

# 潟野遺跡Ⅲ 松ヶ崎遺跡IV 樋館遺跡Ⅲ

潟野遺跡Ⅲ・松ヶ崎遺跡IV・樋館遺跡Ⅲ

—一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

二〇一四・三

青森県教育委員会

2014年3月

青森県教育委員会

潟野遺跡Ⅲ  
松ヶ崎遺跡IV  
楷館遺跡Ⅲ

—一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2014年3月

青森県教育委員会



## 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴い、平成22・23年度に潟野遺跡、平成24年度に松ヶ崎遺跡と樋館遺跡の発掘調査を行いました。

潟野遺跡は、平成16・17年度にも発掘調査が行われており、縄文時代前期初頭から前葉の集落跡が確認されています。今回の調査においても、当該期の竪穴住居跡が検出されており、集落の広がりを確認することができました。

松ヶ崎遺跡は、これまでに多くの発掘調査が行われており、縄文時代中期を中心とした遺跡であることが知られています。今回の調査では、縄文時代早期前葉に位置づけられる押型文土器（日計式土器）が出土しており、遺跡の成り立ちを知る新たな資料を得ることができました。

樋館遺跡は、中世の館跡として周知された遺跡です。平成13・15年度にも発掘調査が行われており、三重の壕跡が検出されています。今回の調査においても、壕跡の延長が検出され、これまでの調査成果を補うものとなりました。

これらの調査成果が今後、埋蔵文化財の調査や八戸市をはじめとする周辺地域の歴史研究や文化財保護に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成26年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司

## 例　言

1 本書は、国土交通省東北整備局青森河川国道事務所による一般国道 45 号八戸南環状道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成 22、23 年度に発掘調査を実施した八戸市潟野遺跡、及び平成 24 年度に発掘調査を実施した松ヶ崎遺跡、橋館遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査対象面積は潟野遺跡 11,200 m<sup>2</sup>、松ヶ崎遺跡 1,050 m<sup>2</sup>、橋館遺跡 180 m<sup>2</sup>である。

各遺跡の発掘調査に至る経緯については便宜的に第 1 編第 1 章第 1 節にまとめた。

2 各遺跡の所在地は以下のとおりである。

潟野遺跡 青森県八戸市大字は川字潟野 24-3 外（青森県遺跡番号 203242）

松ヶ崎遺跡 青森県八戸市大字十日市字松ヶ崎 （青森県遺跡番号 203068）

橋館遺跡 青森県八戸市大字は川字橋館 （青森県遺跡番号 203148）

3 潟野遺跡、橋館遺跡の発掘調査報告書は、一般国道 45 号八戸南環状道路建設事業に伴って既に 2 冊刊行されており、本書は 3 冊目となる。また、松ヶ崎遺跡はこれまで青森県教育委員会により、同事業の外にも発掘調査が行われており、発掘調査報告書は既に 3 冊刊行されている。今回の調査報告書は青森県教育委員会が発掘調査を行った 4 冊目の調査報告書となる。

4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は発掘調査を委託した国土交通省東北整備局青森河川国道事務所が負担した。

5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成 22 年 5 月 11 日～8 月 6 日

平成 23 年 5 月 10 日～10 月 27 日

平成 24 年 5 月 9 日～6 月 29 日

整理・報告書作成期間 平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日

平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。潟野遺跡の執筆と編集は、平成 22 年度調査分については葛城和徳文化財保護主査、加藤隆則文化財保護主事が、平成 23 年度調査分については畠山昇文化財保護主幹、小山浩平文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。また、松ヶ崎遺跡の執筆と編集は野村文化財保護主幹が、橋館遺跡の執筆と編集は小山文化財保護主査が担当した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。

7 発掘調査から整理・報告書作成に至るまで、以下の業務については委託により実施した。

航空写真撮影 株式会社 シン技術コンサル

石器の石質鑑定 八戸市文化財審議委員 松山 力

剥片石器の実測 株式会社 ラング

遺物の写真撮影 シルバーフォト、フォトショップいなみ、有限会社 無限

8 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。宇部則保、村木淳、横山寛剛、市川健夫
- 11 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図を複写して使用した。
- 12 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。
- 13 採図中の方位は、座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、適宜選択し採図毎にスケール等を示した。
- 15 遺構名の付し方については、以下のとおりとした。
- 鴻野遺跡：A～D 区の遺構については平成 16・17 年度の調査で使用した遺構番号を継続して使用した。F 区については A～D 区とは地形が大きく異なっており、遺跡の性格が異なっていることが想定されたため新規に遺構番号を付した。
- 松ヶ崎遺跡：新規に付した。
- 橋館遺跡：これまでの調査で使用した遺構番号を継続して使用した。
- また、遺構に使用した略号は、以下のとおりである。
- S I－竪穴住居跡 S K－土坑 S D－溝跡 S X－用途不明遺構 S P－ピット
- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡の炉跡等は 1 / 30、竪穴住居跡・土坑等は 1 / 60、その他は 1 / 60 及び 1 / 120 に統一し、採図毎にスケール等を示した。
- 18 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、[ ] である。これ以外は図ごとに説明を付した。  
火床面・被熱範囲
- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、『新版標準土色帖 2004・2005 年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 21 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。
- P－土器 S－石器 C－炭化材
- 22 遺物実測図には、採図毎に 1 から通しの図番号を付した。
- 23 遺物実測図の縮尺は、原則として土器・縄石器は 1 / 3、剥片石器・土製品は 1 / 2 に統一し、採図毎にスケール等を示した。
- 24 遺物実測図に使用した網掛けの指示は図ごとに説明を付した。
- 25 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、表毎に指示内容を示した。土製品・石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ (mm)・重さ (g) の順に表記したが、( ) 内の数値は現存値である。
- 26 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。
- 27 遺物写真の縮尺は、原則として遺物実測図の掲載縮尺と合わせているが、鴻野遺跡の A～D 区出土の剥片石器については 2 / 3 の縮尺で掲載した。

## 目 次

例言  
目次  
挿図・写真目次

第1編 涠野遺跡III .....	1
第1章 調査の概要 .....	3
第1節 調査に至る経緯 .....	3
第2節 調査の方法 .....	5
第3節 調査の経過 .....	7
第2章 遺跡の層序 .....	13
第3章 検出遺構と出土遺物 .....	15
第1節 A区 .....	15
第2節 B区 .....	29
第3節 C区 .....	43
第4節 D区 .....	43
第5節 E区 .....	43
第6節 F区 .....	45
第4章 自然科学分析 .....	86
湯野遺跡出土の火山灰について .....	86
第5章 総括 .....	87
引用・参考文献 .....	89
遺構計測表 .....	90
遺物観察表 .....	91
写真図版 .....	101
第2編 松ヶ崎遺跡IV .....	139
第1章 調査の概要 .....	141
第1節 調査の方法 .....	141
第2節 調査の経過 .....	142
第2章 検出遺構と出土遺物 .....	143
第1節 遺跡の概要 .....	143
第2節 土坑 .....	144
第3節 遺構外出土遺物 .....	145
第3章 総括 .....	146
参考文献 .....	146
写真図版 .....	147
第3編 植館遺跡III .....	149
第1章 調査の概要 .....	151
第1節 調査の方法 .....	151

第2節 調査の経過 .....	152
第2章 検出遺構と出土遺物 .....	153
第1節 塚跡 .....	153
第2節 土坑 .....	157
第3節 遺構外出土遺物 .....	159
第3章 総括 .....	159
遺物観察表 .....	160
写真図版 .....	161
報告書抄録 .....	166

## 挿図目次

### 第1編 湧野遺跡III

図1 遺跡位置図 .....	2	図29 F区 遺構配置図 .....	48
図2 路線図 .....	4	図30 F区 土坑(1) .....	52
図3 調査区域図 .....	12	図31 F区 土坑(2) .....	53
図4 基本層序 .....	13	図32 F区 土坑出土遺物 .....	54
図5 A区 遺構配置図 .....	14	図33 F区 土器埋設遺構 .....	55
図6 A区 第46号竪穴住居跡 .....	15	図34 F区 平場エリア 遺構外出土土器(1) .....	57
図7 A区 第46号竪穴住居跡出土遺物 .....	16	図35 F区 平場エリア 遺構外出土土器(2) .....	59
図8 A区 土坑 .....	19	図36 F区 平場エリア 遺構外出土土器(3) .....	60
図9 A区 第82号土坑出土遺物 .....	20	図37 F区 平場エリア 遺構外出土土器(4) .....	61
図10 A区 道路状遺構(1) .....	23	図38 F区 平場エリア 遺構外出土石器(1) .....	64
図11 A区 道路状遺構(2) .....	24	図39 F区 平場エリア 遺構外出土石器(2) .....	65
図12 A区 遺構外出土遺物(1) .....	26	図40 F区 平場エリア 遺構外出土石器(3) .....	66
図13 A区 遺構外出土遺物(2) .....	27	図41 F区 平場エリア 遺構外出土石器(4) .....	67
図14 B区 遺構配置図 .....	28	図42 F区 平場エリア 遺構外出土石器(5)、 土・石製品 .....	68
図15 B区 第29・38号竪穴住居跡、出土遺物 .....	30		
図16 B区 第43号竪穴住居跡 .....	31	図43 F区 沢 .....	72
図17 B区 第44号竪穴住居跡、出土遺物 .....	32	図44 F区 沢エリア 出土土器 .....	73
図18 B区 第45号竪穴住居跡、出土遺物 .....	33	図45 F区 沢エリア 出土石器(1) .....	74
図19 B区 土坑、出土遺物 .....	34	図46 F区 沢エリア 出土石器(2) .....	75
図20 B区 第11~13号溝跡、出土遺物 .....	36	図47 F区 沢エリア 出土石器(3)、 土製品 .....	76
図21 B区 第14~16号溝跡、出土遺物 .....	37		
図22 B区 ピット1~3、出土遺物 .....	38	図48 F区 水田エリア(a・b・c区) .....	80
図23 B区 遺構外出土遺物(1) .....	40	図49 F区 水田エリアb区 出土遺物(1) .....	81
図24 B区 遺構外出土遺物(2) .....	41	図50 F区 水田エリアb区 出土遺物(2) .....	82
図25 C・D・E区 トレンチ配置図 .....	42	図51 F区 水田エリアb区 出土遺物(3) .....	83
図26 C・D区 遺構外出土遺物 .....	43	図52 F区 水田エリアb区 .....	
図27 F区 調査区域図 .....	44	図53 F区 水田エリアc区 出土遺物 .....	85
図28 F区 基本土層、山頂部トレンチ土層、 第1号竪穴住居跡、出土遺物 .....	46	図54 環状土製品 .....	89

## 第2編 松ヶ崎遺跡IV

図55 調査区域図	140	図60 遺構配置図	150
図56 基本層序(III-C-61グリッド付近)	143	図61 第1号壕跡	153
図57 遺構配置図	144	図62 第2号・3号・4号壕跡	155
図58 土坑	145	図63 第2号・3号・4号壕跡出土遺物	156
図59 遺構外出土土器	146	図64 土坑・土坑出土遺物、遺構外出土遺物	158

## 第3編 楠館遺跡III

図60 遺構配置図	150	図61 第1号壕跡	153
図62 第2号・3号・4号壕跡	155	図63 第2号・3号・4号壕跡出土遺物	156
図64 土坑・土坑出土遺物、遺構外出土遺物	158		

## 写真目次

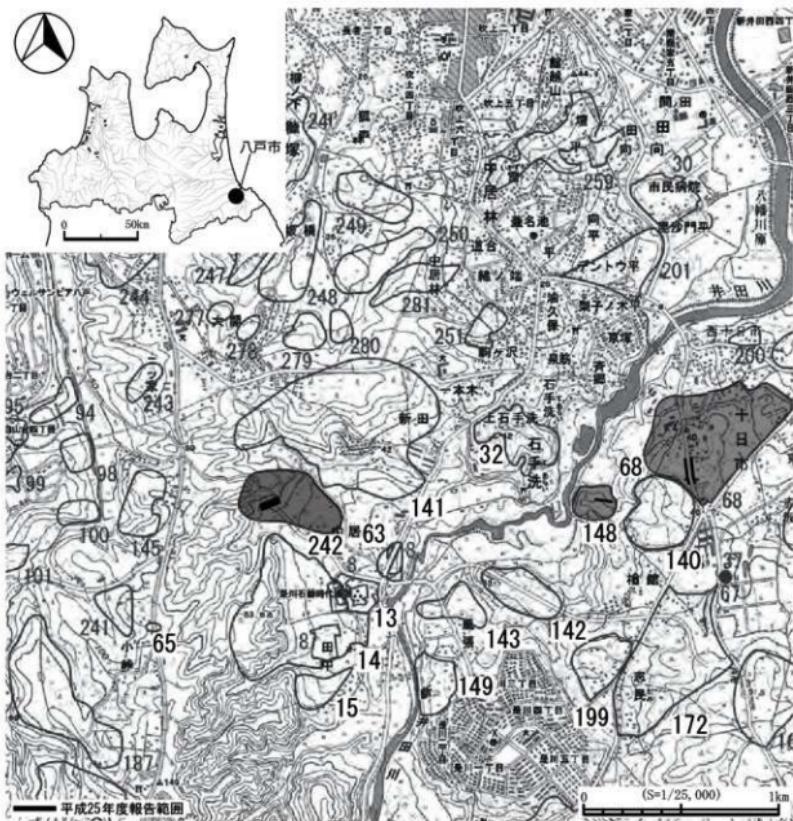
### 第1編 湯野遺跡III

写真1 調査区遠景	101	写真28 A区遺構外出土遺物、B区遺構内出土遺物(1)	128
写真2 環状土製品	102	B区遺構内出土遺物(2)、B～D区遺構外出土遺物	129
写真3 A～E区全景	103	写真29 B区遺構内出土遺物(3)	130
写真4 A～E区作業風景、基本層序	104	写真30 F区 遺構内出土遺物(1)	130
写真5 A区 壓穴住居跡	105	写真31 F区 遺構内出土遺物(2)、平場エリア遺構外出土遺物(1)	131
写真6 A区 土坑(1)	106	写真32 F区 平場エリア遺構外出土遺物(2)	132
写真7 A区 土坑(2)	107	写真33 F区 平場エリア遺構外出土遺物(3)	133
写真8 A区 土坑(3)、道路状遺構(1)	108	写真34 F区 平場エリア遺構外出土遺物(4)	134
写真9 A区 道路状遺構(2)	109	写真35 F区 沢エリア出土遺物(1)	135
写真10 B区 壓穴住居跡(1)	110	写真36 F区 沢エリア出土遺物(2)	136
写真11 B区 壓穴住居跡(2)	111	写真37 F区 水田エリア出土遺物(1)	137
写真12 B区 壓穴住居跡(3)	112	写真38 F区 水田エリア出土遺物(2)	138
写真13 B区 壓穴住居跡(4)	113		
写真14 B区 土坑、溝跡	114		
写真15 C・D・E区	115		
写真16 F区 遠景	116		
写真17 F区 現況、壓穴住居跡	117	第2編 松ヶ崎遺跡IV	
写真18 F区 土坑(1)	118	写真39 調査状況	147
写真19 F区 土坑(2)	119	写真40 基本層序・土坑・	
写真20 F区 土坑(3)、土器埋設遺構	120	遺構外出土土器	148
写真21 F区 平場エリア(1)	121		
写真22 F区 平場エリア(2)、斜面エリア	122	第3編 楠館遺跡III	
写真23 F区 沢エリア(1)	123	写真41 壕跡(1)	161
写真24 F区 沢エリア(2)	124	写真42 壕跡(2)	162
写真25 F区 沢エリア(3)	125	写真43 壕跡(3)	163
写真26 F区 水田エリア	126	写真44 土坑	164
写真27 A区遺構内出土遺物	127	写真45 出土遺物	165



## 第1編 濱野遺跡Ⅲ





遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
203013	中居遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)	203141	新田遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、奈良
203014	一王寺(1)遺跡	縄文(早・前・中・後・晩) 弥生(前)、奈良、平安	203142	風張(1)遺跡	縄文(早・前・中・後・晩) 弥生(前・中・後)、奈良、平安
203015	一王寺(2)遺跡	縄文(中)	203143	風張(2)遺跡	縄文(後・晩)、平安
203032	右手洗遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)	203148	横館遺跡	縄文(前・後・晩)、弥生 奈良、平安、中世
203063	堀田遺跡	縄文(中・後・晩)	203149	風張館跡	縄文(後・晩)、平安
203065	小崎一里塚	近世	203172	上ノ沢遺跡	縄文(後)、奈良、平安
203068	松ヶ崎遺跡	縄文(早・前・中・後) 奈良、平安	203199	志民遺跡	縄文(早・後)
203140	弥次郎塙遺跡	縄文(早・前・後・晩) 弥生、平安	203242	潟野遺跡	縄文(早・前・中・後・晩) 弥生、奈良、平安、近世

図1 遺跡位置図

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経過

八戸南環状道路は、八戸・久慈自動車道の一部区間を構成し、八戸JCTから八戸南ICに至る延長8.6kmの自動車専用道路として事業が着手されている。

当該事業に係る周知の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成7年度に建設省東北建設局青森工事事務所（現・国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所）から事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について青森県教育庁文化課（現・文化財保護課）に照会があり、事業予定地に所在する弥次郎窯遺跡・新田遺跡・橋館遺跡・大開遺跡・渦野遺跡について、事業者と文化課及び青森県埋蔵文化財調査センターによる現地踏査と協議が行われた。協議の結果、発掘調査の条件が整った遺跡から調査を実施することとなり、工事の優先個所を考慮しながら、平成8年度から調査が行われている。

渦野遺跡は、平成16・17年度に埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が実施された。その後、事業計画の変更などをうけ、平成19年10月に国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所（以下、青森河川国道事務所）と文化財保護課及び埋蔵文化財調査センターにより現地踏査と協議が行われた。協議の結果、平成20年12月に文化財保護課が分布調査を実施し、事業予定地内に遺跡の広がりを確認したことから、平成21年1月に遺跡の範囲を変更し、平成22・23年度に埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が実施された。また、平成23年6月に青森河川国道事務所と文化財保護課及び埋蔵文化財調査センターによって協議が行われ、残存部分の調査はトンネルの掘削工事終了後に行うこととなった。

松ヶ崎遺跡と橋館遺跡については、前者が平成11年度、後者が平成13・15年度に埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が実施された。その後、事業計画の変更などをうけ、平成20年度に青森河川国道事務所から埋蔵文化財包蔵地に及ぼす影響についての照会があり、協議の結果、松ヶ崎遺跡は平成21・24年度、橋館遺跡は平成24年度に発掘調査が実施された。

なお、事業者側から土木工事等のための発掘に関する通知は、渦野遺跡が平成22年4月と平成23年4月、松ヶ崎遺跡が平成21年5月、橋館遺跡が平成21年9月に提出されている。

(中略)

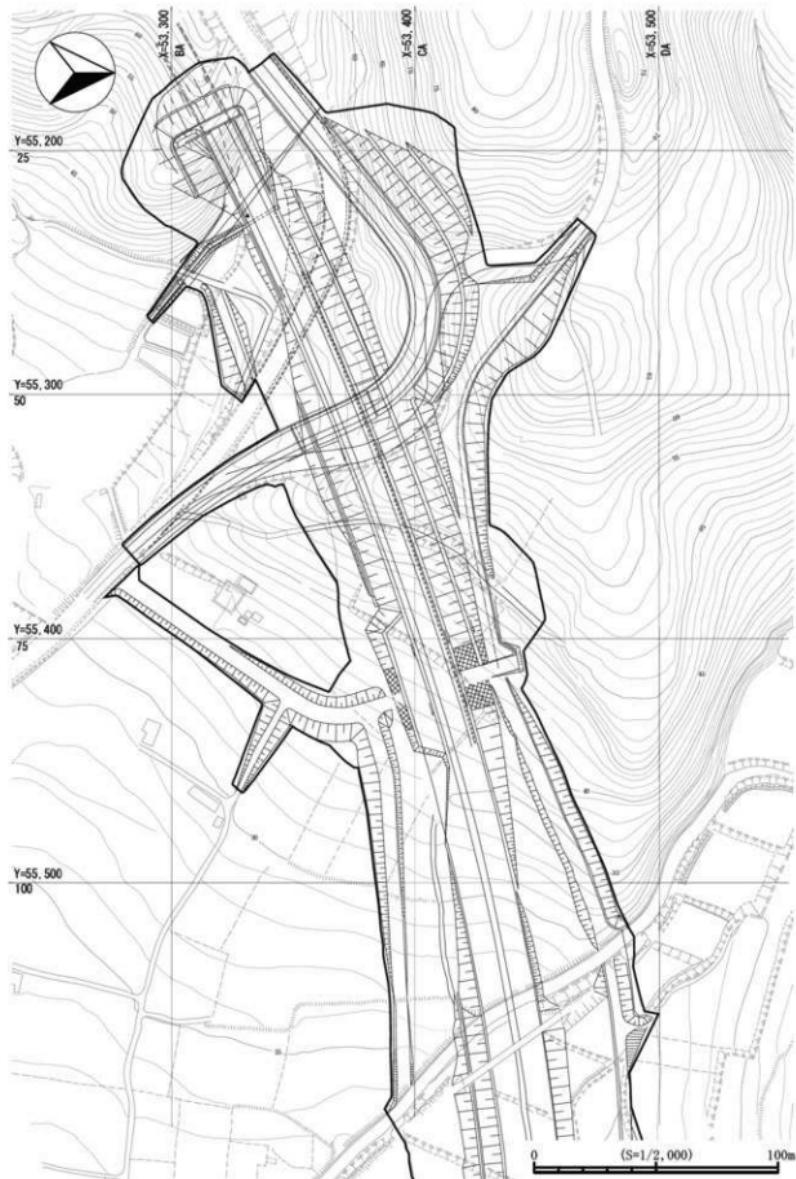


図2 路線図

## 第2節 調査の方法

### 1 発掘作業の方法

平成16・17年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した本発掘調査により、縄文時代の遺物包含層と遺構（堅穴住居跡等）及び古代の遺構（堅穴住居跡等）が確認されているため、縄文時代及び古代の遺構調査に重点をおいて、各集落の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。

#### 〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕

平成16・17年度の調査では、日本測地系に基づいた座標でグリッドを設定していたため、今回の調査では世界測地系の座標を用いて新たに設定し直した。グリッドはAA-0（世界測地系でX=53,200・Y=55,100）を起点とし一辺4mで設定した。グリッド名は、南から北にアルファベット、西から東に算用数字を付けてその組み合わせで呼称し、その名称は南西隅で代表させた。測量基準杭及び標高値は、本事業にあたって設定された4級基準点を用いた。

#### 〔調査区について〕

調査区は平成16・17年度調査区の周囲に点在していることから、それぞれをA～F区と呼称し調査を行った（図3）。なお、平成17年度調査時にも同様の呼称を用いているが関連はない。

#### 〔基本土層〕平成17年度調査の報告を基準として（青埋報第431集）各区対応させた（図4）。

#### 〔表土等の調査〕

平成16・17年度の調査により、第I層は遺物が希薄であることが分かったので重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜地区単位で取り上げた。

#### 〔遺構の調査〕

A・B区から検出した遺構の遺構番号は、平成16・17年度調査区と地形的に連続していることから、平成16・17年度調査で使用したものを継続して使用した。F区に関してはこれらの調査区と地点も離れており、地形も大きく異なっていることから、新たに遺構番号を付すこととした。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、4分割又は2分割で設定した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の図面は、簡易遺り方測量と、（株）CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量を状況に応じて適宜選択し、作成した。遺構内の出土遺物については、層位毎又は堆積土層一括で取り上げたが、床面（底面）や炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易遺り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した後、取り上げた。

#### 〔遺物包含層の調査〕

上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が密集して出土した区域では、トータルステーションや簡易遺り方測量により、縮尺1/20・1/10のドットマップ図や形状実測図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

#### 〔写真撮影〕

写真撮影には、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1,000万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状況、遺構の検出状況・精査状況、完掘後の全景等について記録した。

## 2 整理・報告書作成作業の方法

平成22・23年度の発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、時期不明の溝跡・道路状遺構等を検出した。また、遺物は縄文時代の土器・石器等が66箱出土した。これらの調査結果から、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷、遺物包含層の形成過程等の検討に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

### [図面類の整理]

整理作業では平面図と土層断面図の調整を行った外、現場写真等を活用して、遺物の出土層位や遺構の検出状況などの再確認を行い、調査時の所見についての整理を行った。

### [写真類の整理]

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納した。デジタルカメラのデータ及び35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状況、遺構毎に整理した。

### [遺物の洗浄・注記と接合・復元]

土器の洗浄では文様が消えないように留意した。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等直接注記できないものについては、収納したボリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、遺構間接合、及び遺構内と遺構外の接合状況に留意した。

### [報告書掲載遺物の選別]

遺物全体の分類を適切に行なった上で遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代(時期)・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

### [遺物の観察・図化]

遺物の特徴を適切に表現するように図化した。図化した遺物に関しては観察表も作成し、遺物の属性を記載した。なお、縄文土器の復元個体については、すべて実測図を作成するようにした。

### [遺物の写真撮影]

業者に委託し、実測図では表現し難い質感・雰囲気・文様表現等を伝えられるように留意した。

### [理化学的分析]

沢跡に堆積していた火山灰の同定を弘前大学理工学研究科の柴正敏教授に、石器の石質鑑定は日本地質学会会員の松山 力先生に依頼して行った。

### [遺構・遺物のトレース・版下作成]

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、(株)CUBIC製「トレースくん」を用いて行った。実測図版の版下作成は、Adobe社のIllustratorで行った。写真図版はデジタル写真を使用し、Adobe社のInDesignで版下を作成した。

### [遺構の検討・分類・整理]

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

### [遺物の検討・分類・整理]

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品種構成・個体数等について検討した。

### [調査成果の検討]

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

(葛城・小山)

### 第3節 調査の経過

本編は平成22・23年度の調査成果をまとめていることから、発掘作業の体制及び経過は年度毎に記載する。

#### 1 平成22年度 発掘作業の経過

平成22年度の発掘調査は、3,600m<sup>2</sup>を対象として(図3)、5月11日から8月6日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 剛浩 (平成24年3月退職)
次長	畠山 昇 (平成23年3月退職)
総務GM	木村 繁博 (平成24年3月退職)
調査第一GM	成田 澄彦 (平成24年3月退職)
文化財保護主査	葛城 和徳 (発掘調査担当者)
文化財保護主事	加藤 隆則 (発掘調査担当者)
調査補助員	黒丸 美佳、塩谷 龍平、大谷 望、成田 昂央

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 謙	国立大学法人 弘前大学名誉教授・故人 (考古学)
調査員	松山 力	日本地質学会会員 (地質学)

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

- 4月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。
- 5月11日 発掘器材等を現地へ搬入し、雑木除去等の環境整備を行った。
- 5月中旬 立木伐採の工程上、調査可能区域はC区に限定されていた。このため環境整備終了後、C区内に12箇所のトレンチを設定し、遺構確認作業を行った。また、原因者と立木未伐採のA・B・D～F区について、その工程と優先順位について打ち合わせを行った。
- 5月下旬 C区から遺構は検出されず、遺物も表土中から少量出土したのみであったため、トレンチの埋め戻しを行い、調査を終了した。これと並行して、立木伐採の終了したB区東側の遺構検出作業を開始した。
- 6月上旬 B区で検出した4軒の竪穴住居跡の精査と並行して、A区東側の遺構検出作業を開始した。その結果、A区東側で竪穴住居跡1軒、土坑6基を検出し、順次精査を行った。
- 6月中旬 A・B・D区の内、新たに立木伐採の終了した範囲の表土除去を重機で行い、順次遺構検出作業を開始した。なおF区の立木に関しては、調査期間内での伐採が難

- しいことから、事業者と協議の上次年度以降に伐採及び調査を行うこととした。
- 6月下旬 A・B区で新たに検出した遺構の精査を開始した。D区での検出遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかった。急斜面地であるE区の調査も並行してトレーンチを先行させて行ったが、遺構・遺物ともに検出されなかった。
- 7月上旬 例年はない猛暑の中、体調管理に留意しながらA・B区の包含層の掘り下げ及び検出した遺構の精査を行った。
- 7月中旬 引き続きA・B区の包含層の掘り下げ及び検出した遺構の精査を行った。また、原因者からF区の用水路付け替えに先立ち、当該地区の調査要請があった。このため、調査期間を8月6日まで一週間延長することとした。
- 7月下旬 上記の要請を受け、対象となったF区東側の平坦部について除草などの環境整備を行った。また、F区以外の調査はすべて終了した。
- 8月上旬 F区は立木が未伐採であったため、立木の間に設定した12箇所のトレーンチを先行させて調査を行った。その結果、縄文時代のものと考えられる落ち込みを検出し、包含層からは縄文時代早期後葉～晩期中葉の土器が出土した。このため、F区については立木の伐採後に必要部分を拡張して調査を行うこととした。
- 8月6日 すべての調査を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。
- 8月12日 所轄の警察署に県文化財保護課から遺物発見届を提出した。

## 2 平成22年度調査の整理作業の経過

平成22年度の発掘調査では、縄文時代の竪穴住居跡6軒、土坑9基、時期不明の溝跡7条、道路状遺構9条を検出し、遺物が合わせて14箱（段ボール箱）出土した。報告書刊行事業は平成23年度以降に実施することとなったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成22年11月に終了している。この他の整理作業は平成23年4月1日から平成24年3月31日までの期間で行った。潟野遺跡は縄文時代の遺跡であり、検出遺構の中では竪穴住居跡及び土坑が多く、出土遺物の中では縄文時代前期の土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理・報告書作成体制は、発掘調査体制に整理作業員2名を加えたものである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター  
文化財保護主査 葛城 和徳（報告書作成担当者）  
文化財保護主事 加藤 隆則（報告書作成担当者）  
調査補助員 黒丸 美佳 塩谷 龍平 櫻庭 裕也

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

### 〔平成22年度〕

11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。

### 〔平成23年度〕

4月上旬～ 発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。遺構実測図・

遺構データ等の整理作業を終了し、遺物は洗浄・注記作業が終了した遺構・地区から、順次接合・復元作業を進めた。遺物洗浄・注記作業が終了し、接合・復元作業を集中的に行なった。この間に、石器・土製品・石製品類の報告書掲載遺物を選別した。

- 7月中旬 土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行なった。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表等の作成を開始した。
- 8月中旬～ 選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。併せて遺物台帳を作成した。また、遺構実測図や遺構配置図・調査区域図等のトレースを行なった。
- 12月下旬～ 図化作業が終了した遺物から順次トレースを行なった。トレースが終了した遺構・遺物については印刷用の版下を作成した。この間にシルバーフォト・フォトショッピングに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。また調査成果を総合的に検討して報告書の原稿作成を行なった。その後、原稿、版下等が揃ったので、報告書の割り付け、編集を行なった。
- 3月下旬 記録類・出土品を整理して収納した。 (葛城)

### 3 平成23年度 発掘作業の経過

平成23年度の発掘調査は、7,600 m<sup>2</sup>を対象として(図3)、5月10日から10月27日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	松田 守正(平成24年3月退職)
次長	成田 激彦(平成24年3月退職)
総務GM	木村 繁博(平成24年3月退職)
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	畠山 昇
文化財保護主査	小山 浩平
調査補助員	馬渕恵理香 岩佐 良子 工藤 将陽

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人 弘前大学名誉教授(考古学)
調査員	葛西 勲	前青森短期大学教授(考古学)
調査員	関根 達人	国立大学法人 弘前大学人文学部教授(考古学)
調査員	松山 力	日本地質学会会員(地質学)

発掘踏査の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

- 4月 事業者、文化財保護課、センターの3者で事前協議を行なった。4月の段階で、調査区内には立木が残っている状況であり、木の伐採、及び伐採した木の撤去作業は6月までかかることが見込まれた。発掘作業は作業員の安全確保のため、撤去作業中のエリアと

は別の場所から調査を行うこととした。そこで、調査は新たに調査範囲となった水田エリア（図27）から開始することとした。

水田エリアの工事内容は、調査区内に流れている水路切り替え工事に伴い、現況の水田を作り替えるものであり、埋蔵文化財包蔵地の取り扱いとして恒久物ではないと判断された。そのため、発掘調査は水田工事掘削深度までとし、それ以下は現状保存することとなった。

調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所の設置等、事前の準備作業を行った。

5月10日

発掘器材等を現地へ搬入し、雑木除去等の環境整備を行った。

5月中旬

伐採木の搬出道整備には調査区内の掘削が伴うことから、工事立ち会いを行いながら進めた。また、水田部から遺物が出土したため、掘削深度までの発掘調査を進めた。併せて、平場エリア（図27）の市道から東側について、人力で掘削作業を進めた。

5月下旬

平場エリア東側を基本層序第II層中まで下げたところ、遺構が検出されたことから、これらの遺構について精査した。また、斜面エリアでの伐採木搬出作業が終了したことから、トレンチを先行させながら調査を行った（図29）。結果、斜面エリアの頂部付近は大規模な造成工事が行われていることが明らかとなつたことから、遺構が検出された斜面中腹の緩斜面地を括げ調査を行うこととした（図29）。

6月上旬

調査事務所等は調査区に近接した工事路線内に設置していたが、設置場所に本体工事が入ることから、調査事務所等の移転について協議が行われた。結果、調査事務所は調査区内に移転することが決まり、設置場所については精査を行っている平場エリアの市道東側部分の調査を止めて埋め戻し、そこを設置場所とすることになった。この部分の調査は平成24年度以降へ持ち越すこととなった。

平場エリアでの伐採木搬出作業が完全に終了したことから、平場エリアの市道西側及び沢エリアの調査を行うこととした。

6月中旬

沢の堆積状況及び遺物の出土状況を確認するため、重機を使用してトレンチを入れた。沢は現況でも相当ぬかるんだ状態であったため、重機の使用については十分に注意した。トレンチ調査の結果、遺物が相当数出土したことから、面的な調査が必要と判断した。また、表土のぬかるんだ土は薄い堆積であり、かつ、表土以下は比較的締まった土層であることが明らかとなった。そのため、表土除去後は矢板等の処置をせず、法面を作りながら掘削を進めることとした。

6月下旬

沢は八戸遺跡調査会で掘った是川中居遺跡 長田沢地区へと続いており、長田沢地区と同様に縄文時代晚期中葉の遺物包含層の検出が想定された。そのため、沢の底面まで掘り進めたが、遺物包含層は検出されなかった。また、平場エリアの市道西側は22年度に行った調査で縄文時代早期の遺物が出土したことから、基本層序第II・III層面で遺構検出を行った後、早期の遺物が出土する基本層序第V層面まで全面を掘り下げた。結果、早期の遺物は出土するものの、遺構等は検出されなかった。10月上旬には沢及び平場エリアの調査に日当がついたため、遺跡全体の空中写真撮影を業者に委託し行った。

10月中旬

斜面エリアの中腹部分で調査範囲を括げた箇所について精査を行った。結果、試掘時

に検出した土坑の外に、土坑1基を検出し終了した。

- 10月下旬 10月下旬には調査もほぼ終了し、10月25日には事業者立ち会いの元、調査終了状況の確認を行った。10月27日には予定していた調査をすべて終了し、物品等を搬出した後、現地から撤収した。

#### 4 平成23年度調査の整理・報告書作成作業の経過

平成23年度の発掘調査では、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑8基、土器埋設遺構1基、沢跡1条を検出し、遺物は段ボール箱で52箱出土した。報告書刊行は平成25年度以降となったが、遺物・遺構の整理作業及び版下の作成作業は平成24年4月1日から平成25年3月31日までの期間で行った。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹 畠山 異（報告書作成担当者）

文化財保護主査 小山 浩平（報告書作成担当者）

調査補助員 岩佐 良子 工藤 将陽

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

##### 〔平成23年度〕

- 11月～ 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。また、出土遺物の洗浄・注記作業を行った。

##### 〔平成24年度〕

- 4月上旬～ 遺構実測図・遺構データの整理作業及び土器の接合作業から開始した。遺構実測図の整理が終了した後は、石器・土製品・石製品類の報告書掲載遺物を選別した。

- 6月中旬 報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表等の作成を開始した。

- 7月上旬～ 選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進め、遺物台帳を作成した。

- 12月下旬～ 図化作業が終了した遺物から順次トレースを行った。トレースが終了した遺構・遺物については印刷用の版下を作成した。この間にシルバーフォト・フォトショッピングに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。また調査成果を総合的に検討して報告書の原稿作成を行った。その後、原稿、版下等が揃ったので、報告書の割り付け、編集を行った。

- 3月下旬 記録類・出土品を整理して収納した。

(小山)

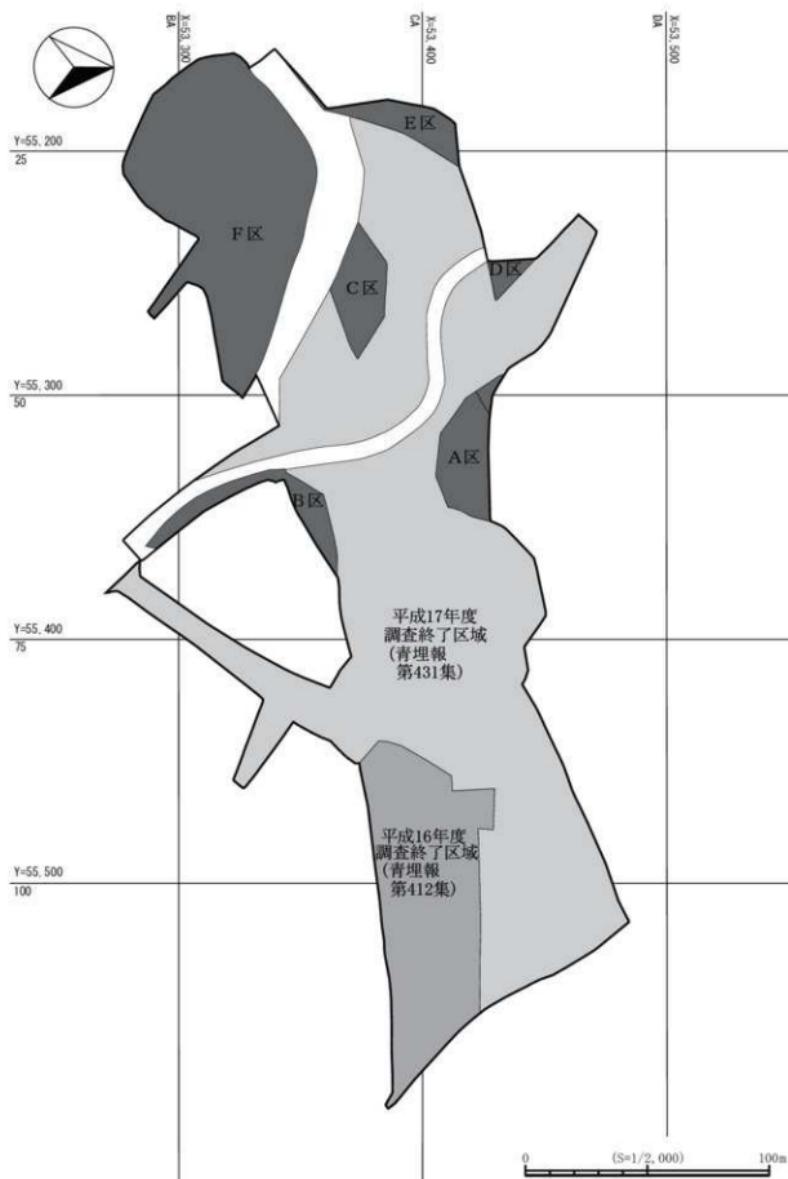


図3 調査区域図

## 第2章 遺跡の層序

潟野遺跡は、八戸市の中心部から南へ約3kmの新井田川左岸に位置している。潟野遺跡の地形・地質及び周辺の遺跡については、既刊の報告書（青森県教育委員会2006・2007）に詳しいので重ねて述べない。遺跡内の基本層序については、平成16年度調査で第I～VII層に分層している（青森県教育委員会2006）。また、平成17年度調査では第VI層以下の整理が行われ、第VI層は八戸火山灰層、第VII層は高館火山灰層、第VIII層は第三紀層とした（青森県教育委員会2007）。平成22年度以降の調査では、平成17年度報告の基本層序を基準として各区対応させた。

第I層 表土層である。

第II層 黒色土層である。層中にはT o-bを含む。

第III層 T o-C uを含む黒色土層である。全体に砂質である。

第IV層 T o-N bを含む層である。色調などからa、bに分層した。またIV a層は層中のT o-N bの混入量によってさらに分層した。

第V層 八戸火山灰層の上位に堆積する火山灰層と考えられ、色調は暗褐～黄褐色を呈する。

第VII層 A区丘陵頂部に認められる砂層で、6層に細分した。色調は明黄褐色を主体とし全体的に硬くしまっており、層中には灰白色の浮石が含まれる。  
(葛城)

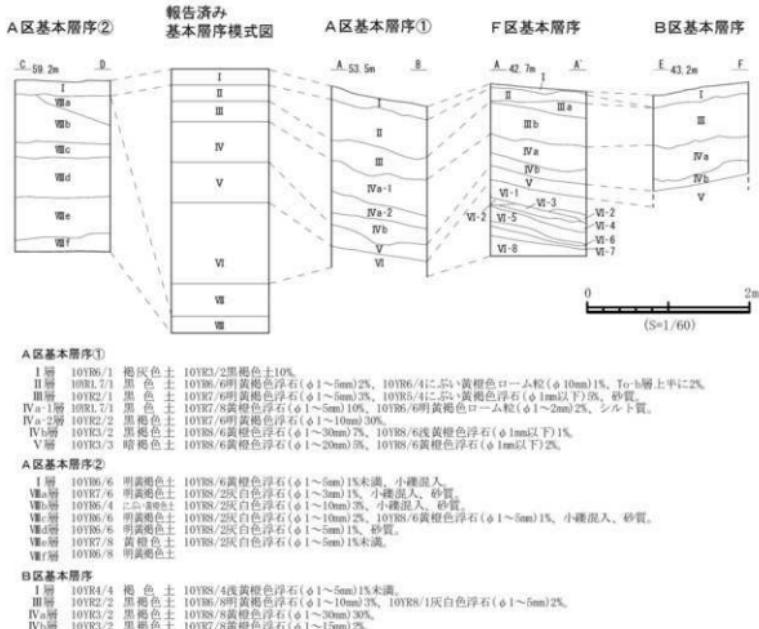


図4 基本層序

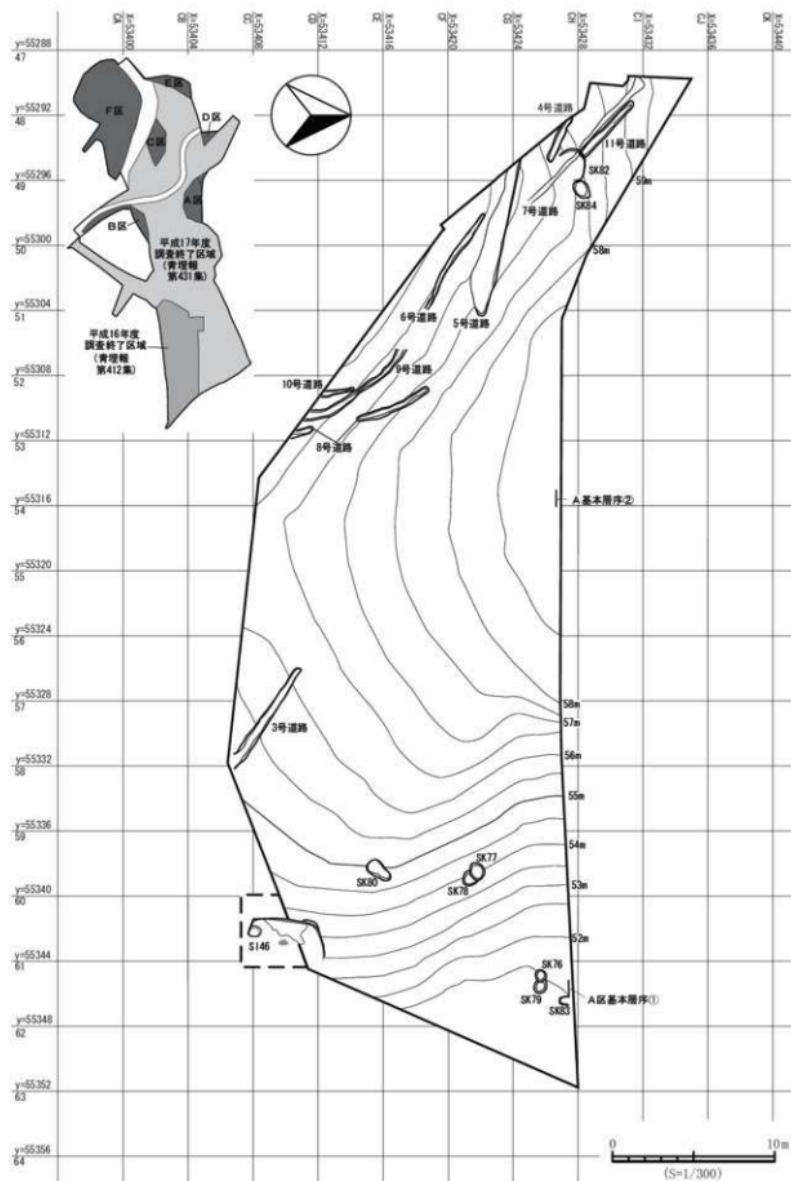


図5 A区 造構配置図

## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 A区

A区は、馬の背状の丘陵の先端部に位置し、標高は52～58mである。平成17年度調査におけるD1区とD2区の中間に位置する。検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑8基、道路状遺構9条である。丘陵頂部を除く東西両斜面で遺構を検出した。

#### 1 竪穴住居跡

##### 第46号竪穴住居跡（図6・7）

[位置・確認] C C・D-60 グリッドに位置する。第V層精査中に褐色土の落ち込みとして確認した。

[平面形・規模] 東側が失われているため詳細は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸4.70m、残存短軸2.06mであり、検出面からの深さは43cmである。

[堆積土] 3層に分層した。3層は明黄褐色及び黄褐色粘土を主体としており、貼床と考えられる。

[壁・床面] 残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は斜面下方である東側に向かってやや傾斜している。また、西壁付近では上述のように貼床を検出した。

[柱穴・施設] 南壁付近から土坑を1基検出した。長軸73cm、短軸71cmの楕円形を呈する。柱穴は検出されなかった。

[炉] 床面ほぼ中央から地床炉を検出した。火床面は長軸65cm、短軸39cmの長楕円形を呈し、厚さは12cmである。

[出土遺物] 繩文土器は床面から堆積土および掘方埋土から総量1,672g出土した。床面からの遺物は多いがいずれも破片である。堆積土上層に中期末葉から後期初頭の土器破片を1点含むが、他は纖維を混入する前期初頭から前葉の土器で、土器の文様はいずれも斜縞文である。図7-1～3は同一個体の深鉢で胎土に纖維を多量に含んでいる。口縁部形状は尖頭状で、口唇部にはLR縞文の押圧痕がみ

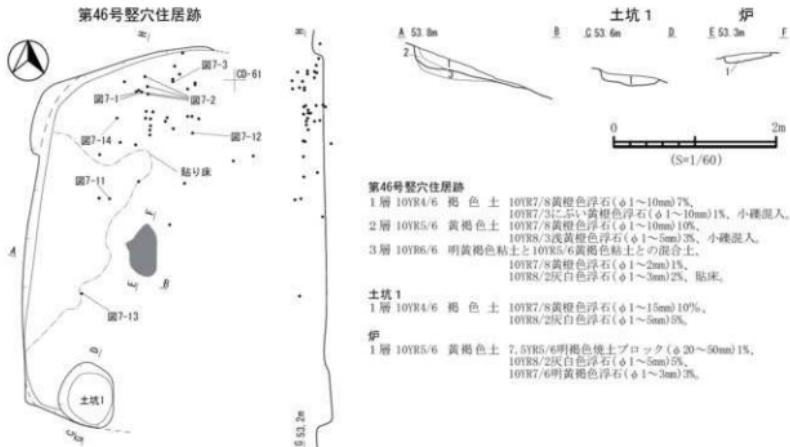


図6 A区 第46号竪穴住居跡

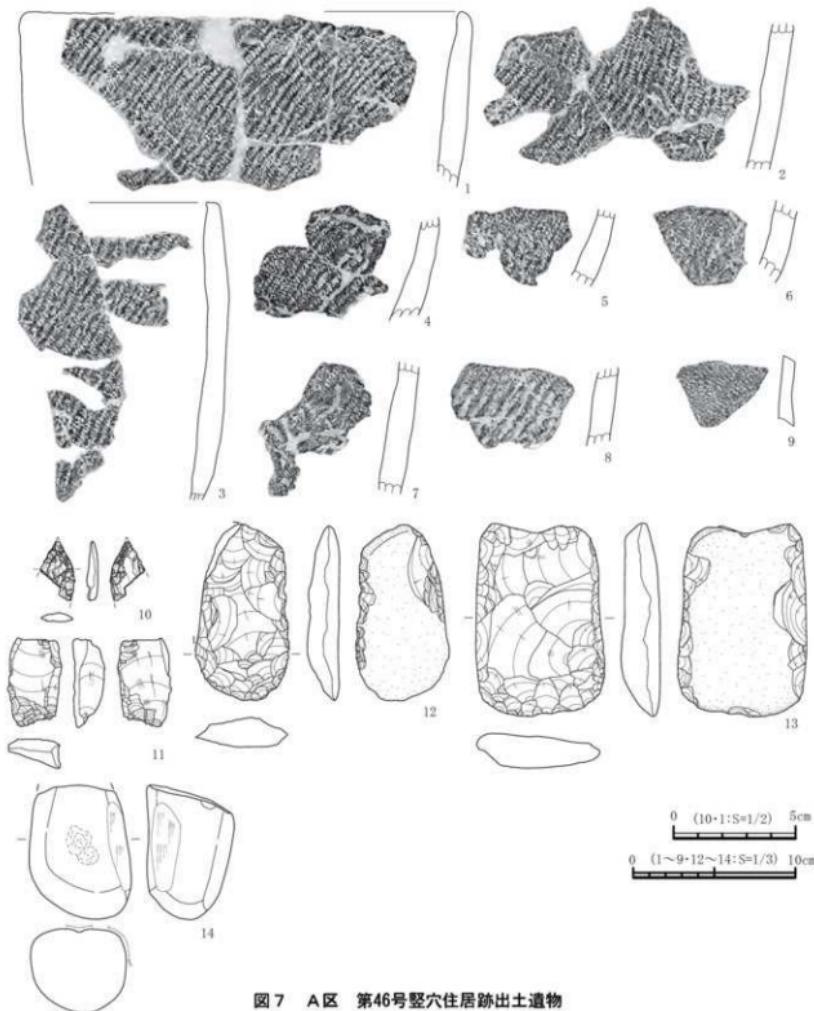


図7 A区 第46号竪穴居跡出土遺物

られる。文様は口縁部から胴部までの全体にLR縦文を横位回転施文する。石器は床面及び床面直上から900.5g出土した。内訳は石鏃1点、楔形石器1点、打製石斧2点、敲磨器1点、剥片2点である。図7-10は基部を欠損する石鏃である。図7-12・13は片面に原縫面を残す打製石斧である。図7-14は敲磨器である。平坦面に敲打痕が、縁辺には磨面が見られる。

[小結]出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉にかけてのものと考えられる。

(葛城)

## 2 土坑

### 第76号土坑（図8）

〔位置・確認〕C G -61 グリッドに位置する。第III層を精査中に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕層位を異にするが、第79号土坑と重複し本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕長軸 74 cm、短軸 68 cm の円形を呈する。検出面からの深さは 29 cm である。

〔堆積土〕黒色土を主体とし、層中には中撒浮石を微量含む。

〔壁・底面〕壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。

### 第77号土坑（図8）

〔位置・確認〕C F -59 グリッドに位置する。第V層を精査中に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕第78号土坑と重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕長軸 1.10m、短軸 0.90m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 44 cm である。

〔堆積土〕黒色土を主体とする。土質は第IV層に類似する。

〔壁・底面〕壁は外傾しながら立ち上がる。底面は地形の傾斜に沿うように東側がやや低くなる。

〔出土遺物〕底面から縄文時代前期の土器小片（総量 18.6g）が出土した。

〔小結〕検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。また、底面が傾斜しており自然の窪地である可能性も考えられる。

### 第78号土坑（図8）

〔位置・確認〕C F -59 グリッドに位置する。第V層を精査中に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕第77号土坑と重複し、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕残存長軸 83 cm、短軸 89 cm の円形を呈する。検出面からの深さは 35 cm である。

〔堆積土〕黒褐色土を主体とする。第77号土坑堆積土より土色は明るいが土質は第IV層に類似する。

〔壁・底面〕壁は外傾しながら立ち上がる。底面は斜面に沿うように東側がやや低くなる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。また、底面が傾斜しており自然の窪地である可能性も考えられる。

### 第79号土坑（図8）

〔位置・確認〕C G -61 グリッドに位置する。第V層を精査中に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕層位を異にするが、第76号土坑と重複し本遺構が古い。

〔平面形・規模〕長軸 97 cm、短軸 75 cm の楕円形を呈する。検出面からの深さは 50 cm である。

〔堆積土〕3層に分層した。3層は土質が第V層に類似している。

〔壁・底面〕壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

[小結]検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。

#### 第 80 号土坑（図 8）

[位置・確認] C D・E -59 グリッドに位置する。第V層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[平面形・規模]長軸 1.61m、短軸 0.92m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 44 cm である。

[堆積土] 3 層に分層した。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であるが、北東側がやや傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。また、掘り込みが浅く底面が傾斜していることから、自然の窪地である可能性も考えられる。

#### 第 82 号土坑（図 8・9）

[位置・確認] C G -48 グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[平面形・規模] 長軸 1.71m、短軸 1.69m の円形と考えられる。検出面からの深さは 65 cm である。

[堆積土] 3 層に分層した。3 層にはロームブロックを含み、土質が類似する 2 層とともに人為堆積と考えられる。1 層には中撒浮石を含み、自然堆積の可能性が高い。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁及び南壁は確認できなかった。底面は南西側に向かって傾斜している。

[施設] 底面南側から底部を欠く深鉢形土器が出土した（図 9-3）。当初は底面に廃棄されたものと認識していた。しかし断面観察の結果、口縁部がやや上がった状態で横位に出土しており、口縁部付近には別の深鉢形土器（図 9-2）の胴部破片が蓋をするように差し込まれていた。また、3 の周囲からは 6 個の自然縛が出土した。以上のことから、明確な掘方は確認できなかったが土器埋設遺構と判断した。土器内堆積土は 2 層に分層した。いずれも南部浮石と考えられる黄褐色浮石が含まれており、土質は第IV層に類似している。土器内からは 2 の底部が出土した。土器埋設遺構は、検出状況から土坑に伴うものと判断したが、土坑廃絶直後に構築された可能性も考えられる。また、本遺構の用途は墓の可能性が考えられる。

[出土遺物] 土坑底面で 1 個体、下位の土器埋設部から 2 個体の縄文土器（総量 9,769 g）が出土した。1 は小型の深鉢で口縁部は欠損し擬口縁となっている。地文は L R 縄文を縦位回転施文する。2 は深鉢で R L 縄文を縦位回転施文する。3 は縄文時代中期末葉（大木 10 式並行）の深鉢で、器形は胴部上半がくびれ下位が張り出し、底部は欠損している。口縁部は、頂点に刻みのあるやや大きめの波状（大波状）が 3 単位、また刻みのない小さめの波状（小波状）が 3 単位に、交互に配され、6 単位の波状口縁となる。文様は波状部の下位には円文ないしは沈線による区画文を配す。大波状下位には円文、小波状下位には区画文の配置を原則とするが、一部小波状の下位にも円文が配される。文様モチーフは J 字状を基本とし、これを組み合わせ、また上位の J 字状文から下位に同文様を垂下させている。また胴部中位では 4 ヶ所で不規則に鱗状の突起がつく。地文は L R 縄文を縦位回転施文する。胴部下方では、器面 11 cm 分を 5 回（平均 2.5 cm 単位）に分節して縦位に連続して回転施文する箇所がある。原体の幅は最小でも 40 mm 以上である。

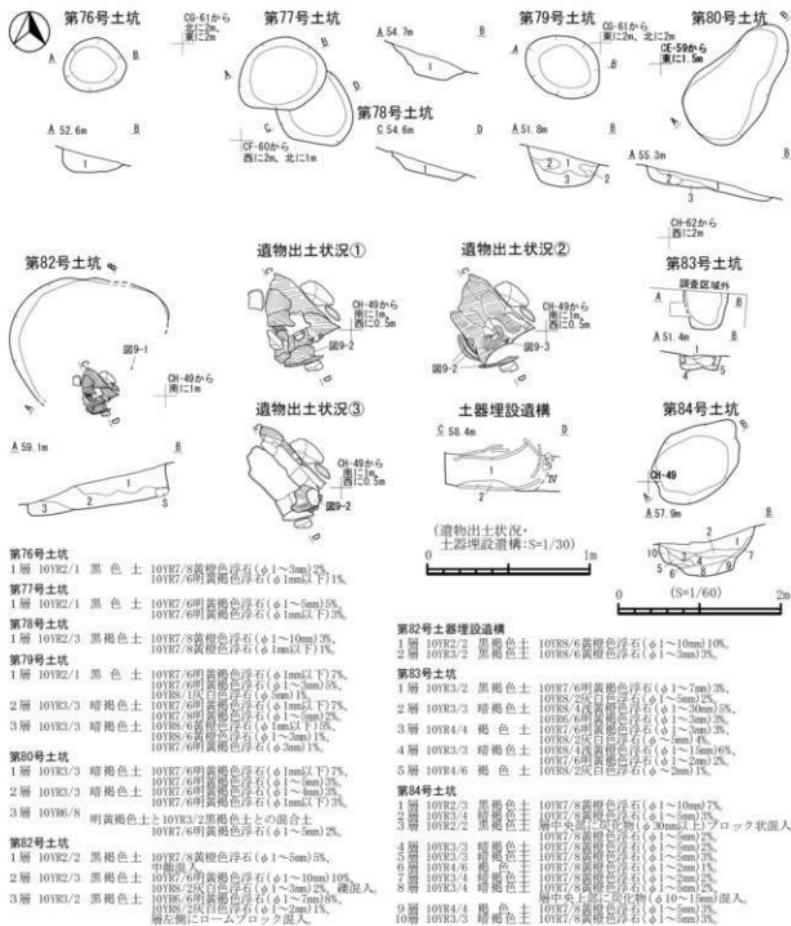


図8 A区 土坑

[小結] 土器埋設遺構出土土器より、縄文時代中期末葉の大木 10 式並行期のものと考えられる。

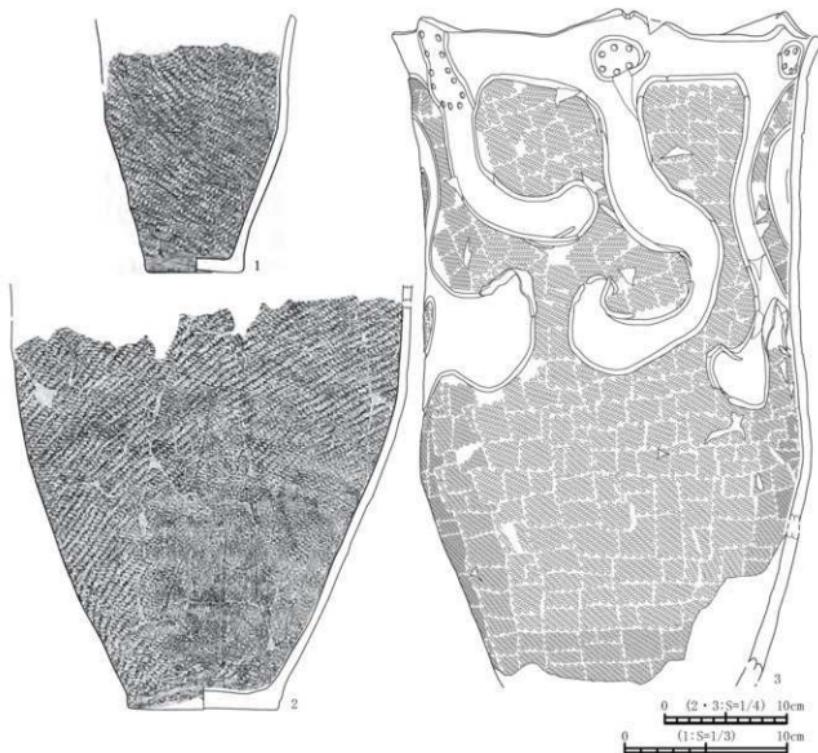


図9 A区 第82号土坑出土遺物

[壁・底面]壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

[小結]検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。

#### 第84号土坑(図8)

[位置・確認] C G・H ~49 グリッドに位置する。第V層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[平面形・規模]長軸 1.12m、短軸 0.87m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 67 cm である。

[堆積土]10 層に分層した。黒褐色土及び暗褐色土を主体とする。3、8 層には炭化物が含まれる。

3 層から出土した炭化物はやや広がりを持つものの、総じて自然堆積の可能性が高い。

[壁・底面]壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

[小結]検出面及び堆積土の状況から縄文時代のものと考えられるが、詳細は不明である。 (葛城)

### 3 道路状遺構

道路状遺構は9条検出した。このうち第4～11号道路状遺構は、調査時に用途不明遺構としたものである。これらはすべて底面に硬化面が確認できることから、道路状遺構として報告する。

#### 第3号道路状遺構（図10）

【位置・確認】C B・C-56・57グリッドに位置する。第I層を除去後に確認した。また、平成17年度調査で検出された第3号道路状遺構に連続することを確認したため、同一遺構として調査した。

【平面形・規模】平面形は溝状を呈する。規模は確認長7.19m、最大幅0.71m、最大深25cmである。

【堆積土】3層に分層した。黒褐色土を主体とする。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。平成17年度調査では底面に硬化面を確認しているが、今回の調査では明確な硬化面は確認できなかった。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【小結】道路状遺構としたが、今回調査範囲からは明確な硬化面は確認できなかった。遺物も出土しなかったため、年代を含め詳細は不明である。

#### 第4号道路状遺構（図10）

【位置・確認】C G-48グリッドに位置する。第I層を除去後に確認した。

【平面形・規模】北西側が調査区域外に延びる。平面形は確認長2.22m、幅0.36mの溝状を呈する。検出面からの深さは7cmである。

【堆積土】黒色土を主体とする。底面は硬化している。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【小結】底面が硬化しており、帯状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。

#### 第5号道路状遺構（図10）

【位置・確認】C F・G-48～51グリッドに位置する。第I層除去後に確認した。

【平面形・規模】西側が調査区域外に延びる。平面形は確認長7.29m、幅1.18mの溝状を呈するが、南側の立ち上がりは明確ではない。検出面からの深さは23cmである。

【堆積土】2層に分層した。黒褐色土を主体とし、底面は硬化している。

【出土遺物】堆積土から縄文時代中期から後期の土器小破片が3点（総量20.0g）出土した。

【小結】底面が硬化しており、帯状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。

#### 第6号道路状遺構（図10）

【位置・確認】C E・F-49・50グリッドに位置する。第I層除去後に確認した。

【平面形・規模】南西側が明確ではないが、確認長4.95m、幅0.30mの溝状を呈する。本遺構の延長線上には第9号道路状遺構があり、同一遺構である可能性も考えられる。検出面からの深さは7cmである。

〔堆積土〕黒褐色土を主体とする。底面は硬化している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕底面が硬化しており、帯状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。

#### 第7号道路状遺構（図10）

〔位置・確認〕C G・H-47～49グリッドに位置する。第I層除去後に帶状の硬化面を確認した。

〔平面形・規模〕南西側が明確ではないが、確認長7.47m、幅0.49mの帶状を呈する。

〔堆積土〕硬化面は黒色土であり、土質は第III層に類似する。硬化面の厚さは8cmである。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕硬化面が帶状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。また、本遺構の北側に隣接して第11号道路状遺構を検出しており、本来は同一遺構の可能性も考えられる。

#### 第8号道路状遺構（図11）

〔位置・確認〕C D・E-52グリッドに位置する。第I層除去後に確認した。

〔平面形・規模〕南東側が調査区域外に延びるが、確認長6.55m、幅0.40mの溝状を呈する。検出面からの深さは11cmである。

〔堆積土〕暗褐色土と黒褐色土の混合土を主体とする。土質は第9・10号道路状遺構と同質である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕底面が硬化しており、帯状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。また、堆積土の状況から第9・10号道路状遺構とはほぼ同時期と考えられる。

#### 第9号道路状遺構（図11）

〔位置・確認〕C C～E-51・52グリッドに位置する。第I層除去後に確認した。

〔平面形・規模〕南東側が調査区域外に延びるが、確認長5.34m、幅0.41mの溝状を呈する。本遺構の延長線上には第6号道路状遺構があり同一遺構の可能性も考えられる。検出面からの深さは8cmである。

〔堆積土〕暗褐色土と黒褐色土の混合土を主体とする。土質は第8・10号道路状遺構と同質である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕底面が硬化しており、帯状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。また、堆積土の状況から第8・10号道路状遺構とはほぼ同時期と考えられる。

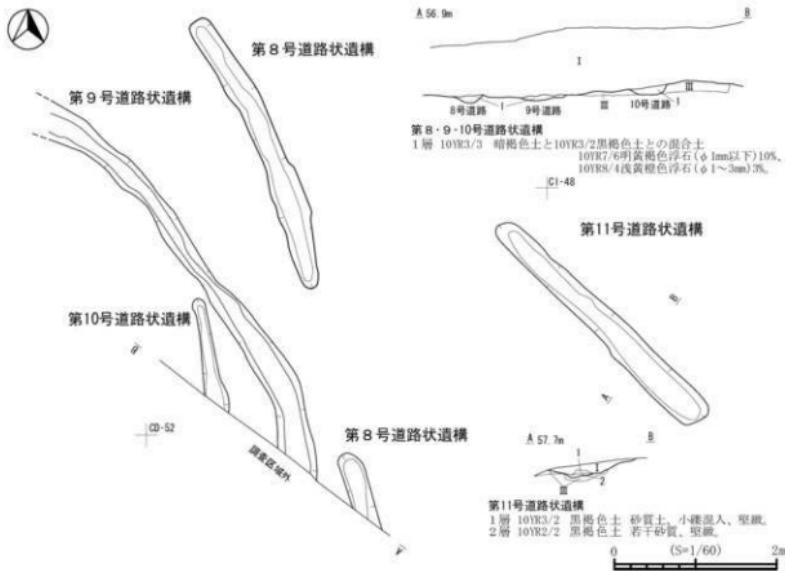
#### 第10号道路状遺構（図11）

〔位置・確認〕C D-52グリッドに位置する。第I層除去後に確認した。

〔平面形・規模〕南東側が調査区域外に延びるが、確認長1.32m、幅0.26mの溝状を呈する。検出面か



図10 A区 道路状遺構 (1)



らの深さは 12 cm である。

〔堆積土〕暗褐色土と黒褐色土の混合土を主体とする。土質は第8・9号道路状遺構と同質である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕底面が硬化しており、帯状に延びることから道路状遺構と考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。また、堆積土の状況から第8・9号道路状遺構とはほぼ同時期と考えられる。

#### 第11号道路状遺構（図11）

〔位置・確認〕CH-47-48 グリッドに位置する。第I層除去後に確認した。

〔平面形・規模〕長さ 3.44m、幅 0.41m の溝状を呈する。検出面からの深さは 11 cm である。

〔堆積土〕2層に分層した。黒褐色土を主体とし、層れも堅緻である。また、底面も硬化している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔小結〕本遺構の南側に隣接して第7号道路状遺構が分布している。本遺構は第7号道路状遺構を精查後に検出したが、本来は同一遺構の可能性も考えられる。検出の状況から古代以降の可能性が高いが、詳細は不明である。

(葛城)

#### 4 遺構外出土遺物（図12-13）

遺物は縄文土器、石器、土製品、陶磁器が出土した。出土遺物の総量は、縄文土器2,963.1 g、石器1,619.3 g、陶磁器61.3 gである。縄文土器は、縄文時代前期初頭から前葉、縄文時代中期末から後期前葉、晚期のものが見られ、それぞれ内訳は、前期初頭から前葉1150.4 g、中期末から後期初頭1730.5 g、晚期82.2 gである。遺物の分布に時期毎の偏りではなく、また同一時期の遺構との分布の重複もない。これらは第I層中から出土した近世以降のものと考えられる陶磁器を除き、調査区東側の標高52～57mの斜面と、調査区西側の標高56～58mの斜面の包含層中に散在する。

##### 縄文時代前期初頭から前葉の土器（図12-1～9）

いざれも破片で出土し、器形のわかる資料はない。製作技法を示す特徴として、粘土紐接合部が外傾するもの（図12-2）が多く、傾きの程度は極めて大きい。図12-2は、下位の粘土と30mm以上の重複がみられ、成形にあつては下位の粘土帯の外面側に大きく被せながら粘土紐を積み上げたものと考えられる。図12-5では、器表の剥落部にも地文がうかがえ、縄文施文が成形と並行して行われたことを示している。文様はLR縄文、単軸絡条体1類、異原体による羽状縄文がみられる。2～9は多量の纖維を含んでいる。2は口縁部に単軸絡条体1類の横位回転施文部がみられる。3は口唇部に列点を施し、LR縄文とRL縄文の異原体の横位回転施文による羽状構成をとる。4は無節Lと無節Rのそれぞれ斜位と横位の回転施文による羽状構成をとる。

##### 縄文時代中期末葉から後期前葉の土器（図12-10～28）

破片での出土であるが、10～12は同一個体の深鉢で比較的まとまって出土している。製作技法を示す特徴として、接合部が外傾を示すものが多い。外傾の程度は大きくなないが（図12-10～12）、1段25mm幅程度の粘土帯の多くを上下の粘土帯に重複させた例（図12-22・24）もうかがえる。また剥がれた擬口縁の端面は整い、きれいに剥がれたものが多く、前期初頭から前葉の外傾接合とは異なった様相を見せる。剥がれ方の相異は粘土紐積み上げ（圧着）時の粘土の固さに関連していた可能性がある。

10～28は縄文時代中期末から後期前葉の土器である。13～16は磨消部をもつ土器で、13・14は同一個体である。15はJ字状のモチーフと思われる。17・18は単軸絡条体1類の土器である。25は上部が横方向のミガキ、下位はLR縄文の縦位回転施文である。26はLR縄文の縦位回転施文でS字状の結節がみられる。

##### 縄文時代晚期の土器（図12-29・30）

29は台付鉢の体部下半の破片である。胴部に横走させた平行沈線区画の内部に、影去した“C”や“逆C”状の文様を対向させ、玉抱き三叉文状の文様を描出する。地文はLR縄文である。（加藤）

#### 石器（図13-1～11）

##### 石鏹（図13-1）

1点出土した。珪質頁岩製の凹基無茎鏹である。

##### 石匙（図13-2）

1点出土した。珪質頁岩製で先端部を欠損する。

##### 削器類（図13-3）

1点出土した。小型で、上端部は被熱により欠損している。珪質頁岩製である。

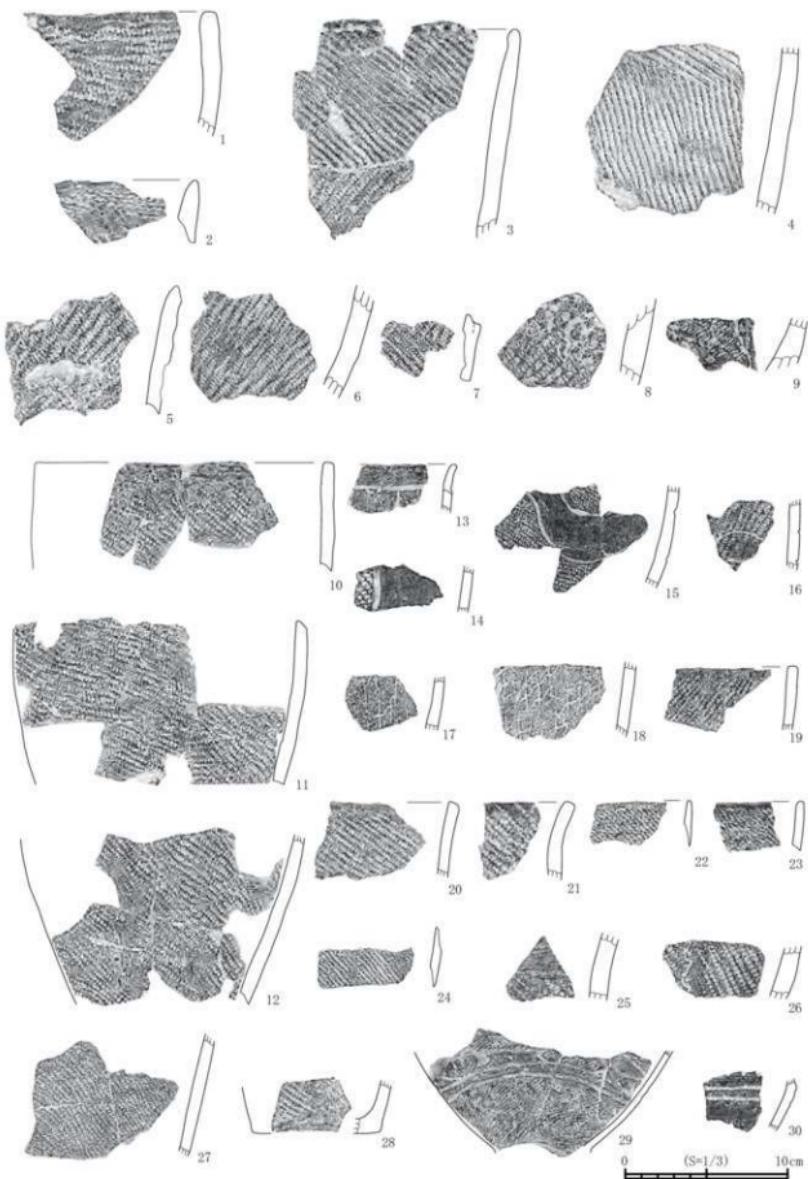


図12 A区 遺構外出土遺物 (1)

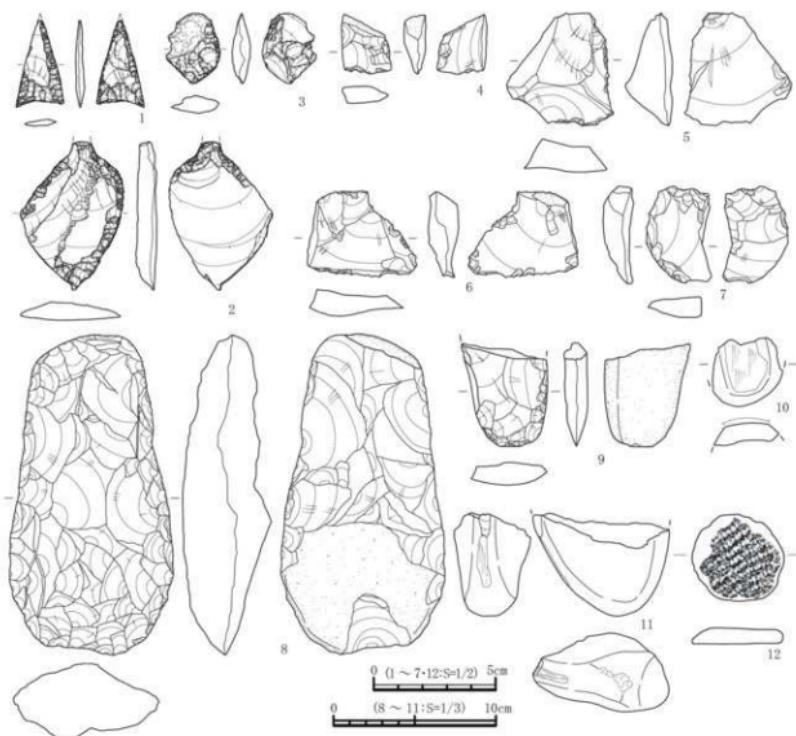


図13 A区 遺構外出土遺物 (2)

## 二次加工剥片 (図 13-4 ~ 7)

剥片の側縁に調整剥離が施されるものである。4点出土し、いずれも珪質頁岩製である。

## 剥片

図示しなかつたが、二次調整の施されない剥片が8点、58.1g出土した。

## 打製石斧 (図 13-8・9)

2点出土した。いずれもヒン岩製で片面に原縁面を残している。

## 磨石 (図 13-10)

1点出土した。小破片であるが、平坦面を磨面として使用している。砂岩製である。

## 敲打器 (図 13-11)

異なる使用痕が重複するものを敲打器とした。1点出土した。破片であるが、平坦面に磨面、先端部に敲打痕をもつ。安山岩製である。

## 土製品 (図 13-12)

図 13-12 は円盤状土製品である。器面にはLR縄文が施文される。

(葛城)

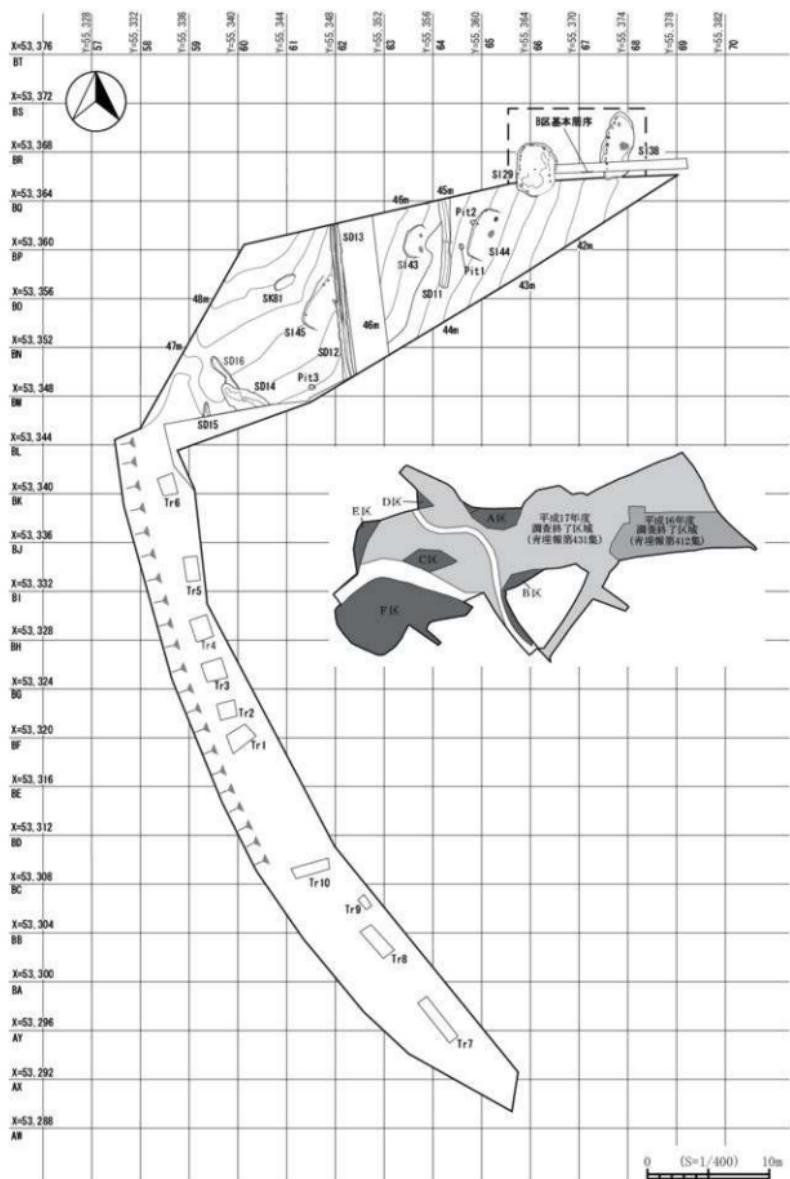


図14 B区 遺構配置図

## 第2節 B区

東向きの丘陵中腹に位置する。調査区は東西方向と南北方向に長く延びる鉤型となつており、北側は平成17年度調査のC・D1区に隣接している。東西方向に延びた調査区の標高は41～49mである。調査の結果、縄文時代の前期初頭から前葉の竪穴住居跡5軒、同晩期の土坑1基、時期不明の溝跡6条、縄文時代のビット1基、時期不明のビット2基を検出した。なお、このうち竪穴住居跡2軒（第29・38号竪穴住居跡）は、平成17年度調査の継続である。B Lライン以南は、標高36～44mの南東方向に下る尾根の西側に位置し、南北方向に延びた幅10mに満たない狭小な調査区である。トレント（Tr1～10）を先行させて調査した結果、いずれも第II～IV層の縄文時代から古代の遺物包含層に欠落がみられ、表土直下がV層であり、遺構の検出、遺物の出土はみられなかつたことから、それ以上の拡張は行わなかつた。

### 1 竪穴住居跡

#### 第29号竪穴住居跡（図15）

〔位置・確認〕B Q・R-65・66グリッドに位置し、第IV b層上面で検出した。土層断面図を作成したA-Bラインより北側は、平成17年度調査で検出・精査を行つてゐる。

〔平面形・規模〕南北方向に長い隅丸方形で、前回調査範囲と合わせた規模は、長軸4.45m、短軸3.08m、確認面から床面までの深さ85cmである。

〔堆積土〕5層に分層した。1～3層は竪穴堆積土、4・5層は貼床である。

〔壁・床面〕壁は西半で確認した。床面は第IV b～V層まで掘り込み、西半では地山を直接床面とし、東側では暗褐色土（5層）を貼つて床面としている。中央での硬化が著しく、中央部には部分的に黒色土（4層）が貼られ、硬化している。

〔柱穴・施設〕今回の調査で、壁際に並ぶ柱穴7基を検出した。前回調査との総数は22基で、壁際の柱穴が21基、中央の柱穴が1基である。壁際の柱穴は北側および西側を中心に配置されている。

〔炉〕検出されなかつた。

〔出土遺物〕堆積土および床面から縄文土器の破片が少量（総量144.0g）出土した。いずれの土器も織維を含んでゐる。図15-1は単軸縞条体1類、同2は異原体による羽状縄文である。

〔小結〕平成17年度調査では、第III群土器とした縄文時代前期初頭の土器に限定されていたが、今回調査で新たに第IV群土器が出土した。遺構の時期は、縄文時代前期初頭から前葉と考えられる。（加藤）

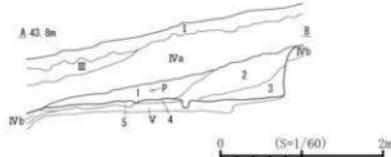
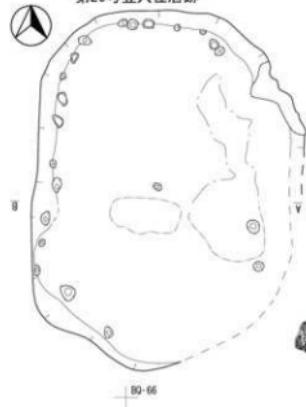
#### 第38号竪穴住居跡（図15）

〔位置・確認〕B Q・R-67グリッドに位置する。IV a層を精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。土層断面図を作成したA-Bラインより北側は、平成17年度調査で検出・精査が行われている。

〔平面形・規模〕平面形は長梢円形を呈する。前回調査範囲と合わせた規模は、長軸5.60m、短軸2.35mであり、検出面からの深さは35cmである。

〔堆積土〕5層に分層した。暗褐色土を主体とする。層中には黄橙色浮石が含まれ、土質は基本層序第IV層に類似する。自然堆積と考えられる。

## 第29号竪穴住居跡



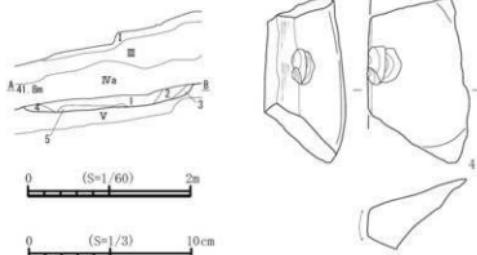
## 第29号竪穴住居跡

- 1層 10YR6/6 黒色土 10YR6/6明黄褐色浮石(φ1~15mm)5%,  
10VES/2灰白色浮石(φ1~10mm)5%,土器混入。  
2層 10YR7/6 明黄褐色浮石(φ1~25mm)40%,  
10YR6/8明黄褐色浮石(φ1~10mm)5%,  
V層 ブロック含む(-埋蔵堆積土)。

- 3層 10YR2/1 黒色土 10YR2/3暗褐色土を層状に含む。貼床。  
4層 10YR2/1 黒色土 10YR6/6明黄褐色浮石(φ1~5mm)35%,  
10YR6/6黃褐色浮石(φ1~7mm)3%,貼床。



## 第38号竪穴住居跡



## 第38号竪穴住居跡

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~10mm)3%,  
10YR6/5黄褐色ローム粒(φ1~20mm)1%未満。

- 2層 10YR2/3 黒褐色土 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~10mm)18%,

- 3層 10YR3/4 暗褐色土 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~10mm)18%,

- 4層 10YR3/4 暗褐色土 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~10mm)2%,

- 5層 10YR3/4 暗褐色土 10YR7/8黄褐色浮石(φ1~10mm)2%。



図15 B区 第29・38号竪穴住居跡、出土遺物

【壁・床面】壁は緩やかに立ち上がる。床面は平坦であるが、斜面下方である東側に傾斜している。

【柱穴・施設】平成17年度調査で西壁際から柱穴を21基検出した。

【炉】平成17年度調査で地床炉を1基検出した。

【出土遺物】堆積土中から縄文土器の破片1点が出土したが、小片のため時期は不明である。石器は堆積土中から磨石が1点（図15-4）出土した。

【小結】年代を決定できる遺物は出土しなかつたが、平成17年度調査成果より縄文時代前期初頭と考えられる。

（葛城）

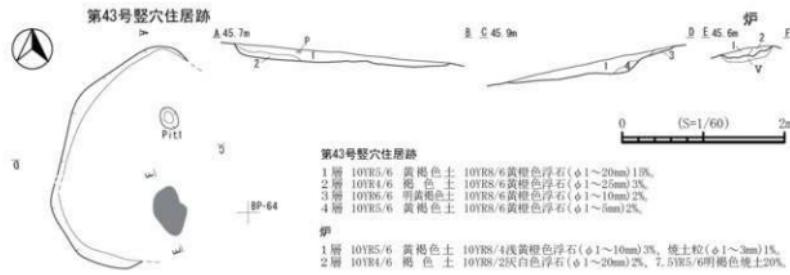


図16 B区 第43号竪穴住居跡

#### 第43号竪穴住居跡 (図16)

- [位置・確認] B O・P-63 グリッドに位置する。第V層を精査中に確認した。
- [平面形・規模] 斜面下方である南東側が失われているため詳細は不明であるが、平面形は長楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸 2.67m、残存短軸 1.58m であり検出面からの深さは 45 cm である。
- [堆積土] 4 層に分層した。黄褐色土を主体とし、土質は第IV層に類似する。自然堆積と考えられる。
- [壁・床面] 残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、斜面下方である東側に傾斜している。
- [柱穴・施設] 柱穴を 1 基検出した。長軸 28 cm、短軸 22 cm の椭円形を呈する。
- [炉] 床面南東側から焼土範囲を検出した。長軸 59 cm、短軸 39 cm の不整形を呈する。明確な火床面は形成されていないが、堆積土中に焼土を含むことから地床炉と考えられる。
- [出土遺物] 堆積土上層から縄文土器の破片 1 点が出土したが、小片のため時期は不明である。
- [小結] 堆積土の状況および周辺の遺構との関係から縄文時代前期初頭から前葉の可能性が高い。

(葛城)

#### 第44号竪穴住居跡 (図17)

- [位置・確認] B O・P-64・65 グリッドに位置し、第V層上面で検出した。
- [平面形・規模] 斜面下方の東側は失われており詳細は不明であるが、平面形は方形を基調とするものと思われる。規模は長軸 4.25m、短軸は残存部で 1.84m、検出面からの深さは 38 cm である。
- [堆積土] 2 層に分層した。1 層は黒色土を主体とした竪穴堆積土、2 層は掘り方埋土である。
- [壁・床面] 壁は西壁と南壁の一部を確認した。掘り方は中央部がやや深く、2 層を貼って床面とする。炉の周辺では硬化が著しい。
- [柱穴・施設] 柱穴は西壁際に 2 基、北側に 1 基 (Pit 1) 検出した。Pit 1 の堆積土は 2 層に分層でき、1 层は白色粘土主体とする層である。
- [炉] 床面の中央で地床炉を検出した。火床面は 70 cm × 50 cm の長円形範囲で被熱している。焼成厚は 15 cm である。
- [出土遺物] 堆積土および床面から縄文土器の破片が少量（総量 122.0 g）出土した。土器はいずれも鐵維を含んだ單軸絹条件 1 類の土器で、このうち 1 点を図示している。石器は床面直上から削器類 2 点、二次加工剥片 1 点、敲磨器 1 点が出土した。
- [小結] 堆積土の状況および出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉と考えられる。

(加藤)

**第45号竪穴住居跡 (図18)**

[位置・確認] BN-61, BO-61・62 グリッドに位置し、第V層上面で検出した。

[平面形・規模] 斜面下方の東側は失われており、平面形は不明である。残存長は、長軸 4.48m、短軸 2.06m である。確認面から床面までの深さは 43 cm である。

[堆積土] 3層に分層した。1・2層は暗褐色ないしは褐色土の竪穴堆積土で自然堆積と思われる。

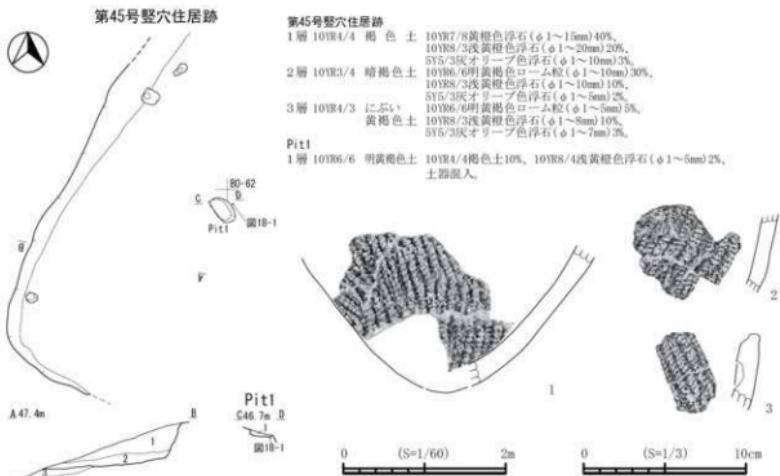


図18 B区 45号堅穴住居跡、出土遺物

3層は掘り方埋土である。

[壁・床面]西壁および南壁の一部を確認した。床は、西側は地山を直接床面とし、東側は3層上面を床面としている。

[柱穴・施設]柱穴は西壁際で3基、また堅穴中央で1基(Pit 1)を検出した。

[炉]検出されなかった。

[出土遺物]堆積土および柱穴内から縄文土器の破片が少量(総量218.0g)出土した。図18-1はPit 1出土の底部破片で、底部形状は砲弾状である。

[小結]出土遺物から時期は縄文時代前期初頭から前葉と考えられる。

(加藤)

## 2 土坑

第81号土坑(図19)

[位置・確認]BO-60・61グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして第V層上面で検出した。当初、堆積土のしまりの無さから搅乱と判断して調査を進めたが、その後、遺存状況の良い土器、石器が出土したため遺構と判断した。

[平面形・規模]斜面下方の南側が失われており平面形は不明である。残存部での長軸1.99m、短軸0.82m、確認面から底面までの深さは19cmである。

[堆積土]図化はできなかったが、しまりの弱い黑色土である。

[出土遺物]底面で縄文時代晩期の壺(図19-1)が出土したほか、堆積土から縄文時代中期から晩期の破片が出土した。図19-1は、底部を除いた口縁部から胴部までの、1/2程度が残存した壺で、口縁部は無文で4単位となる小突起がつくものと思われる。文様はLR縄文で、胴最上部の一部にはRL縄文が施文される。口唇部は全体が摩滅している。2は深鉢の口縁部破片で、肥厚した口縁部最上

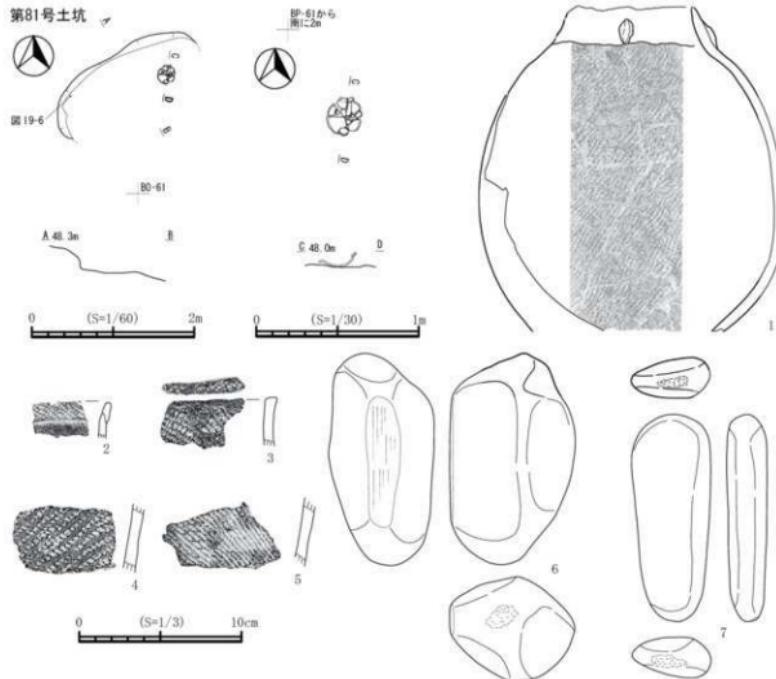


図19 B区 土坑、出土遺物

位に帯状の縄文が施文される。3は口縁部がやや厚くなり、口唇部には体部と同一原体L R 縄文を施文する。4・5はいずれも縄文の縦位回転施文で、4は複節L R L 縄文、5は無節L 縄文である。6は敲磨器、7は両端部に敲打痕をもつ敲石である。いずれも砂岩製である。

[小結]出土遺物から縄文時代晩期のものと考えられる。

(加藤)

### 3 溝跡

溝跡を6条検出した。このうち第11～13号溝跡は第V層上面で検出したが、調査区壁面の土層観察によれば、いずれの溝跡も第I層が堆積土を直接覆い、第11号溝跡では第II層を掘り込んでいる。また第12・13号溝跡は、現代の道路と同じ方向に延びており、堆積土はしまりがない。このため、第11～13号溝跡の時期は古代以降で、現代のものを含んでいる可能性が高い。第14～16号溝跡の走行方位は斜面の傾斜を意識したものであり、現代道路とは一致しないが、堆積土の上層を直接I層が覆っており、第11～13号溝跡同様に新しい可能性がある。

#### 第11号溝跡（図20）

【位置・確認】BO・P-64 グリッドに位置する。検出は第V層上面であるが調査区壁面の観察では第II層を掘り込んでいる。北側は調査区域外へ延びており、南側は調査区域内で掘り込みが途切れる。【規模・方位】幅1.78mで検出長7.20m、確認面から底面までの深さは最深部で36cmである。底面の傾斜は南側へ向かってやや下っている。走行方位はN-5°-Wである。【堆積土】暗褐色土の単層である。【出土遺物】堆積土から土偶（図20-1）が1点出土した。1は頭部破片である。顔面の一部が剥落している。全面に縦位及び横位に連続刺突が施され、一部は押し引き状を呈する。縄文時代中期末葉から後期にかけてのものと考えられる。

#### 第12号溝跡（図20）

【位置・確認】BM・N-62、BO-61・62、BP-61 グリッドに位置し、検出は第V層上面である。南北ともに調査区域外に延びている。第13号溝跡と並行し一部重複する。第13号溝跡とは堆積土が類似しており、平面的には新旧を確認できなかったが、調査区壁面の観察によれば本遺構が新しい。【規模・方位】幅0.64mで検出長は13.6m、確認面から底面までの深さ16cmである。底面の傾斜は、南側へ向かってやや下っている。走行方位はN-6°-Wである。【堆積土】褐色土の単層でしりとりはない。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

#### 第13号溝跡（図20）

【位置・確認】BM・N-62、BO-61・62、BP-61 グリッドに位置し、検出は第V層上面である。南北ともに調査区域外に延びている。第12号溝跡と並行し一部重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。【規模・方位】幅0.44mで、検出長13.60m、確認面から底面までの深さ20cmである。底面の傾斜は、南へ向かってやや下っている。走行方位はN-6°-Wである。【堆積土】褐色土の単層でしりとりはない。【出土遺物】堆積土から縄文時代前期の土器小片1点が出土した。

#### 第14号溝跡（図21）

【位置・確認】BM-59・60、BN-59 グリッドに位置し、第V層上面で検出した。第16号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。【規模・方位】溝跡の掘り込み形状は、台形ないしV字であるが、西側は外方へ開いている。規模は上端幅で1.94m、検出長4.24m、確認面から底面までの深さは1.18mである。走行方位はN-60°-Wで、南斜面の傾斜に直行している。底面標高は北西から南東へ下がっている。【堆積土】6層に分層した。1・2層は主に西側に分布する、溝上部の堆積土である。【出土遺物】底面付近で44cm×26cmの自然疊（S-1）が走行方位に直交するように出土した。このほか、堆積土3層には、縄文時代中期末葉から後期前葉の縄文土器片を少量含んでいる。

#### 第15号溝跡（図21）

【位置・確認】BM-59 グリッドに位置し第V層上面で検出した。西側へ傾斜した斜面に位置する。【規模・方位】溝幅は0.54mで、検出長は1.20mである。確認面から底面までの深さ36cmである。走行方位はN-1°-Wである。【堆積土】2層に分層した。堆積土上層は第I層が覆っている。【出土遺物】

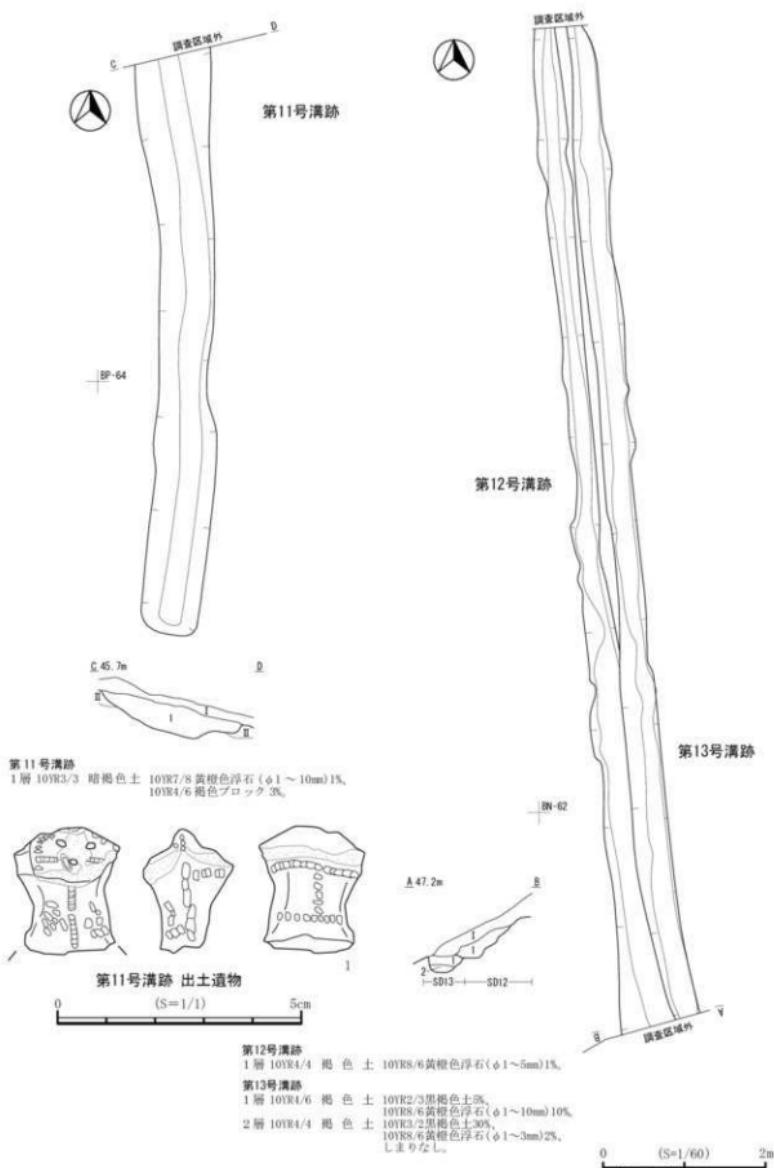


図20 B区 第11~13号溝跡、出土遺物

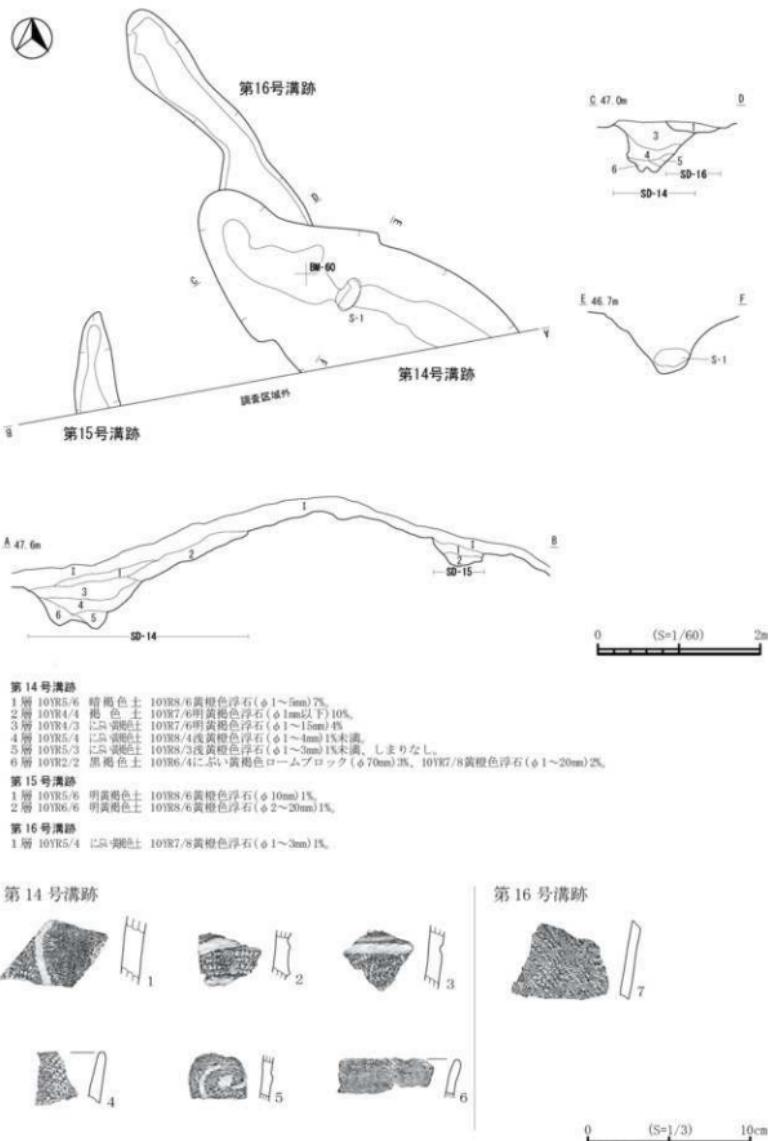


图21 B区 第14~16号溝跡、出土遺物

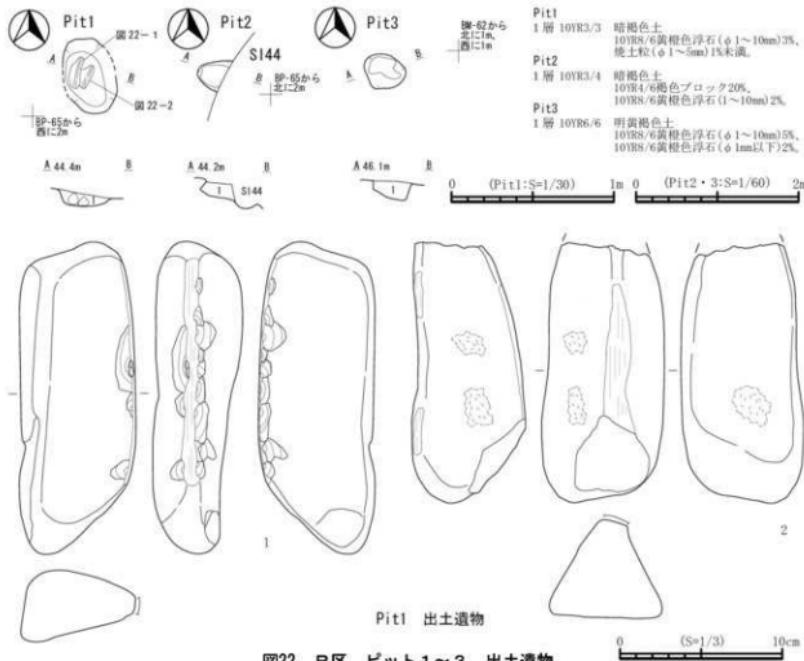


図22 B区 ピット1～3、出土遺物

遺物は出土していない。

#### 第16号溝跡（図21）

【位置・確認】BM・N-59 グリッドに位置し、第V層上面で検出した。南側で第14号溝跡と重複しており、当初、同一遺構として調査を進めたが、規模・形状が異なることから別遺構とした。新旧関係は本遺構の方が新しいが、第14号溝跡の一部である可能性もある。【規模・方位】幅は0.72mで、検出長は3.40mである。確認面から底面までの深さ15cmである。走行方位はN-36°-Wである。【堆積土】にぶい黄褐色土の単層である。【出土遺物】堆積土から縄文土器、石器が出土した。  
(加藤)

#### 4 ピット（図22）

ピットは3基検出した。Pit 1・2はBP-64グリッド、Pit 3はBM-61グリッドに位置する。このうちPit 1の底面では磨石1点、敲磨器1点が使用面を上位に向け、疊長軸を揃えるように出土した。平成16年度でも同様の遺構が出土しており、縄文時代の石器埋納遺構と思われる。図22-1はやや扁平な縄の側縁に磨面を持つ砂岩製の磨石である。磨面の周囲には剥離が見られる。2は断面三角形を呈する縄の側面に磨面が、平坦面に敲打痕を持つ砂岩製の敲磨器である。  
(加藤)

## 5 遺構外出土遺物（図 23・24）

遺物は縄文土器、石器、石製品、陶磁器が出土した。出土遺物の総量は、縄文土器 2,378.0 g、石器 2,168.3 g、陶磁器 64.1 g である。縄文土器の時期は、前期初頭から前葉、中期末葉から後期前葉、晚期のものが見られ、出土数量は前期初頭から前葉 1621.4 g、中期末葉から後期初頭 631.4 g、晚期 7.3 g、時期不明 117.9 g である。前期初頭から前葉の土器の分布は同一時期の竪穴住居跡の位置とおおむね一致している。

### 縄文時代前期初頭から前葉の土器（図 23-1～22）

いずれも破片で出土しており、器形のわかる資料はないが、砲弾状となる底部破片が 1 点（図 23-21）出土している。A 区同様、接合痕は外傾となる資料が多く、その程度が大きいのが特徴で、製作技法の一端を示している。また胎土には纖維を多量に含んでいる。文様は L R 縄文、異原体の羽状縄文、単軸絡条体 1 類がみられるが、単軸絡条体 1 類の比率が多い点において A 区とはやや異なる。単軸絡条体 1 類を施す土器は、いずれも施文時の粘土の移動が大きく、器面の乾燥がほとんど進行しない時点で施文されている。17・22 などでは、器表面の剥落部に地文がうかがえ、施文が成形と並行して進行していたことのわかる資料である。1・2 は同一個体で、節の大きい原体 L R 縄文を横位回転施文する。4・22 の内面には横方向の条痕がみられる。5・6 は同一個体で、文様は L R 縄文と R L 縄文の異原体による羽状縄文である。

### 縄文時代中期末葉から後期前葉の土器（図 23-23～31）

23・24 は波状口縁の深鉢と思われ、文様、胎土の特徴より同一個体の可能性が高い。23 はその波頂部で、地文は L R 縄文の縱位回転で沈線によるモチーフが描かれる。なお掲載はしていないが、同グリッドには同一個体の破片がやや多く分布している。30 も胎土と原体が類似しており同一個体の可能性がある。26 は縄文地に沈線による文様が施される。27 は波状口縁の深鉢と思われ、無筋 R の縄文地に沈線により弧状のモチーフが描かれる。28 は無文地に沈線により J 字状のモチーフが描かれる。29 は隆線上に L R 縄文を回転施文する。

### 縄文時代晚期の土器（図 23-32・33）

32・33 は L R 縄文の横位回転施文である。33 は壺の胴部上半である。

（加藤）

### 石器（図 24）

#### 石鏹（図 24-1）

1 点出土した。有茎の石鏹であるが、左右非対称であり未製品と考えられる。珪質頁岩製である。

#### 石匙（図 24-2～4）

3 点出土した。2～4 は縦型石匙である。2・3 は右側縁は背面のみ、左側縁と末端部は表裏両面に刃部加工を施している。4 は基部を欠損する。右側縁は背面のみ、左側縁は表裏両面に刃部加工を施している。いずれも珪質頁岩製である。

#### 石箇（図 24-5）

1 点出土した。5 は基部を欠損する小型の石箇で、全面に平坦剥離が施される。珪質頁岩製である。

#### 削器類（図 24-6・7）

2 点出土した。6 は周縁に連続する調整剥離が施される。7 は端部に刃部加工が施される。いずれ

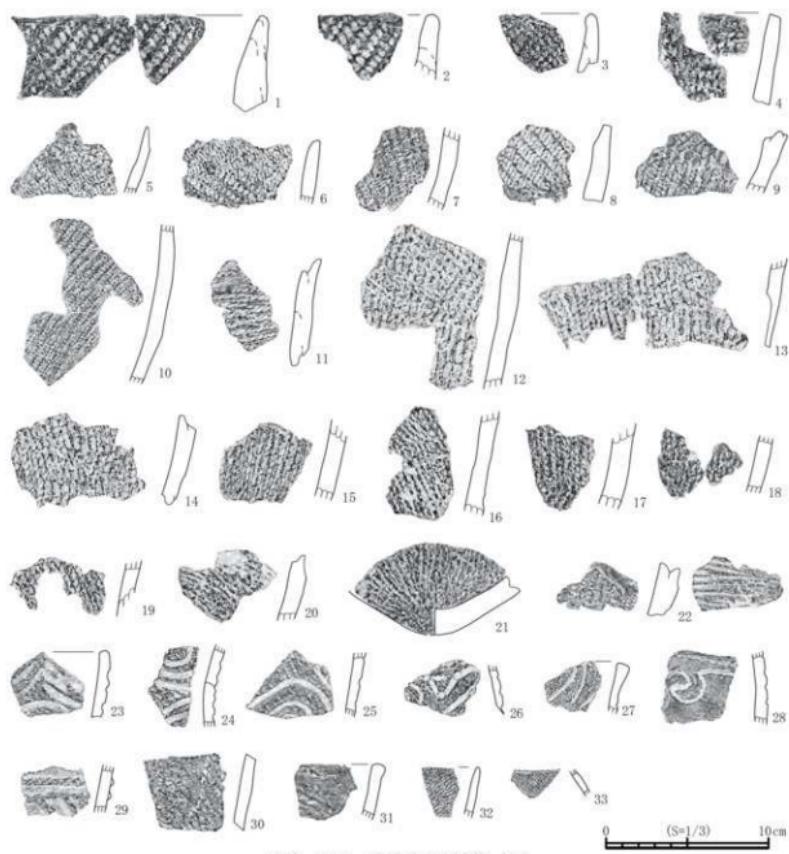


図23 B区 遺構外出土遺物（1）

も珪質頁岩製である。

二次加工剥片（図24-8・9）

2点出土した。いずれも珪質頁岩製である。

剥片 図示しなかつたが、36点、154.1g出土した。

打製石斧（図24-10～12）

3点出土した。いずれも粗粒玄武岩製で、片面に原礫面を残す。

敲磨器（図24-13）

1点出土した。13は平坦面に敲打痕、側縁に磨面をもつ。砂岩製である。

石棒（図24-14）

1点出土した。両端が欠損している。頁岩製である。

（葛城）

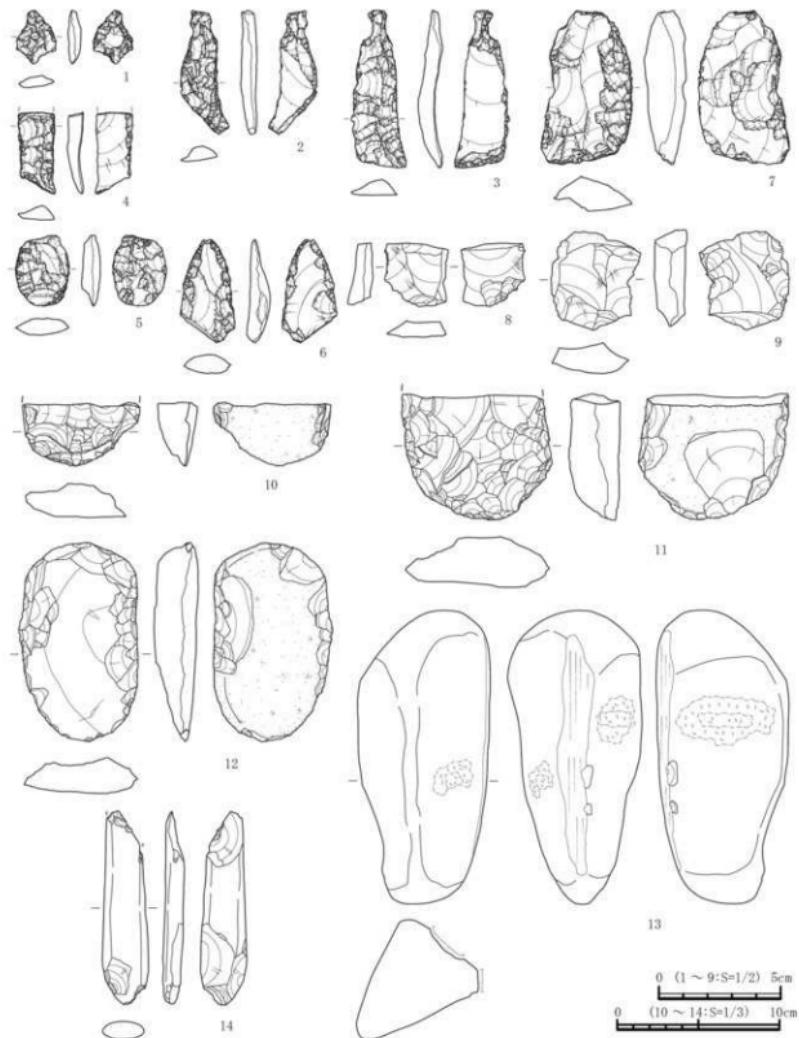


図24 B区 遺構外出土遺物（2）

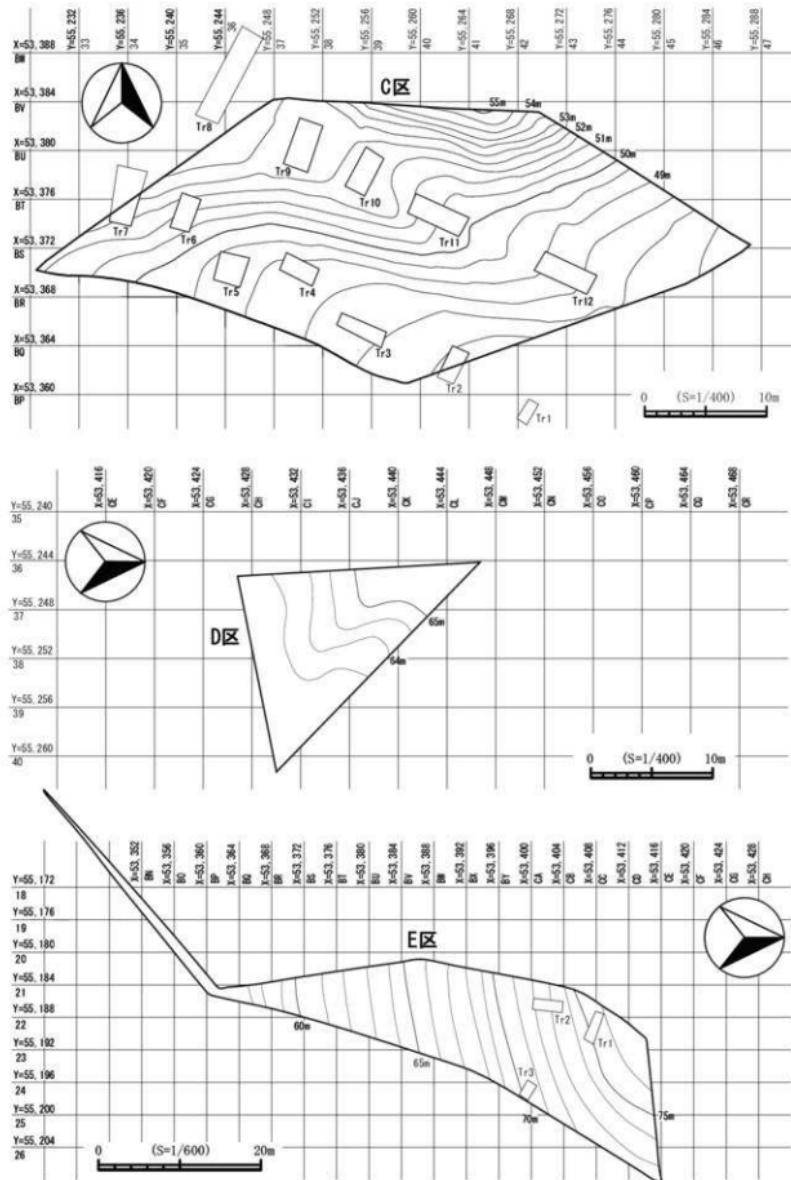


図25 C・D・E区 トレンチ配置図

### 第3節 C区(図25・26)

C区は遺跡西側の傾斜面に位置し標高は47～55mである。本調査区の周辺は平成17年度調査のE区にあたる。12カ所設定したトレンチを先行させて調査を行った。県道に隣接する1～7トレンチは、大きく削平を受けており、8～12トレンチは、第II層以下が良好に堆積していた。いずれのトレンチも少量の土器片が表土から出土したのみで遺構は検出されなかつたことから、それ以上の拡張は行わなかつた。遺物は表土中から、縄文時代前期から晩期の土器が434.6g出土したほか、磨り石1点が出土した。

### 第4節 D区(図25・26)

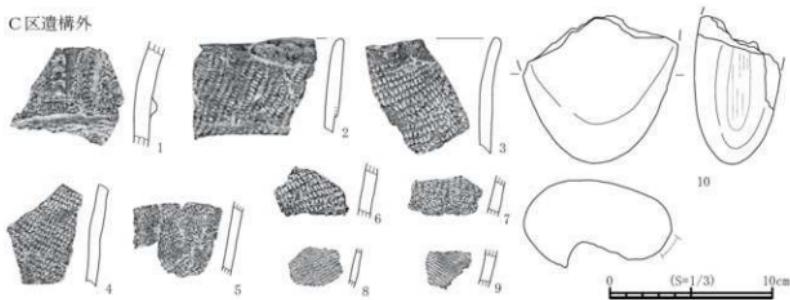
D区は遺跡北西端に位置し、標高は63～66mである。表土中から少量の土器片が出土したのみで遺構は検出されなかつた。

遺物は表土中および攪乱から縄文時代前期から晩期の土器が282.2g出土した。11・12は円筒上層e式の土器で同一個体である。13・14は晩期の壺で同一個体の可能性が高い。3は頸部に沈線があり口縁部は直立する。

### 第5節 E区(図25・26)

E区は調査区西側の急斜面に位置し、標高は55～76mである。斜面中腹を中心にして3カ所のトレンチを先行して調査を行つた。結果、表土直下が基本層序第V層であり、遺構、遺物ともに確認されなかつたことから、それ以上の拡張は行わなかつた。  
(葛城)

C区遺構外



D区遺構外

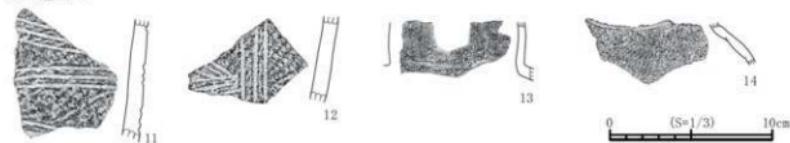


図26 C・D区 遺構外出土遺物

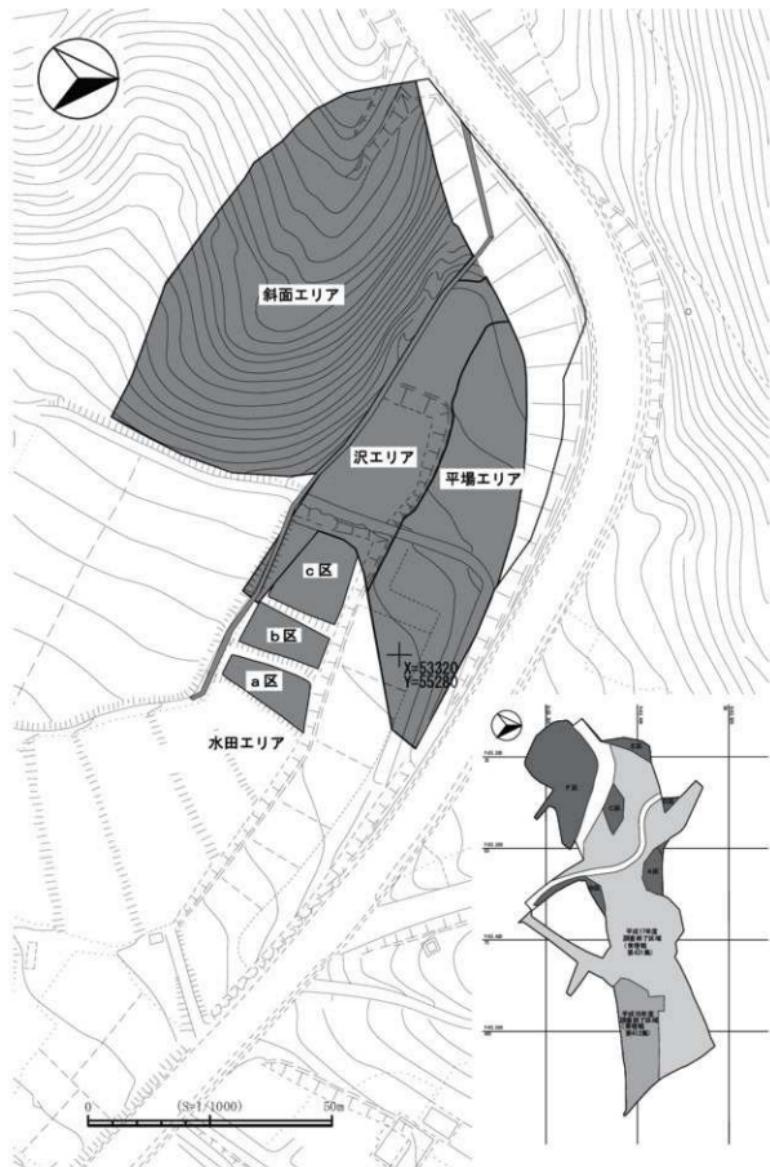


図27 F区 調査区域図

## 第6節 F区

F区は調査対象範囲の西端に位置しており（図27）、平成22年度・23年度に本発掘調査を行った。

調査区は地形により4地区に分けることができる。調査区南側に位置している比高差20mほどある斜面エリア、調査区北側に位置している標高39m～42m付近の平場エリア、調査区の中央に位置している沢エリア、平成23年度の調査開始前の協議で、新たに調査範囲に追加された水田エリアである。

F区からは平場エリアを中心として、堅穴住居跡1軒、土坑8基、土器埋設遺構2基、集石遺構1基を検出した。また、遺物は沢エリアを中心として縄文時代の土器や石器が段ボール箱で52箱出土した。F区の遺構名についてはA～E区と幹線道路を挟んで離れており、かつ地形的にも大きく異なっていることから、新規に番号を付した。また、前節までは遺構ごとに小節を設けていたが、F区では地形で区分けしたエリアごとに小節を設け記載していくこととする。

### 1 斜面エリア（図27～29）

本区は比高差が20mほどある急峻な斜面であるが、頂部付近及び中腹付近は緩斜面となっている。トレンチを先行させて調査を行った結果、急斜面地ではほとんど遺物が出土せず、遺構も見られなかった。また、頂部付近では八戸火山灰層に至るまでの深い造成が行われていることが明らかとなった（図28）。そのため、これらの範囲はそれ以上の調査を行わず、遺構・遺物を発見した中腹付近約265m<sup>2</sup>についてのみ面的な調査を行うこととした（図29）。調査の結果、土坑2基を検出したほか、約850gの土器が出土した。土器は小破片での出土が多く、時期を判断出来るものがなかったため、図示しなかった。

### 第2号土坑（図30、32）

【位置・確認】AU-32グリッドに位置している。基本層序第V層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。【平面形・規模】平面形は円形である。長軸×短軸の長さは上端で1.54m×1.25m、下端で1.42m×1.30mである。確認面からの深さは1.00mである。【堆積土】黒色土を主体として4層に分層した。3層には基本層序第V層由来のロームが多く混じっており、壁が崩落しながら堆積した状況が考えられる。【壁・底面】壁は湾曲して立ち上がっている。底面のはば中央から長軸30cm、短軸20cm、深さ7cmほどの小ピットを検出した。【出土遺物】石鏃が1点出土した（図32-17）。平基の無茎鏃で、先端が欠損している。【小結】平面形及び堆積土の状況から縄文時代に構築されたと考えられるが、詳細は不明である。

### 第8号土坑（図30）

【位置・確認】AV・W-31・32グリッドに位置している。基本層序第V層上面を精査中に黒色土の不整形プランとして確認した。【平面形・規模】平面形は梢円形である。長軸×短軸の長さは上端で2.60m×1.40m、下端で1.10m×0.50mである。確認面からの深さは1.28mである。【堆積土】不整形プランとして確認したため、壁の状況把握を優先し、土層観察用のベルトを設定しなかった。調査時の所見としては黒色土主体の土と記録してある。【壁・底面】壁は開くように立ち上がっており、底面には凹凸がある。【出土遺物】なし。【小結】平面形及び検出面から縄文時代に構築されたと考えられるが、詳細は不明である。 （小山）

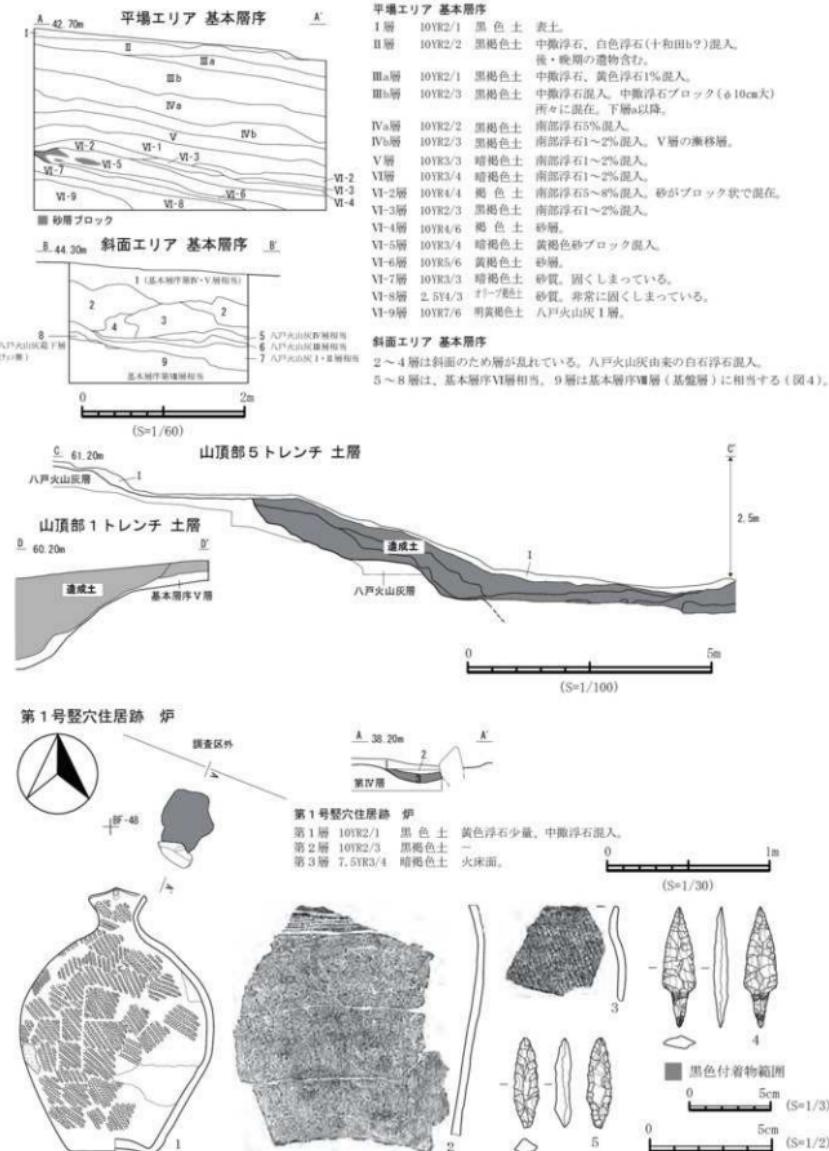


図28 F区 基本土層、山頂部トレンチ土層、第1号竪穴住居跡、出土遺物

## 2 平場エリア (図 27、29 ~ 42)

本エリアは平成 22 年度の発掘調査で、基本層序第 II ・ III 層から縄文時代中期～晩期の遺物が、基本層序第 IV ・ V 層から縄文時代早期の遺物が出土することを確認しており、2 面の文化層について調査が必要であった。調査の結果、竪穴住居跡 1 軒、土坑 6 基、土器埋設遺構 2 基を検出した。

### 2-1 竪穴住居跡

#### 第 1 号竪穴住居跡 (図 28)

【位置・確認】平場エリア東端の B-E ・ F-48 グリッドに位置している。基本層序第 II ・ III 層を掘り下げ中に遺物が周囲よりも比較的密に分布している範囲を確認した。遺構が存在している可能性を考慮し、遺物取り上げ後にプラン確認を行ったが、検出することができなかつた。その後、基本層序第 IV 層上面まで掘り下げたところ、炉を検出したことから住居跡と認定した。しかし、炉周辺で硬化面等を検出することができず、床面範囲を捉えることができなかつた。【平面形・規模】焼面は 32 cm × 33 cm の範囲で拡がっており、土層観察地点では最大 5 cm の厚さで被熱している。また、焼面の端から 15 cm × 25 cm 大の角礫が出土した。礫の掘り方は識別できなかつたものの、焼面検出レベルよりも 10 cm 以上の深さで埋まっていることから、意図的に配置したものと考えられる。【堆積土】炉の堆積土は 3 層に分層した。3 層は被熱している層である。【出土遺物】住居周辺を掘り下げ時に出土した遺物は、炉の上位に集中していたことから、これらの遺物については本竪穴住居跡出土遺物と捉えることとした。土器は約 1,500 g 出土した。図 28-1 は壺型土器ではほぼ完形に近い状況に復元できた。地文のみが施文されている土器で、L.R が縱位・斜位に回転施文されている。口縁は 2 単位の波状口縁となっており、波頭部には突起が貼り付けられている。文様から土器の帰属時期を判断できないが、口縁形状及び器形から後期前葉期に近い土器と考えられる。図 28-2 は深鉢型の土器片で頸部屈曲部に沈線が施文されている。沈線の施文方法としては、浅くて太い 2 条の沈線間に、深くて細い数条の沈線が充填されている。文様から十腰内 I 式に帰属すると考えられる。図 28-3 は鉢型土器で、単輪絞状体 1 類が縱位回転施文されている。土器型式の詳細は不明であるが、施文手法から後期前半期の土器と考えられる。石器は 5 点出土し、このうち石鏃 2 点を図示した。図 28-4 は無茎鏃で、基部が尖っている。図 28-5 は有茎鏃で、茎部付近に黒色付着物が観察された。アスファルトの可能性も考えられる。【小結】炉のみの検出であり、全体形など不明な点が多い。また、床面出土遺物がないことなどから構築時期など詳細は不明である。しかし、炉の形態から時期を推測することはできる。本炉の形態は地床炉と礫がセットになるタイプである。同様の炉は八戸市内では丹後谷地遺跡（第 1 号住居、第 36 号住居）、基座遺跡（第 77 b 号住居）などで検出されており、これらの遺構は出土遺物から後期初頭～前葉期の遺構とされている。のことから本炉も当該期に近い時期に構築された可能性がある。また、炉の上位から出土した遺物も概ね後期前半のものと考えられ、遺物から見ても、本遺構は後期初頭～前葉期に構築されたと推測できる。

(小山)

### 2-2 土坑

#### 第 1 号土坑 (図 30、32)

【位置・確認】平場エリア東側 B-G ・ H-41 ・ 42 グリッドに位置している。基本層序第 III 層上面で白色の浮石が密に入っている黒色土の半円形プランとして確認した。本土坑は調査区外へと伸びており、精査できたのは遺構の約半分である。【平面形・規模】平面形は現存している状況から円形であったと考えられる。長軸 × 短軸の長さは、上端で 4.75 m × (2.63) m、下端で 1.84 m × (1.64) m である。検出面からの深さは 2.90 m

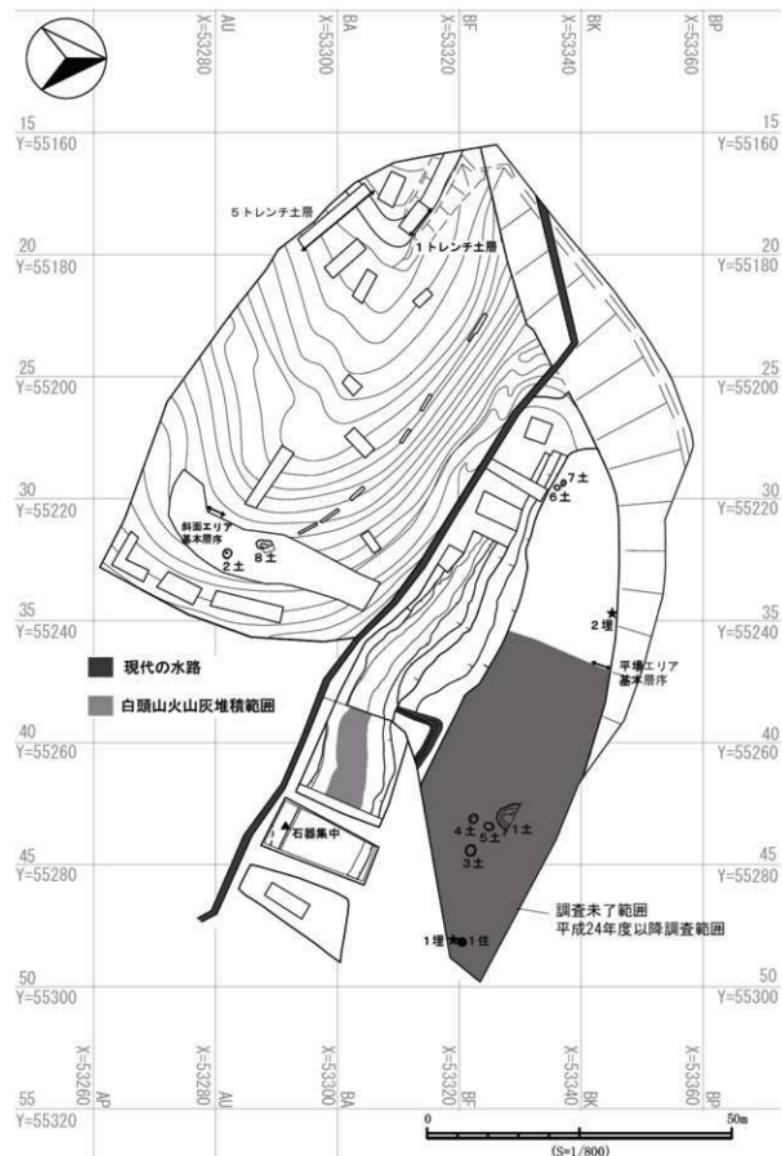


図29 F区 遺構配置図

である。[堆積土]32層に分層した。1～14層はレンズ状に堆積し、15層から下位の層は黒色土の層と、白色・黄褐色のローム層が折り重なるように堆積している。のことから、埋没過程の初期段階では崩落を繰り返し、その後、埋まりきらずに窪地となっていたところに、自然堆積した状況が推測できる。また、層の上位から中位では層を横断するような砂層が何層か確認できた。湧水により水位が上がったものと考えられる。[壁・底面]壁は基本的に聞くように立ち上がっているが、土坑の下位では崩落が繰り返されたせいか、壁に凹凸が見られる。底面の状況は、湧水が激しく詳細を確認することができなかった。

[出土遺物]堆積土中から約7,400gの土器が出土した。遺物は特徴的なものに関しては位置を記録し、層位を把握しながら取り上げたが、その他のものに関しては覆土一括として取り上げている。しかし、31層以下(図30)から出土したものに関しては、最下層という括りを設け取り上げた。図32-1～5は十腰内I式に比定される土器である。1は鉢型、2は深鉢型、3～5は壺型の土器である。5は最下層から出土したものである。図32-6～9は晩期の土器である。このうち、8、9は堆積土の上位である3層中から出土したものである。8は脚付きの浅鉢であるが、現存している脚部は1本である。文様は口縁に沿って1条の沈線が施されているだけで、ほかには施文されておらず、外面全体にミガキが施されている。文様から時期を判断することができないが、工字文が施文されている9と同層で、近接して出土していること、脚付き浅鉢が晩期後葉にみられることなどから、当該期のものと推測できる。9は台付き土器の台部である。工字文が施文されており、沈線内には一部赤色顔料が残存している箇所もある。文様から晩期後葉に帰属すると考えられる。6は口縁部片で、口縁にはB型突起が付き、口唇には刻目が施されている。頸部には沈線が施され、沈線間に刻目が施されている。7はほぼ完形に近い状況に復元できた台付き鉢である。口縁及び頸部屈曲部には突起が貼り付けられている。頸部は磨かれて無文帯となっており、肩部には雲形文が施文されている。文様から晩期中葉に帰属すると考えられる。図32-10～12は綱文を施文しただけの土器である。器形などから、後期～晩期の時期のものと考えられる。

石器は剥片石器3点、礫石器1点が出土した。このうち、石槍1点と加工礫1点を図化した。図32-13は最下層から出土した石槍で、つまみの付いた形状となっている。このような形状の石槍は前期後半に多く見られるものである。図32-14は加工礫である。土製品は1点の出土である。図32-15は鉢型のミニチュア土器で、最下層から出土したものである。頸部屈曲部に沈線と貼り瘤が施されている。器形及び貼瘤の位置から晩期中葉に帰属すると考えられる。石製品も最下層から1点出土した(図32-16)。擦り加工によって器面成形されているが、特に側面が強く擦られ尖端部が作出されている。素材は砂岩である。[小結]最下層から出土した晩期中葉のミニチュア土器の存在から、当該期にわざめて近い時期に廃棄された土坑と考えられる。

### 第3号土坑(図31、32)

[位置・確認]平場エリア東側BF-44グリッドに位置している。基本層序第III層上面を精査中に白色浮石が比較的密に入った黒色土の円形プランとして確認した。[平面形・規模]平面形は円形である。長軸×短軸の長さは、上端で1.65m×1.50m、下端で1.51m×1.36mである。確認面からの深さは2.12mである。[堆積土]8層に分層した。1～4層は黒色土を主体とした層で基本層序第II・III層によく似た土質である。2層中には第1号土坑と同様に砂層が堆積しており、湧水の影響を受けながら堆積したものと考えられる。[壁・底面]壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、崩落しているためか所々凹凸が見られる。底面は平坦でなく10cm程度の段差が見られる。[出土遺物]土器は708g出土した。図32-21は肩部片で、胎土に纖維が混

入している。文様は結束第1種の羽状繩文が施文されている。文様・胎土から前期後葉の土器と考えられる。図32-18は深鉢の胴部片である。文様は太目の弦線の内側に細い弦線が4～5条ほど充填されており、十腰内1式と考えられる。図32-19は鉢の口縁部片である。頸部に弦線、その下位には単軸絡状体1類が縦位回転施文されている。文様から後期前半の土器と考えられる。図32-20は一段高くなった文様帯の中に、節の細かいLRが充填されている。小破片のため全体の文様モチーフが分からず、詳細な土器型式は不明である。後期後葉もしくは晩期中葉に帰属すると考えられる。石器は削器2点、剥片1点出土したが、図示しなかった。〔小結〕出土土器から後期後葉以降に埋まつた遺構と考えられる。

#### 第4号土坑（図31）

〔位置・確認〕平場エリア東側B F -42・43 グリッドに位置している。基本層序第III層上面を精査中に白色浮石が比較的密に入った黒色土の円形プランとして確認した。〔平面形・規模〕平面形は円形である。土層では開口部が窄まっている状況を確認できた。土層観察地点での開口部径は約60cmである。下端での長軸×短軸の長さは0.97m×0.83mである。確認面からの深さは1.70mである。〔堆積土〕7層に分層した。1層及び4層中には砂層が堆積している。7層はローム質土であるが、八戸火山灰等の混入は見られなかった。〔壁・底面〕南北の壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、東西の壁は中位から開口部に向かって窄まっていく状況である。〔出土遺物〕堆積土中から90gの土器が出土したが、小破片ばかりであったため、図示しなかつた。〔小結〕検出面及び堆積土の状況から繩文時代に構築されたと考えられるが、詳細は不明である。

#### 第5号土坑（図31）

〔位置・確認〕平場エリア東側B G -43 グリッドに位置している。基本層序第III層上面を精査中に白色浮石が比較的密に入った黒色土の円形プランとして確認した。〔平面形・規模〕平面形は円形である。長軸×短軸の長さは上端で1.34m×1.21m、下端で1.32m×1.08mである。確認面からの深さは2.02mである。〔堆積土〕半裁して掘り進めていたが、湧水が激しく、週末の休業中に土層観察面が崩落していた。そのため土層観察面を残さずに完掘した。堆積状況は図化していないが、調査時の所見では、堆積土の中位へ上位にかけて黒色土が堆積しており、近接して検出した第4号土坑と同様の堆積状況を示していたと記録している。〔壁・底面〕壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壁の中位では凹凸がみられる。〔出土遺物〕なし。〔小結〕検出面及び堆積土の状況から繩文時代に構築されたと考えられるが、詳細は不明である。

#### 第6号土坑（図31、32）

〔位置・確認〕平場区西側B I・J -30 グリッドに位置している。基本層序第IV層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。〔平面形・規模〕平面形は円形である。長軸×短軸の長さは上端で97cm×83cm、下端で88cm×72cmである。確認面からの深さは15cmである。〔堆積土〕黒色土の単層である。〔壁・底面〕底面には若干の凹凸が認められる。〔出土遺物〕1点出土した。図32-22は鉢型土器の口縁部片で、口縁は小波状となっており、RLが横位回転施文されている。文様から詳細な時期は不明であるが、器形から後期前半の土器と考えられる。〔小結〕出土遺物から繩文時代に構築されたと考えられるが、詳細は不明である。

**第7号土坑（図31）**

【位置・確認】平場エリア西側B J ~29 グリッドに位置している。基本層序第IV層上面を精査中に黒色土の円形プランとして確認した。【平面形・規模】平面形は円形である。長軸×短軸の長さは上端で 104 cm × 75 cm、下端で 62 cm × 40 cm である。確認面からの深さは 42 cm である。【堆積土】黒色土を主体として堆積しており、2 層に分層した。【壁・底面】底面は平坦で、壁は聞くように立ち上がっている。【出土遺物】なし。【小結】検出面及び堆積土の状況から縄文時代に構築されたと考えられるが、詳細は不明である。  
(小山)

**2-3 土器埋設遺構****第1号土器埋設遺構（図33）**

【位置・確認】平場エリア東端B E ~48 グリッドに位置している。基本層序第IV層上面から検出した。【出土状況】口縁から底部まである完形土器が埋設されているが、明瞭な掘り方は確認できなかった。口縁部での検出なため、検出面が構築面と捉えることができる。【土器】図33-1は深鉢型土器で、口縁に横走沈線が、胴部には網目状となる單軸絡条件 5 類が回転施文されている。詳細な土器形式は不明であるが、胎土・器形・施文手法などから後期前半のものと考えられる。【小結】後期前半の土器が埋設される面としては中撒浮石堆積以降の基本層序第II・III層であるはずだが、本遺構は基本層序IV層上面が構築面となっている。このことから、構築時には当該面まで掘り下がっていた事が考えられ、状況としては遺構の底面若しくは床面に構築された可能性が考えられる。本遺構のすぐ脇には炉のみを検出した第1号竪穴住居跡があり、炉と本遺構の検出レベルはほぼ同じである。検出状況から本遺構は第1号竪穴住居跡の床面に構築された遺構であった可能性もある。  
(小山)

**第2号土器埋設遺構（図33）**

【位置・確認】B K -35 グリッドに位置し、第III層中で検出した。ほぼ完形の個体が斜位で出土していることから、掘り方は検出できなかったが土器埋設遺構として報告する。【出土状況】口縁部を南側に傾け、斜位の状態で出土した。ほぼ完形の個体で口縁部から胴部中位までは埋設時の状況を留めたものと思われるが、植物根の影響で一部胴部が土器内に落ち込んでいる。また底部はこの下位に位置し、外底面を南側（土器内側）へ向けた横位の状態で出土している。【土器】図33-2 はほぼ完形の深鉢である。胴部上半に最大径をもち、底部に向かってほぼ直線的にすぼまる器形で、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は角頭状に面取りされている。文様は、口縁部は無文で、胴部以下は R L 繩文を斜位回転施文する。胴部から底部には、煮沸に伴う顕著な使用痕が観察でき（図33右）、外面では口縁部から胴部中央までススが付着し、内面では胴部上半に斑状の剥落、下位にはコゲが3段の帯状に付着している。口縁径 27.5 cm、底径 8.9 cm、器高 39.3 cm、胴部最大径 31.7 cm である。【小結】外反する口縁、胴部上半に最大径をもつ器形上の特徴、および文様上の特徴などから、弥生時代前期頃のものと考えられる。  
(加藤)

**2-4 遺構外出土土器（図34～37）**

平場エリアからは縄文時代早期中葉から晩期中葉までの土器が約 50 kg 出土したが、縄文時代前期後半以降の土器は中撒浮石層の下層にあたる基本層序第IV層以下には全く含まれておらず、これらの層からは早期中葉～前期初頭の土器だけが出土した。

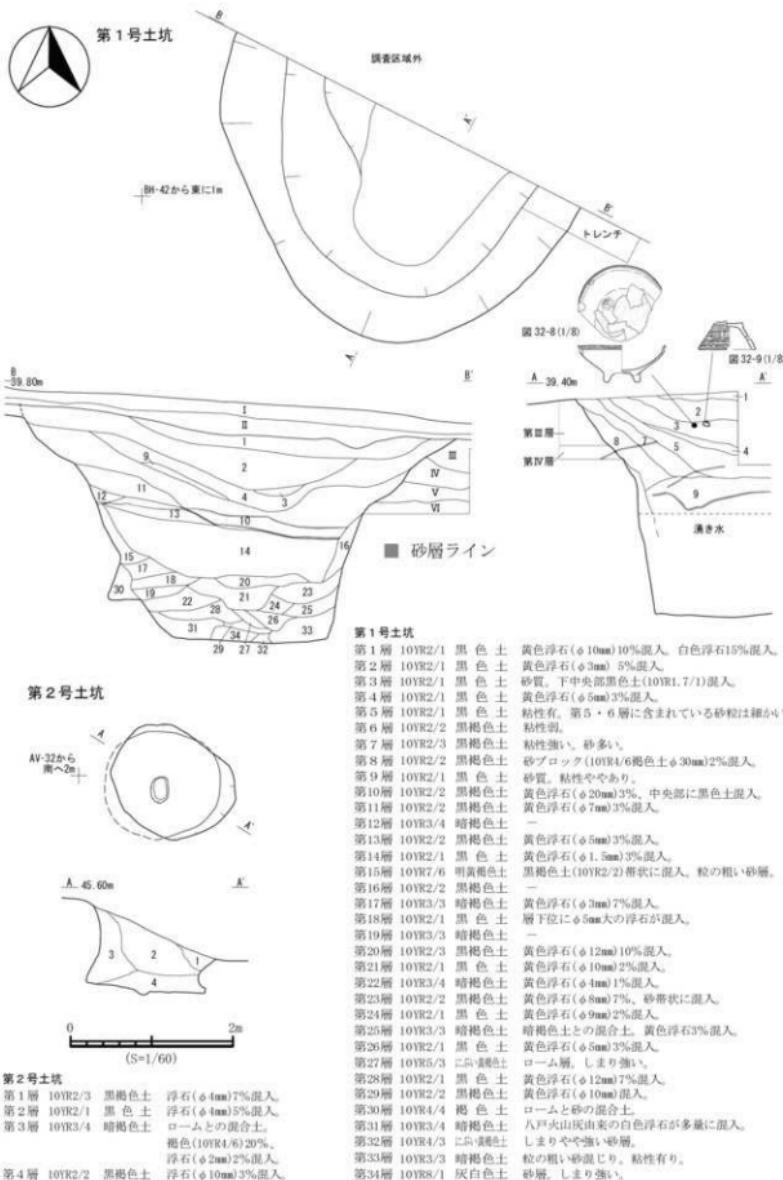


図30 F区 土坑 (1)

**第3号土坑**

第1層	10YR1.7/1	黒色土	浮石ごく微量、中散浮石混入。
第2層	10YR1.7/1	黒色土	浮石(φ~7mm)2%混入。砂層が帶状に体積。
第3層	10YR2/1	黒色土	中散浮石混入。
第4層	10YR2/3	黒褐色土	中散浮石混入。
第5層	10YR2/2	黒褐色土	中散浮石混入。
第6層	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土20%、にぶい黄褐色土7%混入。
第7層	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土20%、にぶい黄褐色土10%混入。
第8層	10YR5/4	こじ葉茎土	崩落土
第9層	10YR5/3	こじ葉茎土	褐色土30%混入。

**第6号土坑**

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒1%混入。
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒1%混入。

**第4号土坑**

第1層	10YR2/1	黒色土	黄色浮石(φ1mm)1%混入。
第2層	10YR1.7/1	黒色土	—
第3層	10YR2/1	黒褐色土	黒褐色土。肉側に帶状に混入。
第4層	10YR2/2	黒褐色土	砂質。4層から下位層では砂の粒子が小さい。
第5層	10YR2/2	黒褐色土	粘性有り。
第6層	10YR3/3	暗褐色土	粘性有り。
第7層	10YR6/6	明黃褐色土	ローム質土。

**第7号土坑**

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒(φ2mm)1%混入。
第2層	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土ブロック混入。

**図31 F区 土坑 (2)**

## 第1号土坑

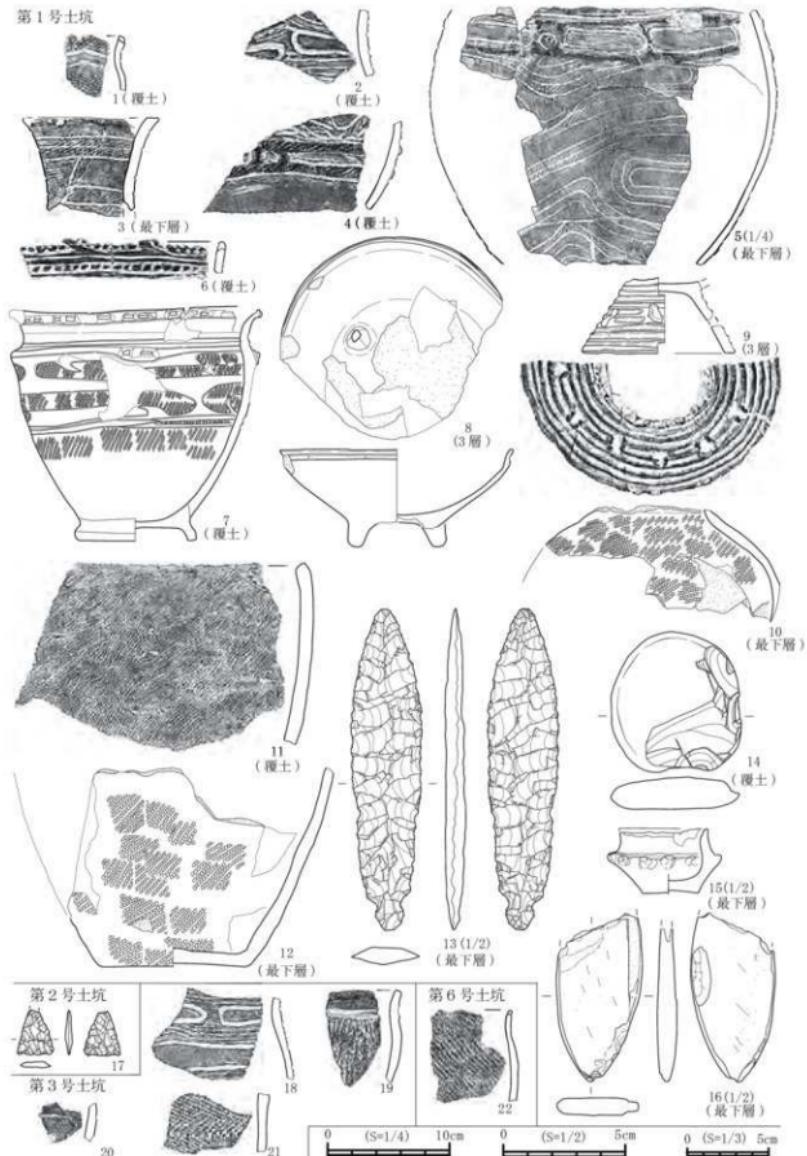


图32 F区 土坑出土遗物

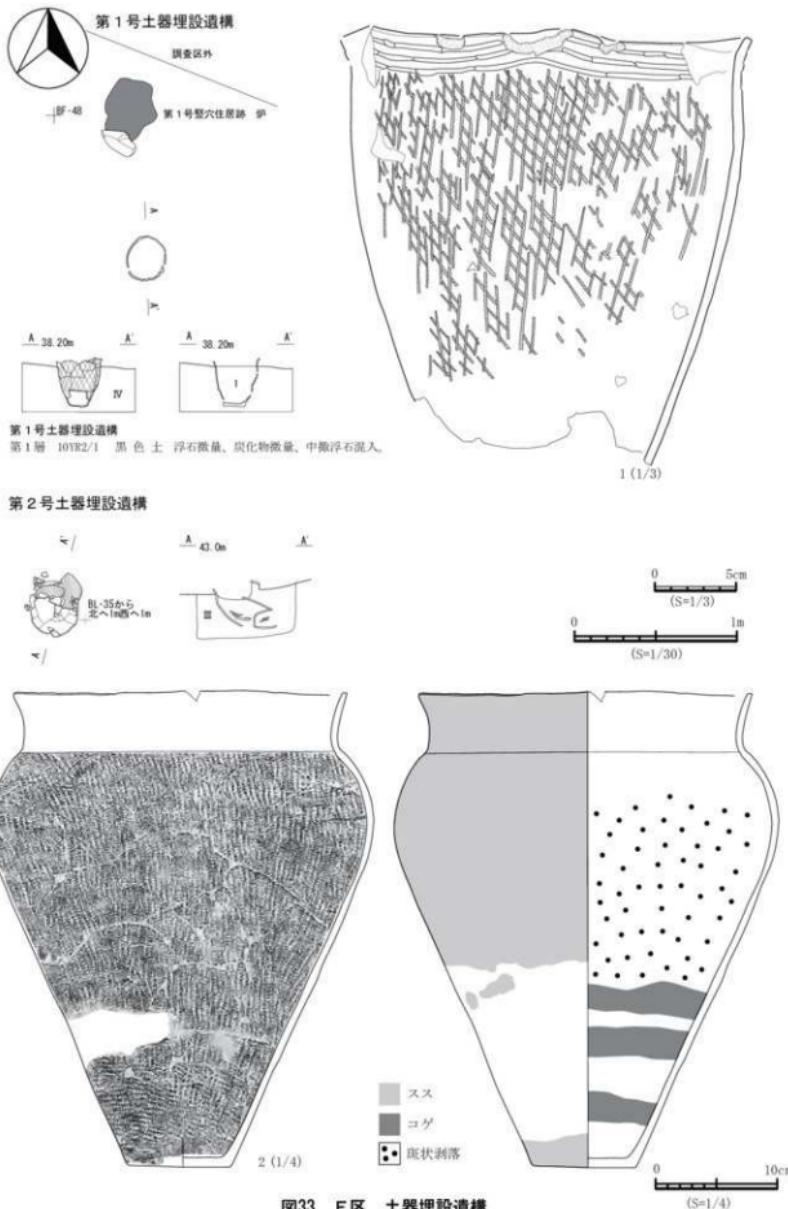


図33 F区 土器埋設遺構

### 縄文時代早期中葉の土器

#### 貝殻が施されている土器 (図 34-1 ~ 10)

1 ~ 9 は腹縁押し引き文が施されているもので、文様から吹切沢式に相当する土器群と考えられる。1 ~ 4 は口縁部片で、このうち 3 は波状口縁となっている。また、1 ~ 3 には隆帯が付されており、隆帯上には刻みが施されている。4 は口唇部に刻みが施されている。10 は腹縁圧痕文が施されている底部付近の破片である。文様から鳥木沢式に含まれる可能性もある。

#### 沈線が施されている土器 (図 34-11, 12)

平成 22 年度の範囲・内容確認調査時に出土したものである。この土器が出土したことにより、F 区には早期の文化層が存在することが明らかとなった。破片で数点出土したが、胎土が特徴的であり、全て同一個体と考えられる。胎土は肌色であり、焼きは堅い感じを受ける。このうち文様が明瞭に残っている 2 点を図示した。11 は横位に展開している矢羽根条の沈線列が 2 段あり、12 は矢羽根条沈線列の下位に網目状の沈線が施されている。文様からムシリ I 式のものと考えられる。

### 縄文時代前期の土器

#### 前期初頭の土器 (図 34-13 ~ 17)

13 ~ 15 は非結束の羽状縄文が施されている土器である。14 は縄文の筋が長いことから、0 段多条などの原体を使用していると考えられる。16 は口縁部片で、口唇には連続する刻みが施されている。文様は結束第 1 種の羽状縄文の外に、LR の側縁圧痕が施されている。17 は LR が横回転施文されているものである。出土層位・胎土の状況から本時期に含めた。

#### 前期後半の土器 (図 34-18 ~ 21)

18, 19 は同一個体である。文様は口縁部から底部にかけて RL R が横回転施文されており、胎土には織維が含まれている。器形は円筒状で底部は平底となっている。詳細な土器形式は不明であるが器形から前期後半期のものと考えられる。

20, 21 は円筒下層 d 式の土器である。20 は微隆帯により区画された口縁部文様帶に LR, RL の側面圧痕が施されている。また、胸部では結節回転文が横位に施文された下位に、結束第 1 種羽状縄文が横回転施文されている。文様から円筒下層 d 1 式の土器と考えられる。21 は縦位と横位の隆帯により区画された文様帶内に LR の側面圧痕が施されている。文様から円筒下層 d 2 式の土器と考えられる。

### 縄文時代中期の土器 (図 34-22, 23)

22 は口縁部文様帶部分の破片で、地文及び隆帯に RL が回転施文されており、文様から円筒上層 a ~ d 式土器に比定されると考えられる。23 は口縁部片である。口縁部に太い隆帯が貼り付けられており、隆帯上には沈線が施されている。文様は地文として RL が回転施文された後に、3 本一組となる沈線が平行・弧状に施されている。口唇に施された沈線から中期後葉の榎林式古段階のものと考えられる。

#### 縄文時代中期葉～後期初頭の土器 (図 34-24 ~ 26)

24, 25 は口縁部片である。24 は文様が付されていないが、口縁から頸部へ向かって鱗状の隆帯が貼り付けられている。25 は隆帯によって区画された口縁部文様帶があり、その内側には刺突が施されている。刺突は口縁と隆帯に沿って横位に施されているものと、これを区切るような縦位の刺突がある。胸部には、LR が縦位回転施文されている。26 は無文地に方形モチーフの沈線が施文されており、沈線間には LR が充填施文されている。

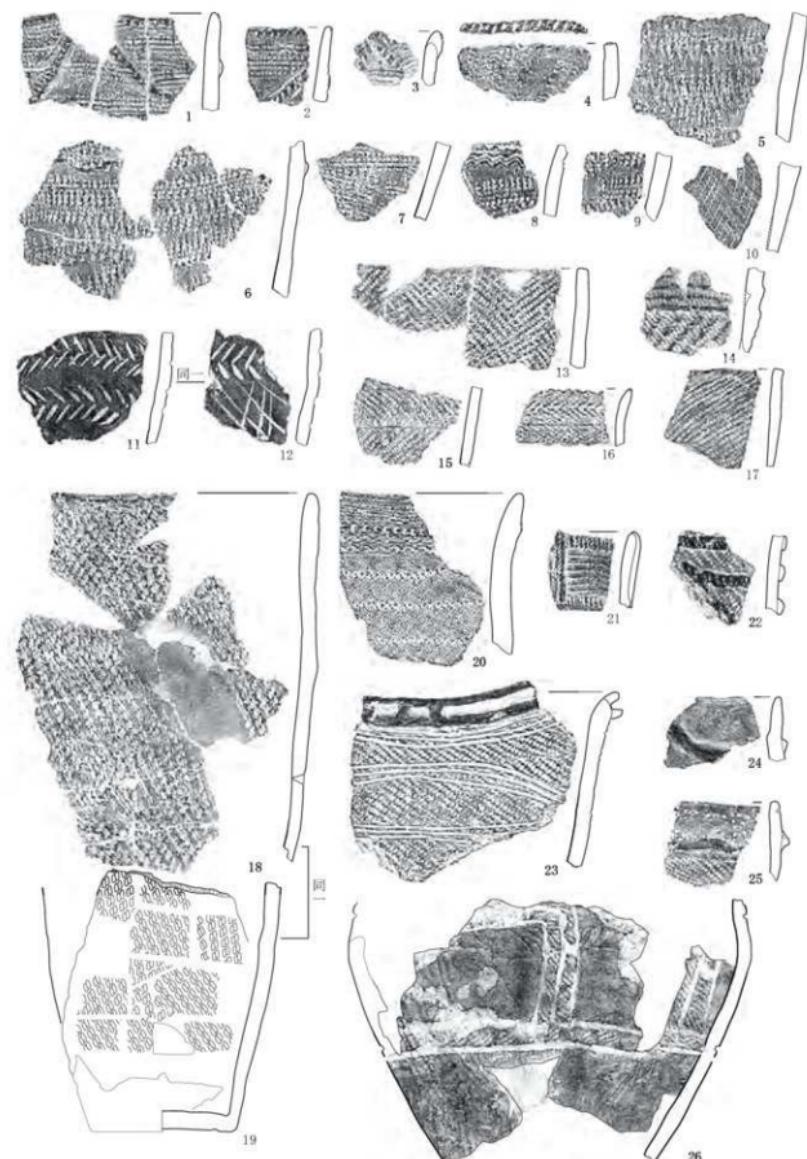


図34 F区 平場エリア 遺構外出土土器 (1)

0 5cm  
(S=1/3)

### 縄文時代後期前葉の土器（図35-1～13）

十腰内I式の土器である。1～10は磨消・充填縄文が施されている土器である。1は地文施文後に沈線により文様帯が区画されている。この区画内は地文を磨り消そうとしているが、ミガキは丁寧ではなく縄文が残存している箇所もある。2～10は充填縄文が施されているものである。口縁に地文縄文が施文されているものと（2～5）、そうでないものとに（6～10）大別できる。11～13は沈線のみで文様が施文されているものである。いずれも太い沈線内に細い沈線が数条充填されている。

### 縄文時代晩期中葉の土器（図35-14～図36-16）

破片試料が多く詳細な器種を判別できるものは少ないが、器形や傾きから深鉢、注口、浅鉢、鉢に分類した。14～17は平成22年度の範囲確認調査で出土した遺物である。14は深鉢で、口縁部には刻目が、頭部にはミガキが施されており、胴部にはR Lが回転施文されている。15は注口土器の口縁から胴部上半にかけての破片である。頭部屈曲部及び胴部に刻目列が施されており、その間は丁寧に磨かれ、渦巻き状の沈線が横位に展開している。胴部には入り組み状の沈線が施され、LRが充填施文されている。16、17は隣り合った状態で出土したものである。16は完形で、17は破損した状態で出土した。16は完形の浅鉢で、口縁部は直立気味に立ち上がり、底部が上げ底である。口縁部は4単位の小突起の両側にB形突起が付される。口縁端部には細かい刻みが入り、直下には3本の横走沈線が全周する。地文はO段多条のLR縄文とRL縄文を交互に、横位回転施文することで羽状構成をとっている。また底面の外周には沈線が1条全周する。口縁径13.5cm、底径4.1cm、器高5.6cmである。17はほぼ完形の縄文土器浅鉢である。底部が丸底の楕円形の器形で、文様は地文のみでO段多条のLR縄文を横位回転施文する。部分的に輪積み痕が観察される。口縁径13.0cm、器高4.4cm、器壁は16よりも薄い。

図35-18～図36-8は小破片のため詳細な器種分類をできなかったものである。浅鉢ないしは皿の破片と考えられる。図35-18は頭部での屈曲度合いが強く、口縁部へ向かって約90度の角度で屈曲している。また、屈曲部の一部には突起が貼り付けられている。図35-19～22は口唇部に装飾的な彫り込みが施されている。図35-23、図36-1は口縁直下に2本の平行沈線が施され、その間に刻目が施されている。図36-2～8は、頭部が磨かれ、沈線が施されているものである。このうち、図36-5～8は頭部屈曲部に貼瘤が施されている。図36-9～16は鉢の破片である。9～12は胴部に地文だけが施されているもので、9は口唇部に沈線が、10～12は口縁に刻目が施されている。13～16は胴部に沈線による文様が描かれており、縄文が充填施文されているものである。いずれも頭部はミガキが施されて無文となっている。13は雲形文状の沈線が描かれており、口唇には装飾的な彫り込みが施されている。14はクランク状の沈線が描かれており、口縁には刻目が施されている。16は入り組み状の沈線が描かれており、口縁には突起が貼り付けられている。

### 縄文時代中期～晩期の土器（図36-17～図37-3）

地文しか施文されていないものなど詳細な型式認定できないものをまとめた。

17～19は中期～後期初頭までのものと考えられる土器である。17は口縁形状が小波状となる土器の口縁部で、結束第1種羽状縄文が横位に回転施文されている。文様及び胎土の状況から中期前半の土器と考えられる。18、19は、原体が縦回転されて文様施文されているものである。いずれも口縁が外反している。器形及び縄の回転方向等の特徴から中期末葉～後期初頭のものと考えられる。このうち、19は口縁から底部付近まで復元できた土器で、胴部の中位が最も膨らむ器形となっている。

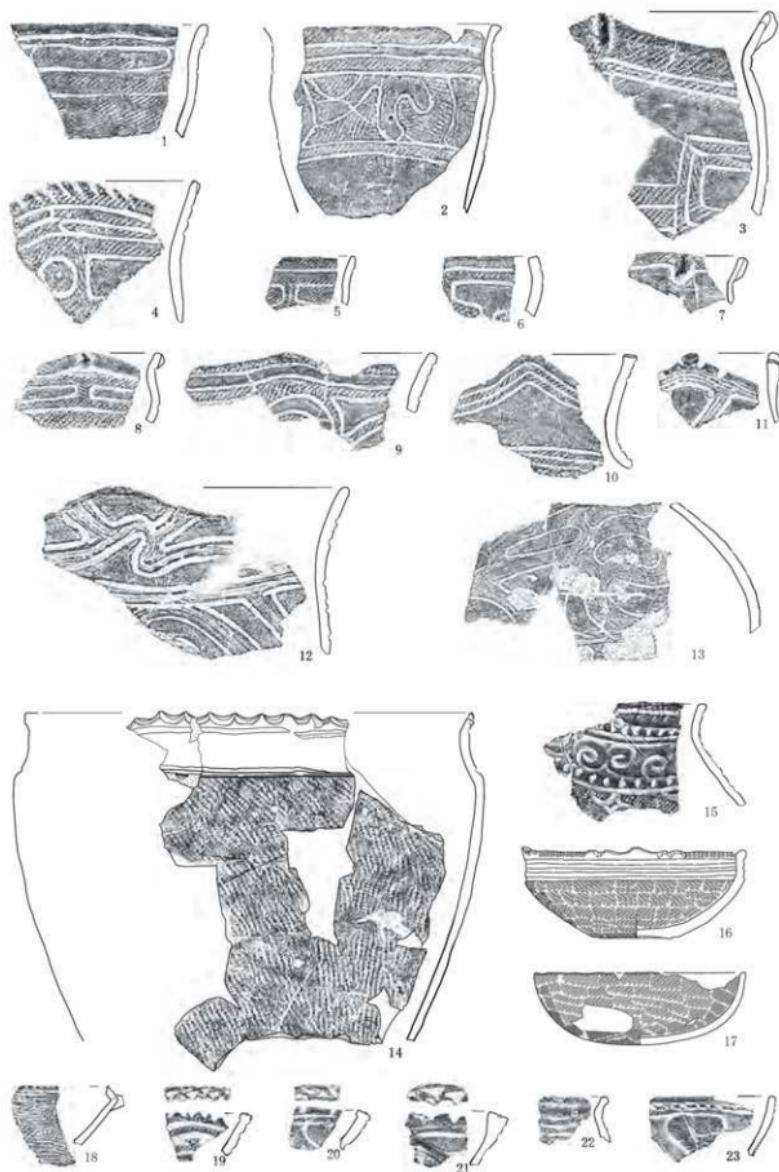


図35 F区 平場エリア 遺構外出土土器 (2)

0 5cm  
(S=1/3)

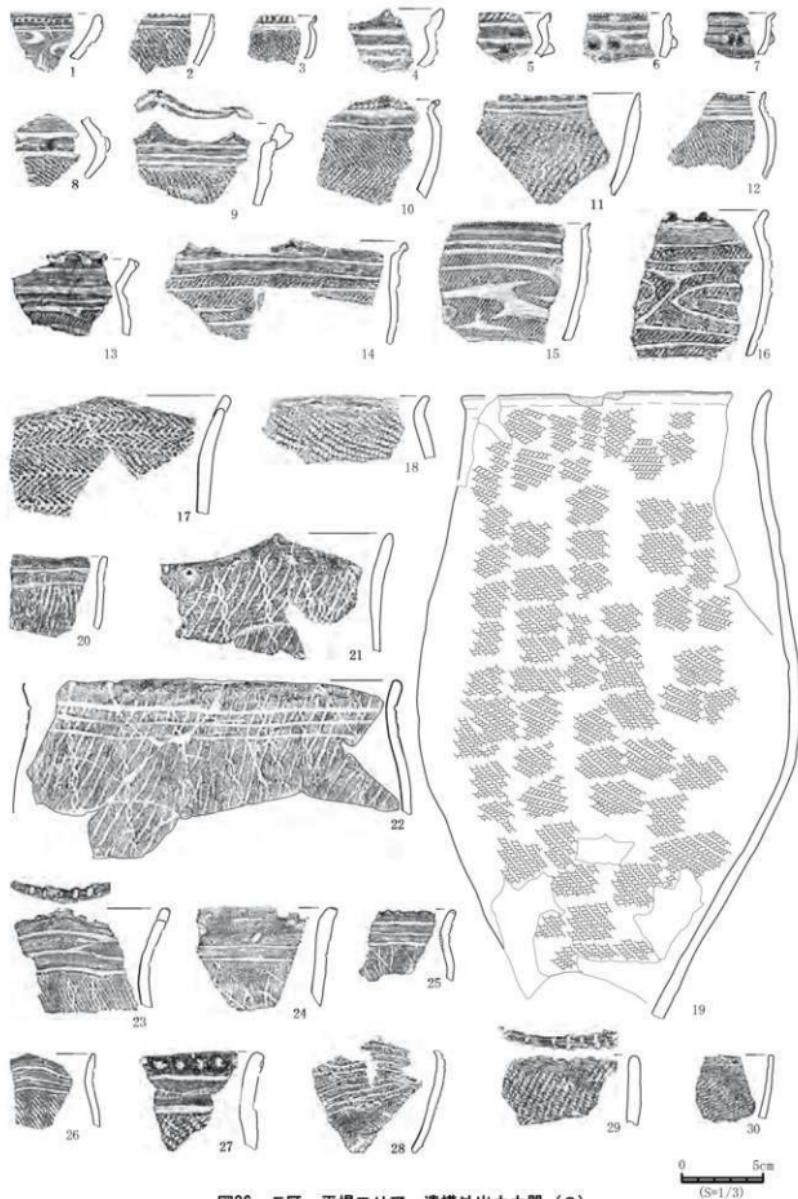


図36 F区 平塙エリア 遺構外出土土器 (3)

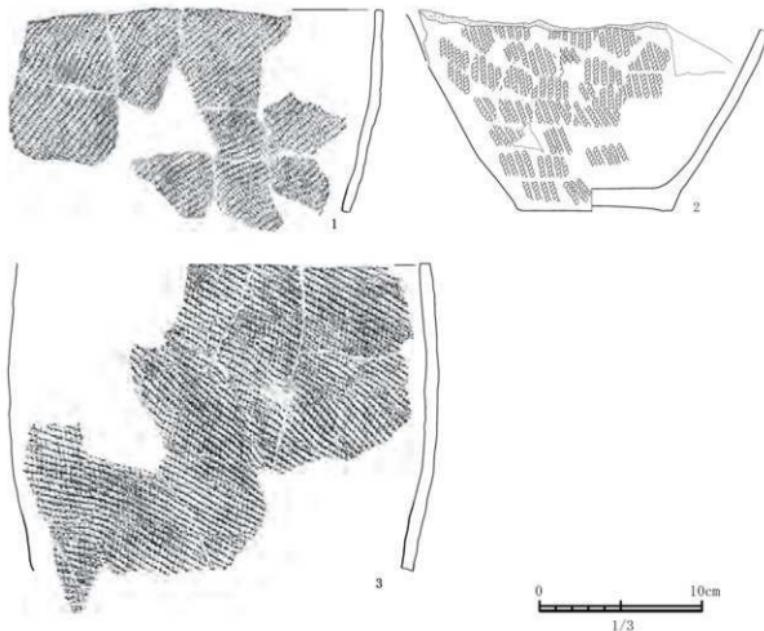


図37 F区 平場エリア 遺構外出土土器（4）

20～30は後期前半期のものと考えられる土器である。このうち、20～24は単軸絡条体を用いて文様施文されているものである。20～23は単軸絡条体2類、24は単軸絡条体5類が使用されている。25は口唇に刻目が施されており、頸部には横位の沈線が、胸部には網目状の沈線が施されている。26は波状口縁で、波頂部の口唇には、刺突が施されている。頸部には沈線が、胸部にはL繩が縦位回転施文されている。27は口縁に沿って刺突が施されており、頸部はミガキにより無文帶となっている。また、胸部にはR Lが横回転施文されている。28は胸部が張る器形となっており、無文地にR繩の側面圧痕が施されている。

図37-1・3は口縁が内湾気味に立ち上がっており、器形から後期後半以降の土器であると考えられる。

(小山)

## 2-5 遺構外出土石器

平場エリアから出土した石器は石鏃 20 点、石槍 2 点、石匙 1 点、削器 13 点、二次加工剥片 13 点、剥片 60 点、磨製石斧 5 点、打製石斧 2 点、磨石 10 点、敲石 4 点、凹石 3 点、半円状扁平打製石器 1 点、石錐 12 点、疎器 2 点、台石 2 点、加工疎 9 点である。

石鏃（図 38-1～20） 回基無茎鏃 3 点（1～3）、平基無茎鏃 1 点（4）、尖基鏃 2 点（18、19）、平基有茎鏃 2 点（8、9）、凸基有茎 10 点（5～7、10～16）、尖頭部破片 1 点（17）のほか、未製品が 1 点（20）出土した。未製品を除く 19 点について欠損状況を見てみると完形品が 8 点、欠損品が 11 点である。後者には先端部を欠損しているもの 4 点、先端部と茎端部を欠損しているもの 5 点、基部を大きく欠損しているもの 1 点、茎端部を欠損しているものが 1 点ある。先端部を欠損しているものには“折れ”や“彫器状剥離”がみられるものがあり、なかには「衝撃剥離痕」（御堂島 1991）が観察されるものが 3 点ある（7、9、16）。また、基部にアスファルトの付着がみられるものが 1 点ある（11）。未製品としたものは両面に粗い二次加工が施された小型の石器である。形態的に石鏃への連続性をもつものととらえられることから石鏃未製品と評価した。

石槍（図 38-21、22） 21 は基部破片である。両面に比較的丁寧な調整が施されている。22 は基部もしくは尖頭部を欠損していると思われるが、調整が粗雑なことから未製品の可能性もある。

石匙（図 38-23） 23 は打面調整剥離技法によってつくられた松原型石匙（秦 1991）である。

削器（図 38-24～32、図 39-1） 13 点出土し、10 点を図示した。

磨製石斧（図 39-2～4） 5 点出土し、全点を図示した。2 は基部片である。全体に敲打痕がみられるもので、研磨は行われていない。また器体の整形もなおざりで、厚さも一定していない粗雑な作りである。製作時に破損した可能性を考えられる。石材は粗粒玄武岩である。3 は基部を欠損しているもので、刃部は両刃の縱斧である。石材は粗粒玄武岩である。4 は二つに割れていたものである。器面全体に敲打痕がみられ、研磨は行われていない。刃部は両凸刃で刃部縁辺は円刃に近い形態を呈している。刃こぼれ状の小さな破損がみられるが使用によるものか不明である。製作途上で破損した可能性もある。石材はひん岩である。これらのほかに、基部片と刃部片が 1 点出土しているが図示していない。石材は前者が粗粒玄武岩、後者が細粒緑色凝灰岩である。

打製石斧（図 39-5、6） 2 点出土した。5 は板状に割れやすい硬を素材としているもので、周縁の整形は比較的丁寧であるが、裏面の大部分は原石面のまま残されている。石材は片岩である。6 は安山岩の円錐の剥片を素材としているもので、側縁の整形はあまり丁寧ではない。素材となった円錐のカーブを利用して片面のみを加工し、片面は原石面のまま残されている。刃部は円錐のもつカーブと剥離がつくる角度を利用しているものと思われるが、使用痕は検出できなかった。厚みのある方を基部としたが、実際はどちらが刃部か判断に悩むものである。

磨石（図 39-7～11、図 40-1） 主に磨りの痕跡がみられる石器で 10 点出土した。石材には砂岩 7 点、安山岩 2 点、粗粒玄武岩 1 点がある。

敲石（図 40-2～4） 主に敲打痕がみられる石器で 4 点出土した。石材はすべて砂岩である。

凹石（図 40-5～7） 凹孔がみられるもので 3 点出土した。5 は棒状錐の片面にあばた状の凹孔が 2 か所みられるもので、上の凹孔はやや深いが、下の凹孔はあまりくぼんでいない。石材は頁岩である。6 は両面にあばた状の凹孔がみられるもので、長軸側面には敲打痕と剥離痕がみられる。7 は扁平錐の両面にあば

た状のやや深い凹孔がみられる。6、7の石材は砂岩である。

半円状扁平打製石器（図41-1）板状の礫を素材とし、器体の周縁には浅い加工が施されている。下縁は刃部状になっている。破損部には強い磨痕がみられる。石材は安山岩である。

石錐（図41-2～13）12点出土した。円形、橢円形の扁平礫を利用しているものが大半であるが、板状節理の破片を利用しているものや礫の剥片を利用しているものがある。3～7、9～13は扁平礫を素材とするもので、礫の長軸端部を打ち欠いて抉りを作出している。石材には砂岩と安山岩があり、前者が8点と多い。8、11は板状節理の礫片を利用しているもので、石材は粘板岩である。小形で薄い作りである。

また、2はチャートの剥片を素材としているもので、長軸端部を打ち欠いているが抉りは浅い。

礫器（図41-14、図42-1）器体の側縁に刃部状の加工が施されているものである。図41-14は扁平礫の長軸両端に、図42-1は片側縁に刃部状の粗い剥離が施されている。石材は砂岩である。

台石 1点の出土であるが図示していない。石材は安山岩である。

加工礫（図41-15）扁平礫の片側縁に剥離痕がみられるものである。9点出土し、1点を図示した。何らかの石器の未製品と思われる。石材には頁岩5点、砂岩1点、片岩1点、粘板岩1点がある。 (島山)

## 2-6 遺構外出土 土・石製品

### 土製品

ミニチュア土器、鐸形土製品、キノコ形土製品、土錐などが出土した。

ミニチュア土器（図42-2）口縁部が内湾している深鉢形土器で、器面には円形の刺突が4段施文されている。内面には煤状炭化物と思われる黒色物質の付着がみられる。

鐸形土製品（図42-3）小形、完形でやや粗雑な作りである。内面には煤状炭化物がみられる。

キノコ形土製品（図42-4）傘の部分は凸面で、傘の下面是若干くぼんでいる。柄の部分は欠落しているが、写実に富んだ小形の土製品である。

土錐（図42-6）管状の土錐で、中央に円形の貫通孔がある。精選された粘土が使われており、焼成は良好である。両端には同心円状の擦痕がみられる。

不明なもの（図42-5）小さな破片で、全体形は不明である。2個の乳房状の小さな突起がみられる。側面にはわずかに面取りされた部分が残されている。裏面はくぼんでいる部分もあるが、その周辺は欠損した痕跡を示している。胎土は精選されており、焼成は良好である。 (島山)

### 石製品

軽石製品1点、円盤状石製品4点などが出土した。

軽石製品（図42-7）全面が整形されている。四角形の固形石鹼に似た形状である。

円盤状石製品（図42-8～11）円形に整形された板状の石製品である。8は最大のもので、一部欠損している。11は最も小さなもので、やや橢円形である。いずれも石材は粘板岩である。

不明なもの（図42-12）板状の粘板岩を素材としている。上端には剥離痕がみられるが、下端は折れたような感じであり、明確な加工痕がみられない。製作の途中で破損し、廃棄された可能性がある。 (島山)

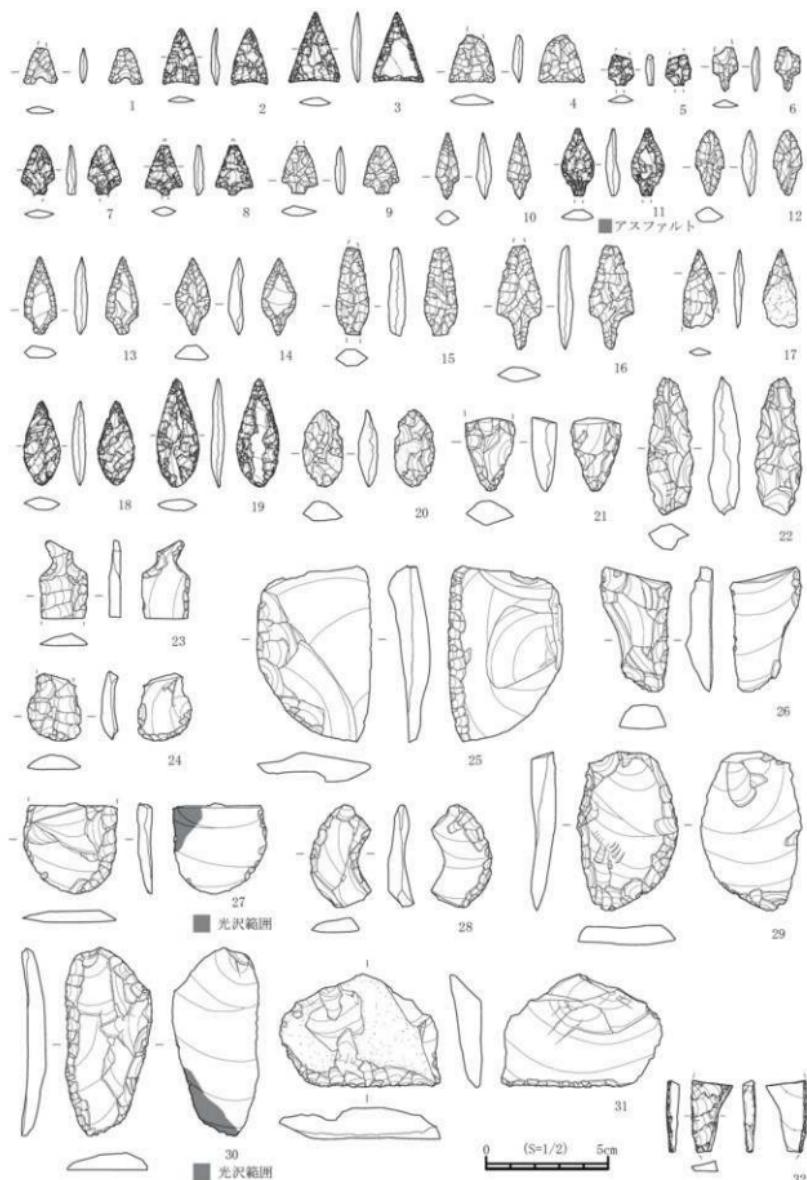


図38 F区 平場エリア 遺構外出土石器 (1)

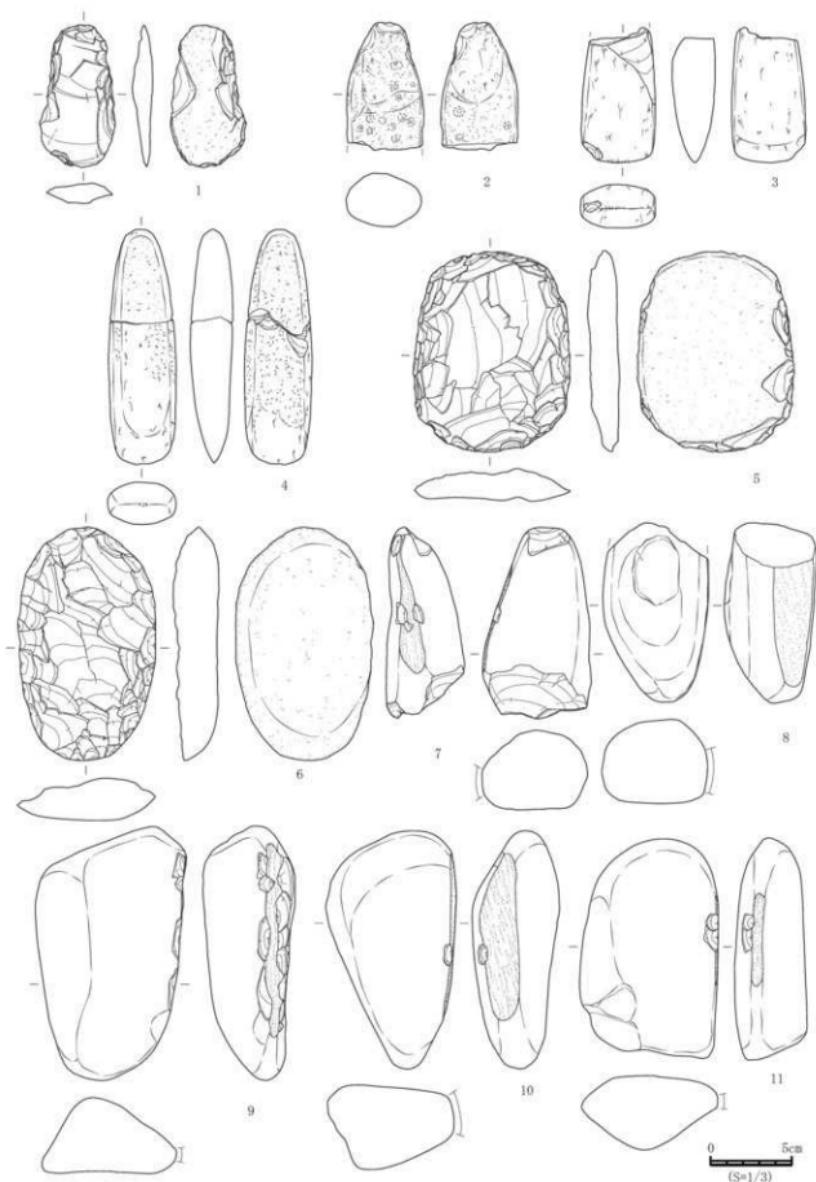


図39 F区 平場エリア 遺構外出土石器（2）

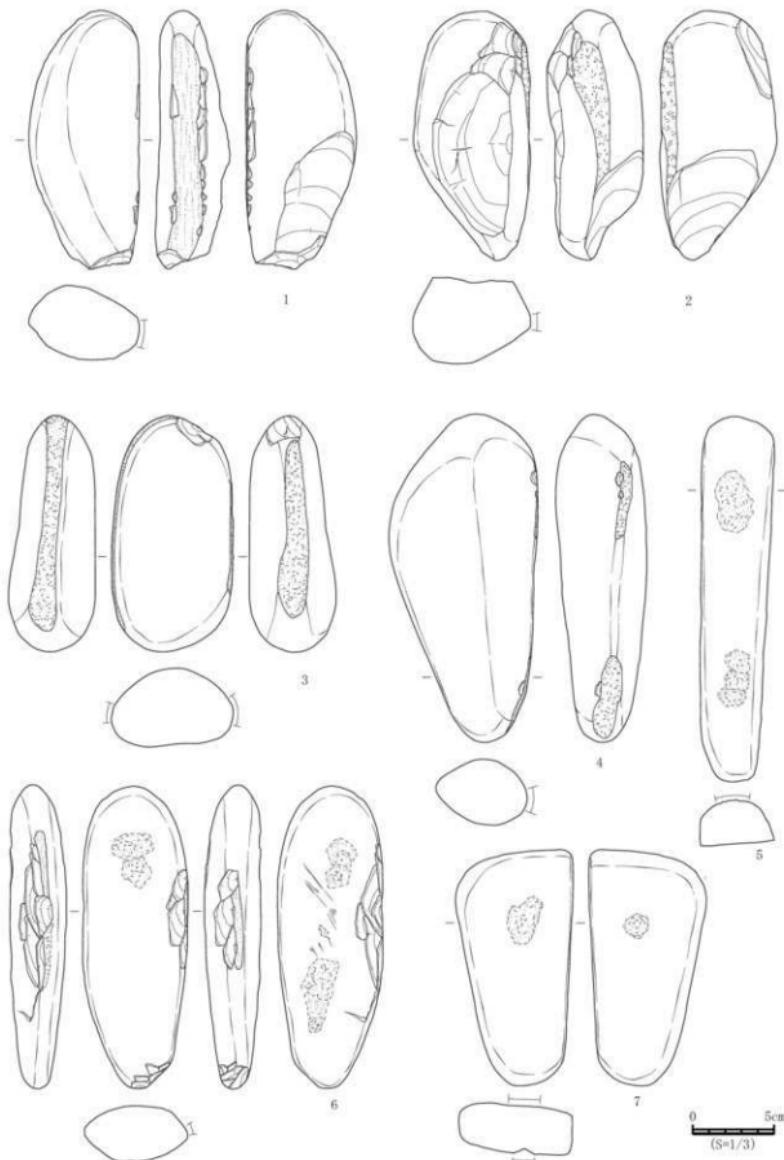


図40 F区 平場エリア 遺構外出土石器（3）

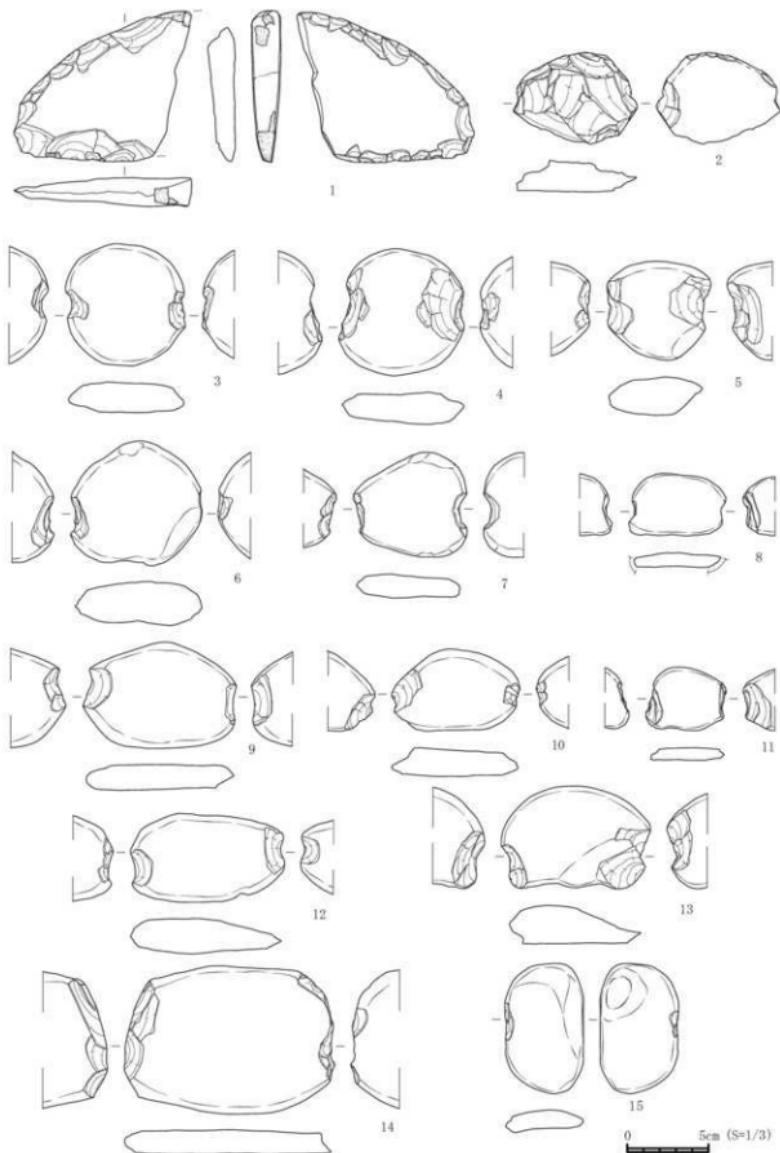


図41 F区 平場エリア 遺構外出土石器 (4)

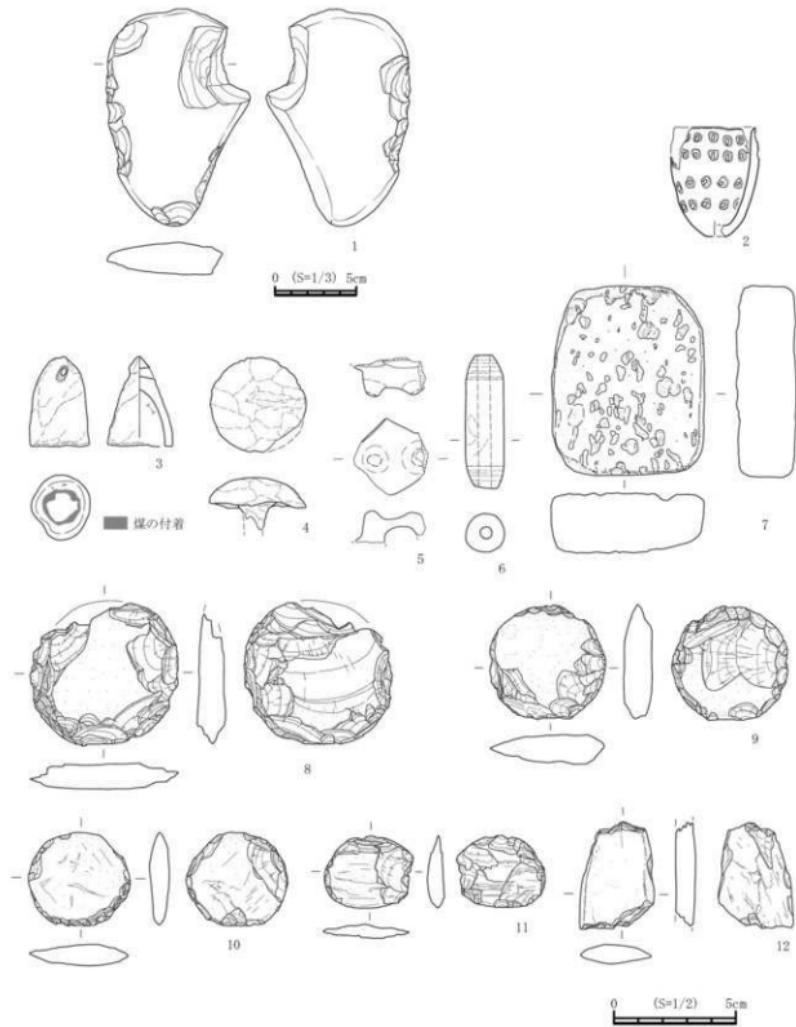


図42 F区 平場エリア 遺構外出土石器(5)、土・石製品

### 3 沢エリア (図43～図47)

沢は調査区から西へ200mほど離れた場所に湧水点があり、そこから調査区内のほぼ中央を南西方向へと流れていき、是川遺跡長田沢地区を経て新井田川へと流れ込んでいる。最近まで水田として使用されていたようであるが、現況では沼地のような湿地帯になっていた。調査は地盤及び堆積の状況、遺構・遺物の有無を確認するためにトレンチ調査を先行させて行うこととした。この結果、遺物は出土するが、遺構等は検出されなかった事から、地盤が緩く崩落の危険が高いと判断した範囲については遺物を回収して埋め戻すこととし、比較的地盤が固いと判断できた約280m<sup>2</sup>の範囲においては川底までの面的な調査を行った(図43)。

#### 3-1 土層

検出面から沢の底面までは約2.7mの深さがあり、大きく8層に分層した。

1～4層は近現代の水田耕作土で40～50cmの層厚がある。

5層は、50cmほどの層厚があり10層に細分した。いずれも、黒泥質で未分解な草本植物の纖維を多量に含んでいる。所々に砂礫の堆積も見られるが、10cmにも満たない薄い堆積である。

6層は砂礫層である。層厚は20cmほどあり、数ミリから10cm大の砂礫を多量に含んでおり、水流の影響を受けて堆積したものと考えられる。中期末葉～晩期中葉までの土器が17kg出土したが、本層は白頭山火山灰堆積後の層であることから、これらの遺物は平安時代以降に沢に流れ込んだものと判断できる。

7層は、80～120cmほどの層厚があり20層に細分した。全体に黒泥質であるが下位には砂礫が厚く堆積している。また、黒泥質の部分には未分解な草本植物の纖維を含む薄層が数枚見られる。本層中位にある7h層は白色をしたシルト質の土で、沢全体を覆うように堆積している(写真23)。分析した結果、白頭山火山灰であることが明らかとなった(第4章参照)。このことから、本層は平安時代に堆積したものと考えられる。土器は早期中葉～晩期中葉までの土器が約16kg出土したが、堆積状況から後世の流れ込みと判断できる。

8層は層厚が40～50cmほどある砂礫層で、2層に細分した。8a層とした上位の層では小礫が主体であるが、8b層とした下位の層では拳大から50cm以上の大礫が主体となる。本層での遺物の出土量は最も多く41kgが出土した。時期は前期末葉の円筒下層d式から晩期中葉までのものが混在して出土している。堆積状況から水流に流されて沢底にたまつた土器と考えられる。このことから、出土土器の中でも最も新しい段階である晩期中葉には沢地になっており、水流があった状況を推測できる。

縄文時代の遺物包含層は検出されなかったが、出土土器・堆積状況から縄文時代晩期には沢地形となっていたことが考えられる。その後は、水が流れたり、湿地状態になったり繰り返す事により埋没していくものと考えられるが、白頭山火山灰を面的に検出した状況から、火山灰降下時には湿地状態であった事が明らかとなった。

#### 3-2 出土土器

沢跡からは段ボール箱で約40箱、総重量76kgの土器が出土した。しかし、前述した堆積状況から全て2次的に動いた遺物であると判断される。以下に時期毎に記載していく。

**縄文時代早期中葉の土器** 図44-1は貝殻腹縁压痕文が施されている。

**前期初頭の土器** 図44-2は胎土に纖維が混入している。口唇には刻目が施されており、地文として異原体を用いた羽状縄文が施文された後に、沈線が施文されている。

**中期末葉～後期初頭の土器** (図44-3～7)

3、4は鱗状突起のある土器である。3は口縁の内面に、4は外面に貼り付けられている。5はR Lの側面圧痕と沈線が施され、沈線間に刺突が施されている。6、7は隆帯が貼り付けられているものである。6はS字状の隆帯が口縁から縦位に貼り付けられており、頸部にはR Lが側面圧痕されている。7は無文地に隆帯が貼り付けられており、隆帯上にはL繩が回転施文されている。

#### 後期前葉の土器（図44-8～11）

十腰内I式に比定される土器である。8は波状口縁の口縁部片で、内面にも文様が施文されている。9は隆帯に沿って沈線が施文されているものである。10は小波状となる口縁部片で、頂部に刻みが施されている。11は沈線の内側にさらに細い沈線が充填されているものである。

#### 後期中葉～後葉の土器（図44-12～15）

いずれも沈線区画内に繩文が充填施文されているものである。12、13は同一個体である。波状口縁の土器と考えられ、12は平縁部、13は波頂部の破片と思われる。2点ともに口縁は肥厚している。文様はL Rが充填施文されているほか、刺突も施されている。14は胴部に貼瘤が施されているものである。L RやR Lしが充填施文されている。15は異原体による羽状繩文が充填施文されている。

#### 晩期中葉の土器（図44-16～26）

16、17は同一個体である。17は胴部片で羊齒状文が施文されている。18、19は頸部が磨かれているものである。18は頸部屈曲部に隆帯が貼り付けられており、胴部には三叉状の沈線が施文されている。19は口唇に刻目が施されているほか、頸部屈曲部に施された平行沈線の中にも刻目が施されている。20～24は、頸部に沈線が施文されているものである。このうち、22の胴部には入組状の沈線が施文され、その内側にはL Rが充填施文されている。25は頸部に平行沈線が施文され、その間に刻目が施されている。26は皿と考えられ、胴部文様帶には數条の平行沈線が、沈線の下位にはL Rが横回転施文されているものである。

#### 晩期末葉の土器（図44-27）

鉢形土器の口縁部片で、口縁には2個1単位となる突起が付く。突起頂部には刺突が、口唇には沈線が施されている。文様は地文としてL Rが回転施文された後に沈線が施文されている。沈線のモチーフは3種類認められる。口縁直下において突起に沿って山形状に施されているもの、頸部において平行に施されているもの、胴部においてZ状ないしはジグザグ状に施されているものである。なお、頸部では沈線の末端が盛り上がりになっていて山形状になっている箇所もある。胴部に施文されているZ若しくはジグザグ状の沈線は名川町劍吉荒町遺跡で出土しているものに類似している。また、これ以外にも、地文が施文された後に沈線が施文されていること、口縁の突起に沿って山形状の沈線が施文されていることなど、共通点が見られる。

#### 繩文時代後期から晩期の土器（図44-28～44）

土器型式や詳細な時期を判断できないものを本類にまとめた。28～31は口縁直下が無文となり胴部文様との区画に繩の側面圧痕が施されているものである。32～42は繩文が施文されているだけのものである。このうち33～37は口縁が内湾気味に立ち上がっているもので、後期後半以降のものと考えられる。43は台付き土器の脚部である。土器内面が丁寧に磨かれている。44は底部片である。

(小山)

### 3-3 出土石器

出土した石器は石鏃5点、石匙1点、トランシェ様石器1点、削器6点、二次加工剥片5点、剥片14点、磨製石斧3点、磨石3点、敲石5点、北海道式石冠1点、石錐1点、台石4点、加工礫1点である。

石鐵（図45-1～5） 基部形態別では平基無茎鐵2点、円基鐵1点、凸基有茎鐵2点がある。2は完形であるが、ほかは先端部を欠損している。このうち、5の先端部の欠損部分には衝撃剝離痕、基部にはアスファルトの付着痕がみられる。

石匙（図45-6） 橫形石匙で、末端には簡単な加工が施されている。

トランシェ様石器（図45-7） 平面形は台形を呈している。主要剝離面のバルブの除去と剥片末端部に加工が施されて側縁部がつくりられており、背面の加工もこれに対応している。

削器・二次加工剥片・剥片（図45-8） 削器6点、二次加工剥片5点、剥片14点が出土したが、このうち図示したのは1点である。図45-8は剥片の末端および左側縁に刃こぼれ状の小剝離痕がみられるもので、左側縁上部には摩耗痕も検出された。

磨製石斧（図45-9～11） 3点の出土である。9は刃部の一部を欠損（刃こぼれ）しているが、ほぼ完形の縱斧である。器体の研磨は不十分で、剝離痕をまばらに残している。石材は頁岩である。10は基部片である。器面は丁寧に研磨され、石斧主面と側面とのあいだに棱を作っている。基部は細く、小さな頭部が形成されている。石材は砂岩である。11は基部を欠損している。器面はなめらかに研磨されており、器体は薄い。刃部は弱凸強平の片刃で、刃部縁辺は緩い弧を描いている。横斧である。石材は頁岩である。

磨石（図45-12・13、図46-1） 扁平鍤の側面に磨痕がみられるが、図45-13の平坦面には弱い敲打痕もみられる。石材は砂岩2点、安山岩1点である。

敲石（図46-2～4、図47-2） 図46-2は楕円球状鍤の凸面、3は扁平鍤の平坦面、4は側面に敲打痕がみられる。図47-2はハンマーストーンで、握りやすい大きさの礫を利用している。石材は砂岩2点、粗粒玄武岩2点、頁岩2点である。

北海道式石冠（図46-5） 破片である。器体の中央にみられる溝状の敲打痕は、実測図左側の面では強く誰みも深いが、その裏面では弱く浅いものとなっている。また、底面は無加工で使用痕跡も見られない。製作時に破損し廃棄されたものであろう。石材は安山岩である。

石錐（図46-6） 扁平鍤の長軸端部を打ち欠いている。石材は頁岩である。

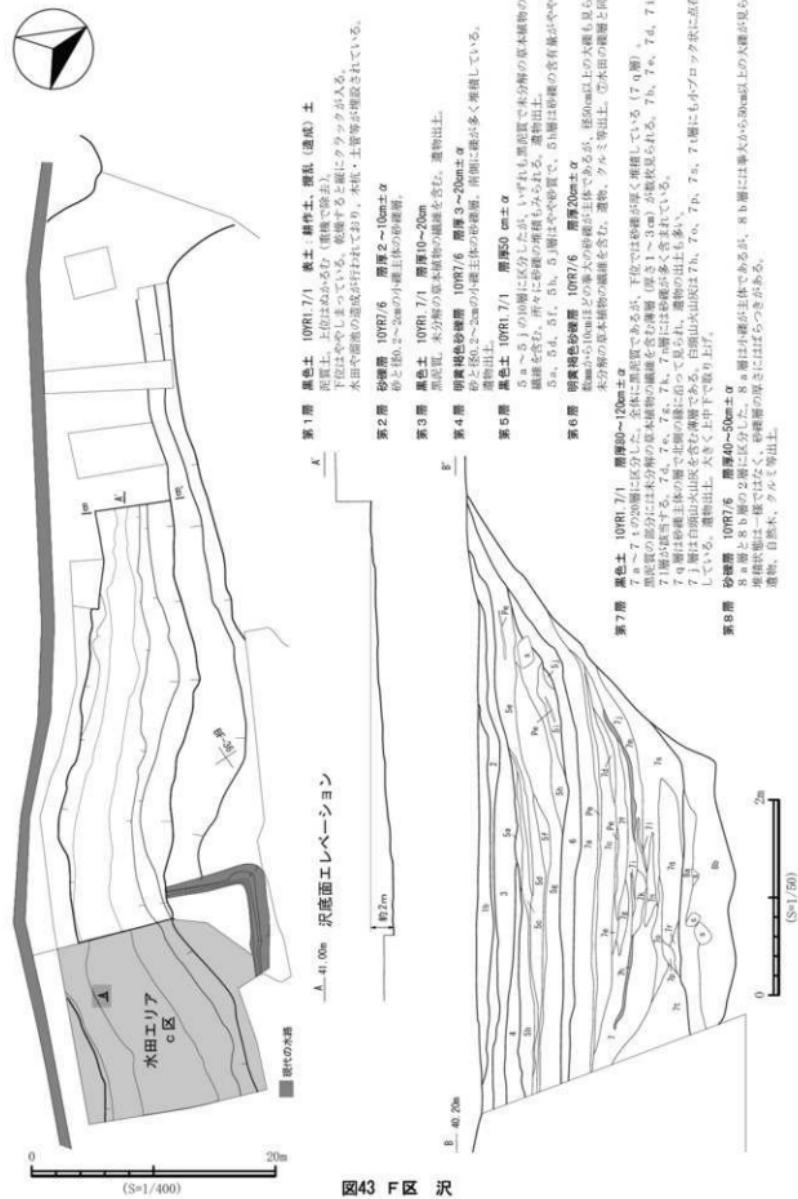
台石（図46-7・8、図47-1） 4点出土した。いずれも安山岩の大礫を素材としている。 (嵐山)

### 3-4 土製品

環状土製品が1点出土した（図47-3）。沢エリアから大きな破片が、水田エリアc区からは小さな破片が出土しているが諸特徴から同一個体と思われる。貝輪に似た形状で内側が狭く、外側が広くなっている。内側は短軸4cm、長軸5cm、外側は短軸7.5cm、長軸10cm前後の大きさの楕円形を呈するものと推定される。文様は長方形をモチーフとして無文部と繩文部が交互に展開し、内側には刺突列、外側には突起列がみられる。両面に赤色顔料の付着痕が観察されることから、全体に赤彩されていたものであろう。なお、内側の部分の表面は強くこすれたような状態を示しており、通常の器表面とは異なっている。類似品に岩手県立石遺跡の「腕輪形土製品」注1や秋田県向井様田D遺跡の「環状土製品」注2がある。前者は繩文時代後期前葉頃、後者は繩文晚期前半のもので、いずれも貝輪を模して作られた可能性が指摘されている。本例も、これらと同じ系列のものと思われる。 (嵐山)

注1 花巻市教育委員会 2006 「立石遺跡発掘調査報告書」大迫町埋文報24集

注2 秋田県教育委員会 2005 「向井様田D遺跡」秋田県文化財調査報告書392集



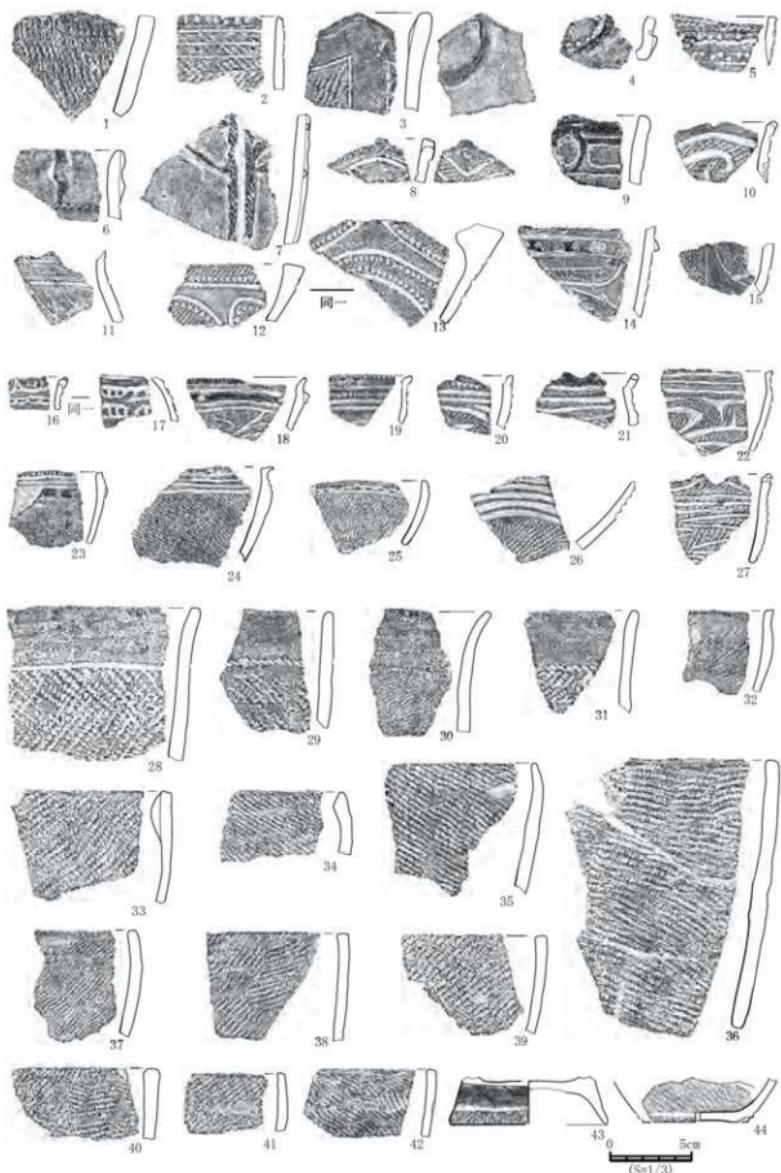


図44 F区 沢エリア 出土土器



図45 F区 沢エリア 出土石器 (1)

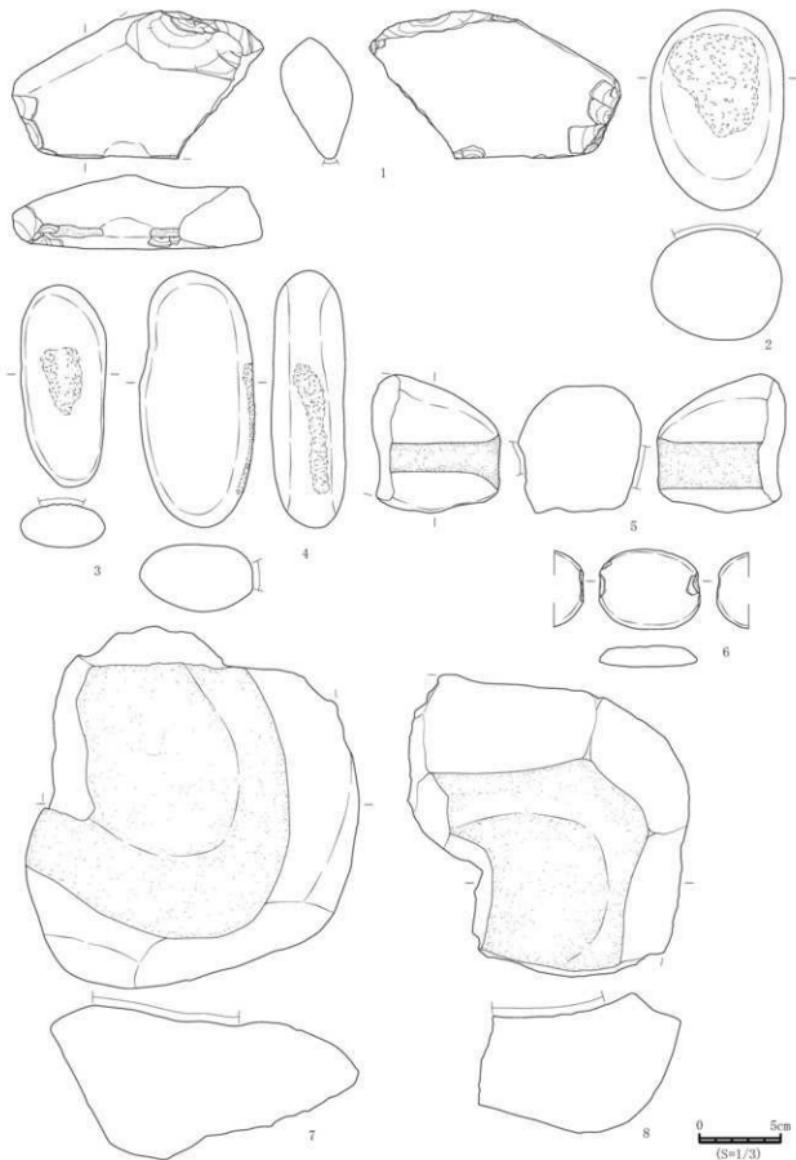


図46 F区 沢エリア 出土石器（2）

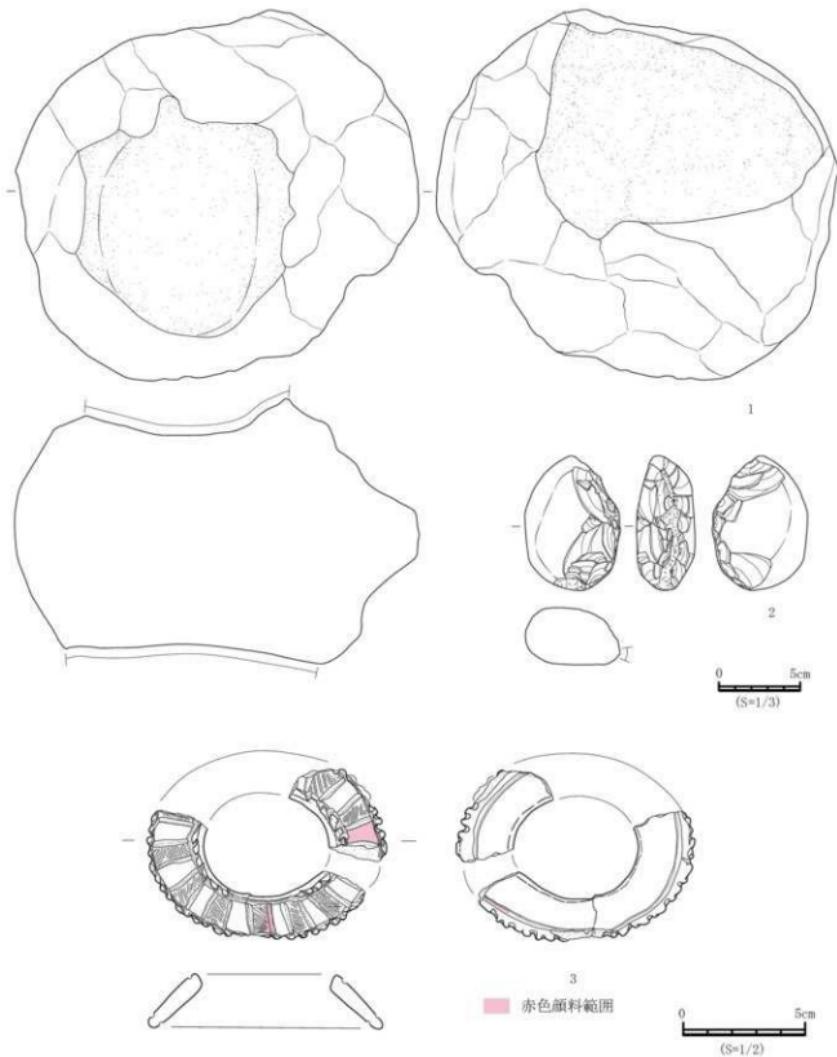


図47 F区 沢エリア 出土石器（3）、土製品

#### 4 水田エリア (図 48～図 53)

水田エリアは本線工事区域外ではあるが、本線工事の影響により、現況の水田を移設する必要性が出てきたため、平成 23 年度当初に行われた協議で、新たに調査範囲に加えられたエリアである。調整の結果、水田移設により掘削が及ぶ深度までを発掘調査対象とし、それ以下は現状保存されることとなった。水田エリアは、現況水田の区画に基づき便宜的に a 区、b 区、c 区に地区区分した。

##### 4-1 土層 (図 48)

各水田は沢に構築されているため、土層は基本的に沢の層位と対応している。しかし、調査の工程上、水田エリアから調査を開始したため、調査当初は対応関係が分からず、独自に層番号を付した。そのため、a・b 区及び c 区の一部では水田に付した層順で遺物を取り上げている。なお、沢の層位と対応することが明らかとなった (図 48) 後に調査を行った c 区の下位では、沢の層位で遺物を取り上げている。

水田エリア I～IV a 層は沢の 1～4 層と対応しており、近現代の水田耕作土と考えられる。c 区では IV 層上面で土管が埋設されている状況を確認した。IV b 層は沢 5 層、V 層は沢 6 層、VI 層は沢 7 層に相当している。c 区の V 層調査時に砂礫層を検出した事から、本層を鍵層として沢の層位と対応させることができた。また、c 区の VI 層中 (沢 7 層相当) では火山灰と思われるシルト質の土が沢を覆うように広範囲に堆積している状況を検出した (図 48)。  
(小山)

##### 4-2 a 区 (図 48)

工事掘削深度が地表面から 25 cm とされた水田である。トレンチ調査を行った結果、表土中で掘削深度に達することが明らかとなった。そのため、全面の調査は不要と判断し、調査を終了した。  
(小山)

##### 4-3 b 区 (図 48～52)

工事掘削深度が地表面から 75 cm とされた水田である。トレンチ調査を行った結果、水田エリアの基本層序 II～IV 層中から遺物が比較的多く出土している状況を確認できたことから、工事掘削深度まで全面を発掘調査することとした。調査の結果、調査区の北側と南側で、沢の縁が検出され、沢幅を確認することができた。また、南側の縁部分からは打製石斧が集中している範囲を検出した (図 48)。調査区内から出土した土器は総重量 12 kg で、石器は 68 点出土した。

###### ○ 磨石器集中範囲 (図 48・52)

【位置・確認】沢の縁にあたる AW-43 グリッドに位置しており、水田エリアの IV 層中 (図 48) で検出した。打製石斧 6 点、磨石 1 点が 1 カ所に密集した状態で出土した。

【出土遺物】縄文時代前期初頭の土器 1 点が打製石斧と隣り合った位置から出土した (図 48)。出土した土器は胴部片で、異原体による羽状縄文が施されている (図 52-8)。6 点の打製石斧の長さは 13 cm～17 cm、幅は 6 cm～8 cm であり、砂岩 (3 点)、粗粒玄武岩 (3 点) が石材として用いられている。また、6 点ともに剥離は縫面側から打撃を加えることにより施されており、片面に原石の縫表皮が多く残存している。刃部使用痕は、図 52-2・6 の刃縁に摩耗したような痕跡が見られるが、その度合いは非常に弱い。その他については使用痕跡を確認することができなかった。

【小結】本石器は擾乱土層からの出土であるが、同じ器種の石器が 1 カ所に集中して出土した状況や、沢の縁

という出土位置、出土した高さはIV層中でも下位にあたることなどを考慮すると、調査時には識別できなかつたが、部分的に包含層が残存していた可能性も考えられる。この場合、これらの石器は共伴している土器から前期前葉期の遺物と捉えることもできる。

#### b区出土土器

##### 縄文時代早中期末葉～前期初頭の土器（図49-1～11）

胎土に纖維が混入し、縄文原体が回転施文されているものである。1はR Lが、2は直前段反撫りのL Lが、3～5は附加条の原体が使用されている。このうち4は口縁部文様帶に単軸絡状体5類が横位回転施文されている。6～10は羽状となる縄文が施文されているものである。6、10は異なる原体が用いられており、7～9は結束第1種の原体が使用されている。9～11は底部片で、9、10は尖底に、11は平底で底部が張り出す器形となっている。

##### 縄文時代中期末葉～後期初頭の土器（図49-12）

口縁部片で、弧状の沈線が施文され、沈線に沿って刺突が施されている。

##### 縄文時代後期前葉の土器（図49-13～16）

いずれも十腰内I式に比定される土器である。13、14は沈線が施文されているものである。15は頸部に横走する沈線が、胴部に縄文が回転施文されている。16は沈線区画内にLRが充填施文されており、その下位には単軸絡状体第1類が縦位に回転施文されている。

##### 縄文時代後期～晩期の土器（図49-17～19）

詳細な土器型式や時期を特定できないものを本類に含めた。17、18は口縁が直線的に立ち上がっている口縁部片である。文様は、17がLRの縱回転施文、18が単軸絡状体の縱位回転施文されているものである。器形、原体の回転方向から後期前半期に帰属すると考えられる。19は台付き土器の底部片で、RLが斜回転施文され縱走する縄文が表出されている。胎土は本調査区から出土した晩期中葉の土器に似ている。（小山）

#### b区出土石器

b区から出土した石器は、石鏃4点、石槍1点、石匙9点、削器14点、二次加工剥片1点、剥片21点、磨製石斧1点、打製石斧7点、磨石8点、石錐1点、礫器2点である。

石鏃（図49-21～24） 基部形態別では凹基無茎鏃2点（21、22）、凸基有茎鏃1点（23）、尖基鏃1点（24）がある。凹基無茎鏃は基部の抉りの小さなものである。凸基有茎鏃の23は先端部と茎部を欠損しているが、ほかは完形である。

石槍（図49-25） 基部片が1点出土した。両面に丁寧な調整が施されている。

石匙（図49-26～28、図50-1～5） 縱形7点、横形2点である。図50-3は打面調整剥離技法によってつくられた松原型石匙である。図49-27は先端部に摩耗痕、図50-1、2は裏面に光沢痕がみられる。図50-4、5は主軸と刃部との角度が縦形と横形との中间あたりにあるが、ここでは横形に分類した。いずれも先端が尖頭状となっている。4は下縁が外湾しており、肩の部分にバルブがある。5は先端部がバルブと重なつておらず、下縁には摩耗痕がみられた。

削器（図50-6～10） 14点出土し、5点を図示した。6は石匙の刃部破片の可能性もある。8は二次調整があまり見られないが、下縁には微細剥離痕がみられた。7、9、10は剥片の周縁または縁辺の一部に浅

い二次加工が施されている。石材は珪質頁岩が13点、玉髓質珪質頁岩が1点である。

**磨製石斧** 基部片が1点出土しているが図示していない。石材はホルンフェルスである。

**打製石斧** (図51-1、図52-1～6) 7点出土した。このうち6点は石器集中範囲で出土したものである。これ以外で出土したのは板状礫を素材とする図51-1の1点である。板状節理の片岩を石材としている。整形加工は周縁部に限られ、両面に節理面を広く残している。刃部は緩い弧を描いているが使用痕は検出できなかった。

**磨石** (図50-11、図51-3～7、図52-7) 8点出土し、7点を図示した。扁平礫を素材とするものが4点、断面が三角形の柱状礫を素材とするものが3点、球状礫を素材とするものが1点である。石材は砂岩が4点のほか、頁岩、チャート、安山岩、閃緑岩が各1点である。

**石錐** (図51-8) 1点の出土である。頁岩の扁平礫を素材とし、長軸端部を打ち欠いている。

**鍛器** (図51-2、9) 2点の出土で、砂岩の扁平礫を素材としている。2は扁平礫の周縁に比較的丁寧な整形加工が両面に施されている。9は扁平礫の長軸の両端に刃部状の剥離が施されている。  
(畠山)

#### b区出土土製品 (図49-20)

水田層序のII層から1点出土した。ミニチュア土器の胴部から底部にかけての破片で、底部付近に平行する2本の沈線が施されている。

#### 4-4 c区 (図48、53)

工事掘削深度が地表面から175cmとされた水田である。b区の調査結果から遺物が出土することが明らかであった事から、本調査区は全面発掘を行うこととした。調査の結果、遺構は検出されなかつたが、総重量18kgの土器と、総数17点の石器が出土した。

#### c区出土土器

##### 縄文時代早期中葉の土器 (図53-1～3)

1は口縁部片で、平坦な口唇部には刻みが施されている。外面には貝殻押し引き文が施文されている。2、3は貝殻腹縁圧痕文が施されているもので、2にはV字状に施された圧痕文の頂点に刺突が施されている。

##### 縄文時代中期中葉～後葉の土器 (図53-4)

4は口縁に隆帯が貼り付けられており、隆帯上には刺突が施されている。文様は地文施文後に横走・弧状の沈線が施文されている。

##### 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (図53-5～7)

5、7は後期初頭期、6は十腰内I式に比定されると考えられる。5は折り返し状口縁となる口縁部片で、口縁にはL Rが回転施文されている。頸部は沈線により区画された内側が磨かれて無文帯となっており、胴部にはL Rが継回転施文されているものである。器形及び文様から後期初頭の土器と考えられる。7は口唇及び隆帯上に刻みが施されており、口縁部文様帶には沈線が施文されている。6は小波状となる口縁部片で、口縁直下と頸部屈曲部に横走沈線が施文され、さらに、沈線間を縦位に区画する短沈線が施文されている。

##### 縄文時代晚期中葉の土器 (図53-8)

口唇に刻み目、頸部屈曲部には突起が貼り付けられている。また、頸部は磨かれて無文帯となっており、胴部にはR Lが横回転施文されている。

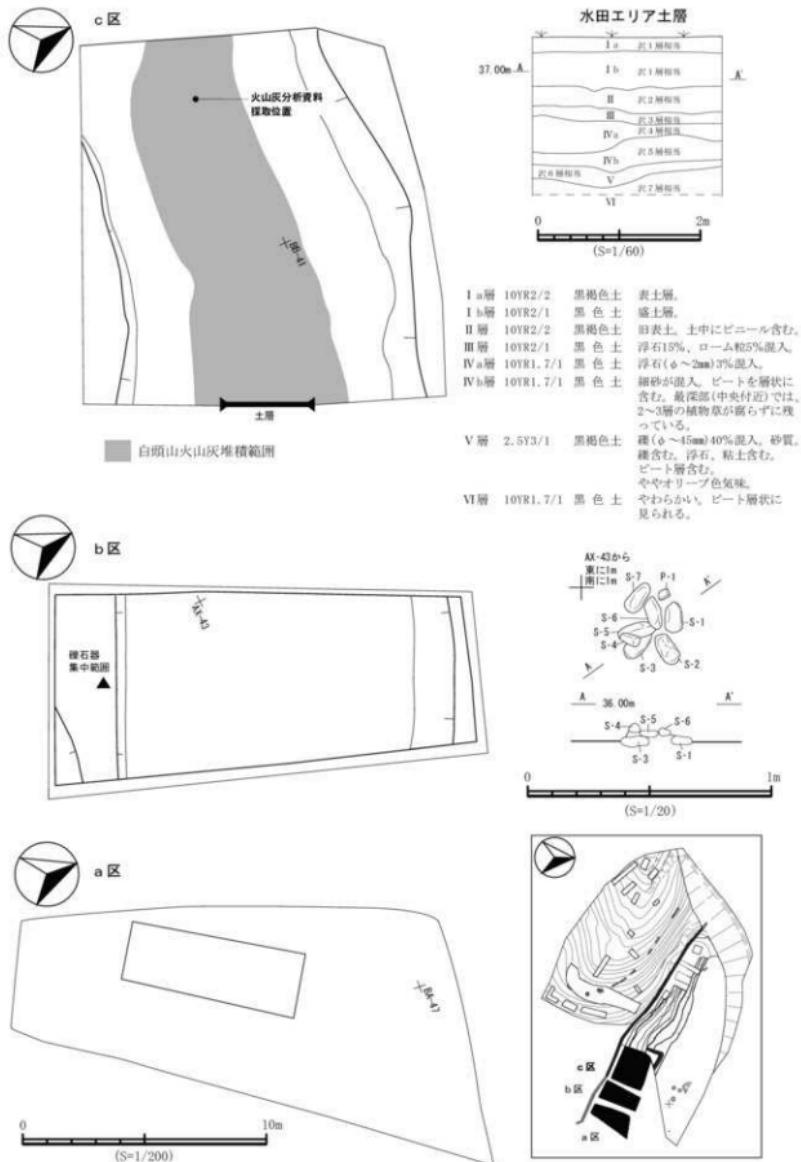


図48 F区 水田エリア (a・b・c区)

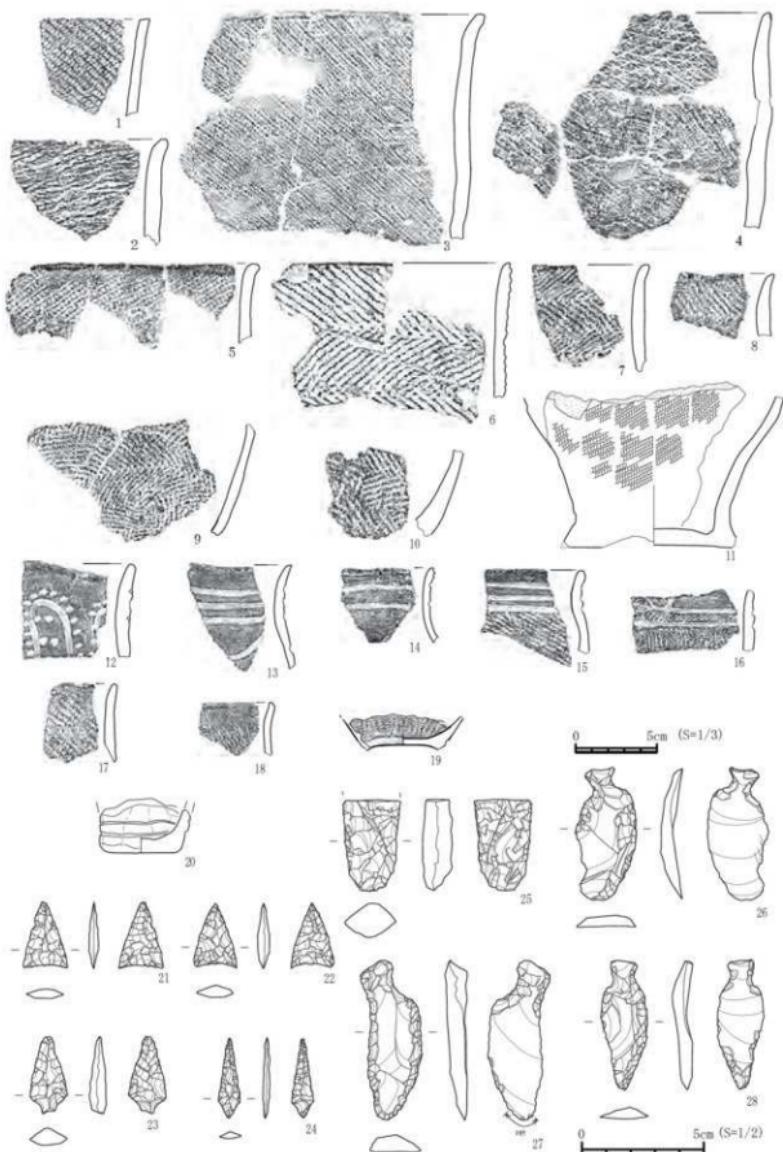


図49 F区 水田エリアb区 出土遺物（1）

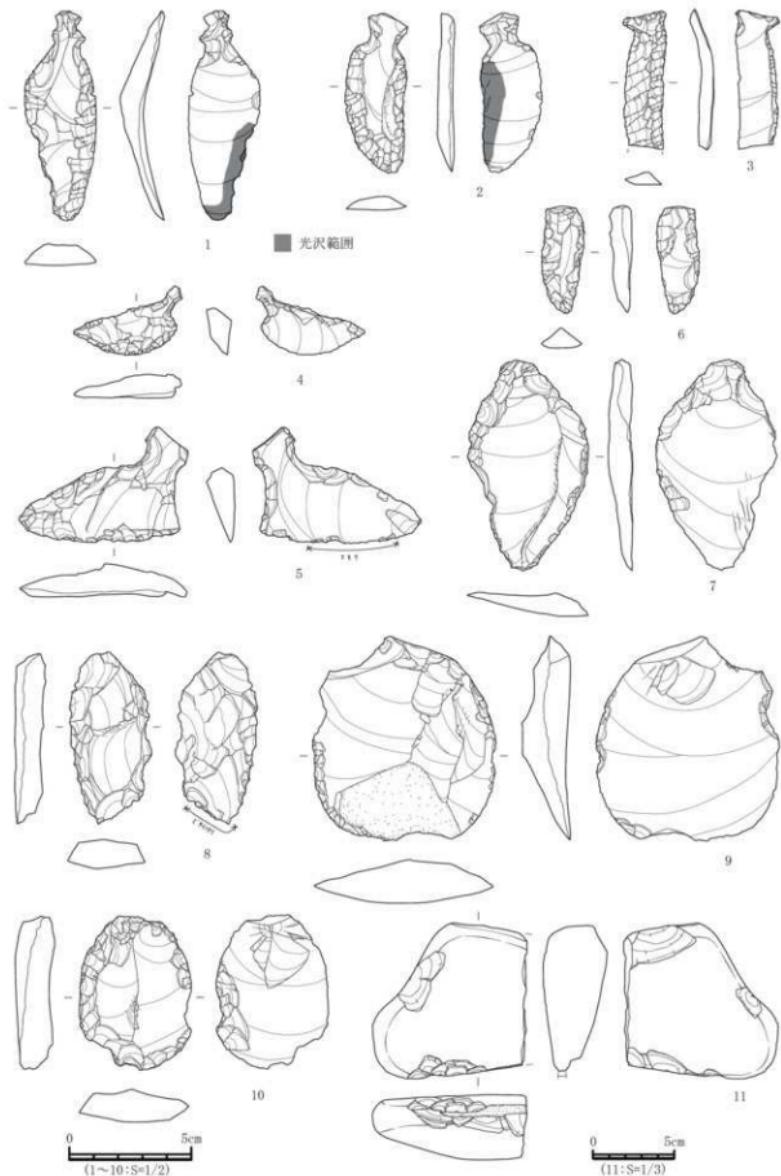


図50 F区 水田エリアb区 出土遺物 (2)

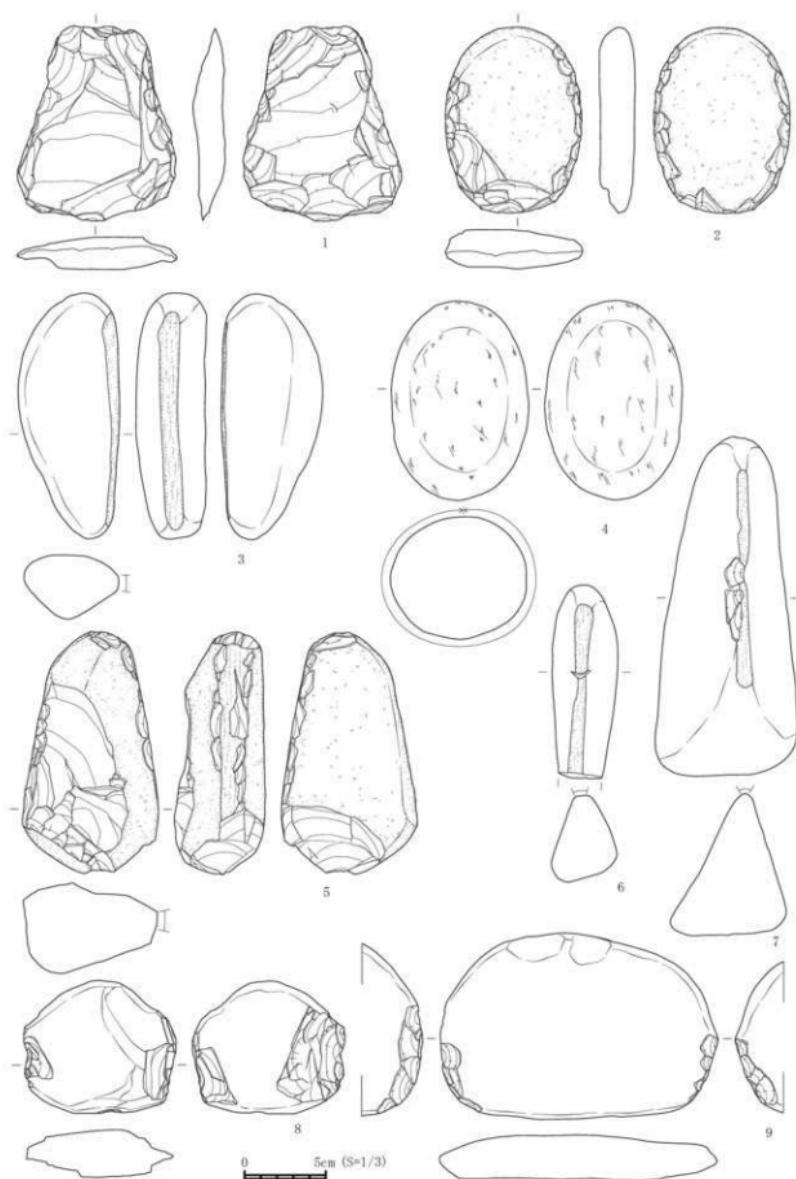


図51 F区 水田エリアb区 出土遺物（3）

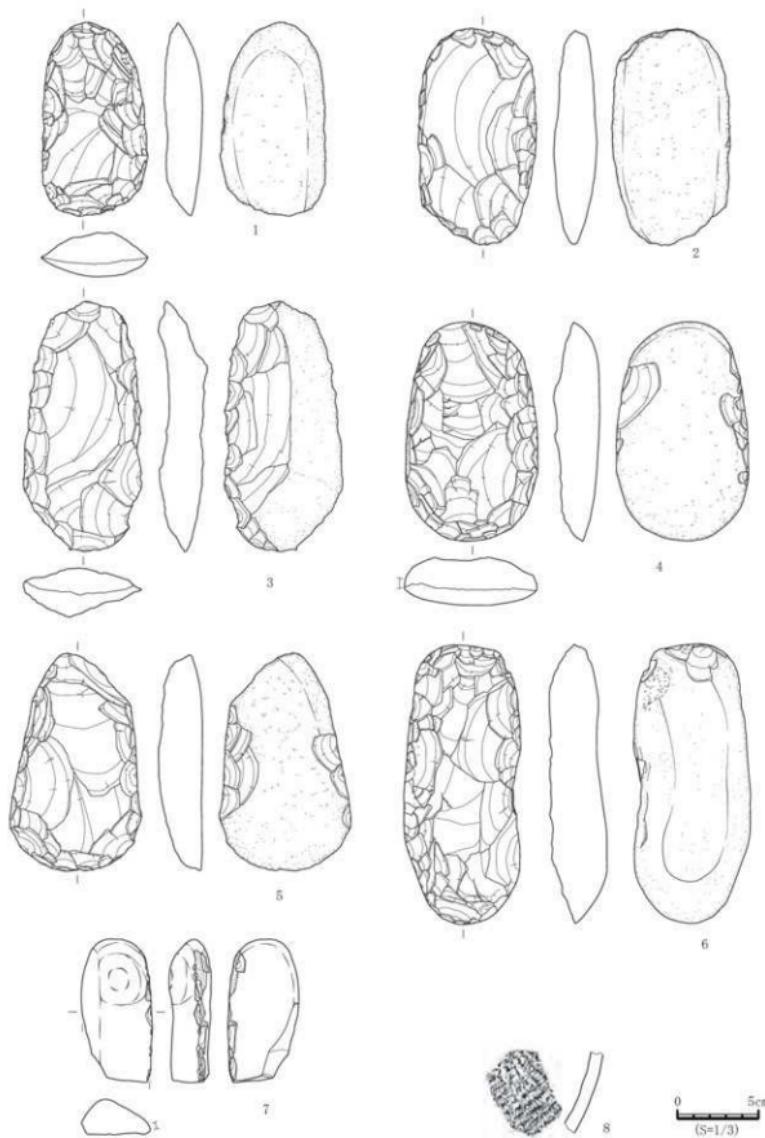


図52 F区 水田エリアb区 積石器集中範囲出土遺物

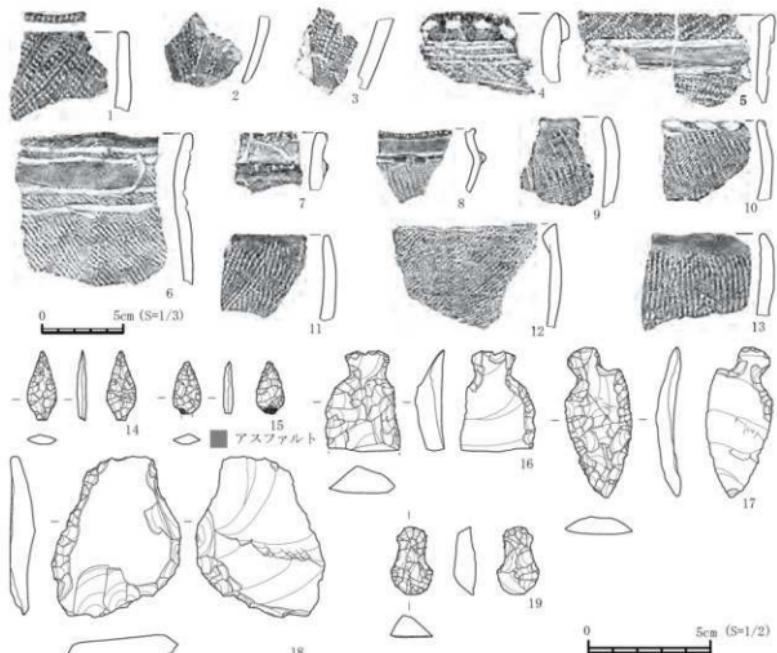


図53 F区 水田エリアc区 出土遺物

後期～晩期の土器 (図 53-9～13)

地文が施されているだけの土器で、いずれも口縁が内湾気味に立ち上がっている。

(小山)

## c区出土石器

c区から出土した石器は、石鏃2点、石匙2点、大石平型石鎧1点、削器4点、二次加工剥片1点、剥片4点、磨石1点、敲石2点である。

石鏃 (図 53-14、15) 凸基有茎鏃が2点である。14は茎部、15は先端部 (衝撃剥離?) と茎部を欠損している。また、15の基部にはアスファルトの付着痕がみられる。石材は2点とも珪質頁岩である。

石匙 (図 53-16、17) 縱形石匙が2点である。石材は珪質頁岩である。16は打面調整剥離技法によってつくられた松原型石匙である。

大石平型石鎧 (図 53-19) 小型の石器で、基部には両面加工が施されているが、刃部は片面加工で半円形に整形されている。石材は珪質頁岩である。

削器 (図 53-18) 4点出土し、1点を図示した。18は下端の調整は急斜度である。

磨石・敲石 磨石1点、敲石2点が出土しているが図示していない。磨石は扁平な圓錐で石材は粗粒玄武岩、敲石は2点とも棒状錐の端部を利用しているもので、石材は砂岩である。

(島山)

## 第4章 自然化学分析

### 潟野遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科

柴 正敏

潟野遺跡より採集された火山灰サンプル1試料（採集場所：沢、層位：7j）について、以下の観察を行った。本試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果は以下の通りである：

- ・火山ガラス（軽石型、バブルウォール型）、・オブシディアン（粗粒）、
- ・斜長石（細粒及び粗粒）、・エジリンオージャイト、・アルカリ長石、・石英（粗粒）、
- ・單斜輝石（細粒及び粗粒）、・斜方輝石（細粒及び粗粒）、・鉄鉱。

ガラスの形態（淘汰の良い、細粒な軽石型ガラス及びバブルウォール型ガラス）及び共存鉱物（エジリンオージャイト及びアルカリ長石）より、本試料は、白頭山苦小牧テフラに帰属される。また、本試料には、粗粒なオブシディアン、石英、單斜輝石及び斜方輝石が存在することから、十和田aテフラが混入していると判断される。

#### （参考文献）

- Hayakawa, Y. (1985), Pyroclastic geology of Towada volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol. 60, 507-592.
- 町田 洋・新井房夫 (2003)、新編火山灰アトラス ー日本列島とその周辺ー、東京大学出版会、pp.336.

## 第5章 総括

潟野遺跡は、八戸市の中心部から南へ約3kmの新井田川左岸に位置しており、これまでに平成16年度と17年度に本発掘調査が行われている。今回報告する平成22年度と23年度の調査区は先の調査区の周囲に点在するような状況で位置しており、便宜上A～F区に区分して調査を行った。その結果、竪穴住居跡7軒、土坑17基、土器埋設遺構2基、礫石器集中範囲1カ所、溝跡6条、道路状遺構9条を検出した。遺物はF区で調査を行った沢跡を中心として縄文時代の土器や石器など段ボール箱で66箱出土した。以下に調査区毎の成果を構造、遺物に分け述べる。

### 1 遺構

A・B区では縄文時代前期初頭の住居を6軒検出した。このうち2棟は平成17年度調査の継続であり、今回調査で当該期の集落がさらに南方へ広がることを確認した。前回調査を含めた縄文時代前期初頭から前葉の竪穴住居跡の総数は17軒で、比較的時期のまとまつた良好な集落の事例と評価できる。これらは標高40～50mの東向き斜面に位置し、斜面下方の壁の立ち上がりを確認できない住居も多い。このため平面形の全容については不明な住居もあるものの、隅丸方形（住居壁面が直線状になり方形基調のもの）と楕円形（住居壁が直線とはならず隣り合う壁が直角とならないもの）の2種類を確認し、平面形の相異が竪穴掘り込みの深さや柱穴配置、炉の有無と相関を見せる。隅丸方形の住居は壁柱穴および中央部のピットをもつた柱穴配置との結びつきが強く、竪穴掘り込みが深く炉をもたない。壁がほぼ全周残る住居（SI-27・28・29・30）をみると、壁柱穴は斜面上方側のみに配置されている。一方、楕円形の住居の多くは壁柱穴をもたず、掘り込みの浅いものが多く、地床炉を設けるのを特徴とする。これらの傾向は平成17年度調査でも指摘されており、今回の調査でも同様の傾向が示された。

A・B区から検出された土坑は9基である。この内、底面から横位の土器埋設遺構が検出された第82号土坑が特筆される。縄文時代中期末葉における横位の土器埋設遺構は、八戸地域においては田代遺跡における中期末～後期初頭の検出例がある（青森県教育委員会2006）。また本遺跡に隣接する新田遺跡からは、遺構外から横位の土器埋設炉が検出されている（青森県教育委員会2006）が、遺構内に構築されたものは管見の限り見当たらない。ただし本埋設土器は、土坑廃絶直後に構築された可能性も考えられる。土器の内部から人骨は出土しなかつたが、横位に埋設した土器の口縁部に別個体の破片が差し込まれていること、土器の周囲には自然礫が配置されることから墓の可能性が考えられる。本遺構の北側からは、平成17年度調査で同時期の竪穴住居跡が検出されており、本遺構との関連が考えられる。

C～E区からは、遺構は検出されなかった。これらの調査区周辺からは平成17年度調査でも遺構が検出されなかつたことから、当該区域では遺構の分布が希薄であることが追認された。（葛城）

F区からは竪穴住居跡1軒、土坑8基、土器埋設遺構2基、礫石器集中範囲1カ所を検出した。

竪穴住居跡は、炉のみの検出である。炉形態は焼土範囲の一端に礫が配置されているもので、立石炉とも呼ばれている形態である。遺物及び炉の形態から縄文時代後期前葉期までには埋没した遺構と考えられる。なお、隣接して検出した後期前半の土器を使用している第1号土器埋設遺構は、中撤浮石層の下位である基本層序第IV層を掘り込み面としており、構築時に基本層序第IV層面まで掘り下

がっていた状況が考えられる。検出位置から第1号竪穴住居跡との関連が考えられる。第2号土器埋設遺構は弥生時代前期の深鉢型土器が斜位に埋設されていた。同時期の遺物はこれまでの調査で、散発的に出土していたが、遺構が検出されたのは初めてである。また、水田エリアb区からは、形態がよく似た打製石斧が密集して出土しており、硃石器集中範囲として調査を行った。出土した石斧はいずれも片面に原礫面を多く残すもので、共に出土した土器から前期前葉期のものであることも考えられる。

F区平場エリアの約1,000m<sup>2</sup>の範囲については（図29）、調査時に行われた事業者との協議により、調査未了のまま埋め戻すこととなつたため、平成24年度以降に調査を持ち越すこととなつた。今後も継続して調査が行われる予定である。（小山）

## 2 遺物

遺物は、遺構や包含層中から縄文時代早期中葉の貝殻文系土器から弥生時代前期に至るまでの土器が出土したほか、これに伴う石器が出土した。

A～E区

前期初頭から前葉、中期末葉から後期前葉、晩期のものが段ボール箱14箱出土した。

前期初頭から前葉の土器群は、いずれも破片で出土しており全容をうかがえるものはみられないが、器壁は10～13mm程度のものが多く、底部形状は砲弾気味の尖底で平底はみられない。口縁部形状は尖頭状のものがやや多く、端部には縄文、列点を施すものがみられる。いずれも繊維を多量に含んでおり極めて脆い。文様は斜縄文がもっとも多く、次いで単軸絡条体第1類、少量の羽状縄文がみられる。

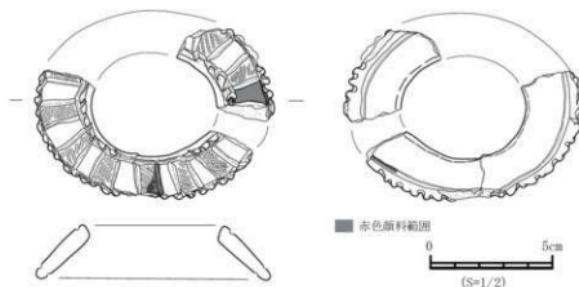
中期末葉から後期前葉の土器群では、第82号土坑関連で良好な一括出土資料がある。図9-3は、6単位の波状口縁深鉢で、磨消縄文によるJ字文を基本モチーフに、これを背合わせ、対向、連結させている。胴部中央には4単位の鱗状突起が付される。器形やモチーフより縄文時代中期末葉の大木10式並行の土器と思われる。（葛城）

F区

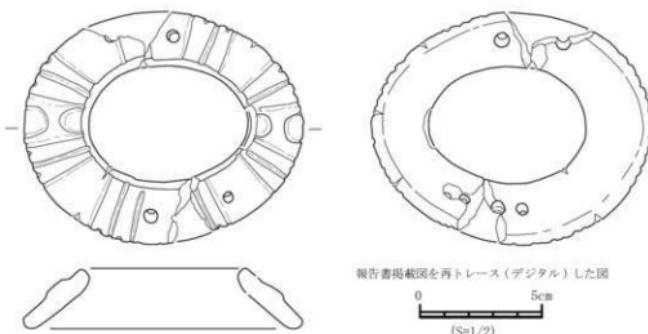
早期中葉の貝殻文系土器群から弥生時代前期までの土器が沢を中心として段ボール箱で52箱出土した。平場エリアでは、縄文時代前期後半以降の土器は中擲浮石層の下層にあたる基本層序第IV層以下には全く含まれておらず、これらの層からは早期中葉～前期初頭の土器だけが出土した。また、是川遺跡長田沢地区へと続く沢跡の調査では、段ボール箱で50箱相当の遺物が出土したが、縄文時代の遺物包含層は形成されておらず、全て流水等の影響により2次的に動いた遺物と判断した。

早期中葉の土器では貝殻腹縁圧痕文が施文されているものが主体を占めており、吹切沢式に相当するものと考えられる。他にはムシリI式も若干数出土している。前期初頭から前葉の土器の様相はA～E区と同じである。F区では遺構内・外から晩期の土器も出土している。特に第1号土坑の覆土上層には晩期後半の遺物が多く含まれており、脚付きの浅鉢が出土した。現存している脚部は1個であるが、本来は4脚であったものと考えられる。縄文は施文されておらず、口縁に沿って1条の沈線が施されているほか、全体が磨かれている。

出土遺物の中で特徴的なものとしては、沢及び水田エリアc区から出土した環状土器があげられる（図47、54）。二次的に動いた遺物であるが、文様などから晩期中葉のものと考えられ、諸特徴から貝製腕輪を模したものであろうと考えられる。同様の土器は県内では見当たらず、本県では初の出土と考えられる。他県の事例としては、秋田県向井様田D遺跡から出土した環状の土器があげられ



潟野遺跡出土 環状土製品



秋田県向様田D遺跡出土 環状土製品

## 図54 環状土製品

る。出土層位から晩期後半のものと捉えられており、報告書中で貝製腕輪複製品の可能性が示唆されている。

(小山)

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2006『新田遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第410集
- 青森県教育委員会 2006『潟野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第412集
- 青森県教育委員会 2006『田代遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第413集
- 青森県教育委員会 2007『潟野遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第431集
- 青森県教育委員会 1988『表館（1）遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
- 秋田県教育委員会 2005『向様田D遺跡』秋田県文化財調査報告書第392集
- 八戸遺跡調査会 2002『是川中居遺跡・長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集
- 名川町教育委員会 1984『劍吉荒町遺跡発掘調査報告書』
- 弘前大学人文学部付属 亀ヶ岡研究センター 2006  
『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3

## 遺構計測表

## 堅穴住居跡一覧

図番号	遺構名	地区	グリッド	平面形	開口部規模(m)		深さ(m)	出土遺物	時期	備考
					長軸	短軸				
国15	S129	B区	BQ+R-65~66	楕円形	4.45	3.08	0.85	縄文土器、石器	縄文前期初期～前葉	
国15	S138	B区	BQ+R-67	長楕円形	5.60	2.35	0.35	縄文土器、石器	縄文前期初期～前葉	
国16	S143	B区	BO+P-63	長楕円形	(2.67)	(1.58)	0.45	縄文土器	縄文前期初期～前葉	
国17	S144	B区	BO+P-64~65	方形？	4.25	(1.84)	0.38	縄文土器、石器	縄文前期初期～前葉	
国18	S145	B区	BN+O-61	不明	(4.48)	(1.56)	0.52	縄文土器	縄文前期初期～前葉	
国6~7	S146	A区	CC+D-60	楕丸長方形	4.70	(2.06)	0.43	縄文土器、石器	縄文前期初期～前葉	
国28	S101	F区	BF-48	不明	-	-	-	縄文土器	縄文時代後期前半	伊だけを検出

## 土坑一覧

図番号	遺構名	地区	グリッド	平面形	開口部規模(m)		深さ(m)	出土遺物	時期	備考
					長軸	短軸				
国8	SK76	A区	CG-61	円形	0.74	0.68	0.29		不明	SK79<
国8	SK77	A区	CF-59	楕円形	1.10	0.90	0.44	縄文土器	不明	SK78<
国8	SK78	A区	CF-59	円形？	(0.83)	0.89	0.35		不明	SK77>
国8	SK79	A区	CG-61	楕円形	0.97	0.75	0.50		不明	SK76>
国8	SK80	A区	CD+E-59	楕円形	1.61	0.92	0.44	石器	不明	
国19	SK81	B区	BO+D-61	楕円形？	1.99	(0.82)	0.19	縄文土器、石器	縄文晩期	
国8~9	SK82	A区	CG-48	円形？	(1.71)	1.69	0.65	縄文土器	縄文中期末葉	底面に埋設土器
国8	SK83	A区	CG-61	長方形？	(0.45)	0.54	0.21		不明	
国8	SK84	A区	CG+H-49	楕円形	1.12	0.87	0.67		不明	
国30~32	SK01	F区	BG+H-41~42	円形？	4.75	(2.63)	2.90	縄文土器、石器	晩期中葉	調査区外へ伸びている
国30~32	SK02	F区	AU-32	円形	1.54	1.25	1.00	石器	不明	
国31~32	SK03	F区	HF-44	円形	1.65	1.50	2.12	縄文土器	後期後葉以降	
国31	SK04	F区	HF-42~43	円形	0.60	0.60	1.70		不明	
国31	SK05	F区	BG-43	円形	1.34	1.21	2.02		不明	
国31~32	SK06	F区	BI+J-30	円形	0.97	0.83	0.15	縄文土器	不明	
国31	SK07	F区	BH-29	円形	1.04	0.75	0.42		不明	
国31	SK08	F区	AV+W-31~32	楕円形	2.60	1.40	1.28		不明	

## 溝跡一覧

図番号	遺構名	地区	グリッド	規模(m)		深さ(m)	出土遺物	時期	備考
				長さ	幅				
-	SD10								矢番
国20	SD11	B区	BO+BP-64	(7.20)	1.78	0.36	土偶		
国20	SD12	B区	BM+N-62, BO+I-62, BP-61	(13.60)	0.64	0.16			SD13<
国20	SD13	B区	BM+N-62, BO+I-62, BP-61	(13.60)	0.44	0.20	縄文土器		SD12>
国21	SD14	B区	BM-59~60, BN-59	(4.24)	1.94	1.18	縄文土器		SD16>
国21	SD15	B区	BM-59	1.20	0.54	0.36			
国21	SD16	B区	BM-N-59	(3.40)	0.72	0.15	縄文土器、石器		SD14<

## 道路状遺構一覧

図番号	遺構名	地区	グリッド	規模(m)		深さ(m)	出土遺物	時期	備考
				長さ	幅				
国10	第3号道路状遺構	A区	CB+C-56~57	(7.19)	0.71	0.25		不明	
国10	第4号道路状遺構	A区	CG-48	(2.22)	0.36	0.07		不明	SX15
国10	第5号道路状遺構	A区	CF+G-48~51	(7.29)	1.18	0.23	縄文土器	不明	SX16
国10	第6号道路状遺構	A区	CE+F-49~50	(4.95)	0.30	0.07		不明	SX17
国10	第7号道路状遺構	A区	CG+H-47~49	(7.47)	0.49	0.08		不明	SX18
国11	第8号道路状遺構	A区	CD+E-52	(6.55)	0.40	0.11		不明	SX19
国11	第9号道路状遺構	A区	CC+E-51~52	(5.34)	0.41	0.08		不明	SX20
国11	第10号道路状遺構	A区	CD-52	(1.32)	0.26	0.12		不明	SX21
国11	第11号道路状遺構	A区	CH-47~48	3.44	0.41	0.11		不明	SX22

土器観察表

番	区	出土地点	層位	器種	部位	時期	特徴	
7	1	A区	SI - 46	堆積土	深鉢	口縁部	前葉初頭～前葉	口縁端部突列。LR(横)、織維混入
7	2	A区	SI - 46	堆積土	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	3	A区	SI - 46	堆積土	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	4	A区	SI - 46	床面直上	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	5	A区	SI - 46	床面直上	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	6	A区	SI - 46	床面直上	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	7	A区	SI - 46	堆積土	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	8	A区	SI - 46	I 層	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
7	9	A区	SI - 46	堆積土	深鉢	胴 部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
9	1	A区	SK - 82	底 面	深鉢	口縁部 欠損	中期末葉	LR(縦)
9	2	A区	SK - 82	埋設土器	深鉢	胴部下半	中期末葉	LR(縦)
9	3	A区	SK - 82	埋設土器	深鉢	底部欠損	中期末葉 起。J字状モチーフ。LR(縦)	6 単位波状口縁(3 単位の大波状+小波状) 縱状突
12	1	A区	CG - 48	I 層	深鉢	口縁部	前期か?	LR(斜)
12	2	A区	CF - 59	IVa層	深鉢	口縁部	前葉初頭～前葉	高体1類(横)、織維混入
12	3	A区	CF - 60	III 層	深鉢	口縁部	前葉初頭～前葉	口縁端部突列、羽状構成。異原体 (RL(横)とLR(横))、織維混入
12	4	A区	CF - 52	I 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	羽状構成、異原体(無能LR(横)と無能LR(斜))、織維混入
12	5	A区	CE - 60	IV 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(縦)、織維混入
12	6	A区	CD - 59	V 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
12	7	A区	CD - 61	IV 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	羽状構成、異原体 (RL(横)とLR(横))、織維混入
12	8	A区	CD - 61	III 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
12	9	A区	CD - 61	III 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	O段多条、LR(横)、織維混入
12	10	A区	CF - 49	III 层	深鉢	口縁部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	11	A区	CF - 49	III 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	12	A区	CF - 49	I 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	13	A区	CG - 58	IVa層	深鉢	口縁部	中期末葉	沈像織文、LR(縦)
12	14	A区	CG - 58	I 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	潛消織文、LR(縦)
12	15	A区	CG - 49	III 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	潛消織文、J字形。LR(縦)
12	16	A区	CF - 49	I 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	沈像、RL(縦)
12	17	A区	CE - 60	I 层	深鉢	胴 部	後葉初頭～前葉	羽状路条体(縦)
12	18	A区	CE - 60	I 层	深鉢	胴 部	後葉初頭～前葉	單軌路条体(縦)
12	19	A区	CF - 51	II 层	深鉢	口縁部	中葉後～後期	LR(縦)
12	20	A区	CE - 51	III 层	深鉢	口縁部	中葉後～後期	LR(縦)
12	21	A区	CF - 49	III 层	深鉢	口縁部	中葉後～後期	LR(縦)
12	22	A区	CG - 56	III 层	深鉢	口縁部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	23	A区	CG - 57	I 层	深鉢	口縁部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	24	A区	CG - 57	I 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	25	A区	CG - 49	III 层	深鉢	胴 部	羽状路+羽状斜	LR(縦)、潛消
12	26	A区	CG - 49	III 层	深鉢	胴 部	中期末葉	LR(縦)、結飾
12	27	A区	CF - 49	III 层	深鉢	胴 部	中葉後～後期	LR(縦)、外縫接合
12	28	A区	CG - 49	III 层	深鉢	底 部	後葉初頭～後期	LR(縦)
12	29	A区	CE - 51	III 层	台付鉢	胴部上半	晚 期	潛消織文、LR(横)、平行沈像。対向するC字状文
12	30	A区	CE - 51	III 层	鉢小	胴 部	晚 期	平行沈像
15	1	B区	SK - 81	床面直上	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	單軌路条体1類
15	2	B区	SI - 29	床 面	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	羽状構成、異原体 (LR(横)とRL(横))、織維混入
15	3	B区	SI - 29	堆積土	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	LR(横)、織維混入
17	1	B区	SI - 44	堆積土	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	羽条体1類、織維混入
18	1	B区	SI - 49 <small>(it)</small>	I 层	深鉢	底 部	前葉初頭～前葉	尖底、RL(斜)、織維混入
18	2	B区	SI - 49 <small>(it)</small>	I 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	RL(斜)か?、織維混入
18	3	B区	SI - 45	I 层	深鉢	胴 部	前葉初頭～前葉	RL(横)、織維混入
19	1	B区	SK - 81	I 层	壺	底部欠損	晚 期	4 単位の瘤状貼付。LR(横)、胴最上部の一部粗(横)
19	2	B区	SK - 81	I 层	深鉢	口縁部	晚 期	口縁肥厚、調文帯、RL(横)
19	3	B区	SK - 81	堆積土	深鉢	口縁部	前葉初頭～前葉	異原体 (LR(斜)とRL(横))、織維混入
19	4	B区	SK - 81	I 层	深鉢	胴 部	後葉初頭～前葉	複筋RLR(縦)
19	5	B区	SK - 81	I 层	深鉢	胴 部	後葉初頭～前葉	L(縦)
21	1	B区	SD - 14	I 层	深鉢	胴 部	中期末葉	沈像、潛消織文、LR(縦)
								21-1~3弱同一個体

国	番	区	出土地点	層位	器種	部位	時期	特徴
21	2	BK	SD-14	I 層	深鉢	胴部	中期末葉	沈縛、LR
21	3	BK	SD-14	I 层	深鉢	胴部	中期末葉	沈縛、LR 前縁は~後縁は複数RLR(縦)か
21	4	BK	SD-14	2 層	深鉢	口縁部	前縁は~後縁は複数RLR(縦)か	
21	5	BK	SD-14	1 层	深鉢	胴部	後期前葉	沈縛、済巻き状モチーフ、LR+
21	6	BK	SD-14	1 层	深鉢	口縁部	晚期か	口縁部小突起
21	7	BK	SD-16	1 层	深鉢	胴部	物は~前縁は	LR(縦)
23	1	BK	BQ-65	IVa層	深鉢	口縁部	前葉初~前葉	LR(横)、織維混入
23	2	BK	BQ-65	IVa層	深鉢	口縁部	前葉初~前葉	LR(横)、織維混入
23	3	BK	BQ-66	IVa層	深鉢	口縁部	前葉初~前葉	LR(横)、織維混入
23	4	BK	BN-61	III 層	深鉢	胴部	前葉初~前葉	LR(斜)、内面柔軟、織維混入
23	5	BK	BQ-66	IVa層	深鉢	胴部	前葉初~前葉	羽状構成、異原体(RL(横)とRL(横))、織維混入
23	6	BK	BQ-66	III 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	羽状構成、異原体(RL(横)とRL(横))、織維混入
23	7	BK	BN-64	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	RL(横)、織維混入
23	8	BK	BN-64	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	RL(横)、織維混入
23	9	BK	BN-61	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	LR(横)、織維混入
23	10	BK	BN-60	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	LR(横)、織維混入
23	11	BK	BQ-66	III 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類、織維混入
23	12	BK	BQ-67	IVa層	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦・斜)、織維混入
23	13	BK	BQ-66	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	14	BK	BQ-66	III 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	15	BK	BQ-66	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	16	BK	BQ-66	III 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	17	BK	BQ-65	IVa層	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	18	BK	BQ-66	III 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	19	BK	BQ-66	IVa層	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	20	BK	BQ-66	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	單軸絡条体1類、織維混入
23	21	BK	BQ-66	III 层	深鉢	底部	前葉初~前葉	砂輪式、單軸絡条体1類(縦)、織維混入
23	22	BK	BQ-65	IVa層	深鉢	胴部	前葉初~前葉	内面柔軟
23	23	BK	BN-61	I 层	深鉢	口縁部	中葉は~後期	波状口縁、沈縛、地文LR(縦)
23	24	BK	BN-61	I 层	深鉢	口縁部	中葉は~後期	波状口縁、沈縛、地文LR(縦)
23	25	BK	BN-60	I 层	深鉢	胴部	中葉は~後期	沈縛、済巻文、地文LR(縦)
23	26	BK	BN-61	I 层	深鉢	胴部	中葉は~後期	沈縛、内文、地文LR(縦)
23	27	BK	BP-64	I 层	深鉢	口縁部	前縁は~後縁は	波状、沈縛、地文LR
23	28	BK	BN-60	I 层	深鉢	胴部	前縁は~後縁は	無文地、J字文
23	29	BK	BN-60	I 层	深鉢	胴部	中葉は~後期	粘土紐2条、粘土紐上にLR施文
23	30	BK	BN-61	I 层	深鉢	胴部	後期初頭	異原体(LR(縦)とLR(縦))
23	31	BK	BN-59	I 层	深鉢	口縁部	後期初頭	口縫部肥厚。L(縦)
23	32	BK	BN-61	I 层	深鉢	口縁部	晚 期	LR(横)
23	33	BK	BN-61	I 层	深鉢	胴部	晚 期	頭部沈縛、LR(横)
26	1	CJK	10トレンチ	I 层	深鉢	胴部	円葉上唇E式	馬蹄形溝文押正、粘土紐上縫文施文
26	2	CJK	青採	深鉢	口縁部	中葉末葉	小波状か、貼付剥落か。RL(斜)	
26	3	CJK	青採	深鉢	口縁部	中葉末葉	波状縫、LR(斜)、外縫接合	
26	4	CJK	9トレンチ	I 层	深鉢	胴部	中葉末葉	LR(縦)
26	5	CJK	12トレンチ	I 层	深鉢	胴部	中葉末葉	RL(縦)
26	6	CJK	9トレンチ	I 层	深鉢	胴部	中葉末葉	RL(縦)
26	7	CJK	8トレンチ	I 层	深鉢	胴部	前葉初~前葉	羽状構成、異原体(RL(横)とRL(横))
26	8	CJK	5トレンチ	I 层	深鉢	胴部	不 明	RL(縦)
26	9	CJK	9トレンチ	I 层	深鉢	胴部	不 明	L(縦)か
26	11	DJK	1トレンチ	#7	深鉢	胴部	円葉上唇E式	3本=1単位の沈縛、LR(横)
26	12	DJK	1トレンチ	#7	深鉢	胴部	円葉上唇E式	3本=1単位の沈縛、LR(横)
26	13	DJK	1トレンチ	#7	深鉢	頭 部	晚 期	口縫部直立、LR(横)
26	14	DJK	1トレンチ	#7	深鉢	胴 部	晚 期	LR(横)
28	1	FEK	SI-1	覆 土	蓋	完 形	後期前葉	口径:3.5cm、高さ16.3cm、底径5.6cm、2単位の波状縫、波頂部外縫には突起、全面にLR縫、斜回。底部は上げ底状
28	2	FEK	SI-1	覆 土	深鉢	胴部	十 横内 I	沈縛(多量)
28	3	FEK	SI-1	確認面	鉢	口縁	後期前半	單縫 L(縦)
32	1	FEK	SK-1	覆 土	鉢	口縁	十 横内 I	沈縛、L充填
32	2	FEK	SK-1	覆 土	深鉢	胴部	十 横内 I	沈縛(多量)
32	3	FEK	SK-1	最下層	蓋	口縁	十 横内 I	口径(8.4cm)、沈縛、L充填

国	番	区	出土地点	層位	器種	部位	時期	特徴	
32	4	FIK	SK-1	覆 土	壺型	胴部	十櫛内 I	縫帶、縫帶上L回転、沈縫	
32	5	FIK	SK-1	最下層	壺型	口縁	十櫛内 I	縫沈縫、沈縫(波・輪ゴム状)、LR充填	
32	6	FIK	SK-1	覆 土	鉢型	口縁	晩期中葉	口唇:割目、B型突起、口縁:沈縫、沈縫間に刻み目	
32	7	FIK	SK-1	覆 土	台付鉢	完形	晩期中葉	口径:15.5cm、器高:14.2cm、底径:7.6cm、口縁:貼り畠、頭部:34°、無文帯、曲面部に貼り畠、 縫縫:沈縫、雲形文、LR充填	
32	8	FIK	SK-1	覆 土	脚付き浅鉢	略完形	晩期後葉	口径(14.4cm)、器高4.0cm、脚長1.5cm、沈縫(1条)、 底径:4cm、工字文、すかし、内面35°傾顯著、沈縫 内に赤色顔料残存している箇所あり。	P-1
32	9	FIK	SK-1	3 層	台付土器	脚部	晩期後葉	底径:4cm、工字文、すかし、内面35°傾顯著、沈縫 内に赤色顔料残存している箇所あり。	P-2
32	10	FIK	SK-1	最下層	壺	胴部	後期前半	LR横回	
32	11	FIK	SK-1	覆 土	深鉢	口縁	後~晚期	LR横回	
32	12	FIK	SK-1	最下層	深鉢	胴部	後~晚期	底径:9.0cm、LR横回	
32	18	FIK	SK-3	覆 土	深鉢	胴部	十櫛内 I	沈縫(多重)	
32	19	FIK	SK-3	覆 土	鉢	口縁	後期前半	沈縫、單線1縫回	
32	20	FIK	SK-3	覆 土	深鉢	胴部	後~晚期	割り消し、LR充填	
32	21	FIK	SK-3	覆 土	深鉢	胴部	前期後葉	脚付に織縫混入、結束1羽状	
32	22	FIK	SK-6	1 層	鉢型	口縁	後期前半	LR横回	
33	1	FIK	SK-1	IV層上面	深鉢	略完形	後期前半	口径25.5cm、口縁:小波状、頭部には沈縫、胴部 には単縫5縫回	
33	2	FIK	BK-L-34	III層上面	深鉢	完形	弥生前期	口径:34°、脚部:LR横回	
34	1	FIK	BJ-32	IVb層	深鉢	口縁	早期中葉	口縫端縫、縫帶上に刻み、貝殻腹縫押引文	
34	2	FIK	BL-33	IVb層	深鉢	口縁	早中期中葉	口縫端縫に刻み、縫帶、縫帶上にも刻み、縫帶に 沿って沈縫、貝殻腹縫押引文	
34	3	FIK	BL-32	IVb層	深鉢	口縁	早期中葉	波狀口縁、口唇:縫帶上にも刻み、貝殻腹縫押引文	
34	4	FIK	BJ-30	IIIb層	深鉢	口縁	早期中葉	口唇刻み、貝殻腹縫押引文	
34	5	FIK	BJ-31	IIIb層	深鉢	胴部	早期中葉	貝殻腹縫押引文	
34	6	FIK	BJ-34	IVa層	深鉢	胴部	早中期中葉	波狀帯、貝殻腹縫押引文	
34	7	FIK	BL-32	III 層	深鉢	胴部	早中期中葉	貝殻腹縫押引文	
34	8	FIK	BJ-34	IVa層	深鉢	胴部	早中期中葉	波狀沈縫(2条)、貝殻腹縫押引文	
34	9	FIK	BJ-~29-30	I 層	深鉢	胴部	早中期中葉	貝殻腹縫押引文	
34	10	FIK	BL-33	IVe層	深鉢	胴部	早中期中葉	貝殻腹縫压痕	
34	11	FIK	BG-B-37-38	V 層下面	深鉢	胴部	早中期中葉	矢羽根状沈縫、ムシリ I	34-12と同一
34	12	FIK	BG-B-37-38	V 層下面	深鉢	胴部	早中期中葉	矢羽根状沈縫、ムシリ I、内面に貝殻多刺	P-4、34-11と同一
34	13	FIK	BJ-36	V 層	深鉢	口縁	前期初頭	LR横回、縫回、織維確認できず	
34	14	FIK	BK-33	IVa層	深鉢	胴部	前期初頭	LR横回、斜回、織維混入	
34	15	FIK	BB-35	III 層	深鉢	胴部	前期初頭	奥原体による羽状、織維混入	
34	16	FIK	BG-42	I・II 層	深鉢	口縁	前期初頭	口唇刻目、結束1羽状、LR側圧、織維混入	
34	17	FIK	BI-32	IVb層	深鉢	口縁	前期初頭	LR横回、織維混入	
34	18	FIK	BJ-32	III 層	深鉢	口縫~脚部	前期後半	織維混入、RLR横回、BJ-33と接合	34-19と同一
34	19	FIK	BJ-32	II 層	深鉢	胴部~底部	前期後半	底径9.0cm、RLR横・斜回、織維混入、BJ-34、BK-34 と接合	34-18と同一
34	20	FIK	BE-40	III層上面	深鉢	口縁	下層d1	LR、RL側圧、微隆帯上刺突、結合回転式、 結合1羽状	
34	21	FIK	BE-46	III層上面	深鉢	口縁	下層d2	隆帯、文様帯内・隆帯上LR側圧	
34	22	FIK	BK-32	II 層	深鉢	胴部	中期前半	RL横回、縫帶貼付、縫帶上斑回転、上層式	
34	23	FIK	BL-34	III 层	深鉢	口縁	中期後葉	口縫に縫帶、縫帶上沈縫、胴部はRL横回→沈縫(楕円形)	
34	24	FIK	BL-32	II 層	口縁	中末~後初	外縫に縫状突起		
34	25	FIK	BK-28	III 层	深鉢	口縁	中末~後初	口縫部文様帯は無文で棒状工具による刺突列、 隆帯、LR横回	
34	26	FIK	BE-44	I・II 層	深鉢	胴部	後期初頭	沈縫(方形区画)、LR充填、BG-44と接合	
35	1	FIK	BE-48	III層上面	鉢	口縁	十櫛内 I	L調回転→沈縫→ミガキ	
35	2	FIK	BE-48	III層上面	鉢	口縁	十櫛内 I	口縫のみ地文LR横回→沈縫(平行沈縫間に入り組状 沈縫)→LR充填	
35	3	FIK	BE-43	III層上面	鉢	口縁	十櫛内 I	波狀口縫、波頂部に隆帯貼付、口縫のみ地文LR横回 →沈縫(方形区画)、LR充填	
35	4	FIK	BE-42	III層上面	鉢	口縁	十櫛内 I	波狀口縫、波頂部口唇に刻み、口縫のみ地文LR横回 →沈縫→LR充填	
35	5	FIK	BE-45	I・II 層	鉢	口縁	十櫛内 I	L調回転→沈縫→ミガキ	
35	6	FIK	BE-44	III層上面	鉢	口縁	十櫛内 I	沈縫、LR充填	
35	7	FIK	BE-45	III層上面	鉢	口縁	十櫛内 I	縫縫の縫帶、沈縫→LR充填	
35	8	FIK	BE-42	I・II 層	鉢	口縁	十櫛内 I	波狀口縫、波頂部外面に突起、沈縫→LR充填	

区番	区	出土地点	層位	器種	部位	時期	特徴		
35	9	FK	BE-43	I・II層	深鉢	口縁	十棱内 I	小波状口縁、沈線。L充填	
35	10	FK	BE-43	III層上面	深鉢	口縁	十棱内 I	波状口縁、波頂部口唇に刻目(直痕)、沈線→LR→沈線充填	
35	11	FK	BE-43	III層上面	深鉢	口縁	十棱内 I	口唇気み、波状口縁、多重沈線、刺突	
35	12	FK	BE-42	I・II層	深鉢	口縁	十棱内 I	波状口縁、多重沈線	
35	13	FK	BE-41	II層	壺	肩部	十棱内 I	多重沈線	
35	14	FK	BL-E-37-38	I層	深鉢	口縁～肩部	晩期中葉	口唇:刻目、頸部:ミガキ、肩部:RL横、斜回	
35	15	FK	BL-E-32-33	III層上面	注口	口縁	晩期中葉	口縁:沈線、頸部:沈線、沈線間に刻目、満巻き状文、肩部:入り組み文、LR充填	
35	16	FK	BK-L-34	III層上面	浅鉢	完形	晩期中葉	[計測値] 口径:12.5cm、底径:6.0cm、器高:5.2cm。 [文様] 口唇:沈線、口縁:4単立形突起、山形突起の内脇にB型羽状。口唇:刻目、沈線、肩部:井結合東の羽状 (RL・LR横回)、底部:上平底状、沈線	P-2
35	17	FK	BK-L-34	III層上面	浅鉢	完形	晩期中葉	[計測値] 口径12.9cm、底径5.4cm、器高4.4cm。 [文様] LR回転、底部:丸底状	
35	18	FK	BJ-32	III層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口唇:内側に沈線、刻目、口縁:沈線、肩部:LR縦回、點彫	
35	19	FK	BK-27	II層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口唇部に彌り込み、沈線、LR充填	
35	20	FK	BJ-33	I層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口唇に雲形文状の彌り込み、沈線、調文(原体不明)充填	
35	21	FK	BJ-33	II層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口唇に雲形文状の彌り込み、沈線、LR充填	
35	22	FK	BK-28	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇に雲形文状の彌り込み、刺突、沈線、調文回転	
35	23	FK	BL-30	II層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口縁に沿った平行沈線間に3個単位となった刻目、雲形文彫(彫去)、BL-33と接合	
36	1	FK	BJ-31	I層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口唇に沿った平行沈線間に刻目、沈線、雲形文?、LR充填	
36	2	FK	BJ-33	I層	浅鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、口縁:沈線、肩部:RL横回	
36	3	FK	BK-34	I層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、内面に沈線、頸部:沈線。肩部:RL横回	
36	4	FK	BJ-28	I層	鉢	口縁	晩期中葉	口縁:突起、内面に沈線、頸部:ミガキ、沈線、頸部屈曲部:沈線、肩部:調文充填	
36	5	FK	BK-28	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、頸部:ミガキ、沈線、屈曲部に貼彫、肩部:沈線	
36	6	FK	BL-32	III層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、内面に沈線、頸部:沈線、頸部屈曲部:貼彫、沈線、肩部:沈線、LR充填	
36	7	FK	BK-34	II・III層	鉢	口縁	晩期中葉	口縁:ミガキ、頸部屈曲部:貼彫、沈線、肩部:沈線、LR充填	
36	8	FK	BL-35	II層	鉢	肩部	晩期中葉	頸部:ミガキ、頭部屈曲部:貼彫、沈線、肩部:RL横回	
36	9	FK	BL-30	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:沈線、口縁:山形突起。内面に沈線、頸部:沈線、肩部:RL横回	
36	10	FK	BJ-33	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、口縁:突起。頸部:ミガキ。肩部:RL横・縱回・切羽状	
36	11	FK	BF-34	I層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻み、口縁:沈線、肩部:RL横回	
36	12	FK	BJ-32	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、内面に沈線、頸部:沈線、ミガキ、肩部:RL横回	
36	13	FK	BL-E-32-33	III層上面	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:裝飾的な彌り込み、頸部:ミガキ、肩部:磨消彫(抜抜き)	
36	14	FK	BK-33	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口縁:突起、内面に沈線。頸部:ミガキ、沈線、肩部:沈線、LR充填	
36	15	FK	BL-32	II層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:刻目、内面に沈線。頸部:ミガキ、肩部:沈線、雲形文?、LR充填	
36	16	FK	BL-E-32-33	III層	鉢	口縁	晩期中葉	口唇:突起、頸部:ミガキ、肩部:入組文、LR、充填	
36	17	FK	BL-33	III層	深鉢	口縁	中期前半	波状口縁、沈線(平行)、單絡2縦回	
36	18	FK	BL-32	II層	鉢	口縁	中期後半	波状口縁、結束1種羽状	
36	19	FK	BL-32	II層	深鉢	略尖形	中期～後初	口径19.5cm、器高(40cm)、LR回転、BL-33、34、BJ-33、34、BK-34、35と接合 沈線、單絡2縦回	
36	20	FK	BF-44	I・II層	鉢	口縁	後期前半	波状口縁、單絡2縦回	
36	21	FK	BE-43	III層上面	深鉢	口縁	後期前半	波状口縁、單絡2縦回	
36	22	FK	BE-45	III層上面	深鉢	口縁	後期前半	口径(23.2cm)、沈線(平行)、單絡2縦回	
36	23	FK	BE-42	I・II層	深鉢	口縁	後期前半	小波状口縁、波頂部に気み、沈線、單絡2縦回	
36	24	FK	BJ-28	II層	深鉢	口縁	後期前半	口唇刻み、單絡5縦回	
36	25	FK	BL-32	III層	鉢	口縁	後期前半	口唇:刻目、口縁:沈線(平行)、肩部:沈線(網目状)	
36	26	FK	BE-42	III層上面	深鉢	口縁	後期前半	波状口縁、波頂部に刻み?口縁:沈線、肩部:LR横回	
36	27	FK	BL-E-32-33	III層上面	深鉢	口縁	後期前半	口唇に沿って刺突、頸部:ミガキ、沈線、肩部:RL横回	
36	28	FK	BK-28	II層	鉢	肩部	後期前半	E縞を横位に側E、LR横回	
36	29	FK	BE-41	III層上面	深鉢	口縁	後期前半	口唇:一部に側Eの側E、LR横回	
36	30	FK	BF-42	I・II層	鉢	口縁	後期	L縦回転、外傾接合	

図番	区	出土地点	層位	器種	部位	時期	特徴
37	1	FIK	BT-35	IIIb層	深鉢	口縁	後期後半 LR横回
37	2	FIK	BL-34	II層	深鉢	胴部	後期 底径9.6cm, RL斜・横回
37	3	FIK	BT-33	IIIb層	深鉢	口縁	後期後半 RL横回
44	1	FIK	BT41V	7上層	深鉢	胴部	早期中葉 貝殻模様王冠文
44	2	FIK	BG-34	I層	深鉢	口縁	前期初頭 口唇划目、翼原体を用いた羽状網文→沈線、鐵捲混入
44	3	FIK	BB-36	6層	深鉢	口縁	中末～後初 波状口縁、沈線、RL充填(瓶回転)、内面に鱗状突起
44	4	FIK	BC-36	8層	深鉢	口縁	中末～後初 輪状突起、突起に沿って刺突
44	5	FIK	BB-37	7下層	深鉢	口縁	中末～後初 口縁に沿ってRL側圧、沈線、沈線間に刺突
44	6	FIK	BC-36	6層	深鉢	口縁	後期初頭 口縁からS字状に垂下している沈帶、RL側圧
44	7	FIK	BC-35	8層	深鉢	胴部	後期初頭 無文地に隆帯、隆帯上回転
44	8	FIK	BF-33	6層	深鉢	口縁	十櫓内 I 口唇: 鎏文回転、口縁: 小波状口縁、波頂部に突起、突起部間に刺突、外面: LR回転、沈線、内面: 沈線、 LR充填、刺突
44	9	FIK	BF-33	8層	深鉢	口縁	十櫓内 I 小波状口縁、隆沈線
44	10	FIK	BE-35	6層	深鉢	口縁	十櫓内 I 小波状口縁、波頂部に刻み、沈線、刺突、LR充填
44	11	FIK	BA-37	7中層	深鉢	胴部	十櫓内 I 多刺沈線
44	12	FIK	BT35V	8層	深鉢	口縁	後期後業 口縁肥厚、沈線、刻目、LR充填
44	13	FIK	BP-32	8層	深鉢	口縁	後期後業 口縁肥厚、沈線、刻目、LR充填
44	14	FIK	BF-33	7上層	深鉢	胴部	後期後業 貼り瘤、沈線(ゲラガ)、LR・RL充填
44	15	FIK	BT41V	8層	深鉢	胴部	後期後業 沈線、異原体(LR・RL)による羽状網文充填
44	16	FIK	BT35V	8層	口縁	晚期中葉 口縁: 突起、羊齒状文、267と同一	
44	17	FIK	BF-32	8層	口縁?	胴部	晚期中葉 半曲状文、249と同一
44	18	FIK	BF-32	8層	鉢	口縁	口唇: 刻目、内面に沈線、口縁: けV字、頭部: 隆帯、隆帯上刺突、胴部: LR回転→三叉状沈線
44	19	FIK	BE-33	8層	鉢	口縁	晚期中葉 口唇: 刻目、内間に沈線、頭部: 沈線、沈線間に刻目、胴部: 丸充填?
44	20	FIK	BD-34	8層	鉢	口縁	晚期中葉 刻目、沈線、LR充填
44	21	FIK	BC-36	8層	鉢	口縁	晚期中葉 口縁: 型突起、内面に沈線、頭部: 沈線
44	22	FIK	BE-33	8層	鉢	口縁	晚期中葉 口唇: 刻目、内側に沈線。頭部: 沈線、入り組み文、LR充填
44	23	FIK	BC-36	8層	鉢	口縁	晚期中葉 口縁: 型突起、内面に沈線、頭部: LR横回
44	24	FIK	BE-35	7下層	鉢	口縁	晚期中葉 口唇: 刻目、沈線、頭部: 沈線、胴部: RL横回
44	25	FIK	BF-32	8層	鉢	口縁	晚期中葉 口唇: 平行沈線間に刻目、頭部: LR横回
44	26	FIK	BD-35	8層	浅鉢	胴部	晚期中葉 沈線、LR横回
44	27	FIK	BT35V	耕土層	鉢	口縁	晚期末葉 口唇: 沈線、口縁: 突起、突起部刺突、頭部: LR回転→沈線(変形矢張状)
44	28	FIK	BF-32	8層	深鉢	口縁	後期初頭 口縁: 無文、頭部: 沈線、胴部: RL横・縱回→羽状網文
44	29	FIK	BT41V	8層	深鉢	口縁	後期初頭 口縁: 無文、頭部: L側圧(2条)、胴部: L横回
44	30	FIK	BD-35	8層	深鉢	口縁	後期初頭 口縁: 無文、頭部: L側圧(1条)、胴部: RL横回
44	31	FIK	BC-36	8層	深鉢	口縁	後期初頭 口縁: 無文、頭部: RL横回
44	32	FIK	BE-35	7上層	鉢	口縁	後期前半 LR横回
44	33	FIK	BA-37	8層	深鉢	口縁	後・晚期 LR横回
44	34	FIK	BT41V	8層	深鉢	口縁	後・晚期 RL横回
44	35	FIK	BB-36	8層	深鉢	口縁	後・晚期 RL(0段多条)横回
44	36	FIK	BE-38	8層	深鉢	口縁	後・晚期 RL斜回
44	37	FIK	BF-34	7上層	深鉢	口縁	後・晚期 RL(0段多条)横回
44	38	FIK	BD-34	8層	深鉢	口縁	後・晚期 LR横回
44	39	FIK	BC-35	8層	深鉢	口縁	後・晚期 LR横回
44	40	FIK	BE-33	8層	深鉢	口縁	後・晚期 LR横・斜回
44	41	FIK	BE-33	8層	深鉢	口縁	後・晚期 LR横回
44	42	FIK	BE-33	7中層	深鉢	口縁	後・晚期 RL(0段多条)横回
44	43	FIK	BA-37	7中層	台付上置	脚部	後期～晚期 けV字、LR、内面けV字頸著
44	44	FIK	BT31V	6層	浅鉢	底部	中～晚期 沈線、LR横回、底面けV字
49	1	FIK	AW-43	IV層	深鉢	口縁	早期末葉～ 前期初頭 RL横回、鐵捲混入
49	2	FIK	AX-42	IV層	深鉢	口縁	早期末葉～ 前期初頭 LR(直前段反撃り?)、鐵捲混入
49	3	FIK	AW-43	IV層	深鉢	口縁	早期末葉～ 前期初頭 付加条、鐵捲混入
49	4	FIK	AX-43	IV層	深鉢	口縁～ 胴部	口唇: 刻目、口縁: 単絡5横回、胴部: 付加条、 胎土: 鐵捲混入

図 番	区	出土地点	層位	器種	部位	時期	特徴		P-1
							長さ	幅	
49	5	FIK	AW-43	III層上面	深鉢	口縁	早期木葉～ 前期初頭	付加条、織維混入	
49	6	FIK	AW-42	IV 層	深鉢	口縁	早期木葉～ 前期初頭	IR・LRの異原体による羽状、織維混入、AW-42と接合	
49	7	FIK	AW-43	IV 層	深鉢	口縁	早期木葉～ 前期初頭	結束1羽状、織維混入	
49	8	FIK	AW-42	II 層	深鉢	口縁	早期木葉～ 前期初頭	羽状(結束？摩滅のため詳細不明)、織維混入	
49	9	FIK	AW-43	IV 層	深鉢	胴部	早期木葉～ 前期初頭	結束1羽状、織維混入	
49	10	FIK	AW-42	II 層	深鉢	胴部	早期木葉～ 前期初頭	尖底、IR・LRの異原体による羽状、織維混入、尖底	
49	11	FIK	AV-43	V～VI層	深鉢	底部	早期木葉～ 前期初頭	LR横回、織維混入。AW-43、AY-42、AY-43と接合	
49	12	FIK	AN-43	V 层	深鉢	口縁	中末～後初	沈線、刺突	
49	13	FIK	AN-44	IV 层	鉢	口縁	十樓内 I	沈線	
49	14	FIK	AN-43	II 层	鉢	口縁	十樓内 I	沈線	
49	15	FIK	AV-43	VI 层	鉢	口縁	十樓内 I	沈線、LR横回	
49	16	FIK	AW-42	II 层	深鉢	胴部	十樓内 I	沈線、LR充填、單里I縫回	
49	17	FIK	AY-43	V 层	鉢	口縁	後期前半	LR縫回	
49	18	FIK	AW-43	IV 层	深鉢	口縁	後期前半	單里 I 縫回	
49	19	FIK	BA-44	IV 层	台付上器	底部	晚期	沈線、IR斜回	
52	8	FIK	水田玉ア ルミニウム器 類集合群	IV 层	深鉢	胴部	前期初頭	異原体を用いた羽状纏文、織維混入	P-1
53	1	FIK	AY-40	7 层	深鉢	口縁	早期中葉	口唇刻み、貝殻腹縫押し引き	
53	2	FIK	BB-41	7 层相当	深鉢	胴部	早期中葉	貝殻腹縫压痕文、	
53	3	FIK	BA-40	7 层相当	深鉢	胴部	早期中葉	貝殻腹縫压痕文	
53	4	FIK	BA-41	2 层	深鉢	口縁	中期中葉～ 後葉	口縁に縦帯、縦帶上に刺突、沈線、IR?(原体不明) 回転	
53	5	FIK	AY-40	6 层	深鉢	口縁	後期初頭	口縫：折り返し状口縁、IR横回→沈線、頭部：ヨリキ、 胴部：IR横回	
53	6	FIK	BB-42	4 层	深鉢	口縁	後期前葉 十樓内 I	口縫：小波状口縁、IR地文、頭部：沈線、IR充填、 ヨリキ、胴部：IR横回	
53	7	FIK	AY-41	4 层	深鉢	口縁	後期初頭	口縫：刻み、口縁：沈線、頭部：縫帶、縫帶上刻み、 胴部：沈線、調文回船	
53	8	FIK	BB-40	6 层	鉢	口縁	後期中葉	口縫：刻目、内面に沈線、頭部：ヨリキ、扭曲部に沈線、 突起、胴部：IR横回	
53	9	FIK	BA-40	6 层	深鉢	口縁	後・晚期	IR横回	
53	10	FIK	BA-39	6 层	深鉢	口縁	後・晚期	口縫面上指頭压痕、IR横回	
53	11	FIK	BA-38	6 层	深鉢	口縁	後・晚期	IR横回	
53	12	FIK	BB-41	6 层	深鉢	口縁	後・晚期	IR横回	
53	13	FIK	BA-40	6 层	深鉢	口縁	後・晚期	IR斜回→縫毛彫文が突出	

石器観察表

図版	地区	出土位置	層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
7-10	AJK	SI-46	脇り方	石 砕	(21.4)	(13.4)	4.5	1.1	玉 麻	基部欠損。S-7
7-11	AJK	SI-46	床 面	楔形石器	36.0	22.0	13.0	9.8	玉 麻	S-4
7-12	AJK	SI-46	床 直	打製石斧	(109.0)	(58.0)	20.0	155.6	安山岩	S-2
7-13	AJK	SI-46	床 面	打製石斧	(120.0)	(79.0)	24.0	354.3	粗粒玄	S-1
7-14	AJK	SI-46	床 面	敲削器	(83.0)	63.0	54.0	376.6	凝灰岩	S-5
13-1	AJK	CG-49	III 層	石 砕	(33.0)	19.1	3.4	1.7	珪 真	凹基無茎。
13-2	AJK	CG-48	I 层	石 砕	(60.0)	41.1	8.2	14.5	珪 真	先端部欠損。
13-3	AJK	CH-48	III 层	削器類	28.6	21.9	7.3	3.8	珪 真	被熱により上半部欠損。
13-4	AJK	CG-57	I 层	二次加工剝片	24.0	20.0	9.0	3.5	珪 真	
13-5	AJK	CD-61	I 层	二次加工剝片	46.0	44.0	19.0	26.8	珪 真	
13-6	AJK	CF-58	I 层	二次加工剝片	35.0	45.0	12.0	15.1	珪 真	
13-7	AJK	CG-58	IVa層	二次加工剝片	40.0	27.0	13.0	12.3	珪 真	
13-8	AJK	CD-61	III 层	打製石斧	199.0	101.0	64.0	1143.8	セン岩	
13-9	AJK	CF-59	IV 层	打製石斧	(64.0)	(53.0)	(15.0)	59.5	ヒン岩	
13-10	AJK	CF-60	IVa層	磨 石	(43.0)	(43.0)	(24.0)	34.5	砂 岩	
13-11	AJK	CG-58	IVa層	敲削器	(64.0)	(84.0)	(47.0)	245.7	安山岩	
13-14	BJK	SI-38	堆積土	磨 石	(103.0)	(63.0)	(50.0)	198.4	砂 岩	

図版	地区	出土位置	層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
17-2	B区	SI-44	床 直	削器類	21.0	27.0	8.0	3.6	珪 真	S-8
17-3	B区	SI-44	床 直	削器類	50.0	44.0	18.0	29.1	珪 真	S-1
17-4	B区	SI-44	床 直	二次加工剥片	55.0	30.0	15.0	25.0	珪 真	S-5
17-5	B区	SI-44	床 直	敲磨器	165.0	73.0	70.0	1130.2	粗粒玄	S-6
19-6	B区	SK-81	底 面	敲磨器	131.0	77.0	65.0	820.5	砂 岩	S-1
19-7	B区	SK-81	底 面	敲 石	127.0	59.0	25.0	229.9	砂 岩	
22-1	B区	Pit1	I 層	磨 石	195.0	73.0	73.0	946.9	砂 岩	S-2
22-2	B区	Pit1	I 层	敲磨器	(162.0)	76.0	71.0	1056.9	砂 岩	S-1
24-1	B区	BV-61	I 层	石 砥	21.6	16.1	5.2	1.4	珪 真	未製品。
24-2	B区	表探	-	石 砥	45.5	14.9	6.2	4.6	珪 真	砸型。
24-3	B区	BQ-65	IVa層	石 起	63.3	19.4	6.6	8.3	珪 真	砸型。
24-4	B区	BQ-66	I 层	石 砥	(32.6)	(14.8)	6.0	3.0	珪 真	砸型, 基部欠損。
24-5	B区	BQ-65	I 层	石 筒	28.4	21.9	7.3	5.1	珪 真	基部欠損, 被熱。
24-6	B区	BQ-65	IVa層	削器類	40.6	21.9	8.2	7.5	珪 真	
24-7	B区	BQ-65	I 层	削器類	62.3	34.9	16.7	36.0	珪 真	
24-8	B区	BV-59	I 层	二次加工剥片	27.0	26.0	10.0	6.0	珪 真	
24-9	B区	BQ-65	IVa層	二次加工剥片	41.0	37.0	13.0	20.5	珪 真	
24-10	B区	BQ-66	III 层	打製石斧	(39.0)	(73.0)	(24.0)	82.4	粗粒玄	
24-11	B区	BQ-65	IVa層	打製石斧	(78.0)	(93.0)	(32.0)	225.5	粗粒玄	
24-12	B区	BQ-66	III 层	打製石斧	122.0	74.0	27.0	299.3	粗粒玄	
24-13	B区	BQ-65	IVa層	敲磨器	181.0	82.0	75.0	1263.2	砂 岩	
24-14	B区	BO-64	I 层	石棒?	(120.0)	(28.0)	12.0	51.4	真 岩	
26-10	C区	7号	I 层	磨 石	(92.0)	(95.0)	(53.0)	488.5	安山岩	
28-4	F区	SI-1	覆土下位	石 砥	50.0	14.0	5.5	2.4	珪 真	凸基有茎。黒色付着物(?)付着。完形。
28-5	F区	SI-1	覆土上位	石 砥	37.0	10.0	6.0	2.3	珪 真	尖基。完形。
32-13	F区	SK-1	最下層	石 槍	133.0	28.0	9.0	30.8	珪 真	先端をわざかに欠損。
32-14	F区	SK-1	覆 土	加工繩	87.0	80.0	20.0	200.0	チャート	石鍛未製品?
32-17	F区	SK-2	覆 土	石 砥	(16.0)	15.0	3.0	0.5	珪 真	平基無茎。先端部欠損。
38-1	F区	BJ-33	II 层	石 砥	(15.0)	14.0	3.0	0.4	珪 真	圓基無茎。先端部欠損。
38-2	F区	BJ~1-29-30	II 层	石 砥	21.8	14.7	3.3	0.8	玉髓住	圓基無茎。完形。
38-3	F区	BJ~K-32-33	II 层	石 砥	27.8	29.3	3.5	1.5	珪 真	平基無茎。完形。
38-4	F区	BH-32	廢 土	石 砥	(19.0)	19.0	4.0	1.3	珪 真	平基無茎。先端部の欠損部分に再加工。
38-5	F区	BJ-K-31	I 层	石 砥	(12.2)	10.1	3.0	0.4	珪 真	凸基有茎。先端部。茎部欠損。
38-6	F区	BJ-33	II 层	石 砥	(18.0)	10.0	3.0	0.4	珪 真	凸基有茎。先端部欠損。
38-7	F区	BJ-K-31	I 层	石 砥	(19.7)	13.3	3.6	0.8	玉髓住	凸基有茎。完形。
38-8	F区	BJ-K-31	I 层	石 砥	(20.0)	15.1	3.5	0.8	珪 真	平基有茎。先端部欠損。
38-9	F区	BJ-35	I 层	石 砥	(19.0)	15.0	4.0	1.0	珪 真	平基無茎。先端部に衝撃剝離。茎部欠損。
38-10	F区	BJ-23	I 层	石 砥	27.0	16.0	6.0	1.0	珪 真	凸基有茎。完形。
38-11	F区	BJ~K-33	II 层	石 砥	27.5	13.2	5.0	1.4	珪 真	凸基有茎。完形。アスファルト付着。
38-12	F区	BE-46	I-II 层	石 砥	(27.0)	12.0	6.0	1.4	玉髓住	凸基有茎。
38-13	F区	BJ-33	II 层	石 砥	32.0	13.0	5.0	1.8	珪 真	凸基有茎。
38-14	F区	BL-14	II 层	石 砥	32.0	14.0	6.0	1.9	珪 真	凸基有茎。完形。
38-15	F区	BJ-36	III 层	石 砥	(37.0)	14.0	7.0	3.2	珪 真	凸基有茎。先端部と茎部を欠損。
38-16	F区	BE-45	III層上面	石 砥	(43.0)	18.0	6.0	3.3	珪 真	凸基有茎。先端部に衝撃剝離。
38-17	F区	BF-44	II 层	石 砥	(32.0)	(14.0)	4.0	1.2	珪 真	尖頭部破片。
38-18	F区	BJ-37	I 层	石 砥	34.2	14.8	5.2	2.3	珪 真	円基。完形。
38-19	F区	BJ-35	I 层	石 砥	44.2	17.1	5.0	3.4	珪 真	円基。完形。
38-20	F区	BE-42	I-II 层	石 砥	32.0	17.0	8.0	3.6	珪 真	石鍛未製品。粗雑な剥離。
38-21	F区	BJ-33	I 层	石 槍	(31.0)	(21.0)	16.0	5.9	珪 真	破損品。
38-22	F区	BK-33	I 层	石 槍	57.0	19.0	13.0	11.5	珪 真	大きくて粗雑な剥離痕。木製品?。
38-23	F区	BJ-33	III 层	石 底	(32.0)	20.0	5.0	3.0	珪 真	粘原型。先端部欠損。
38-24	F区	BE-45	III 层	削 器	(28.0)	22.0	7.0	3.7	珪 真	破損品。石底の可能性あり。
38-25	F区	BF-40	III層上面	削 器	47.0	72.0	15.0	38.1	珪 真	片面に連続した浅型調査。
38-26	F区	BJ-36	V 层	削 器	51.0	29.0	11.0	13.7	珪 真	右側縁に急斜度調整。
38-27	F区	BK-32	IIIb層	削 器	(37.0)	38.0	6.0	9.4	珪 真	裏側左側縁に光沢痕。この部分の刃部摩耗。
38-28	F区	BK-34	III 层	削 器	42.0	26.0	11.0	8.5	珪 真	内溝部分の刃縁に摩耗痕。
38-29	F区	BF-41	III層上面	削 器	65.0	42.0	10.0	29.8	珪 真	裏面は主に急斜度調整。
38-30	F区	BI-32	IVb層	削 器	78.0	36.0	10.0	21.6	珪 真	裏面先端付近に弱い光沢痕。

図版	地区	出土位置	層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
38-31	F区	BI-37	II・III層	削器	66.0	47.0	13.0	34.1	珪 石	下側面を両面加工 (打面調整削離技法?)。
38-32	F区	BI-1-32-34	II 層	削器	29.0	16.0	5.0	2.9	珪 石	スクレーパーの一部
39-1	F区	BI-32	IVb層	削器	88.0	47.0	12.0	53.1	頁 岩	表皮破片の側縁を加工。
39-2	F区	BG-43	III層上面	磨製石斧	(79.0)	48.0	33.0	197.7	粗粒玄	刃頭欠損。全体に敲打痕。
39-3	F区	AW-43	III 層	磨製石斧	(82.0)	45.0	27.0	165.3	粗粒玄	基部欠損。縦斧。
39-4	F区	BP-44	I・D層 III層上面	磨製石斧	144.0	42.0	27.0	249.5	ひん岩	基部IとD・刃部2に割れていたものが合体。全体に敲打痕。
39-5	F区	BP-44	III層上面	打製石斧	125.0	97.0	18.0	351.0	片岩	板状筋理を素材。周縁を整形加工。
39-6	F区	BE-42	I・II 層	打製石斧	145.0	85.0	29.0	491.9	安山岩	片面に原石面を残す。
39-7	F区	BI-32	IVb層	磨 石	119.0	66.0	49.0	494.2	粗粒玄	一側縁にやや広い磨痕。
39-8	F区	BI-35	V 層	磨 石	(111.0)	65.0	57.0	567.4	安山岩	一側縁に広い敲打痕。
39-9	F区	BJ-30	IIIb層	磨 石	148.0	91.0	46.0	924.9	砂 岩	側縁に磨痕。機能面はざつつく。
39-10	F区	BI-32	IVb層	磨 石	147.0	81.0	53.0	784.2	砂 岩	一側縁に広い磨痕。
39-11	F区	BI-32	III層	磨 石	137.0	86.0	45.0	738.1	砂 岩	一側縁に狭い磨痕。
40-1	F区	BI-33	IVb層	磨 石	160.0	68.0	44.0	663.0	砂 岩	扁平錐形材。片側面に広い磨痕。
40-2	F区	BI-32	IVb層	鐵 石	152.0	72.0	58.0	768.8	砂 岩	一側縁に敲打痕。
40-3	F区	BI-33	VIa層	鐵 石	146.0	75.0	54.0	786.7	砂 岩	扁平錐形材、両側縁に敲打痕。
40-4	F区	BI-32	IVb層	鐵 石	202.0	91.0	55.0	1264.2	砂 岩	棒状錐形材で、端部に強い敲打痕。
40-5	F区	BK-34	II 層	凹 石	236.0	45.0	29.0	504.4	頁 岩	両面は敲打整形、同孔2で敲打痕。
40-6	F区	BI-32	V 层	凹 石	188.0	65.0	35.0	532.6	砂 岩	側縁に磨痕。両面にあげた状の凹孔。
40-7	F区	BI-32	IVb層	凹 石	146.0	72.0	35.0	507.2	砂 岩	扁平錐形材。両面に凹孔。
41-1	F区	BJ-35	II 層	半円状扁平 打製石器	(109.0)	93.0	18.0	204.3	安山岩	折れ面に磨痕。
41-2	F区	BI-32	IVb層	石 鋸	76.0	57.0	20.0	91.1	チャート	錐片素材。抉りの度合いは低い。
41-3	F区	BI-31	IVa層	石 鋸	75.0	74.0	19.0	143.8	砂 岩	扁平錐形材。
41-4	F区	BI-31	IVa層	石 鋸	79.0	77.0	20.0	167.8	砂 岩	扁平錐形材。
41-5	F区	BH-33	I 層	石 鋸	64.0	62.0	24.0	126.6	砂 岩	扁平錐形材。
41-6	F区	BI-34	IIIb層	石 鋸	81.0	77.0	27.0	217.2	砂 岩	扁平錐形材。
41-7	F区	BK-28	IVb層	石 鋸	70.0	65.0	15.0	99.4	安山岩	扁平錐形材。
41-8	F区	BJ-34	IVa層	石 鋸	58.0	40.0	9.0	32.0	粘板岩	小形で薄い。
41-9	F区	BI-31	IVa層	石 鋸	94.0	66.0	16.0	164.6	砂 岩	扁平錐形材。
41-10	F区	BI-31	IVa層	石 鋸	78.0	51.0	17.0	101.8	砂 岩	扁平錐形材。
41-11	F区	BJ-34	IIIb層	石 鋸	49.0	39.0	8.0	22.3	粘板岩	小型で薄い。
41-12	F区	BI-31	IVa層	石 鋸	95.0	55.0	23.0	153.3	砂 岩	扁平錐形材。
41-13	F区	BI-33	IVb層	石 鋸	92.0	63.0	24.0	188.2	砂 岩	扁平錐形材。
41-14	F区	平場-37	不 明	鍛 造 器	130.0	92.0	15.0	315.0	頁 岩	扁平錐形材。両端を打ち欠き。
41-15	F区	BE-37	I 層	加工錐	81.0	49.0	18.0	86.0	頁 岩	扁平錐形材。石錐未製品?
42-1	F区	BI-32	IVa層	鍛 造 器	134.0	89.0	25.0	363.0	砂 岩	扁平錐形材。粗糙な剝離。
45-1	F区	沢-BF-32	8 層	石 錐	(16.0)	13.0	32.0	0.5	铁石英	平基無茎。先端部欠損。火ハジケ。
45-2	F区	沢-BI-24	不明	石 錐	22.0	17.0	5.0	1.2	珪 石	平基無茎。完形。
45-3	F区	沢-31v	8 层	石 錐	(39.0)	20.0	5.0	3.5	珪 石	円基。先端部欠損。右側縁にも小さな破缺。
45-4	F区	沢-BF-32	7 层	石 錐	(37.0)	13.0	5.5	1.9	珪 石	凸基有茎。先端部欠損。
45-5	F区	沢-BB-38	8 层	石 錐	(41.0)	13.0	7.0	2.9	珪 石	凸基有茎。先端部に衝撃剥離。アスファルト付着。
45-6	F区	沢-BD-35	6 层	石 錐	45.0	42.0	7.0	11.5	珪 石	平基。裏面下側縁に簡単な調整加工。
45-7	F区	沢-BB-37	6 层	トレンチ様石器	60.0	41.0	12.0	22.8	珪 石	刃部右端に弱い摩耗痕。
45-8	F区	沢-BD-34	8 层	二次加工剥片	48.0	44.0	15.0	22.3	珪 石	表面右上部に摩耗痕。
45-9	F区	沢-BG-35	6 层	磨製石斧	129.0	55.0	25.0	247.2	頁 岩	刃口二切れあり。縦斧。
45-10	F区	沢-BH-31	3 层	磨製石斧	(101.0)	54.0	32.0	209.4	砂 岩	刃部欠損。
45-11	F区	沢-31v	6 层	磨製石斧	(82.0)	49.0	13.0	87.8	頁 岩	基部欠損。
45-12	F区	沢-BG-34	1 层	磨 石	128.0	63.0	45.0	467.7	砂 岩	扁平錐形材。長軸側縁に広い磨痕。
45-13	F区	沢-BE-34	6 层	磨 石	132.0	75.0	45.0	516.7	砂 岩	側縁の一部磨り。両面に弱い敲打痕。
46-1	F区	沢-BE-33	8 层	磨 石	155.0	92.0	46.0	797.5	安山岩	下側縁に弱い磨痕。
46-2	F区	沢-BB-37	8 层	鐵 石	125.0	83.0	75.0	1144.4	粗粒玄	円錐状錐。一面に敲打痕。
46-3	F区	沢-BB-36	8 层	鐵 石	125.0	53.0	28.0	256.3	砂 岩	平頂面に弱い敲打痕。側縁の端部に敲打痕。
46-4	F区	沢-BB-38	7中・下層	敲 石	159.0	72.0	46.0	722.8	砂 岩	側縁にあげた状の敲打痕。
46-5	F区	沢-BE-33	7下層	北海道式石冠	(86.0)	(80.0)	84.0	800.7	安山岩	器体に帯状の敲打痕。底面は無加工。

図版	地区	出土位置	層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
46-6	F区	沢 3丁	7中層	石 鋸	62.0	50.0	14.0	60.3	真 岩	扁平鍛素材。抉りは弱い。
46-7	F区	沢 4丁	8 層	台 石	222.0	202.0	129.0	6380.0	安山岩	ややなめらか。
46-8	F区	沢 BE-32	7 中層	台 石	196.0	175.0	100.0	3900.0	安山岩	全体になめらか。
47-1	F区	沢 BE-34	7下層	台 石	244.0	215.0	16.0	10360.0	安山岩	完形。くぼんでいる部分はなめらか。
47-2	F区	沢 BE-33	8 層	戴 石	84.0	59.0	36.0	240.6	真 岩	ハンマー。握りやすい大きさの鍔。
49-21	F区	b KAK-43	III層	石 鋸	27.0	18.0	4.0	1.3	珪 岩	凹基無基。先端部ごくわずかに欠損。
49-22	F区	b KAK-42	II層	石 鋸	26.0	18.0	5.0	1.6	珪 岩	凹基無基。完形。
49-23	F区	b KAK-44	IV 層	石 鋸	(32.0)	16.0	7.0	2.5	珪 岩	凸基有基。先端部と茎部を欠損。
49-24	F区	b KAK-43	III層	石 鋸	33.0	9.0	3.0	0.5	珪 岩	尖基。完形。
49-25	F区	b 区	I 層	石 槍	(38.0)	(24.0)	14.0	11.7	珪 岩	基部片。
49-26	F区	b KAK-44	IV 層	石 長	55.0	25.0	9.0	7.3	珪 岩	完形。裏面左側縁に光沢?。
49-27	F区	b KAK-43	III層	石 長	66.0	25.0	9.0	10.3	珪 岩	完形。先端摩耗。
49-28	F区	b KAK-43	III層	石 長	53.0	19.0	6.0	5.0	珪 岩	先端部は両面加工。
50-1	F区	b KAK-42	IV 层	石 長	86.0	19.0	18.0	21.9	珪 岩	完形。裏面に光沢痕(刃縫摩耗)。
50-2	F区	b KAK-43	VII層	石 長	71.0	25.0	8.0	11.3	珪 岩	裏面に光沢痕。
50-3	F区	b KAK-44	IV 层	石 長	(58.0)	17.0	5.0	5.9	珪 岩	先端部欠損。松原型。
50-4	F区	b KAK-43	III層	石 長	45.0	28.0	10.0	6.1	珪 岩	完形。
50-5	F区	b KAK-43	II 层	石 長	69.0	47.0	14.0	18.5	珪 岩	完形。
50-6	F区	b KAK-43	VII層	削 刀	44.0	18.0	10.0	7.0	珪 岩	片面調整主体。
50-7	F区	b KAK-43	II 层	削 刀	87.0	50.0	10.0	34.9	珪 岩	表面側縁に浅い調整。
50-8	F区	b KAK-42	IV 层	削 刀	71.0	33.0	13.0	34.3	珪 岩	両面に粗く大きな剝離。先端に微細剝離。
50-9	F区	b KAK-43	IV 层	削 刀	84.0	75.0	20.0	101.6	珪 岩	縁辺の一帯に浅い調整。
50-10	F区	b 区	② 层	削 刀	64.0	46.0	16.0	46.5	珪 岩	裏面に深い急斜度の調整。
50-11	F区	b KAK-40	IV 层	磨 石	(96.0)	95.0	40.0	480.1	圓錐岩	扁平鍛素材。機能面は下底。
51-1	F区	b KAK-40	IV 层	打製石斧	121.0	98.0	20.0	194.3	片 岩	大形。短冊形。板状節理の板状鍛素材。
51-2	F区	b KAK-45	IV 层	鍛 造	115.0	85.0	24.0	334.4	砂 岩	扁平鍛素材。周縁整形加工。
51-3	F区	b KAK-43	III層	磨 石	152.0	63.0	43.0	530.2	砂 岩	一側縁にややざらつた磨痕。端部に弱い打痕。
51-4	F区	b KAK-43	IV 层	磨 石	124.0	85.0	76.0	1172.9	安山岩	球状磨石。大形。全面磨り。
51-5	F区	b 区	I 层	磨 石	150.0	84.0	56.0	843.2	真 岩	三角柱状縊。一側縁に深い磨痕。
51-6	F区	b KAK-43	III層	磨 石	(120.0)	54.0	41.0	350.4	砂 岩	小形の三角柱状縊。一側縁にやや広い磨痕。
51-7	F区	b KAK-44	VI 层	磨 石	210.0	89.0	102.0	1781.3	砂 岩	三角柱状の大形研。
51-8	F区	b KAK-43	IV 层	石 锤	94.0	82.0	30.0	274.9	真 岩	扁平鍛素材。
51-9	F区	b KAK-42	III層	鍛 造	172.0	115.0	27.0	905.3	砂 岩	大形。扁平鍛素材。両端打ち欠き。
52-1	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	打製石斧	120.0	66.0	27.0	242.2	砂 岩	S-7。鍛の剥片を素材。
52-2	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	打製石斧	134.0	73.0	27.0	355.6	砂 岩	S-3。鍛の剥片を素材。刃部摩耗?。
52-3	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	打製石斧	155.0	73.0	29.0	420.5	粗粒玄	S-5。風化した?鍛素材。
52-4	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	打製石斧	136.0	82.0	36.0	456.3	粗粒玄	S-2。鍛の剥片を素材。
52-5	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	打製石斧	136.0	82.0	27.0	404.6	粗粒玄	S-1。鍛の剥片を素材。
52-6	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	打製石斧	172.0	74.0	35.0	648.8	砂 岩	S-6。鍛の剥片を素材。基部を整形加工。
52-7	F区	b 区鑿石器 集中範囲	IV 层	磨 石	(87.0)	43.0	26.0	127.6	砂 岩	S-4。扁平鍛の側縁に磨痕。
53-14	F区	e[KA]A-40	4・5層	石 鋸	(24.0)	12.0	4.0	1.0	珪 岩	凸基有基。基と先端のごく一部欠損。
53-15	F区	e[KA]B-41	6 层	石 鋸	(21.0)	11.0	4.0	0.8	珪 岩	凸基有基。アスファルト付着。
53-16	F区	e[KA]	1 层	石 長	(41.0)	31.0	12.0	13.2	珪 岩	先端部欠損。松原型。
53-17	F区	e[KAY-41	3 层	石 長	67.0	28.0	10.0	11.3	珪 岩	完品。
53-18	F区	e[KA]	1 层	削 刀	66.0	53.0	10.0	35.1	珪 岩	下端は急角度の調整。
53-19	F区	e[KA] AV-41	b 层	大石平 型石鋤	28.0	17.0	9.0	3.7	珪 岩	完形。玉髓質珪質岩に似た石材。

石材で點記したのは以下のものである。

珪質岩→珪質 玉髓質珪質岩→玉髓質 粗粒玄武岩→粗粒玄

## 土製品・石製品観察表

## 【土製品】

図番号	名 称	地区	出土地	層	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	備 考
13-12	円盤状土製品	A区	CF-50	II	36.0	38.0	7.0	15.1	LR繩文
29-1	土偶	B区	SD-11	堆積土	(26.0)	(22.0)	(19.0)	11.0	刺突
32-15	ミニチュア土器	F区	SK1	最下層	3.7	2.5	2.7	23.3	鉢形。口縁をわずかに破損。沈線。貼瘤。
42-2	ミニチュア土器	F区	BE-46	III上	3.3	0.8	4.5	10.3	深鉢形。破損。4列の刺突文。底部はほとんどを欠損。内面に煤?。鐸形土製品に似る。
49-20	ミニチュア土器	F区	水田エリアb区 AX-43	II	—	3.2	—	—	深鉢形?。口縁部破損。沈線

図番号	名 称	地区	出土地	層	傘の大きさ (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	備 考
42-4	キノコ形土製品	F区	BE-43	III	3.9	2.2	13.1	柄(ヘタ)の部分欠損。傘の部分にガリ

図番号	名 称	地区	出土地	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
42-3	鐸形土製品	F区	BE-41	III上	3.7	2.7	0.4	11.3	完形。内面に煤の付着
42-5	不明	F区	BI-J-33・34	II	2.7	2.6	1.3	—	H10年出土。全体形は不明で、側面が面取りされていることから、少なくともこの部分は四角形。2個の乳房状の突起。無文研磨。
42-6	土鍤	F区	BI-K-32・33	II	5.5	1.6	0.5	15.7	管状。中央に貫通孔。内径5mm。H10年出土
47-3	環状土製品	F区	(大) 沢 BF-33	6	—	2.7	0.7	—	外径が7.5cm×10cm前後。内径が4×5cm前後の精円形と思われる。長方形の磨消溝文(L.R.)。突起列。刻目。器面に赤色顔料の付着。貝輪を模したものか。
		F区	(小) 水田エリア c 区 BB-40	6					

## 【石製品】

図番号	名称	地区	出土地	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考
32-16	不明	F区	SK-1	最下層	6.6	3.6	0.8	24.4	砂岩	破損。側縁はやや平ら。石剣?
42-7	軽石製品	F区	BE-43	III上	7.8	6.3	2.4	49.0	軽石	完形。圓形石錐に似た形状
42-8	円盤状石製品	F区	BE-46	I・II	6.2	5.9	1.1	51.2	粘板岩	一部欠損
42-9	円盤状石製品	F区	BK-30	I	4.7	4.6	1.2	34.9	頁岩	完形。周縁刀削し。
42-10	円盤状石製品	F区	BI-31	II	4.2	3.8	0.8	17.7	粘板岩	完形。周縁刀削し。
42-11	円盤状石製品	F区	BJ-33	I	3.4	3.0	0.7	7.4	粘板岩	完形
42-12	不明	F区	BK-33	I	4.2	3.0	0.8	16.3	粘板岩	破損



F区から路線全体を臨む（南西→）

写真1 調査区遠景



写真2 環状土製品



A区 東斜面全景（南→）



B区 西側全景（北→）



A区 北西侧全景（南東→）



B区 東側全景（北東→）



C区 全景（北西→）



D区 全景（東→）



E区 全景（東→）

写真3 A～E区全景

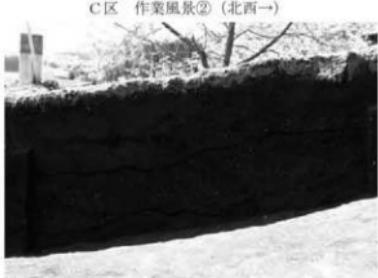
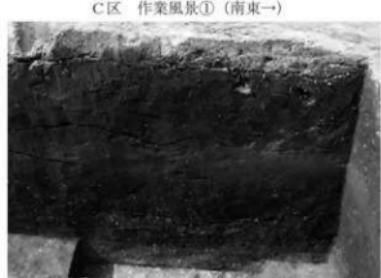
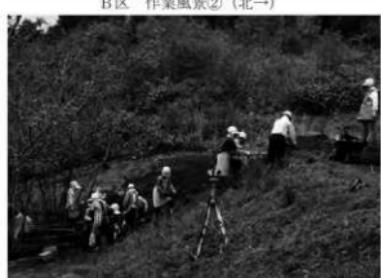


写真4 A～E区作業風景、基本層序



A区 第46号堅穴住居跡完掘（南東→）



A区 第46号堅穴住居跡土層（南→）



A区 第46号堅穴住居跡土坑1土層（東→）



A区 第46号堅穴住居跡炉土層（東→）



A区 第46号堅穴住居跡遺物出土状況（東→）

写真5 A区 堅穴住居跡

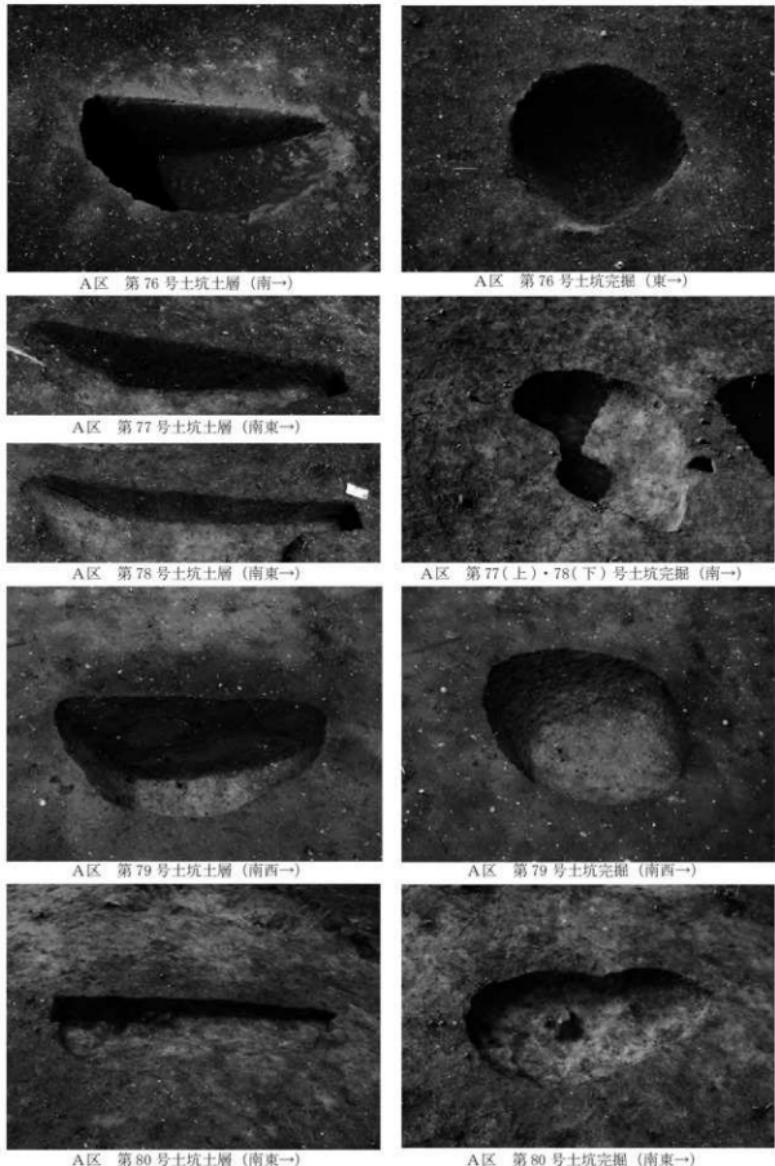


写真6 A区 土坑 (1)



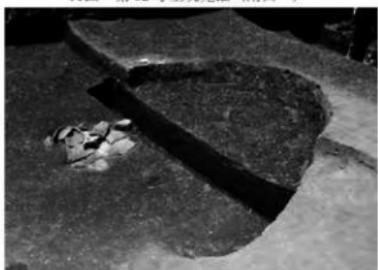
A区 第82号土坑土層（南東→）



A区 第82号土坑完掘（南西→）



A区 第82号土坑遺物出土状況①（南→）



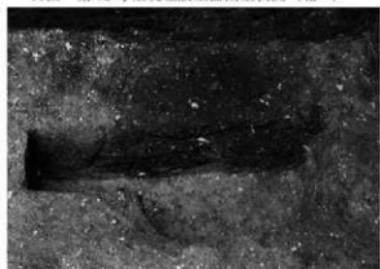
A区 第82号土坑遺物出土状況②（南東→）



A区 第82号土坑埋設土器出土状況（北→）



A区 第82号土坑埋設土器出土状況（南西→）



A区 第83号土坑土層（南→）



A区 第83号土坑完掘（南→）

写真7 A区 土坑（2）

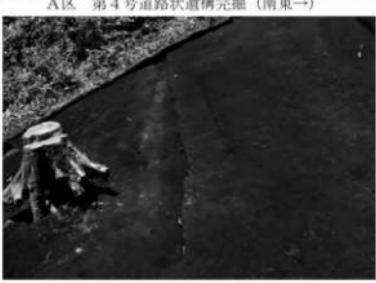
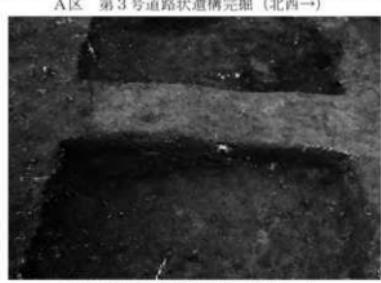
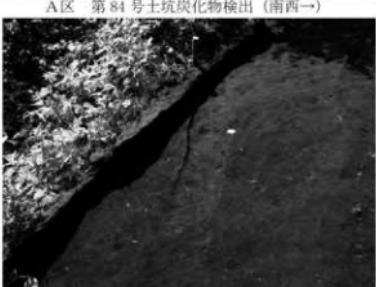
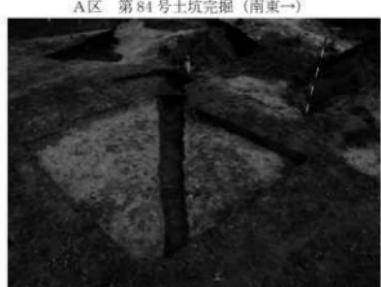
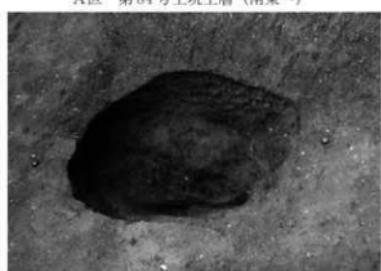


写真8 A区 土坑(3)・道路状遺構(1)



A区 第6号道路状遺構完掘（東→）



A区 第7号道路状遺構土層（東→）



A区 第7号道路状遺構検出（北西→）



A区 第8・9・10号道路状遺構完掘（北西→）



A区 第11号道路状遺構土層（南東→）



A区 第11号道路状遺構完掘（北西→）

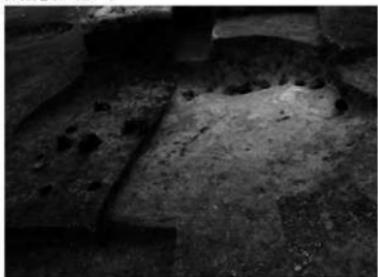
写真9 A区 道路状遺構（2）



B区 第29号竪穴住居跡発掘（北→）



B区 第29号竪穴住居跡土層（北→）



B区 第29号竪穴住居跡遺物出土状況（東→）

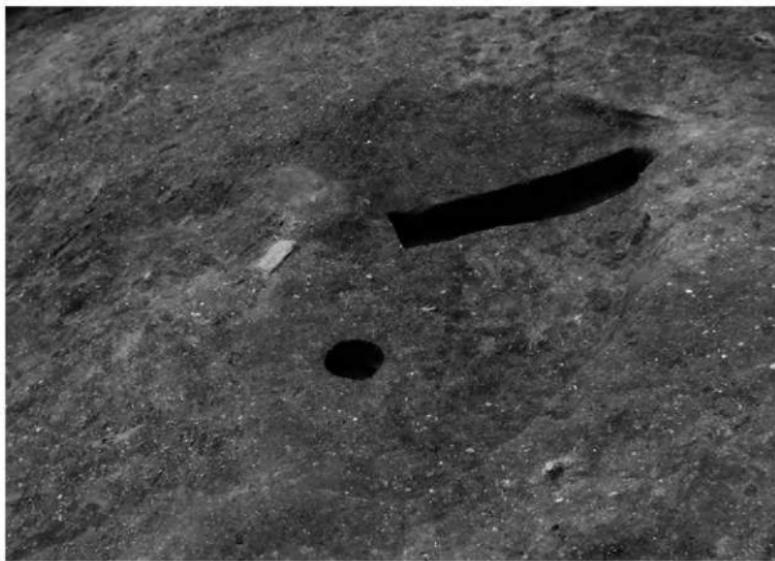


B区 第38号竪穴住居跡発掘（北→）



B区 第38号竪穴住居跡土層（北→）

写真10 B区 竪穴住居跡 (1)



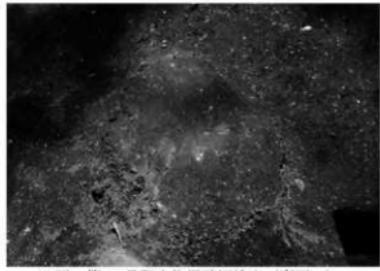
B区 第43号竪穴住居跡発掘（北→）



B区 第43号竪穴住居跡土層①（北→）



B区 第43号竪穴住居跡土層②（西→）



B区 第43号竪穴住居跡炉検出（南西→）



B区 第43号竪穴住居跡土層（北東→）

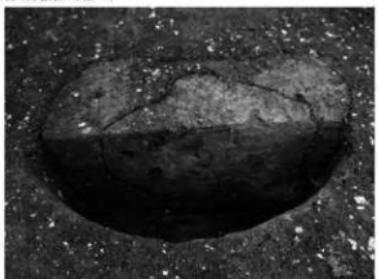
写真11 B区 竪穴住居跡（2）



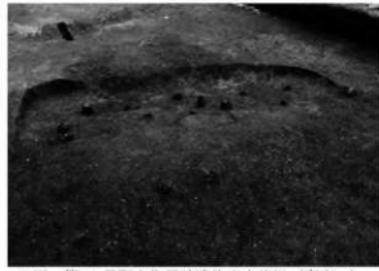
B区 第44号竪穴住居跡完掘（北→）



B区 第44号竪穴住居跡土層（南東→）



B区 第44号竪穴住居跡Pit1土層（東→）



B区 第44号竪穴住居跡遺物出土状況（南東→）



B区 第44号竪穴住居跡土層（南東→）

写真12 B区 竪穴住居跡（3）



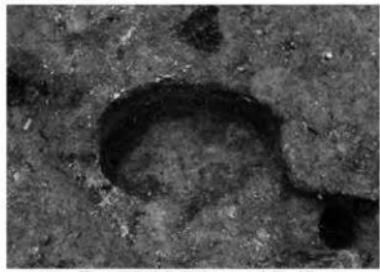
B区 第45号竪穴住居跡完掘（北東→）



B区 第45号竪穴住居跡土層（北→）



B区 第45号竪穴住居跡Pit 1土層（南→）



B区 第45号竪穴住居跡Pit 1完掘（北→）

写真13 B区 竪穴住居跡（4）



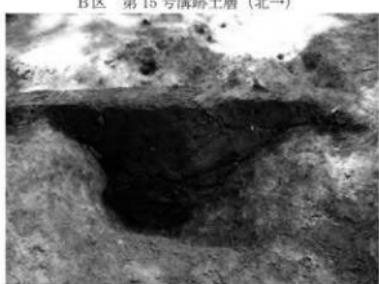
B区 第81号土坑完掘（北西→）



B区 第15号溝跡土層（北→）



B区 第14・16号溝跡完掘（北→）



B区 第14・16号溝跡土層（南東→）



B区 第14号溝跡出土状況（北→）



B区 第14号溝跡完掘（北西→）

写真14 B区 土坑、溝跡



C区 2 トレンチ完掘 (南西→)



C区 3 トレンチ完掘 (東→)



C区 4 トレンチ完掘 (東→)



C区 6 トレンチ完掘 (東→)



C区 12 トレンチ完掘 (南東→)



C区 9 トレンチ完掘 (南→)



D区 完掘 (東→)



E区 全景 (東→)

写真15 C・D・E区



調査区遠景（西→）



調査区遠景（東→）

写真16 F区遠景



水田エリア現況（西→）



平場エリア現況（南→）



斜面エリア現況（北東→）



斜面エリア作業風景（北→）



第1号竪穴住居跡周辺 遺物出土状況（南→）



第1号竪穴住居跡炉・第1号土器埋設遺構 検出(西→)



第1号竪穴住居跡炉 検出（西→）



第1号竪穴住居跡炉<sup>3</sup> 土層（西→）

写真17 F区 現況、竪穴住居跡



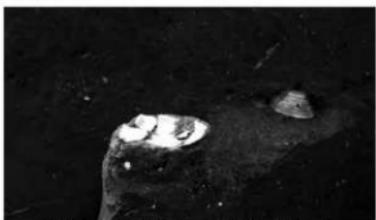
第1号土坑 土層（南西→）



第1号土坑 完掘（北東→）



第1号土坑 遺物出土状況（南東→）

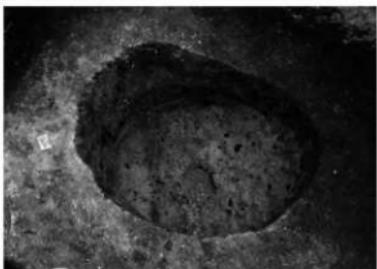


第1号土坑 遺物出土状況接写（南東→）

写真18 F区 土坑(1)



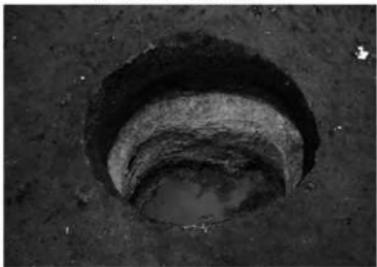
第2号土坑　土層（南西→）



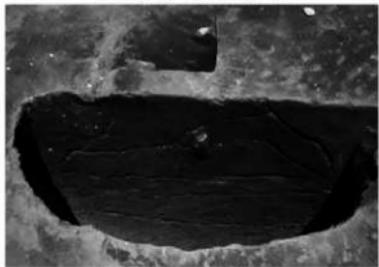
第2号土坑　完掘（南西→）



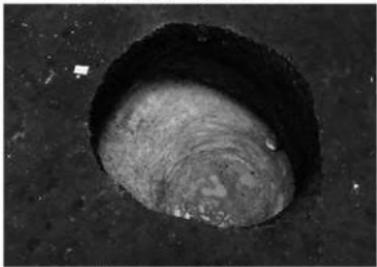
第3号土坑　土層（南西→）



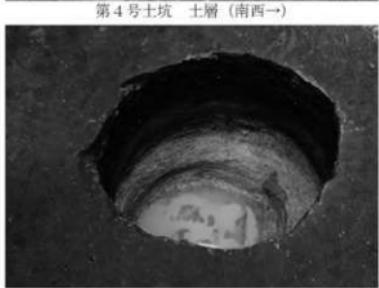
第3号土坑　完掘（南西→）



第4号土坑　土層（南西→）



第4号土坑　完掘（南西→）



第5号土坑　完掘（南→）

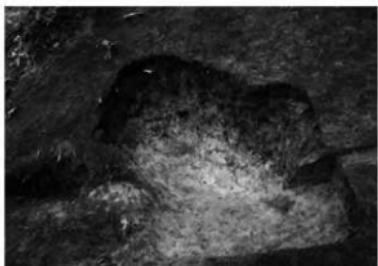


第6号土坑　完掘（東→）

写真19 F区　土坑(2)



第7号土坑 完掘（南→）



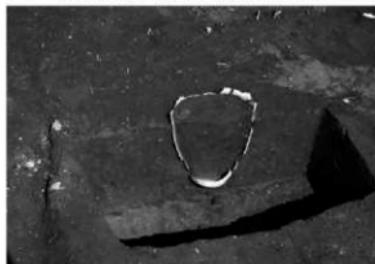
第8号土坑 完掘（北→）



第1号土器埋設遺構 検出（南西→）



第1号土器埋設遺構 断ち割り（西→）



第1号土器埋設遺構 土層（西→）



第2号土器埋設遺構 検出（西→）

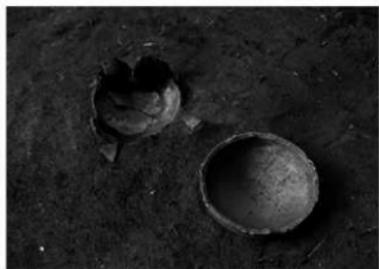


第2号土器埋設遺構 断ち割り（北西→）



第2号土器埋設遺構 土層（北西→）

写真20 F区 土坑(3)、土器埋設遺構



平成 22 年度調査 遺物出土状況（北→）



平成 22 年度調査 遺構検出状況（南→）



平成 22 年度調査 基本土層（西→）



平成 22 年度調査 V層 遺物出土状況（西→）



平場エリア V層面検出（南→）

写真21 F区 平場エリア(1)



平場エリア 基本土層（西→）



斜面エリア 基本土層（東→）



斜面エリア 1トレンチ土層（南→）



斜面エリア 5トレンチ土層（南→）



斜面エリア トレンチ完掘状況（東→）

写真22 F区 平場エリア(2)、斜面エリア



沼エリア 調査風景（1）（南西→）



沼エリア 調査風景（2）（南→）



沼エリア 調査風景（3）（東→）

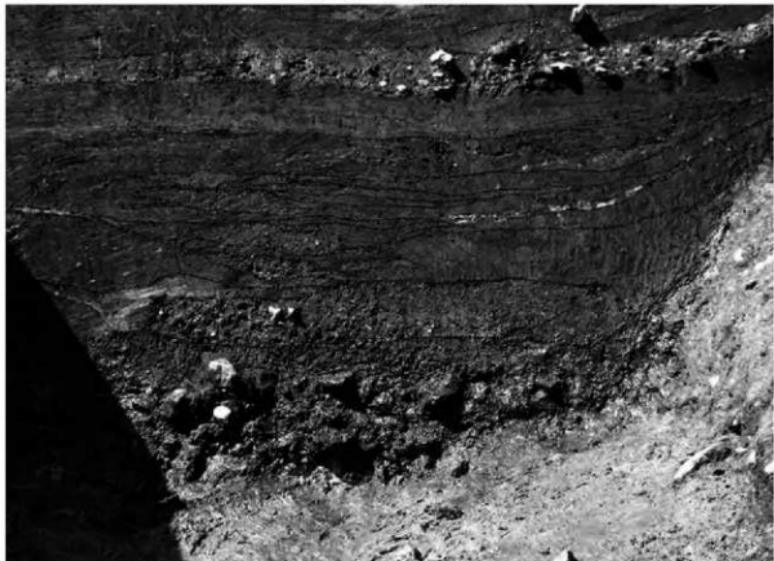


沼エリア B-tm 火山灰検出（西→）

写真23 F区 沼エリア（1）



沢エリア 土層（東→）



沢エリア 土層下位アップ（東→）

写真24 F区 沢エリア (2)



沢エリア 完掘（西→）



沢エリア 完掘（東→）

写真25 F区 沢エリア(3)

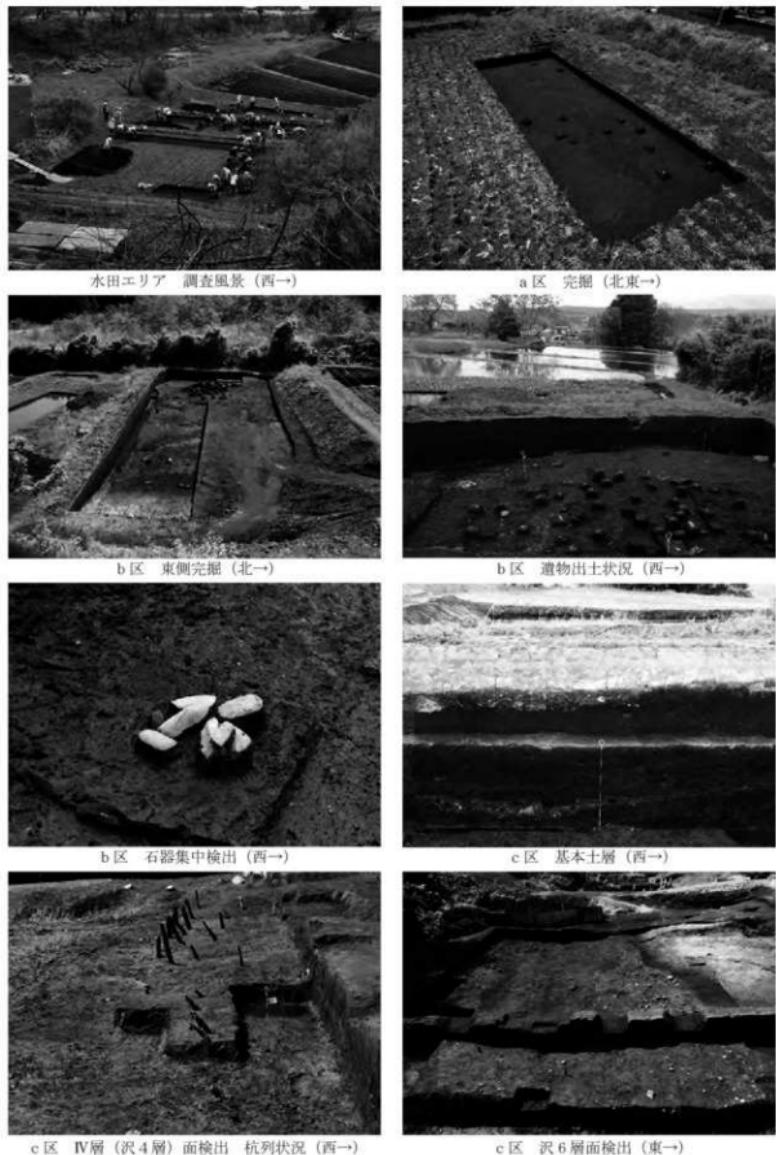


写真26 F区 水田エリア

第46号堅穴住居跡



第82号土坑

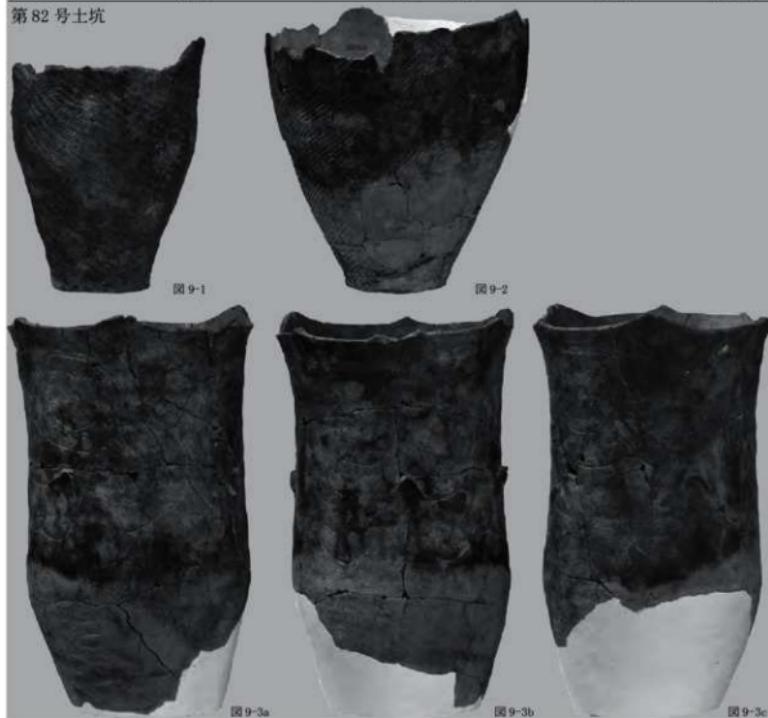
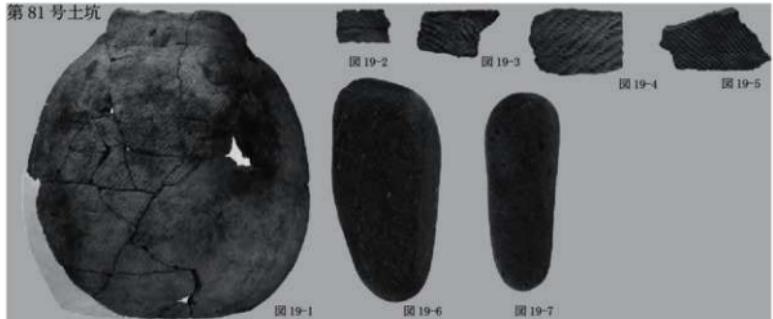


写真27 A区遺構内出土遺物



写真28 A区遺構外出土遺物、B区遺構内出土遺物(1)

第81号土坑



B区遺構外



写真29 B区遺構内出土遺物(2)、B~D区遺構外出土遺物



写真30 F区 遺構内出土遺物（1）

第1号土器埋設遺構



図33-1

第2号土器埋設遺構



図33-2

平場エリア遺構外

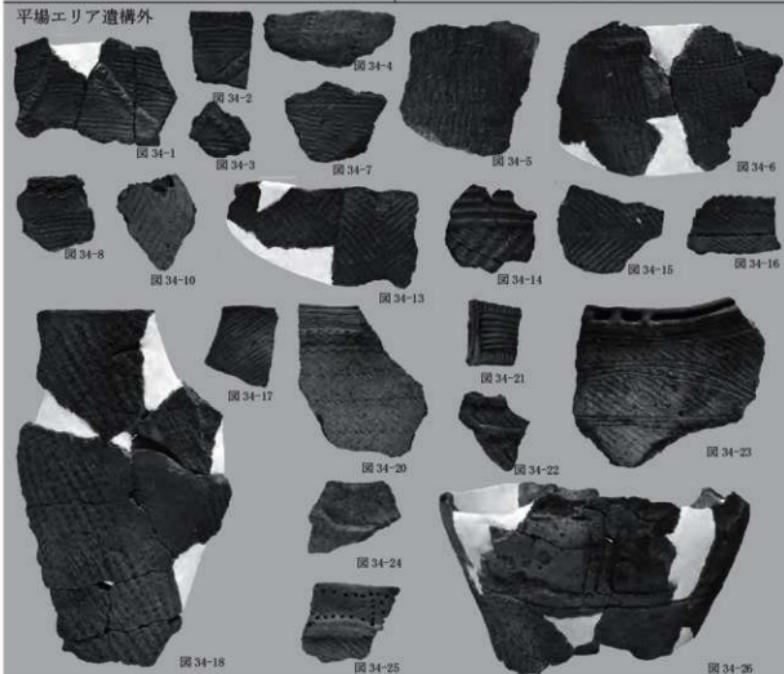


写真31 F区 遺構内出土遺物(2)、平場エリア遺構外出土遺物(1)



写真32 F区 平場エリア遺構外出土遺物 (2)

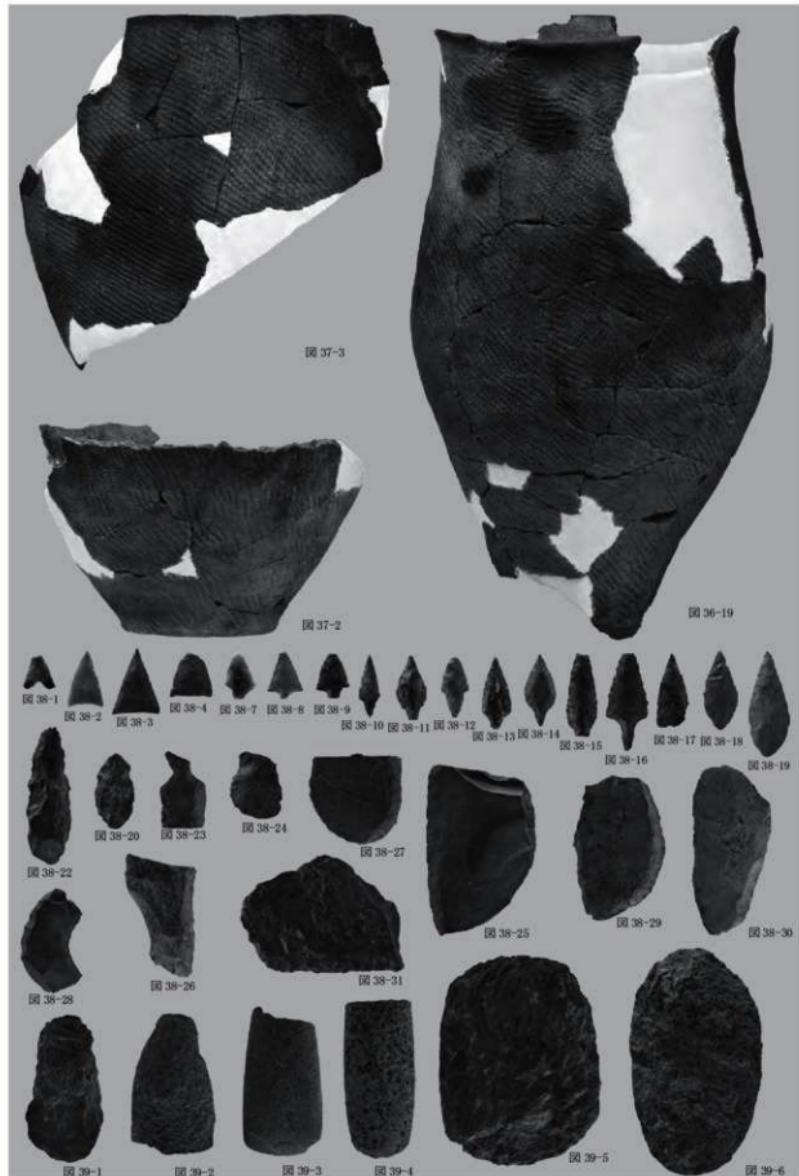


写真33 F区 平場エリア遺構外出土遺物 (3)

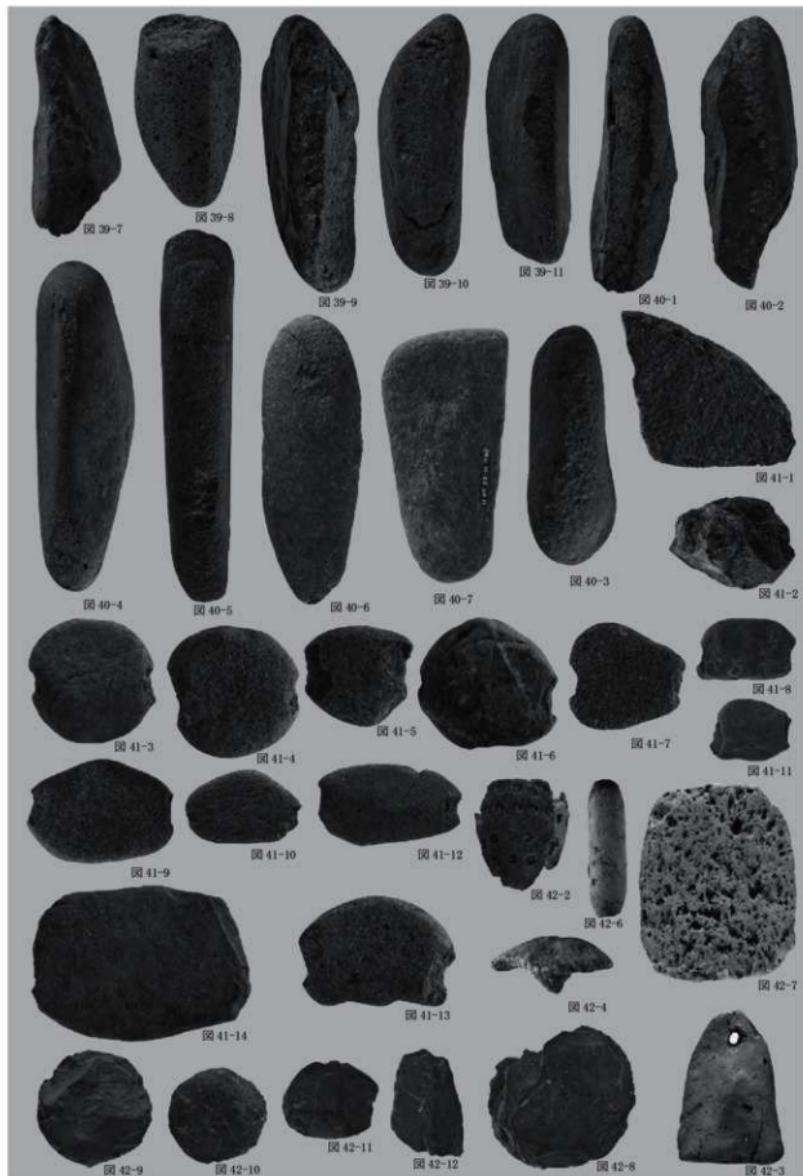


写真34 F区 平場エリア遺構外出土遺物 (4)

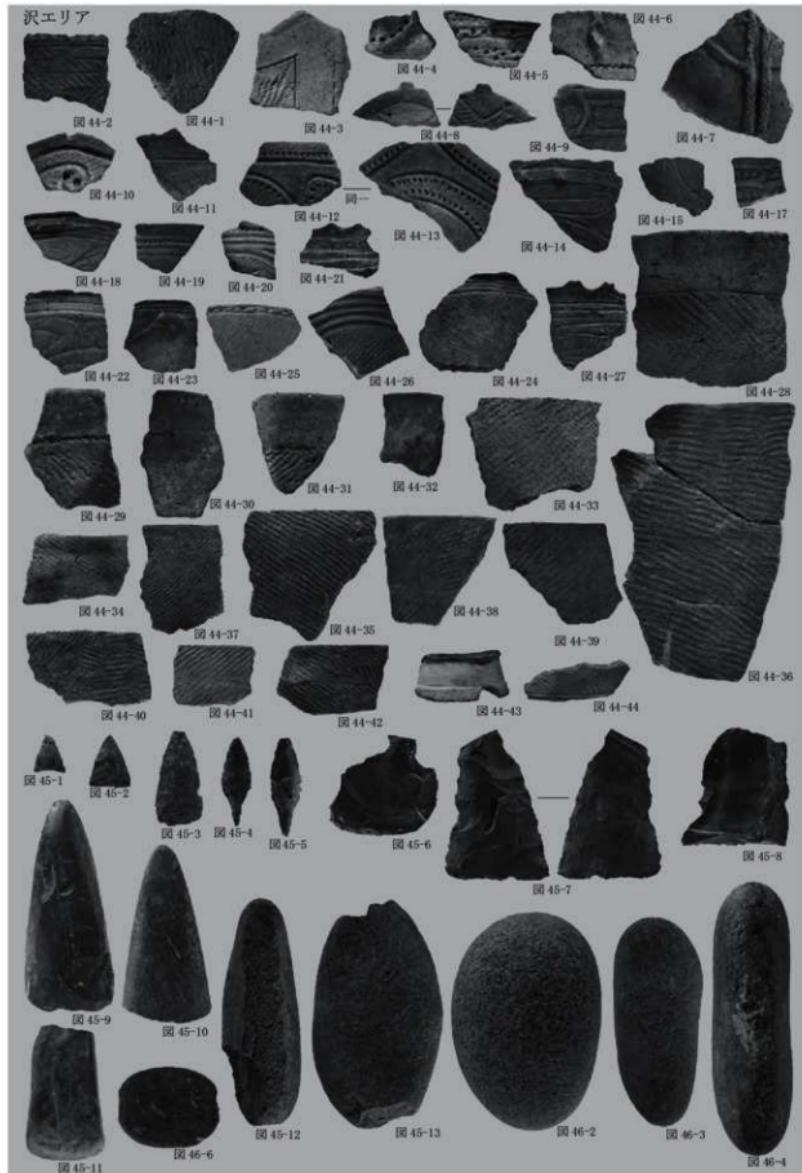


写真35 F区 沢エリア出土遺物（1）

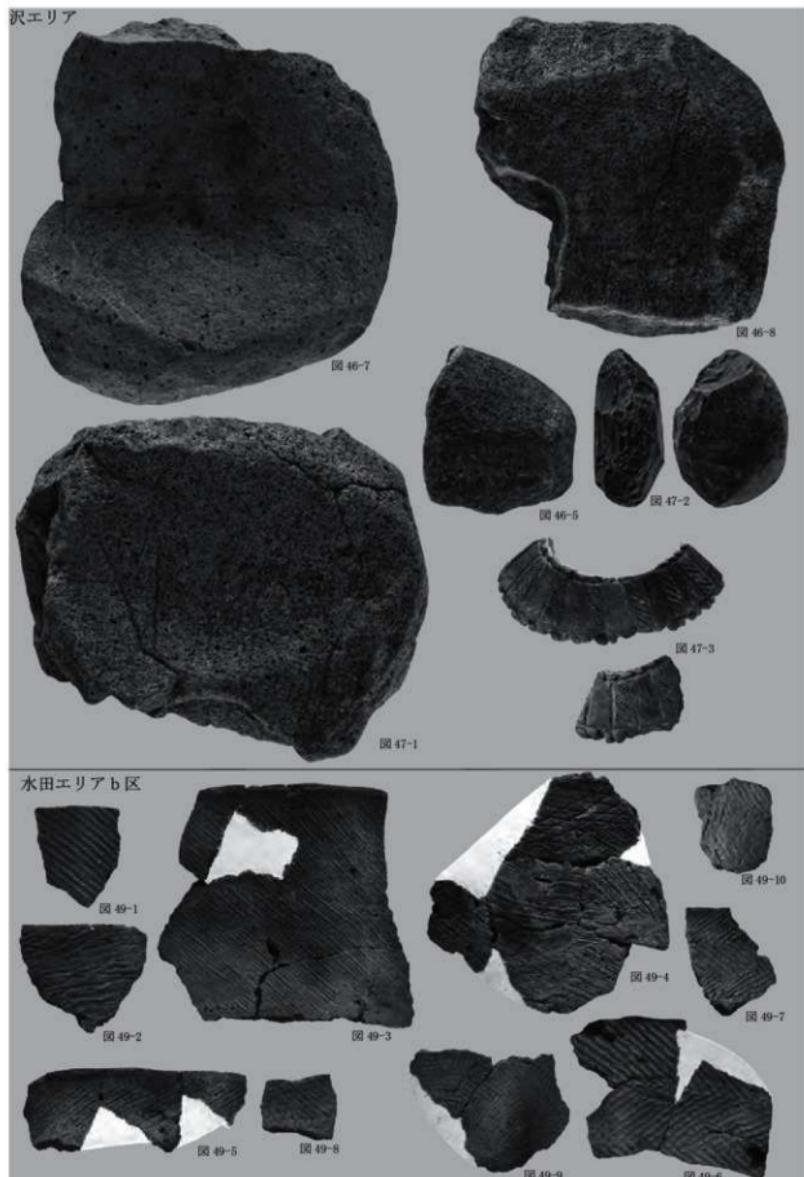


写真36 F区 沢エリア出土遺物 (2)、水田エリア出土遺物 (1)

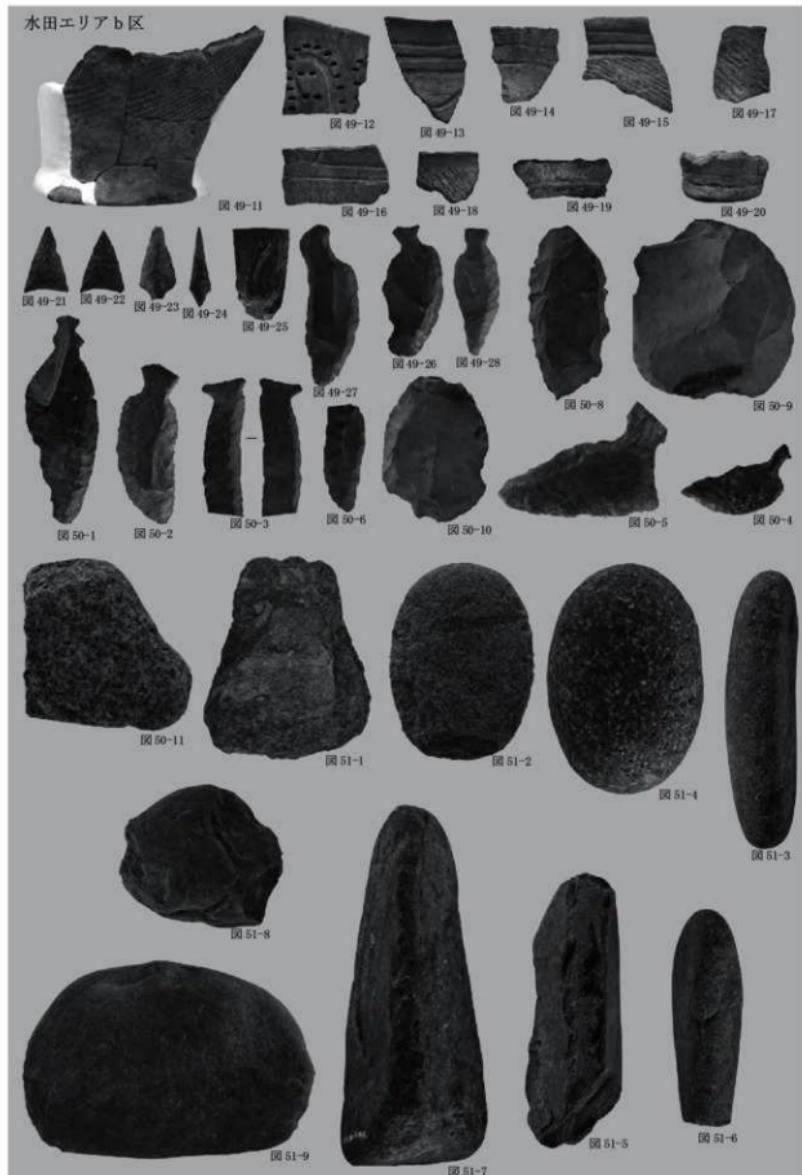


写真37 F区 水田エリア出土遺物 (2)

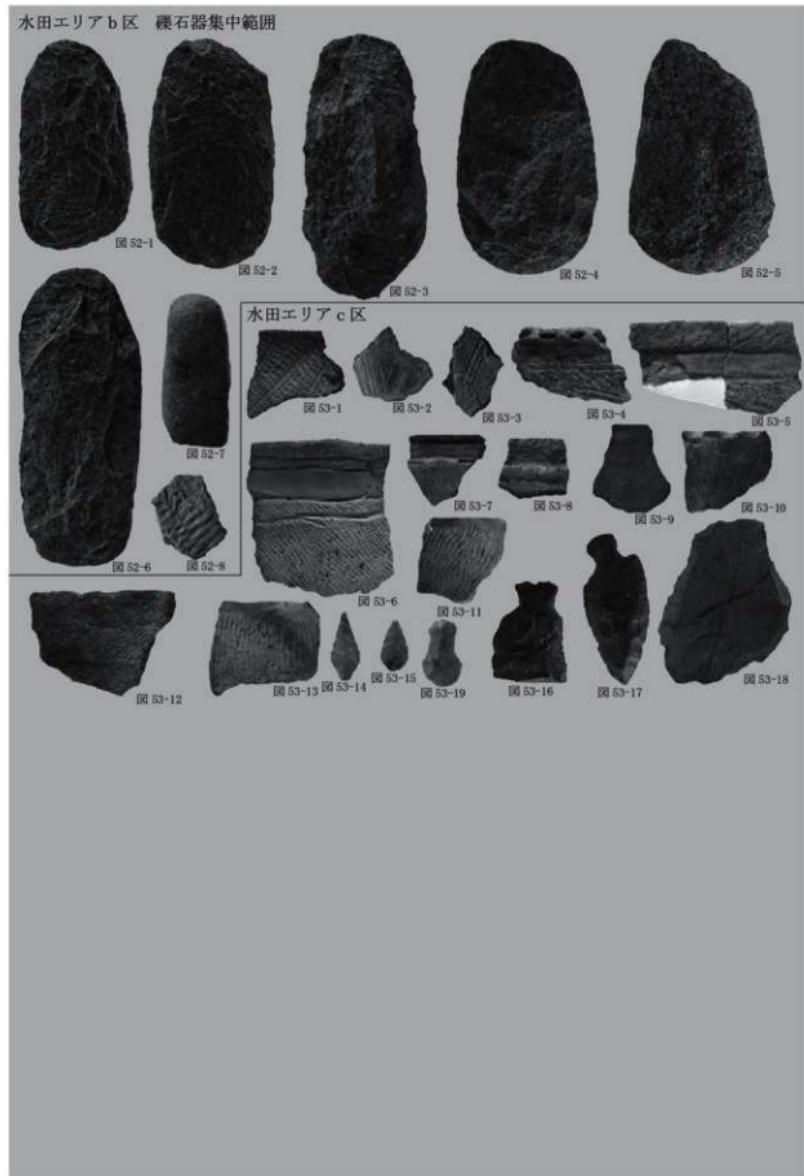
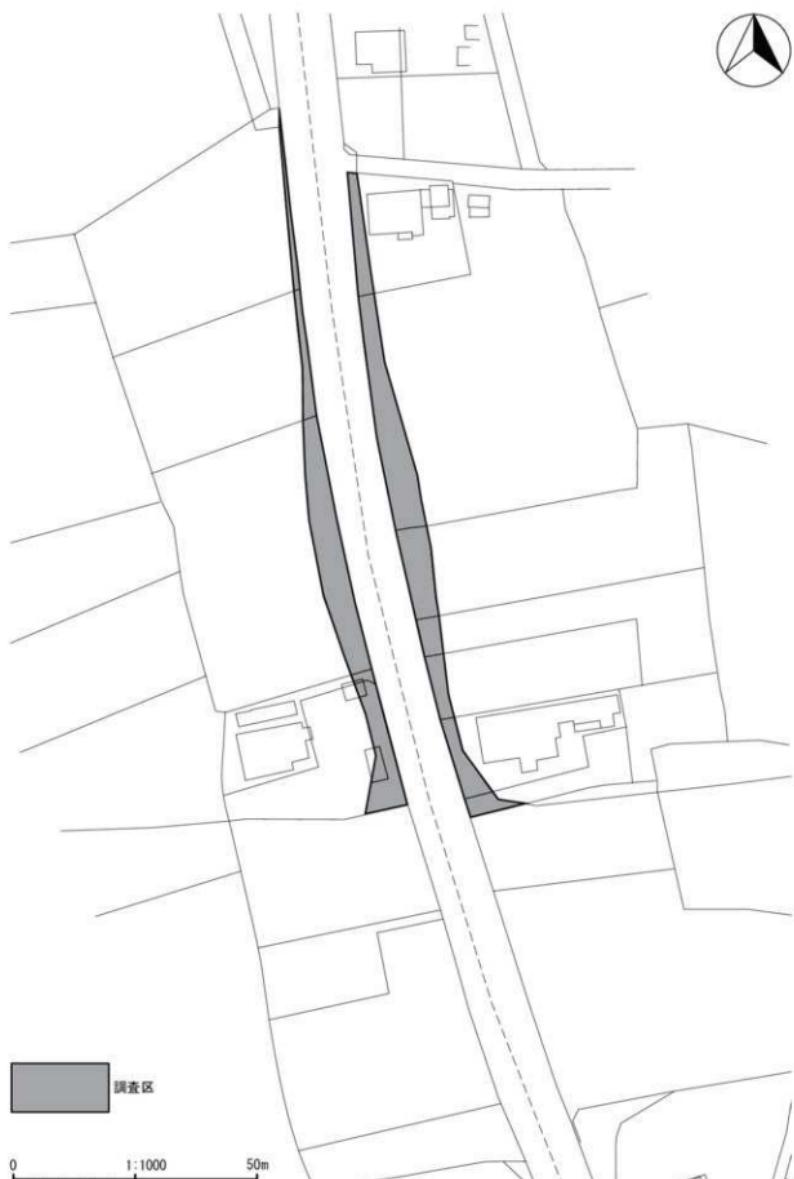


写真38 F 区 水田エリア出土遺物 (3)



## 第2編 松ヶ崎遺跡IV





# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の方法

### 1 発掘作業の方法

平成21年度に青森県教育府文化財保護課が実施した試掘調査により、縄文時代の遺構が確認されたため、縄文時代の遺構調査に重点を置いて調査を実施した。

【測量基準点と水準点の設置・グリッド設定】測量基準点と水準点については、本事業に伴って設置された用地幅杭を用いて、調査区内に任意杭を設置した。グリッドは世界測地系に基づく公共座標値X = 53300・Y = 57200を起点IA-0とし、1辺4mで設定した。グリッドの名称は、各グリッドの南から北にローマ数字とA~Yのアルファベット、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。

【基本層序】表土から順にローマ数字を付けて呼称した。

【表土等の掘削】平成21年度の試掘調査により、畠の造成によって地形変更が行われている場所が多く、また表土から縄文時代の遺構検出面までは遺物が希薄であったことから、重機を使用して掘削を行った。

【遺物包含層の調査】上層から層位ごとに人力で掘削した。出土遺物はトータルステーションを使用して取り上げを行った。

【遺構の調査】検出順に略号と算用数字を組み合わせた遺構番号を付けた。検出された遺構は土坑のみであったので、長軸で2分割して堆積土の観察を行った。堆積土層には算用数字を付け、『新版標準土色帖』を基に色調などを記録した。平面図は株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を使用して、トータルステーションによる測量で作成したが、土層断面図は簡易造り方測量で縮尺20分の1の実測図を作成した。

【写真撮影】35mmモノクロームと35mmカラーリバーサルの各フィルム及び有効画素数1600万画素以上のデジタルカメラを併用し、土層の堆積状況・遺構の完掘状況などについて記録した。

### 2 整理・報告書作成作業の方法

平成24年度の松ヶ崎遺跡発掘調査では、調査の結果、縄文時代の土坑3基と土器片3点が確認された。遺構・遺物が希薄であったことから、事実記載を主体に整理・報告書作成作業を進めた。

【図面の整理】遺構の平面図は、トータルステーションによる測量で作成したため、整理作業ではこれを縮尺20分の1で図化し、簡易造り方測量で作成した土層断面図と図面修正を行い、遺構配置図を作成した。

【写真的整理】35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは遺構ごとに整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、遺構ごとのフォルダに整理し、HDD及びDVD-Rに保存した。

【遺物の洗浄】洗浄ブラシを用いて、表面の摩耗に注意しながら、水で付着物を落とした。

【遺物の注記】遺物の取り上げに用いた遺物カードを基に、調査年度・遺跡名・出土地点・層位を略記

した。

〔報告書掲載遺物の選別〕出土点数が少なかったので全て掲載した。

〔遺物の観察と図化〕個々の遺物を目視で観察して、遺物の特徴を適切に分かりやすく表現するように図化し、観察表を作成した。

〔遺物の写真撮影〕実測図では表現し難い材質感・立体感・遠近感・文様・製作時の加工痕や調整痕・使用痕などを忠実に再現し、細部が観察できるように留意して業者に委託した。

〔遺構と遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」・「トレースくん」と A dobe 社製 Illustrator を使用してデジタルトレースを行った。実測図版・写真図版などの版下作成についても、A dobe 社製 Illustrator を使用してデジタルデータで作成した。

〔遺構の検討〕事実記載を基に検討した。

〔遺物の検討〕事実記載を基に検討した。

## 第2節 調査の経過

### 1 発掘作業の経過

平成 24 年度の松ヶ崎遺跡発掘調査は、1,050 m<sup>2</sup>を対象として（図 55）、5 月 9 日から 6 月 29 日までの発掘作業期間（柄館遺跡と弥次郎窯遺跡を含む）で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査員 藤沼 邦彦 前弘前大学教授（考古学）

調査員 上條 信彦 国立大学法人 弘前大学人文学部准教授（考古学）

調査員 佐々木辰雄 日本地質学会会員・故人（地質学）

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司

次長（総務 GM） 高橋 雅人

調査第一 GM 中嶋 友文

文化財保護主査 野村 信生（発掘調査担当者、現文化財保護主幹）

文化財保護主査 小山 浩平（発掘調査担当者）

調査補助員 岩佐 良子（平成 25 年 3 月退職）

工藤 将陽（平成 25 年 9 月退職）

川崎 僖大

発掘作業の経過、業務委託状況などは、以下のとおりである。

4 月上旬 國土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所・県文化財保護課と打ち合わせを行い、発掘調査範囲や発掘作業の進め方などについて確認した。

5 月上旬 5 月 9 日に発掘調査器材などを現地へ搬入し、環境整備後、調査区北側から発掘作業を開始した。

5 月中旬 東側調査区から土坑を検出したが、遺構・遺物の分布が希薄であったため、調査終了予定を 5 月下旬とした。

5月下旬 全ての調査が終了し、調査区の埋め戻しを行った。

## 2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は、平成25年4月1日から平成26年3月31日までの期間で行った。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹 野村 信生（報告書作成担当者）

文化財保護主査 小山 浩平（報告書作成担当者）

調査補助員 工藤 将陽（平成25年9月退職）

齋藤 千聖

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況などは、以下のとおりである。

4～6月 図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行った。出土遺物は土器片が3点だったので、全て掲載遺物とし、拓本と実測を行った。

7～9月 図面のトレースを行い、土器の写真撮影は有限会社無限に委託して行った。

10～12月 図版作成と原稿執筆を行い、報告書の割付と編集を行った。

1～3月 印刷業者を選定し、入札を行った。校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

## 第2章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 遺跡の概要

松ヶ崎遺跡は八戸市の南東部に位置し、八戸市庁から直線距離で約4kmの地点に所在する。遺跡は新井田川と松館川の合流地点、新井田川右岸の標高37～42m程の高館段丘上に立地している（図1）。遺跡はこれまで数多くの調査が行われており、縄文時代中期を中心とした遺跡であることが判明している。

調査区は遺跡の西側、主要地方道八戸大野線に分断されており、便宜的に東側調査区・西側調査区と呼称した（図55）。標高42.5～42.7m程の平坦地であり、現状は畑や宅地となっている。

基本層序は西側調査区中央部で確認しており、7層に分層した（図56）。I層は耕作土を主体とし

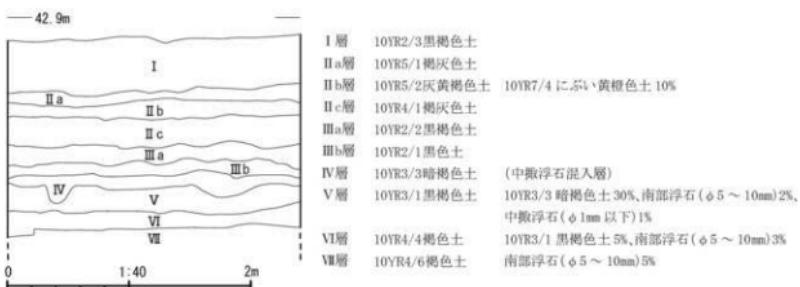


図56 基本層序(III-C-61 グリッド付近)

た表土である。II層は3層に細分しており、褐色土を主体に二次堆積と考えられる火山灰が混入している。III層は2層に細分した。黒色土を主体としており、場所によっては分離が困難である。IV層は暗褐色土を主体に中撒浮石が混入しているが、調査区全域に広がらず部分的な堆積である。特に東側調査区には希薄な状況であった。V層は黒褐色土を主体とし、中撒浮石と南部浮石が混入している。VI層は褐色土を主体としており、場所によってはV層との分離が困難である。VII層は褐色土を主体とするローム層であり、主に遺構検出を行った層である。

調査区に分布する遺構・遺物は希薄であり、東側調査区から土坑3基、土器片3点が確認されたのみである（図57）。

## 第2節 土坑

### 第1号土坑（図57・58、写真40）

【位置・確認】東側調査区北部、III L-62 グリッドに位置している。VII層（ローム層）で検出したが、掘り込みはVI層から確認される。

【構造】調査区外に及ぶため詳細は不明であるが、平面形状は円形と推定される。

断面形状は、平坦な底面から壁が外傾する形状である。規模は開口部 114 cm・深さ 72 cm 程度である。

【堆積土】黒褐色土を主体に南部浮石が混入する自然堆積である。

【出土遺物】確認されなかった。

【小結】詳細は不明であるが、堆積状況から縄文時代と考えられる。

### 第2号土坑（図57・58、写真40）

【位置・確認】東側調査区北部、III K-62 グリッドに位置している。VII層（ローム層）で検出したが、掘り込みはVI層から確認される。

【構造】調査区外に及ぶため詳細は不明であるが、平面形状は円形と推定される。

断面形状は、ほぼ平坦な底面から壁が外傾する形状である。規模は開口部 132 cm・深さ 54 cm 程度である。

【堆積土】褐色土を主体に南部浮石が混入

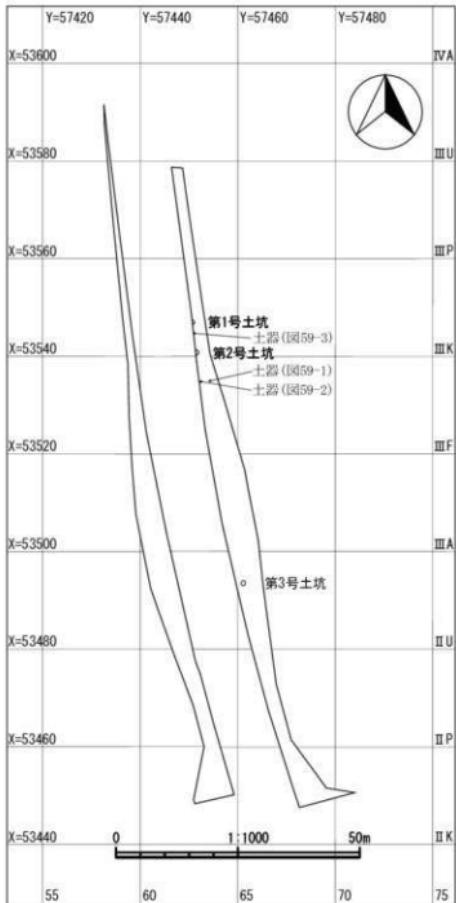


図57 遺構配置図

する自然堆積である。

[出土遺物]確認されなかつた。

[小結]詳細は不明であるが、堆積状況から縄文時代と考えられる。

### 第3号土坑（図57・58、写真40）

[位置・確認]東側調査区南部、II X-65 グリッドに位置している。VII層（ローム層）で検出した。

[構造]平面形状は円形であり、平坦な底面から壁は外傾する。検出面での規模は、長軸108cm・短軸90cm・深さ30cm程度である。

[堆積土]暗褐色土を主体に南部浮石が混入する自然堆積である。

[出土遺物]確認されなかつた。

[小結]詳細は不明であるが、堆積状況から縄文時代と考えられる。

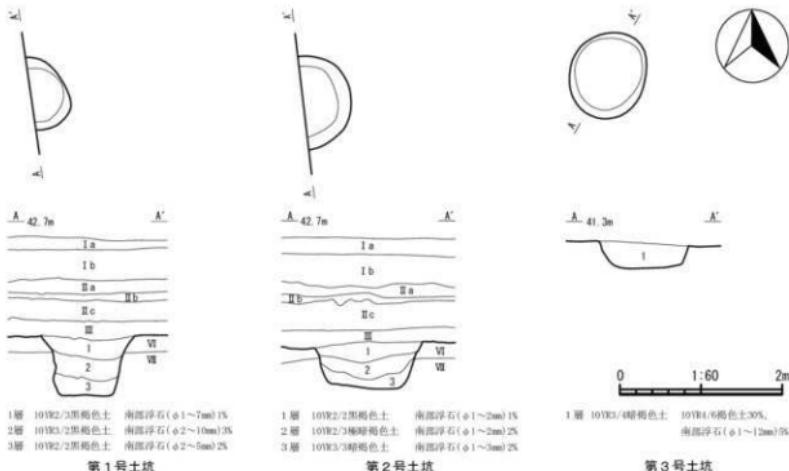


図58 土坑

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 縄文土器（図57・59、写真40）

東側調査区北部に位置する第1・2号土坑の周辺から破片が3点出土した。1はVII層（ローム層）、2・3はVI層からの出土である。1と2は同一個体と考えられる深鉢の破片である。外面には重層山形文が施文されており、内面は丁寧なミガキによって調整されている。器厚は7~8mm程度で胎土には細かい砂粒と植物繊維が混入している。これらの特徴から、早期前葉に位置づけられる押型文土器（日計式土器）と考えられる。3は深鉢の破片であり、外面には単筋のL Rを縦方向に施文し、内面は雑なミガキによって調整されている。器厚は8mm程度で胎土には細かい砂粒と海綿骨針が混入している。詳細は不明であるが、出土地点や層位、胎土の特徴などから早期の可能性が考えられる。



図59 遺構外出土土器

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	外面文様	内面調整	備考
59-1	III-63	VII	縄文早期前葉	深鉢	重層山形文	ミガキ	植物繊維混入、2同一個体と推定
59-2	III-63	VI	縄文早期前葉	深鉢	重層山形文	ミガキ	植物繊維混入、1同一個体と推定
59-3	III-62	VI	縄文早期	深鉢	LR縦	ミガキ	海綿骨針混入

### 第3章 総括

松ヶ崎遺跡は新井田川と松館川の合流地点、新井田川右岸の標高37～42m程の高館段丘上に位置している。これまでに数多くの調査が行われ、縄文時代中期を中心とした遺跡であることが判明している。

今回の調査は、遺跡の南西部を対象としており、土坑3基と遺構外から土器片3点が確認された。土器片は2点が同一個体とみられ、重層山形文が施文されていたことから、縄文時代早期前葉に位置づけられる押型文土器（日計式土器）と考えられるものであった。もう1点は縄文が施されたもので、胎土や出土層位などから早期と考えた。日計式土器は、本遺跡が位置する新井田川下流域では、市子林遺跡や牛ヶ沢（4）遺跡などから出土している。特に牛ヶ沢（4）遺跡からは、当該期の堅穴住居跡3棟と土坑1基が検出されており、土器片にみられる押型文も多様である。この他に日計式の標識となる日計遺跡や白浜遺跡・岩ノ沢平遺跡・和野前山遺跡・売場遺跡・見立山（1）遺跡・見立山（2）遺跡・林ノ前遺跡・櫛引遺跡・鴨平（1）遺跡などからも出土している。これらには、地文に縄文が施された土器などもみられるが、本遺跡から出土した押型文土器（日計式土器）と縄文施文土器の関連性については判断し難く、後者は早期の範疇にとどめた。

土坑は出土遺物がなく、詳細は不明であるが、第1・2号土坑の周辺から早期と考えられる土器片が出土していることや、堆積土などの様相から、縄文時代早期の可能性も示唆される。

本遺跡では、これまでに縄文時代早期中葉に位置づけられる白浜式土器などが出土しているが、早期の遺物は少ない状況である。今回の調査で破片資料であったが、早期前葉の押型文土器（日計式土器）が出土したことは、松ヶ崎遺跡の形成を考えるうえで重要な調査成果といえる。 (野村)

### 参考文献

- 青森県教育委員会 2001『松ヶ崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第291集
- 青森県教育委員会 2004『松ヶ崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第377集
- 青森県教育委員会 2010『青森県遺跡詳細分布調査報告書22』青森県埋蔵文化財調査報告書第493集
- 青森県教育委員会 2011『松ヶ崎遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第497集
- 八戸市教育委員会 2001『牛ヶ沢（4）遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第89集
- 八戸市教育委員会 2004『牛ヶ沢（4）遺跡Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集



西側調査区中央部調査状況（北から）



東側調査区北部調査状況（南から）

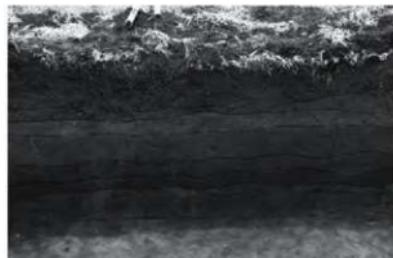


西側調査区南部調査状況（北から）



東側調査区南部調査状況（北から）

写真39 調査状況



III C-61 グリッド付近基本層序 (西から)



第1号土坑 (東から)



第2号土坑 (東から)



第3号土坑堆積状況 (東から)



第3号土坑完掘状況 (東から)



図 59-1

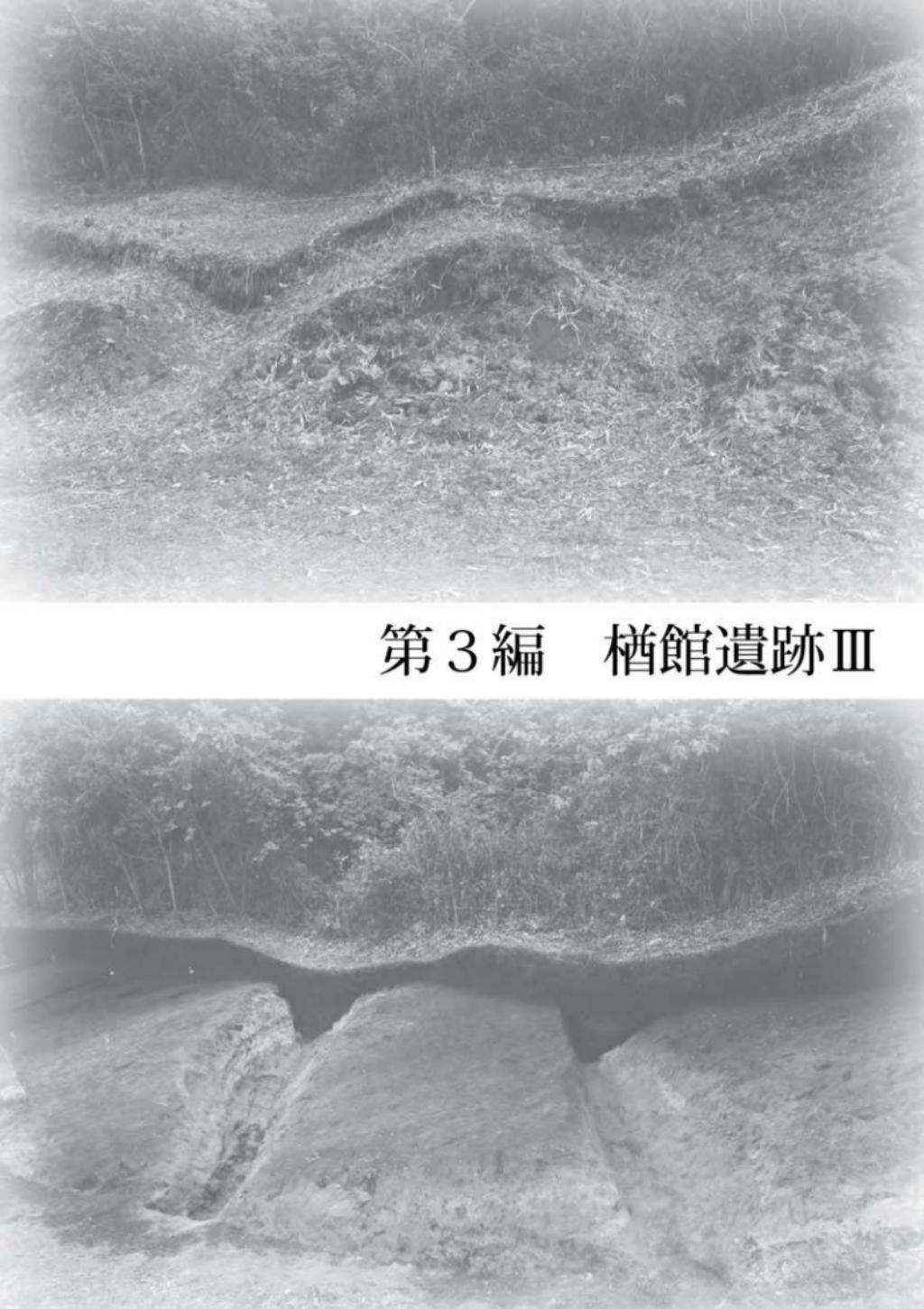


図 59-2



図 59-3

写真40 基本層序・土坑・遺構外出土土器



## 第3編 楼館遺跡Ⅲ

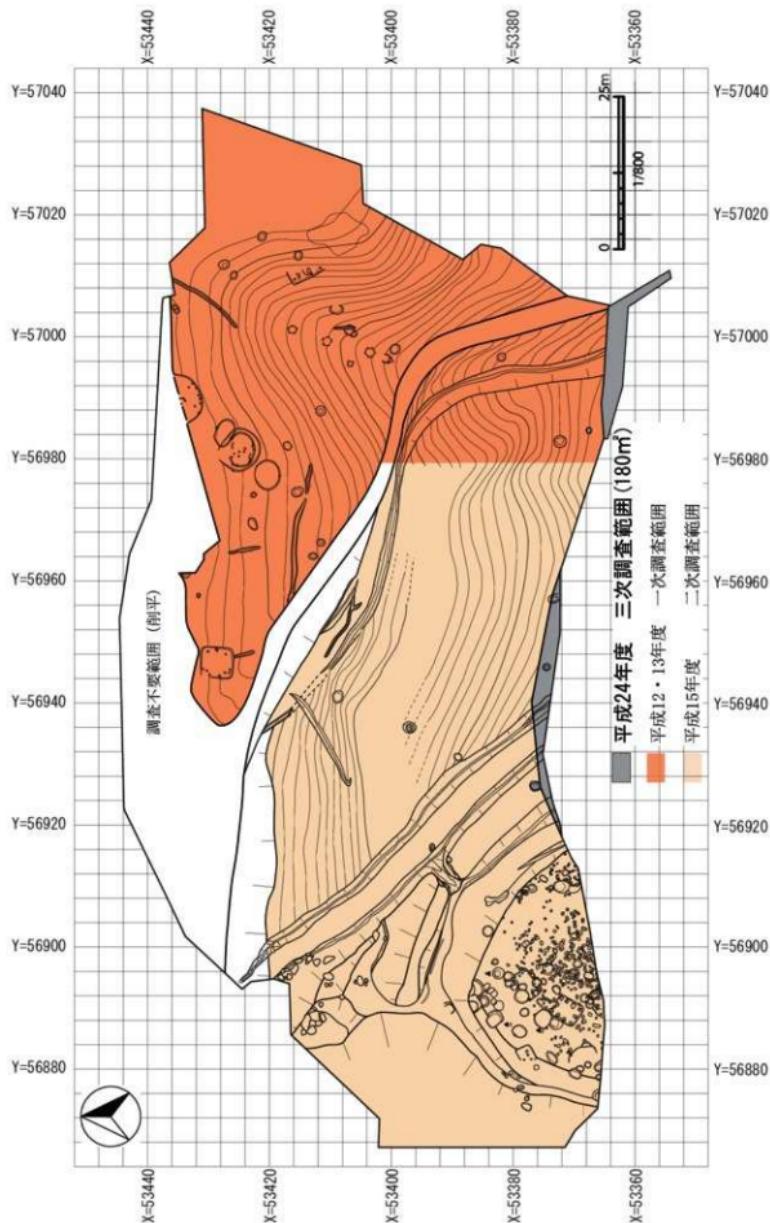


図60 造構配置図

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査の方法

本遺跡は八戸南環状道路建設事業に伴い平成12・13年度に1次発掘調査、平成15年度に2次発掘調査が行われており、平成24年度の発掘調査は3次目の発掘調査となる。

#### 1 発掘作業の方法

##### 【測量基準点・水準点・グリッド設定】

1次・2次調査では日本測地系に基づいた公共座標値を用いてグリッドを設定していたが、世界測地系の座標値を用いた3次調査では、このグリッドを踏襲すると混乱することが予想されたため、グリッドを設定せず、遺構の実測・遺物の取り上げ等はトータルステーションを用いて位置を記録することとした。調査に用いた基準点は工事用の測量杭から任意に打設した杭を使用した。

##### 【基本層序】

基本層序は1次・2次調査で確認したものを継続して使用した。基本層序の観察は、調査区間の壁面で行った。基本的には表土である第Ⅰ層の黒色土から、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層黒褐色砂質土（中揮浮石混入）第Ⅳ層黒褐色土（南部浮石混入）、地山の第V層黄褐色粘質土（八戸火山灰層）の層序となる。第Ⅲ層は中揮浮石の含まれている量の違いで2層に細分した箇所もある。基本層序の図化は壕跡の土層とともにに行っていることから、壕跡の土層とともに掲載した（図62）。

##### 【表土等の調査】

調査範囲が狭小であることから、雑木の撤去、表土の除去及び遺構検出面までの掘り下げ作業は人力で行った。また、遺構の埋め戻し作業についても人力で行った。

##### 【遺構の調査】

3次調査では土坑4基を新たに検出し、これらの遺構番号については2次調査から継続した番号を付した。また、1～4号壕については検出位置から前回調査の延伸部にあたることが確実であったことから新たな遺構名を付さずに調査を行った。しかし、各壕跡の土層番号については、3次調査で観察した結果に基づいて番号を付しているため、報告済みの土層番号とは対応していない。

##### 【写真撮影】

写真撮影は原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1,000万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺構の調査状況等について記録した。

#### 2 整理・報告書作成作業の方法

##### 【図面・写真類の整理】

各遺構の平面図と土層図の調整を行ったほか、遺構の重複関係や発掘作業時の所見を整理した。写真是モノクロームフィルムについては撮影順にネガアルバムに整理収納し、カラーリバーサルフィルムについては発掘作業状況や遺構毎に整理して、スライドファイルに収納した。デジタルカメラのデータについては遺構毎のフォルダに整理してハードディスクに保存した。

##### 【遺物の洗浄・注記と接合・報告書掲載遺物の選別】

土器の洗浄は文様が消えないように留意して行った。遺物の注記は、調査年度・遺跡名・出土地点・遺構名・層位・遺物番号などを略記したが、剥片石器などに関しては、収納してあるポリ袋に注記した。また、中世の壕跡から出土した縄文土器については、遺構の時期とは直接関係ないが、調査区周辺の様相を示すものと判断したことから掲載した。

#### 〔遺物の観察・図化・写真撮影〕

個々の遺物を目視及びルーペで観察し、遺物の特徴を適切に表現するよう図化した。掲載用に選別した遺物については、規模や特徴を記載した観察表を作成した。写真撮影に関しては業者に委託して行った。また、石器類の石質鑑定は日本地質学会会員の松山 力先生に依頼して行った。

#### 〔遺構と遺物のトレース・版下作成〕

トレースは株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」と同「トレースくん」を用いてデジタルで行った。版下及び写真図版は Adobe 社製 CreativeSuite を用いてデジタルデータをパソコン上でレイアウトしたものを使用した。

## 第2節 調査の経過

### 1 発掘作業の経過

平成 24 年度の発掘調査は松ヶ崎遺跡等とあわせて実施しており、調査体制は第 2 編第 1 章第 2 節と同じである。なお、柄館遺跡の調査面積は 180 m<sup>2</sup> である。発掘作業の経過は以下のとおりである。

5月 中旬に調査範囲を明示する杭の打設が完了した事を受けて、下旬から調査に着手した。現況では雑木や雑草が生い茂っており、調査範囲を確認できなかったことから、調査は雑木等の除去作業から開始した。

6月 上旬には雑木等の撤去作業も終了し、調査範囲を確認できたことから、掘り下げ作業を開始した。掘り下げ作業は人力で行い、中旬には遺構の調査を終了した。下旬には遺構の埋め戻しも終了し、調査を終了した。

### 2 整理・報告書作成作業の経過

松ヶ崎遺跡とあわせ第 2 編第 1 章第 2 節と同じ体制で行った。

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況などは以下のとおりである。

4～6月 遺構の図面・写真など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行った。  
出土遺物の中から報告書掲載資料を選別し、実測・観察表の作成を行った。

7～9月 図面のトレースを行い、土器の写真撮影は有限会社無限、石器の写真撮影は Photo Shop いなみに委託して行った。

10～12月 図版作成と原稿執筆を行い、報告書の割付と編集を行った。

1～3月 印刷業者を選定し、入札を行った。校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

## 第2章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 墓跡

4条検出したが、いずれも前回調査を行った墓跡の延伸部分にあたる。また、墓跡に相当する範囲が1段低くなつており、現況でも遺構の存在を確認できた。

#### 第1号墓跡（図61）

【位置】調査区南東側、X=53360、Y=5700付近に位置している。【規模】土層観察面での開口部の幅は約1.75m、底面の幅は約0.6mで、掘り込み面からの深さは約1.2mである。断面形状は箱築研形となっている。【土層】9層に分層した。層の中位には砂層が堆積しているが、硬化面等は確認できなかった。また、層の下位には地山由来と思われるロームブロックが大量に混入しており、壁が崩落しながら堆積したような状況を示している。【出土遺物】なし。

【小結】本墓跡は2次調査の調査報告書の中で「館を形づくる区画を意識した墓であったと思われる。出土遺物がなく構築および廃絶時期は不明である。」と報告されているが、今回の調査でも遺物は出土せず、詳細な時期等を明らかにすることはできなかった。

#### 第2号墓跡（図62、63）

【位置】調査区南側、X=53380、Y=56940付近に位置している。【規模】土層観察面での開口部の幅は2.5m、底面の幅は約20~40cmで、掘り込み面からの深さは約1.1mである。断面形状は箱築研形となっている。【土層】10層に分層した。第2層、第5層、第7層は砂質土層であり、層の上面には硬化面が形成されている。2次調査の報告でも硬化面が複数面確認されており、墓が埋没する課程で通路として使用されたものと判断されている。今回の調査でも通路として使用された状況を追認することができた。

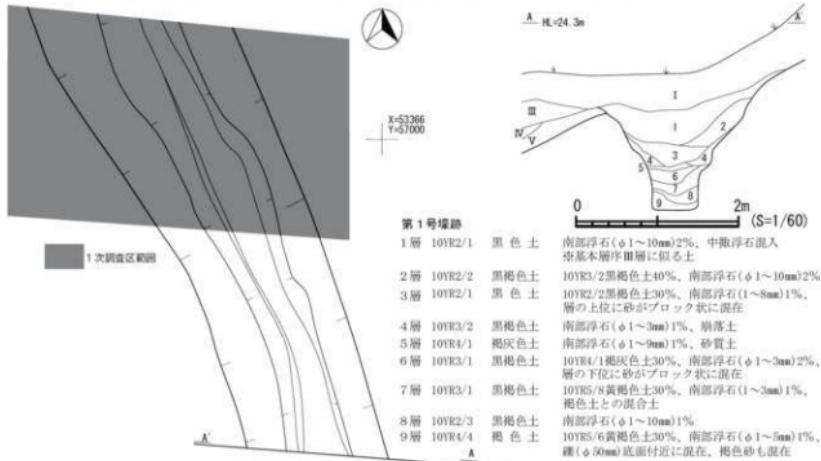


図61 第1号墓跡

【出土遺物】中世の石鉢が1点出土したほか、縄文時代の土器が260 g、石器は3点で約760 g出土した。石鉢は安山岩を素材としており、外面は底部を除いて丁寧に磨かれている。一方、内面は鉢の立ち上がり部分に器面調整時のものと考えられる敲打痕が残っているが、底面中央部分は顕著に擦られている。このことから、掘り鉢のような使われ方をされたものと考えられる。縄文土器は後期前半の土器が出土したが、いずれも小破片である。

【小結】本塹跡は2次調査の調査報告書の中で『南部諸城の研究』の記載にある一番外側の塹跡に相当する。堆積土出土の陶磁器から16世紀中葉以前に廃絶している。と記載されている。今回の調査では、中世陶磁器が出土しなかったことから時期について新知見を得ることができなかつたが、堆積土中に硬化面を複数面確認しており、埋没過程の中で通路として使用していた状況は追認できた。

### 第3号塹跡（図62、63）

【位置と確認】第2号塹跡に隣接したX=53380、Y=56932付近に位置している。【規模】土層観察面での開口部の幅は約1.7 m、底面の幅は約40 cmで、掘り込み面からの深さは約1.2 mである。断面形状は箱薬研形となっている。【土層】12層に分層した。このうち、第3a～3b層は砂質土層で層上面は堅く縮まっている。隣接している第2号塹跡と同様に埋没する過程で通路として使用されたものと考えられる。

【出土遺物】小破片の縄文土器が124 g出土した。図62-13は垂下している沈線が描かれており、中期後葉の最花式と考えられる。14～18は文様・胎土から後期前半に帰属するものと考えられる。このうち、14は波状口縁となる深鉢の口縁部で、折り返し状口縁となっている。また、文様は沈線で区画された内側に、LRが充填施文されている。15は隆帯に沿って沈線が施されているものである。

【小結】2次調査では遺構の構築時期等を判断できるような陶磁器は出土していないものの、検出状況等から構築と廃絶後の利用は第2号塹跡と連動していたと判断されている。今回の調査でも、陶磁器等は出土せず詳細な時期等については明らかにできなかつた。しかし、堆積土中には第2号塹跡と同様に複数面の硬化面を確認でき、廃絶後に通路として使用されていたことは追認できた。

### 第4号塹跡（図62、63）

【位置と確認】第3号塹跡に隣接した、X=53376、Y=56924付近に位置している。【規模】本塹跡は斜面の端部に構築されており、土層観察面での開口部は斜面の上側と下側で約2 mの比高差がある。また、開口部の幅は約5.1 m、底面の幅は60 cm、掘り込み面からの深さは約1.9 mで、断面形状はY字状となる。【土層】12層に分層した。4～7層、9層は層全体が堅く縮まつておらず、各層の上面は通路として使用されたものと考える。

【出土遺物】土器が約50 g、石器が磨り石1点出土した。図62-20は節の細かい縄を回転施文しているもので、胎土も他のものとは異なっている。小破片であるため詳細は不明であるが、1次調査で弥生時代後期の遺物も出土していることから、当該期の遺物である可能性も考えられる。

【小結】2次調査の調査報告書の中では、『南部諸城の研究』の記載にある一番内側の塹跡に相当する。塹の形態変化から区画・防衛はもとより景観的因素も含みつくられた塹で、門跡および通路と強く関連したものと考えられる。・・中略・・出土陶磁器から16世紀後葉にはほぼ埋没している。と報告されている。今回の調査では時期を判断できるような陶磁器が出土しなかつたため、時期についての新知見は得られなかつたが、土層堆積状況から埋没過程の中で通路として使用されたことは追認できた。

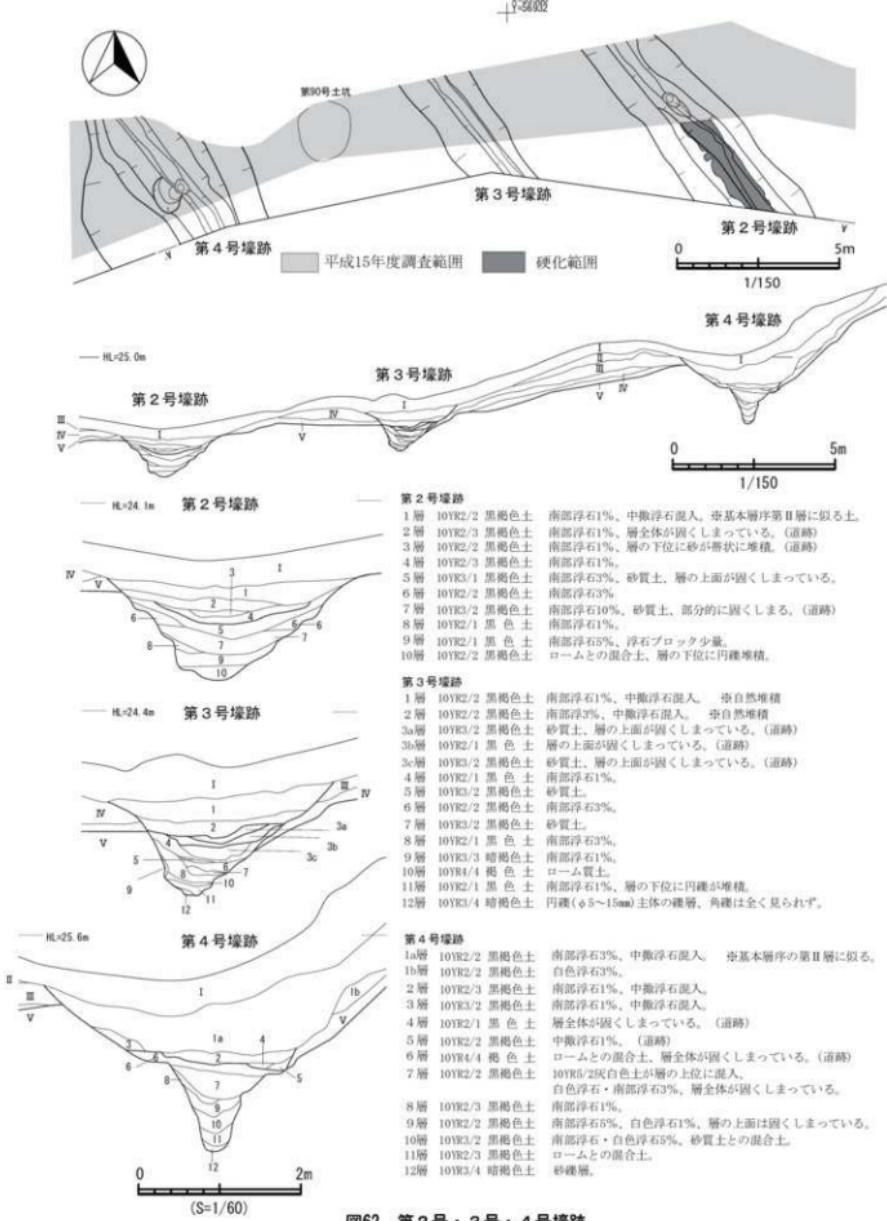
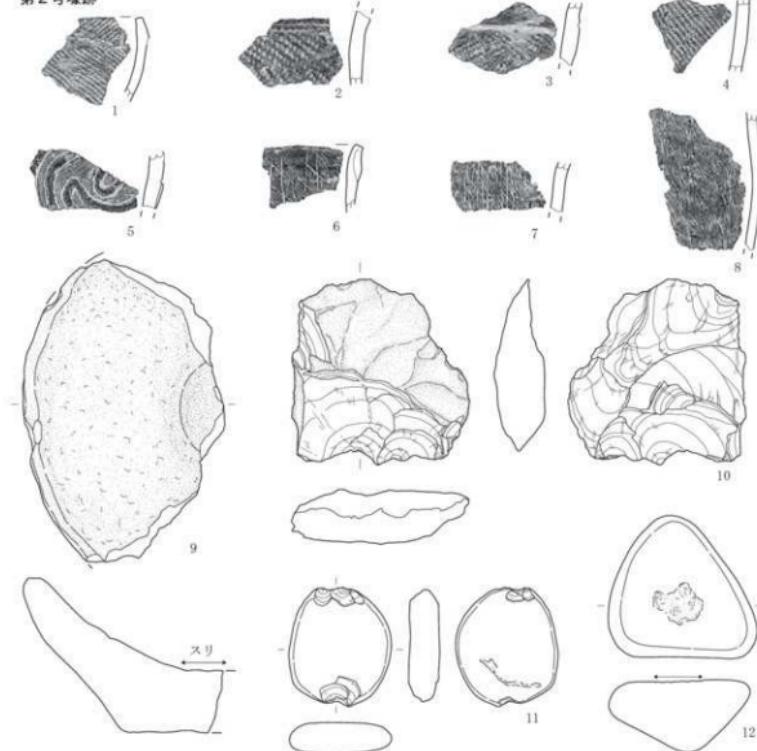
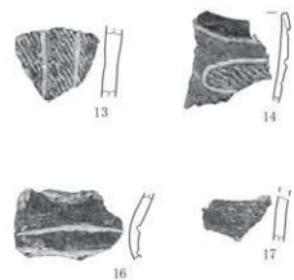


図62 第2号・3号・4号壕跡

第2号墳跡



第3号墳跡



第4号墳跡

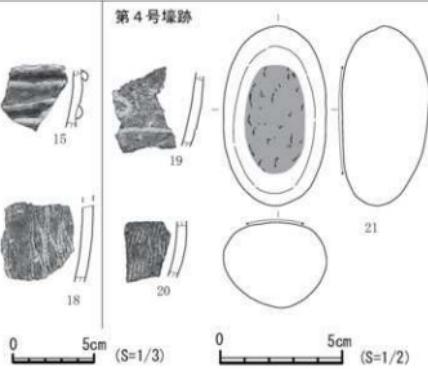


図63 第2号・3号・4号墳跡出土遺物

## 第2節 土坑

総数4基の土坑を検出した。

### 第88号土坑（図64）

【位置と確認】調査区ほぼ中央のX=53372、Y=56956付近に位置している。調査区際から検出しており、遺構の半分は調査区外へと伸びている。基本層序第IV層下面で黒色土の円形プランとして確認した。【規模】現存している開口部幅は1.4m、底面幅は約90cmで、掘り込み面からの深さは約1.4mである。【土層】調査区ラインで確認した土層では、基本層序第IV層上面から掘り込まれている事を確認した。黒色土を主体として8層に分層した。第1層は黒色土に南部浮石が混入した層で基本層序第IV層に非常に似ている。第4層は八戸火山灰由来と考えられるローム層が互層となって堆積している。【遺物】なし。【小結】遺物は出土しなかつたが、掘り込み面が基本層序第IV層上面であることから、中撤浮石が堆積する縄文時代前期中葉以前の遺構と考えられる。

### 第89号土坑（図64）

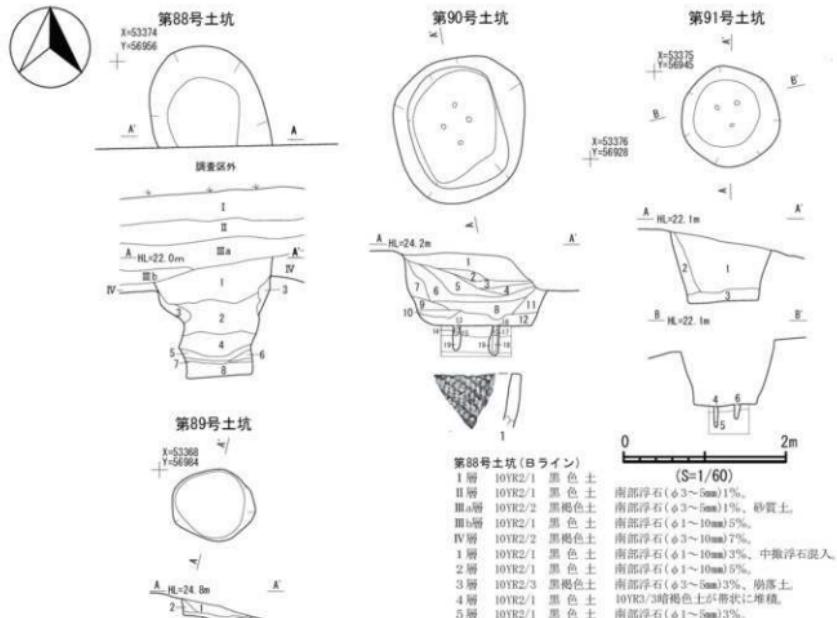
【位置と確認】調査区東側にあたるX=53368、Y=56984に位置している。基本層序第V層上面で黒色土の円形プランとして確認した。【規模】確認面での大きさは長軸1.03m、短軸0.86mで、底面は長軸0.87m、短軸0.83mである。なお、確認面からの深さは16cmである。【土層】3層に分層した。【遺物】なし。【小結】堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、遺物が出土していないため詳細は不明である。

### 第90号土坑（図64）

【位置】調査区西側にあたるX=53376、Y=56928に位置している。基本層序第V層上面で黒色土の円形プランとして確認した。【規模】確認面での大きさは長軸1.75m、短軸1.6mで、底面は長軸1.5m、短軸1.2mである。なお、確認面からの深さは約90cmである。【土層】黒色土を主体として8層に分層した。どの層にも南部浮石が混入している。堆積状況から自然堆積と考えられる。【施設】底面から逆茂木痕と考えられる小穴を4個検出した。これらのうち2個を断ち割ったところ、底面から30～40cmの深さがあることを確認した。【遺物】堆積土中から1点の土器が出土した。図63-1は胎土に織維が含まれており、文様は0段多条のRLRが横回転施文されているもので、縄文時代前期前半に帰属するものと考えられる。【小結】出土遺物及び底面施設の状況から、縄文時代前期前半以前の落とし穴である可能性が考えられる。

### 第91号土坑（図64）

【位置】調査区西側にあたるX=53375、Y=56945に位置している。基本層序第V層上面で黒色土の円形プランとして確認した。【規模】確認面での大きさは直径1.2mで、底面は長軸0.84m、短軸0.76mである。なお、確認面からの深さは約90cmである。【土層】黒色土を主体として3層に分層した。どの層にも南部浮石が混入している。堆積状況から自然堆積と考えられる。【施設】底面から逆茂木痕と考えられる小穴を3個検出した。これらのうち2個を断ち割ったところ、底面から20～25cmの深さがあることを確認した。【遺物】なし。【小結】底面施設の状況から、落とし穴である可能性が考えられる。遺構の時期については遺物が出土していないため詳細は不明であるが、遺構の形状及び堆積土の状況から、近接して検出した第90号土坑と近い時期に構築・廃絶された遺構である可能性もある。



**第88号土坑(白ライン)**

I層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~5mm)5%。
II層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~5mm)1%。
IIIa層	10YR2/1	黒褐色土	南部浮石(φ1~5mm)5%、砂質土。
IIIb層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~10mm)5%。
IV層	10YR2/2	黒褐色土	南部浮石(φ1~10mm)7%。
1層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~10mm)3%、中微浮石混入。
2層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~10mm)5%。
3層	10YR2/3	黒褐色土	南部浮石(φ3~5mm)3%、崩落土。
4層	10YR2/1	黒色土	10YR2/3暗褐色土上部状に堆積。
5層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~5mm)3%。
6層	10YR4/2	褐色土	南部浮石(φ3~10mm)1%、崩落土。
7層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ5~20mm)1%。
8層	10YR2/3	黒褐色土	南部浮石(φ5~15mm)5%。

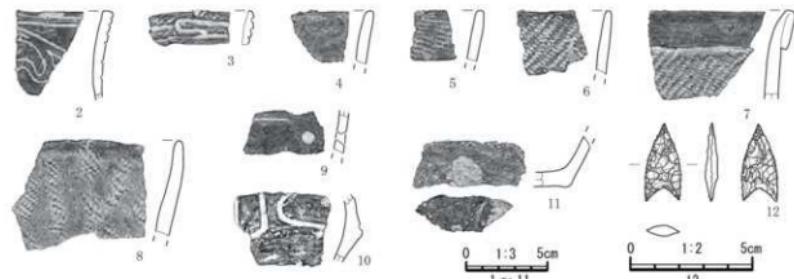
**第89号土坑**

1層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~8mm)5%。
2層	10YR2/2	黒褐色土	南部浮石(φ1~10mm)5%。
3層	10YR2/1	黒色土	南部浮石(φ1~5mm)2%。

**第91号土坑**

1層	10YR3/3	暗褐色土	南部浮石(φ1~8mm)7%。
2層	10YR4/6	褐色土	南部浮石(φ1~8mm)3%。
3層	10YR2/3	黒褐色土	南部浮石(φ1~8mm)5%。
4層	10YR3/3	暗褐色土	南部浮石(φ1~8mm)1%。
5層	10YR5/1	黃灰色粘土	南部浮石(φ1~8mm)5%。
6層	10YR8/1	黃灰色粘土	南部浮石(φ1~8mm)5%。

### 土坑・土坑出土遺物



遺構外出土遺物

図64 土坑・土坑出土遺物、遺構外出土遺物

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 土器（図64）

出土量は少なく、調査区西側から出土したものが多い。破片資料のみで細片が多くみられ、それらの大半は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものである。10点を図示しており、全て調査区西側のⅠ層から出土したものである。2～8は鉢・深鉢類の口縁部、9は深鉢の口縁部付近、10は壺の胴部、11は深鉢の底部である。2は細い沈線で文様が施文されており、外面はミガキ調整により光沢がある。3は単節のLRを地文とし、太めの沈線により文様が施文されている。内面は剥落しており、調整は不明である。4と11は胎土の特徴から同一個体の可能性があり、ミガキやナデ調整により無文となっている。6は単節のRしが継方向に施文されている。7は折り返し口縁で、口縁部はナデ調整により無文帯となっている。8は単節のLRが継方向に間隔を空けて施文されている。9には一般的に補修孔とされる穿孔がみられる。10は太い沈線で文様が施文されており、内面には煤が付着し、器面にその境界が明瞭にみられる。これらの土器は、縄文時代後期初頭から前葉への位置づけが考えられるものである。5は単節のLRが斜め方向に施文されており、縄文の特徴から弥生時代の可能性が考えられる。

石器（図64） 石織が1点出土した。無茎の回基織である。

（野村）

### 第3章 総括

本遺跡は館跡として周知の遺跡であり、古くは沼館愛三氏の『南部諸城の研究』（沼館：1977）の中で館跡の規模や形態が紹介されている。平成12・13年度には館の範囲外とされる低地部を、平成15年度の調査では館跡本体の北端部に当たる部分の調査が行われている。

館の範囲外とされる低地部からは、縄文時代・弥生時代・奈良時代の堅穴住居跡や土坑が検出されたほか、縄文時代前期初頭の土器を主体とする捨て場1カ所などが検出された。また、中世と考えられる塙跡と土墻も検出されており、館跡範囲の外側にも各時代の遺構が展開していることが明らかとなり、本遺跡は縄文時代前期初頭から中世に至るまでの複合遺跡であることが明らかとなった。

館跡本体の北端部にあたる部分の調査では、調査範囲が本体の一部にとどまったことから、館の構造や構築及び機能時期については不明な点が多いとしながらも、三重の塙跡に囲まれた館の景観について、塙・通路・門跡の調査成果に基づいて見解が出されている。また、館の年代観についても、塙跡及び堅穴建物跡出土の陶磁器から16世紀中葉にはほぼ埋まっており、それ以前に機能が停止していたことが明らかとなった。

今回の調査は、これまでの調査で南側調査区の境界となっていた部分を一部拡幅するような状況で、約180m<sup>2</sup>を対象として行った。その結果、新たに土坑を4基検出したほか、第1号～第4号塙跡の延伸部分を検出した。第90号、91号土坑の底面からは逆茂木痕が検出されており、これらの遺構は落とし穴と考えられる。このうち、第90号土坑からは縄文時代前期前葉の遺物が自然堆積した土層中から出土しており、これより以前に機能した遺構と考えられる。塙跡の調査では陶磁器類が出土しなかったため、時期に関する新しい知見を得ることができなかつたが、第2号～第4号塙跡は埋没過程の中で通路跡として使用されていた状況を追認することができた。なお、八戸南環状道路建設事業に伴う発掘調査は3次調査をもって、全て終了した。

（小山）

出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	部位	外面特徴	内面調整	備考
63-1	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	鉢・深鉢	口縁部	LR横・LR縦	ミガキ	
63-2	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	肩部	LR押庄・LR横	ミガキ	
63-3	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	肩部	LR横・虹横→沈縫+ナデ	ミガキ	
63-4	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	肩部	LR縦	ミガキ	
63-5	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	壺	肩部	脇付壺帯+沈縫+ミガキ	ミガキ	
63-6	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	口縁部	R輪軸筋条体5輪	ミガキ	
63-7	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	肩部	R單輪軸筋条体	ミガキ	
63-8	第2号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	肩部	R單輪軸筋条体、煤付着	ミガキ	
63-13	第3号墳跡	フク土	縄文中期後葉	深鉢	肩部	LR縦→沈縫	ミガキ	
63-14	第3号墳跡	フク土	縄文後期前半	鉢・深鉢	口縁部	波状口縁、虹横→沈縫+ミガキ	ミガキ	
63-15	第3号墳跡	フク土	縄文後期前半	壺	肩部	脇付壺帯+沈縫+ミガキ	ミガキ	
63-16	第3号墳跡	フク土	縄文後期前半	壺	口縁部附近	沈縫+ナデ	ナデ	
63-17	第3号墳跡	フク土	縄文後期前半	鉢・深鉢	肩部	RL単輪筋条体1型	ミガキ	
63-18	第3号墳跡	フク土	縄文後期前半	深鉢	肩部	R單輪筋条体	ミガキ	
63-19	第4号墳跡	フク土	縄文後期前半	鉢・深鉢	肩部	沈縫、摩耗	ミガキ、煤付着	
63-20	第4号墳跡	フク土	弥生後期	鉢・深鉢	肩部	LR横・LR斜	ミガキ	
64-1	第90号土坑	フク土	縄文初期前半	深鉢	口縁部	RLFO段多条横	ナデ	植物繊維混入
64-2	西区	I	縄文後期前半	鉢・深鉢	口縁部	波状口縁+沈縫+ミガキ	ミガキ	
64-3	西区	I	縄文後期前半	鉢・深鉢	口縁部	波状口縁+LR横+沈縫	剥落	
64-4	西区	I	縄文後期前半	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	IIと同一個体の可能性あり
64-5	西区	I	弥生	鉢・深鉢	口縁部	LR斜	ナデ	
64-6	西区	I	縄文後期前半	深鉢	口縁部	粗縫	ナデ	
64-7	西区	I	縄文後期前半	深鉢	口縁部	粗縫→折波口縁ナデ	ミガキ	
64-8	西区	I	縄文後期前半	深鉢	口縁部	LR縦	ミガキ	
64-9	西区	I	縄文後期前半	深鉢	口縁部附近	ミガキ→沈縫、穿孔	ナデ	
64-10	西区	I	縄文後期前半	壺	肩部	沈縫+ミガキ	ミガキ、煤付着	
64-11	西区	I	縄文後期前半	深鉢	底部	ナデ、ナデ底	ナデ	4と同一個体の可能性あり

出土石器観察表

図版	出土地点	層位	器種	石質	計測値 (mm)			重量	備考	
					長さ	幅	厚さ			
63-9	第2号墳跡	覆土	石鉢	安山岩	(188)	(126)	96	1316.4		
63-10	第2号墳跡	覆土	附脚	珪質頁岩	76	73	23	121.9		
63-11	第2号墳跡	覆土	石鍤	安山岩	74	65	20	158.1		
63-12	第2号墳跡	覆土	敲石	砂岩	93	88	49	481.9		
63-21	第4号墳跡	覆土	磨石	安山岩	112	64	54	576.5		
64-12	西区	I	杵	6 磨	珪質頁岩	32	15	5	1.6	回基盤

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2003 『柄館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第342集  
 青森県教育委員会 2005 『柄館遺跡II』 青森県埋蔵文化財調査報告書第388集  
 沢館 愛三 1977 『南部諸城の研究』 青森県文化財保護協会



第2・3号墳跡 現況（北→）



第2・3号墳跡 完掘（北→）

写真41 墳跡(1)



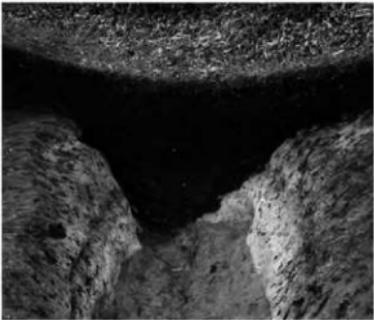
第1号塚跡 完掘（北→）



第2号塚跡 完掘（北→）



第1号塚跡 土層（北→）



第2号塚跡 土層（北→）

写真42 塚跡(2)



第2号壕跡 硬化面 検出 (北→)



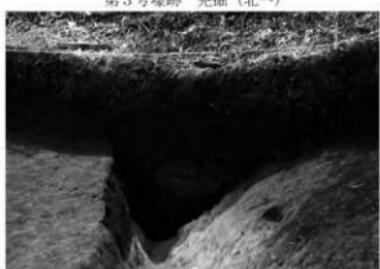
第2号壕跡 硬化面までの土層 (北→)



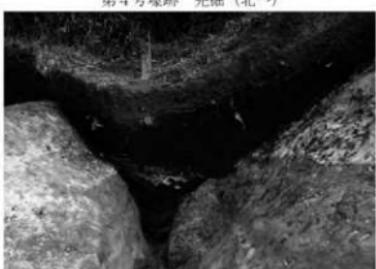
第3号壕跡 完掘 (北→)



第4号壕跡 完掘 (北→)



第3号壕跡 土層 (北→)

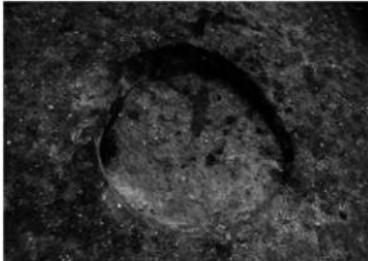


第4号壕跡 土層 (北→)

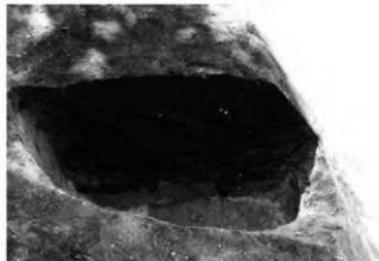
写真43 壕跡(3)



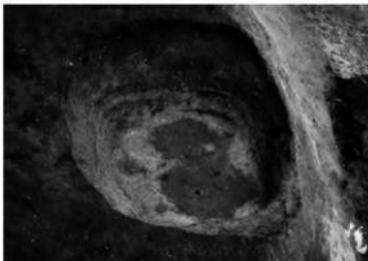
第88号土坑 完掘（北→）



第89号土坑 完掘（東→）



第90号土坑 土層（東→）



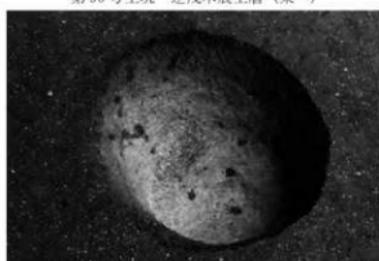
第90号土坑 逆茂木痕検出（東→）



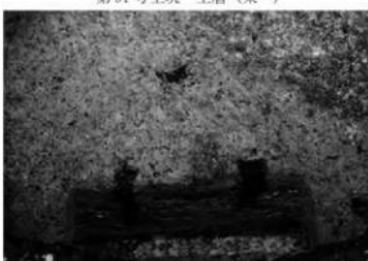
第90号土坑 逆茂木痕土層（東→）



第91号土坑 土層（東→）



第91号土坑 逆茂木痕検出（東→）



第91号土坑 逆茂木痕土層（東→）

写真44 土坑



写真45 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	かたのいせきさん まつがさきいせきよん ならだいせきさん
書名	潟野遺跡III 松ヶ崎遺跡IV 横館遺跡III
副書名	一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第537集
編著者名	葛城和徳 加藤隆則 小山浩平 畠山昇 野村信生
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	2014年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系(JGD2000)		調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
潟野遺跡	青森県八戸市大字是川字湯野外	02203	203242	40°	141°	20100511～	11,200	記録保存調査
				28'	29'	20100806		
				45"	09"	20110510～ 20111027		
松ヶ崎遺跡	青森県八戸市大字十日市字松ヶ崎		203068	40°	141°	20120509～	1,050	
				28'	30'	20120629		
				48"	39"			
横館遺跡	青森県八戸市大字是川字横館		203148	40°	141°	20120509～	180	
				29'	30'	20120629		
				00"	37"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
潟野遺跡	集落	縄文時代	堅穴住居跡	7	縄文時代前期初頭を主体とする集落跡。是川遺跡長田沢地区へと続く沢跡。
			土坑	17	
			土器埋設遺構	1	
		弥生時代	ピット	1	土器埋設遺構
		時期不明	集石遺構	1	
		弥生時代	道路状遺構	9	道路状遺構
		時期不明	溝跡	6	
松ヶ崎遺跡	集落	縄文時代	土坑	3	縄文土器(早期前葉)
横館遺跡	集落	縄文時代	土坑	4	縄文土器(後期初頭～前葉)、石器
		中世以降	壕跡	4	

要 約	<p>湯野遺跡は、八戸市中心部から南へ約3kmの新井田川左岸に位置している。発掘調査は平成16年度と17年度に行われている。今回報告する平成22年度と23年度の調査区は先の調査区の周間に点在するような状況で位置しており、便宜上A～F区に区分けして調査を行った。その結果、A・B区からは縄文時代前期初頭から前葉の堅穴住居跡を6軒検出した。F区では縄文時代後期前半の堅穴住居跡1軒を検出した。土坑は17基検出した。中でもA区から検出した縄文時代中期末葉と考えられる第82号土坑は、底面から検出した土器埋設遺構の存在から墓の可能性が考えられる。C～E区から遺構は検出されなかった。</p> <p>遺物は縄文時代早期中葉の貝殻文系土器から晩期の土器が段ボール箱で66箱出土した。F区の平場エリアでは、縄文時代前期後半以降の土器は中撒浮石層の下層にあたる基本層序第IV層以下には全く含まれておらず、これらの層からは早期中葉～前期初頭の土器だけが出土した。また、是川遺跡長田沢地区へと続く沢跡の調査では、段ボール箱で50箱相当の遺物が出土したが、遺物包含層は形成されておらず、全て流水等の影響により2次的に動いたものと判断された。沢跡から出土した晩期中葉の環状土製品は、貝輪を模した土製腕輪である可能性が考えられる。このような土製腕輪は本県では初の出土である。</p> <p>松ヶ崎遺跡は、新井田川と松館川の合流地点、新井田川右岸の標高37～42m程の河岸段丘上に位置している。今回の調査では、縄文時代の土坑が検出され、早期前葉に位置づけられる押型文土器(日計式土器)が出土した。</p>
	<p>橋館遺跡は、新井田川と松館川の合流地点、新井田川右岸の標高31～35m程の河岸段丘上に位置している。過去にも調査が行われており、今回の調査が3次目の発掘調査となる。これまで三重の塹に囲まれた館跡や、館跡周辺に拡がる縄文時代、弥生時代、奈良時代の集落跡が調査されてきた。今回の調査では、縄文時代の土坑と平成13・15年度に調査された塹跡の延長を検出した。縄文時代早期～前期初頭の土坑と考えられる第90号、91号土坑の底面からは逆茂木痕が検出されており、落とし穴として機能していたと考えられる。落とし穴はこれまでの調査でも検出されており、早期～前期初頭には調査区周辺が狩猟場であったことが確認された。塹跡の調査では、陶磁器などが出土せず時期についての新しい成果は得られなかつたが、塹跡が埋没する過程で通路跡として使用されたことを追認できた。</p>

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第537集

潟野遺跡Ⅲ  
松ヶ崎遺跡IV  
櫛館遺跡Ⅲ

—一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2014年3月20日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印刷 株式会社 誠工社

〒030-0113 青森県青森市第二問屋町三丁目3-18

TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188

---